

K-572

米沢市埋蔵文化財報告書第79集

# 館山北館

館山北館跡発掘調査報告書

平成14年3月

2002

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財報告書第79集

# 館山北館

館山北館跡発掘調査報告書

平成14年3月

2002

米沢市教育委員会



▲調査区全景 (空中写真)



▲調査区全景 (空中写真)



▲西側調査区全景（南より望む）



▲主要建物全景BY8～BY11（東より望む）

# 序 文

本報告書は、平成13年度の国庫補助を受けて実施した、館山北館跡発掘調査の結果をまとめたものです。

(財)県南漁業組合が「内水面関連活性化事業」の一環として計画した稚魚養殖池の造成工事に伴う緊急発掘調査として実施したものであり、中世期の建物跡や井戸跡、薬研堀等の遺構群が数多く検出されています。

調査の対象となった館山北館跡は、古来から伊達氏に係わる山城として注目されてきた「館山城」の北側山麓から平坦面に分布するもので、今回の調査によって館山城を構成していた重要な曲輪であるものと考えられます。同様な平坦面は、東側と南側も存在し、遺構の一部も検出されることから、館山城が想像以上に大規模な城廓であった可能性があります。

また、大型建物の母屋を中心に井戸や関連施設を伴った屋敷群が継続し整然と配置された例は、他に類をみないものです。

これらの屋敷群は、館山城が作られたのとほぼ同じ時期に建てられた可能性が高く、館山城と伊達氏との係りや中世史を知る上でも重要な遺跡と考えられます。

学術的に価値の高い、歴史的遺産の宝庫と自負している本市には、中世の城館跡が数多く現存しております。その多くは伊達氏に係る城跡とされ、現在までに230箇所を確認しておりますが、現存する資料や記録が乏しいことから課題が多いのも現実です。

今後とも、館山城を含めた中世城館跡の解明に努力する所存ですので、関係各位のなお一層のご理解とご指導を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、格別のご指導を賜りました文化庁及び県教育庁社会教育課文化財保護室、そして多大なるご協力を賜りました地元の関係者と(財)県南漁業組合に対し、心から感謝を申し上げます。

平成14年3月

米沢市教育委員会

教育長 佐藤 政 一

# 例 言

1. 本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて実施した、養魚池造成工事に伴う緊急発掘調査として実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は、工事を進める(財)県南漁業組合と協議の上、米沢市教育委員会が主体となって平成13年5月10日から同年9月21日の期間で実施したものである。
3. 調査体制は下記の通りである。
  - ・調査主体 米沢市教育委員会
  - ・調査総括 村野 隆男 (文化課長)
  - ・調査担当 手塚 孝
  - ・調査主任 月山 隆弘
  - ・調査補助員 渡部 明美
  - ・調査作業員 阿部 祐一 五十嵐三郎 伊藤 利信 江袋 吉雄 大久保 正  
貝沼 正吉 工藤 敏夫 小出 久三 色摩 三郎 高橋 正子  
布川 紀子 水科 友恵
  - ・事務局 唐澤 一義・渡邊 紘子
  - ・調査指導 坂井 秀弥・伊藤 正義・川崎 利夫・佐藤 庄一 (順不同・敬称略)  
文化庁・山形県教育庁社会教育課 文化財保護室
  - ・調査協力 (財)県南漁業組合
4. 挿図の縮尺は、遺物の実測図を2分の1と原寸を基本にした。遺構の平面図に関しては付図を80分の1と統一したが、縮尺率の関係で建物と井戸跡の平面図は概ね66分の1、柱列が約135分の1、柱穴平面図及び断面図・集石遺構が約33分の1、大型の建物跡については縮尺不同となることから、それぞれにスケールを明記し、建物計測表と柱穴計測表を表示した。写真図版に関しても縮尺不同としている。
5. 出土遺物は米沢市埋蔵文化財資料室(米沢市万世町桑山269-3)に一括保管している。
6. 本書の作成は手塚が中心となり、次の者が担当した。
  - ・遺構平面図作成 渡部 明美・手塚 孝
  - ・土器実測図作成 手塚 孝
  - ・石器実測図作成 菊地 政信
  - ・木器実測図作成 手塚 孝
  - ・写真撮影・図版作成 手塚 孝・高橋 正子
  - ・遺構等表作成 高橋 正子・手塚 孝
  - ・本文執筆・編集 手塚 孝
  - ・責任校正 手塚 孝

# 本文目次

## 序文 例言 目次

第1節 調査の経緯	1	(7) 第Ⅶ期の建物群	67
1. 位置と地形	1	・ B Y 18	73
2. 館山周辺の遺跡	3	・ B Y 25	73
3. 歴史的背景と館山城	5	・ B Y 26	73
4. 調査の経過	6	(8) 第Ⅷ期の建物群	73
第2節 調査の成果	8	・ B Y 22	73
1. 遺構の概要	8	・ B Y 33	74
1 掘立建物跡	8	(9) 第Ⅸ期の建物群	74
(1) 第Ⅰ期の建物群	9	・ B Y 1	74
・ B Y 11	14	・ B Y 2	78
・ B Y 20	14	・ B Y 14	78
(2) 第Ⅱ期の建物群	19	・ B Y 28	78
・ B Y 4	19	2 柱列	87
・ B Y 7	20	・ O N 1	87
・ B Y 10	20	・ O N 2	87
・ B Y 16	20	・ O N 3	87
・ B Y 21	20	・ O N 4	87
・ B Y 24	20	・ O N 5	87
・ B Y 30	20	・ O N 6	87
(3) 第Ⅲ期の建物群	35	3 集石遺構	104
・ B Y 5	35	・ S Y 1	104
・ B Y 9	36	・ S Y 2	104
・ B Y 13	36	・ S Y 3	104
・ B Y 15	36	・ S Y 4	104
・ B Y 17	36	・ S Y 5	104
・ B Y 27	36	4 土壇	104
(4) 第Ⅳ期の建物群	49	5 井戸跡	106
・ B Y 8	50	・ D N 1	106
・ B Y 12	50	・ D N 2	106
・ B Y 29	50	・ D N 3	106
(5) 第Ⅴ期の建物群		・ D N 4	106
・ B Y 3	58	・ D N 5	109
・ B Y 32	63	・ D N 6	109
(6) 第Ⅵ期の建物群	63	・ D N 7	109
・ B Y 19	63		
・ B Y 23	67		

6 掘跡	109	第2節 総括	121
・KY1	110	1. 伊達氏関連の主要城館跡	121
・KY2	110	1 前の在家城	121
・KY3	110	2 三沢館	122
・KY4	110	3 驚城	122
4. 遺物の概要	115	4 二色根城	123
1 縄文時代の遺物	115	5 高畑城	123
(1) 甕状石器	115	6 成島館	124
(2) 石鏃	115	7 鮎貝城	124
(3) 削器	115	8 荒砥城	125
(4) 石楔	115	9 長手館	125
2 中世の遺物	115	10 亀岡館	126
(1) 土埧	116	11 原田館	126
(2) 香炉	116	12 赤芝館	126
(3) 播鉢	116	13 古志田館	127
(4) 赤焼土器	116	14 上ノ町館	127
(5) 陶磁器	116	2. 館山城跡及び館山北館跡の性格	131
(6) 土鈴	116	3. 館山城跡及び館山北館跡の年代	133
(7) 木製品	116	4. まとめ	135
(8) 古銭	121	米沢城・館山城関係資料	136
		参考文献	137
		報告書抄録	138

## 挿 図 目 次

第1図 館山北館跡周辺の地形図	2	第16図 館山北館跡BY16平面図	27
第2図 館山城全体図	4	第17図 館山北館跡BY10・BY16柱穴平面図	28
第3図 館山北館跡遺構全体図	8	第18図 館山北館跡BY21平面図	29
第4図 館山北館跡建物変容想定図(1)	14	第19図 館山北館跡BY16・BY21柱穴平面図(1)	30
第5図 館山北館跡BY11平面図	15	第20図 館山北館跡BY21柱穴平面図(2)	31
第6図 館山北館跡BY11柱穴平面図	16	第21図 館山北館跡BY24平面図	32
第7図 館山北館跡BY20平面図	17	第22図 館山北館跡BY24柱穴平面図	33
第8図 館山北館跡BY20柱穴平面図	18	第23図 館山北館跡BY30平面図・同柱穴平面図	34
第9図 館山北館跡建物変容想定図(2)	19	第24図 館山北館跡建物変容想定図(3)	35
第10図 館山北館跡BY20柱穴平面図・BY4平面図	21	第25図 館山北館跡BY5平面図・同柱穴平面図	37
第11図 館山北館跡BY4柱穴平面図	22	第26図 館山北館跡BY6平面図	38
第12図 館山北館跡BY7平面図	23	第27図 館山北館跡BY6柱穴平面図	39
第13図 館山北館跡BY7柱穴平面図	24	第28図 館山北館跡BY9平面図	40
第14図 館山北館跡BY10平面図	25	第29図 館山北館跡BY6・BY9柱穴平面図(1)	41
第15図 館山北館跡BY7・BY10柱穴平面図	26	第30図 館山北館跡BY9柱穴平面図(2)	42

第31図	館山北館跡 B Y 13 平面図・同柱穴平面図	43	第64図	館山北館跡建物変容想定図(9)	78
第32図	館山北館跡 B Y 15 平面図・同柱穴平面図	44	第65図	館山北館跡 B Y 1 平面図	79
第33図	館山北館跡 B Y 17 平面図・同柱穴平面図	45	第66図	館山北館跡 B Y 22・B Y 1 柱穴平面図	80
第34図	館山北館跡 B Y 27 平面図・同柱穴平面図	46	第67図	館山北館跡 B Y 2 平面図	81
第35図	館山北館跡 B Y 31 平面図	47	第68図	館山北館跡 B Y 1・B Y 2 柱穴平面図	82
第36図	館山北館跡 B Y 12・B Y 31 柱穴平面図	48	第69図	館山北館跡 B Y 14 平面図	83
第37図	館山北館跡建物変容想定図(4)	49	第70図	館山北館跡 B Y 14 柱穴平面図	84
第38図	館山北館跡 B Y 12 平面図	51	第71図	館山北館跡 B Y 14・B Y 28 柱穴平面図	85
第39図	館山北館跡 B Y 12 柱穴平面図	52	第72図	館山北館跡 B Y 28 平面図・同柱穴平面図	86
第40図	館山北館跡 B Y 8 平面図	53	第73図	館山北館跡 ON 1・ON 2・ON 3 平面図	88
第41図	館山北館跡 B Y 8 柱穴平面図(1)	54	第74図	館山北館跡	
第42図	館山北館跡 B Y 8 柱穴平面図(2)	55		ON 4・ON 5・ON 6・ON 1 柱穴平面図	89
第43図	館山北館跡 B Y 29 平面図	56	第75図	館山北館跡 ON 2・ON 3・ON 4 柱穴平面図	90
第44図	館山北館跡 B Y 29 柱穴平面図	57	第76図	館山北館跡	
第45図	館山北館跡建物変容想定図(5)	58		ON 5・ON 6 柱穴平面図・SY 3・SY 5 平面図	91
第46図	館山北館跡 B Y 3 平面図	59	第77図	館山北館跡	
第47図	館山北館跡 B Y 3 柱穴平面図	60		DY 1・DY 2・SY 1・SY 2・SY 4 平面図	105
第48図	館山北館跡 B Y 32 平面図	61	第78図	館山北館跡	
第49図	館山北館跡 B Y 32・B Y 19 柱穴平面図	62		DN 1・DN 2・DN 3・DN 4 平面図	107
第50図	館山北館跡建物変容想定図(6)	63	第79図	館山北館跡 DN 5・DN 6・DN 7 平面図	108
第51図	館山北館跡 B Y 19 平面図・同柱穴平面図	64	第80図	館山北館跡 KY 1 平面図	111
第52図	館山北館跡 B Y 23 平面図	65	第81図	館山北館跡 KY 2 平面図	112
第53図	館山北館跡 B Y 23 柱穴平面図	66	第82図	館山北館跡 KY 3 平面図	113
第54図	館山北館跡建物変容想定図(7)	67	第83図	館山北館跡 KY 4 平面図	114
第55図	館山北館跡 B Y 23 柱穴平面図・B Y 18 平面図	68	第84図	館山北館跡出土遺物実測図(1)	117
第56図	館山北館跡 B Y 18・B Y 25 柱穴平面図	69	第85図	館山北館跡出土遺物実測図(2)	118
第57図	館山北館跡 B Y 25 平面図	70	第86図	館山北館跡出土遺物実測図(3)	119
第58図	館山北館跡 B Y 26 柱穴平面図	71	第87図	館山北館跡出土遺物実測図(4)	120
第59図	館山北館跡 B Y 26 平面図・B Y 33 柱穴平面図	72	第88図	館山城関連城館跡縄張図(1)	128
第60図	館山北館跡建物変容想定図(8)	74	第89図	館山城関連城館跡縄張図(2)	129
第61図	館山北館跡 B Y 33 平面図・B Y 22 柱穴平面図	75	第90図	館山城関連城館跡縄張図(3)	130
第62図	館山北館跡 B Y 22 平面図	76	第91図	館山城跡範囲推定図	132
第63図	館山北館跡 B Y 22 柱穴平面図	77	第92図	館山北館跡遺構変遷想定図	134

## 付 表 目 次

第 1 表	館山北館跡検出建物跡一覧表	10	第 3 表	館山北館跡柱列計測表	13
第 2 表	館山北館跡建物計測表	11	第 4 表	館山北館跡柱穴計測表	92

# 図 版 目 次

- 巻頭図版一 館山北館跡の発掘(一)  
▲調査区全景(空中写真)  
▲主要建物全景(空中写真)
- 巻頭図版二 館山北館跡の発掘(二)  
▲西側調査区全景(南より望む)  
▲主要建物全景BY8~BY11(東より望む)
- 第一図版 館山北館跡の発掘(一)  
▲調査区全景(空中写真)  
▲主要建物全景(空中写真)
- 第二図版 館山北館跡の発掘(二)  
▲館山北館跡Ⅱ期建物群(空中写真)  
▲館山北館跡Ⅲ期建物群(空中写真)
- 第三図版 館山北館跡の発掘(三)  
▲東側調査区全景(西より望む)  
▲東側調査区全景(南より望む)
- 第四図版 館山北館跡の発掘(四)  
▲BY8~BY11全景(東より望む)  
▲BY14・BY22・BY23・BY25全景(東より望む)
- 第五図版 館山北館跡の発掘(五)  
▲BY20全景「Ⅰ期」(東より望む)  
▲BY4全景「Ⅱ期」(南より望む)
- 第六図版 館山北館跡の発掘(六)  
▲BY7全景「Ⅱ期」(南より望む)  
▲BY21全景「Ⅱ期」(南より望む)
- 第七図版 館山北館跡の発掘(七)  
▲BY27全景「Ⅲ期」(南より望む)  
▲BY6全景「Ⅲ期」(東より望む)
- 第八図版 館山北館跡の発掘(八)  
▲BY8全景「Ⅳ期」(東より望む)  
▲BY32全景「Ⅴ期」(南より望む)
- 第九図版 館山北館跡の発掘(九)  
▲BY22全景「Ⅷ期」(東より望む)  
▲BY1全景「Ⅸ期」(東より望む)
- 第十図版 館山北館跡の発掘(一〇)  
▲KY1・KY2全景(南より望む)  
▲KY1断面状況(東より望む)
- 第十一図版 館山北館跡の発掘(一一)  
▲DN5全景(南より望む)  
▲DN6全景(北より望む)
- 第十二図版 館山北館跡の発掘(一二)  
▲DN2全景(北より望む)  
▲DN4全景(北より望む)
- 第十三図版 館山北館跡の発掘(一三)  
▲SY2全景(東より望む)  
▲SY3全景(東より望む)
- 第十四図版 館山北館跡の発掘(一四)  
▲SY4全景(東より望む)  
▲SY5全景(南より望む)
- 第十五図版 館山北館跡の発掘(一五)  
▲TY587内摺鉢出土状況(東より望む)  
▲土鈴出土状況(南より望む)
- 第十六図版 館山北館跡の発掘(一六)  
▲DN2内古銭出土状況(南より望む)  
▲TY353内陶器出土状況(南より望む)
- 第十七図版 館山北館跡の発掘(一七)  
▲TY149全景(BY1) ▲TY157全景(BY1)  
▲TY155全景(BY1) ▲TY151全景(BY1)  
▲TY156全景(BY1) ▲TY38全景(BY6)  
▲TY159全景(BY1) ▲TY33全景(BY6)
- 第十八図版 館山北館跡の発掘(一八)  
▲TY26全景(BY7) ▲TY275全景(BY15)  
▲TY267全景(BY14) ▲TY276全景(BY15)  
▲TY201全景(BY14) ▲TY168全景(BY21)  
▲TY277全景(BY15) ▲TY178全景(BY21)
- 第十九図版 館山北館跡出土の遺物(一)  
▲石器類
- 第二十図版 館山北館跡出土の遺物(二)  
▲古銭・陶磁器・土師質土器(一)
- 第二一図版 館山北館跡出土の遺物(三)  
▲古銭・陶磁器・土師質土器(一)
- 第二二図版 館山北館跡出土の遺物(四)  
▲土鍋・播鉢
- 第二三図版 館山北館跡出土の遺物(五)  
▲下駄・木椀

# 第1節 調査の経緯

## 1. 位置と地形

館山城は、米沢市内地の玄関口となる大字口田沢字長峯二地内に所在する。地元で城山もしくは長峯山と称する丘陵は、遠く福島県北塩原村の境界となる標高1,300.9mの山頂より分枝しながら延々と複雑に連なって北北東に進み、城跡が存在する先端部で終止符を迎える。

一方、丘陵の谷間となる低辺には、西吾妻連峰を源とする南の大樽川、北側に小樽川が発達した河岸段丘を形成しながら優雅に北流しており、両河川は丁度、丘陵の先端で合流して鬼面川となる。館山城付近で合流した鬼面川は成島丘陵を經由しながら、現在の塩井・広幡・六郷一帯にかけての広大な扇状地を形成している。合流後の平坦な地形は、肥沃な水田地帯をもたらす一方で、未発達な河岸段丘の影響からの大規模な氾濫も古来から頻繁に起こっていた。鬼面川の河川名もこうした背景から名付けられたものである。

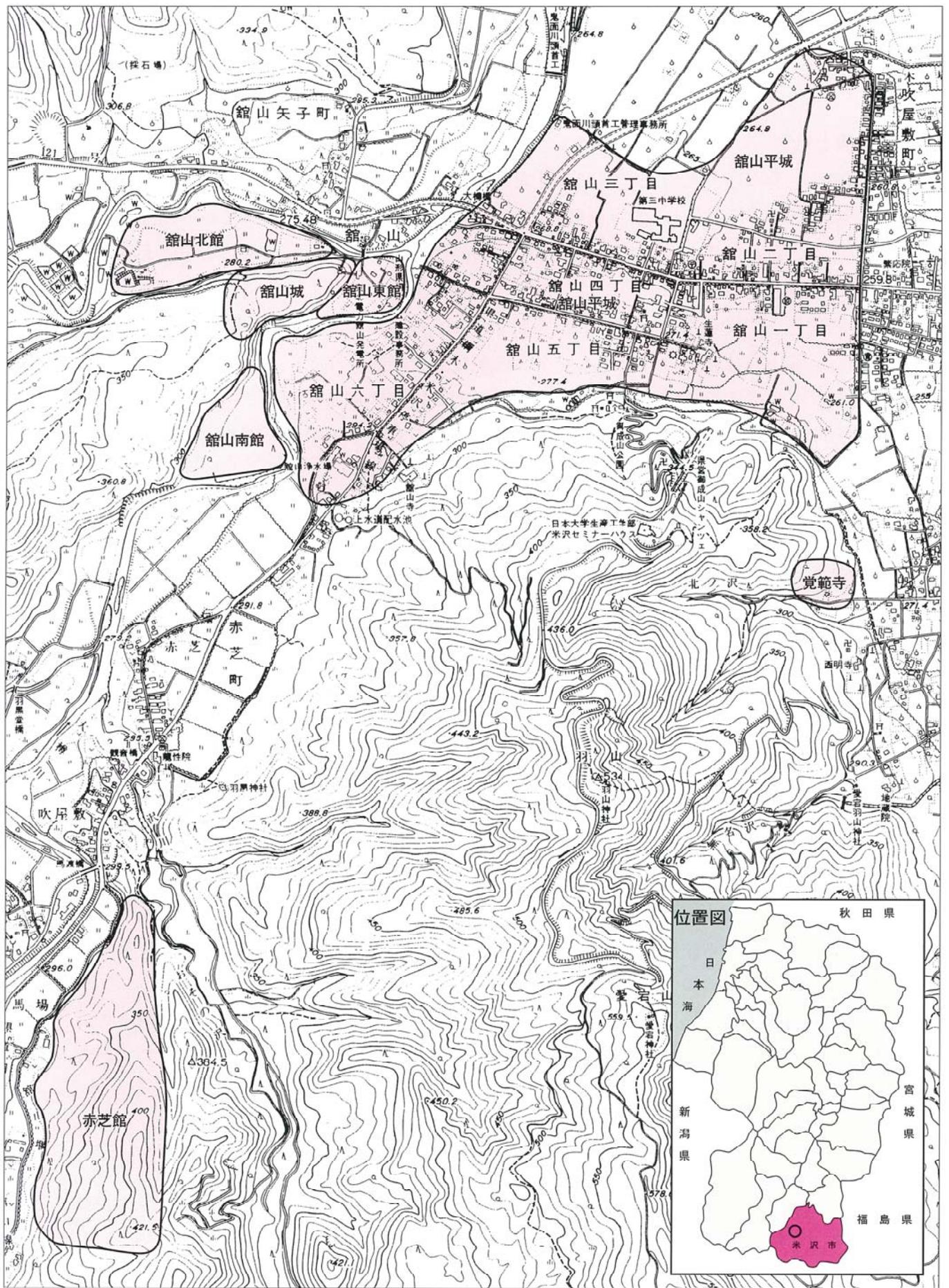
館山城を起点とする周辺には、古来からの重要な道路が確立していた。まず、大樽川の上流に向かって小野川温泉を經由しながら築沢地区と進む道路（築沢道）は、南原地区を横断して綱木宿に向かう会津街道（福島では米沢街道）と接続する。会津街道は、綱木峠を越えて福島県側に抜ける街道として古来より確立していたものであり、伊達氏の重要な戦略上の幹線道路でもあった。小樽川に沿って並行する現在の国道121号線も当時は重要な路線にあった。

入田沢から川西町に抜ける「大舟道」がそれで、当時の越後街道に抜ける支線道路として確立していた。路線には、現在も8箇所 of 山城が分布している。

さらに、小樽川を上流に向かうと旧大峠と旧八谷鉦山方向に分支する。前者の八谷鉦山を越える峠は、かつて伊達政宗が芦名攻めに利用したと伝えられる軍道「八谷峠道」が存在していたと伝えられている。後者の大峠は、入田沢から福島県喜多方市に抜ける国道として利用されてきた。谷間沿いに連なる旧道は、明治16（1883）年に山形県の初代県令三島通庸が両県の交流を図るために「大峠喜多方街道」として開通させたものである。この難所「大峠」の原形は、伊達氏が開いたものとされているが定かではない。このように、館山城の存在する周辺は、交通往来の重要な要所であったものといえる。

さて、館山北館は、館山笹平下1733-1他に所在する。置賜最大の山城「館山城」の北側山麓に面した河岸段丘上に立地している。北側に接する小樽川は、約300mほど下流で大樽川と合流し鬼面川となる。遺跡は丁度、館山城と小樽川に挟まれた馬蹄形状の平坦地（約50,000㎡）に分布している。この平坦地には、残存する土塁の一部や字切図などの分析から、約1町四方（120m）の方形区画「平城」が存在していたことが判っている。

一方、館山城の東側にも馬蹄形の平坦面（約11,000㎡）が広がっている。ここにも同様に、一町四方で区画された館山東館が存在する。最近の調査では、館山城南側の平坦地（約48,000㎡）に集落跡が存在することが確認されている。これら3箇所の平坦地は館山城に密接に係る施設が存在していたものと推測している。



第1図 館山北館跡周辺の地形図

## 2. 館山周辺の遺跡

館山城が存在する成島・館山周辺の遺跡群は、鬼面川によって形成された河岸段丘及び鬼面川扇状地の先端部に数多く分布し、大樽・小樽両河川域の遺跡も加えると約100箇所の遺跡が存在することになる。遺跡の種別は、主に縄文時代の集落跡と中世期に属する城館跡に係わる遺跡が大半で、僅かに古墳時代の遺跡も含まれている。先の縄文遺跡は、成島の窪平遺跡を始め、一ノ坂遺跡・生蓮寺遺跡・地蔵園遺跡・館山A～C遺跡などの館山周辺の15遺跡に河川上流域に存在する塔之原遺跡・源八前遺跡がその代表となる。時代は、縄文早期中葉から縄文晩期までと、縄文各時期を通して幅広く分布しているのが特徴であり、とりわけ縄文後期に集中する傾向がある。特に、国指定史跡の一ノ坂遺跡を代表とする縄文前期の遺跡では、生蓮寺遺跡、館山A遺跡、窪平遺跡など大規模な遺跡が集中する地域としても特筆できるものである。

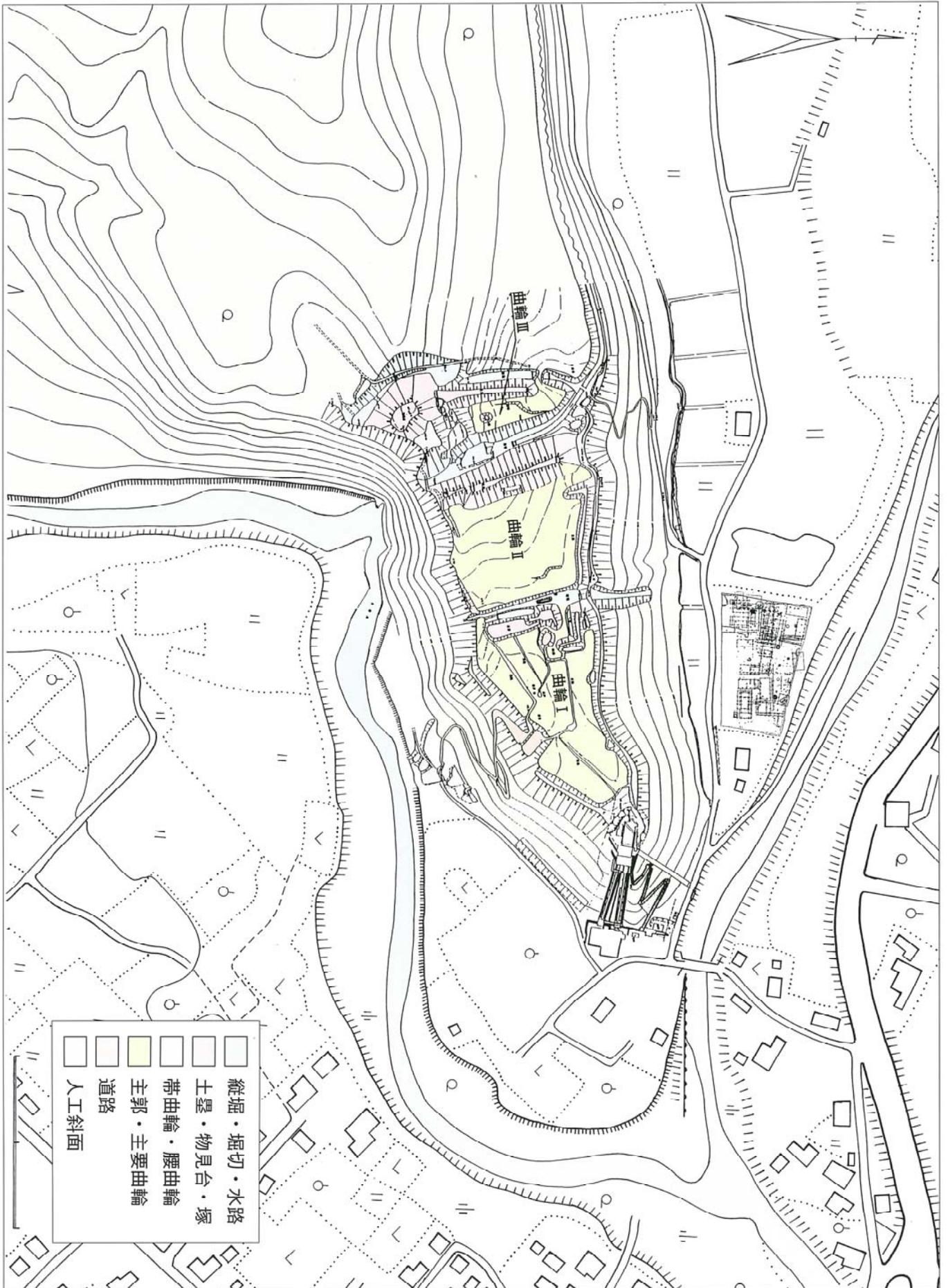
さて、後者の中世期に属する遺跡の代表は館山城である。館山城を中心とした館山一帯の地域には、中世以降の地名や遺跡が数多く分布している。矢来一丁目から館山一丁目の境にかけての箇所には、一段高い登り坂があり、一ノ坂、二ノ坂、三ノ坂、四ノ坂といった地名を始め、馬場、矢来といった城に関係する地名が残っている。

特に注目されるのは、一ノ坂付近から南北に延びる通称「並松土手」と呼ばれていた堤防状の土塁施設で、市立図書館所有の市街地図（文化年間）によれば、「一ノ坂下南二八〇間、北方四四八間」と記されている。現在は、残念ながら後世の削平による影響で失われ、北端に僅かに当時の痕跡を確認する程度である。これまでの分布調査から推測すると幅が約二間以上、南北約1.2kmで、西側に約二間幅の堀が付随していたことが判明している。

さらに、館山四丁目付近には河原石で構築した石塁の痕跡や生蓮寺遺跡の調査からは、中世の建物跡。平成8年から平成10年にかけて9次の調査が実施された大樽遺跡からは、堀の一部や溝跡、井戸跡、柱穴、墓壙等が検出しており、館山一帯の広範囲に中世に属する遺構が存在することが確認されている。

一方、昭和60年にまんぎり会が主体となって調査を実施した入田沢地区の戸長里窯跡は、東北地方では最古級の陶磁器生産の窯跡として注目されている。この窯では、地元特産の陶磁器を焼く目的で伊達政宗が天正19年前後に築いたと推測されるもので、擦鉢や甕などの日用品の他に、香炉や茶壺、皿、土風呂などの茶道具に関する遺物が出土している。

特に重要なのは、この戸長里窯で製作された製品が米沢を中心とする中世の城館跡から次々と検出されていることで、関連性が指摘されている。現在までに製品が確認された遺跡としては、一ノ坂遺跡、大樽遺跡、生蓮寺遺跡の館山地区を始め、比丘尼平遺跡、湯ノ沢遺跡、大浦館跡、我妻館跡、米沢城東二の丸跡、原田館跡、東屋敷館跡、荒川2遺跡の他に川西町田制館跡、南陽市植場一遺跡等16箇所の中世遺跡から出土している。その多くが伊達氏に関係する城館跡及びその周辺に限られるといった特徴があり、伊達氏が戸長里窯を築いたとする根拠を補強するものといえる。このことから、館山地区一帯は、伊達氏に係る重要な地域であったことが指摘される。山形県中世城館遺跡跡の調査報告書では、前述の調査成果を重視して館山一帯の約1.2km四方の範囲を館山関連の平城として登録している。



第2図 籠山城全体図

### 3. 歴史的背景と館山城

館山城は、古来より地元の館山地区では伊達氏の城跡として伝えられてきた。伊達晴宗が高島城から米沢城に拠点を移すのを館山城とする考え方で多数の人が指示している。

城跡は、大樽川と小樽川の合流する舌状丘陵の標高306m～317mに位置している。丘陵の先端部には東北電力館山発電所が存在し、発電所建設によって城郭の一部が破壊されているが、城全体は良好に残存している。

館山城に関しては、平成10年度に文化庁の国庫補助を採択して米沢市教育委員会が詳細な測量調査を実施している。その測量図を元に城の形態について触れると東西の全長が350m、最大幅の南北で156mを測る。城は、丘陵の上部を平坦に整地した後に土塁と堀切り、縦堀等で区画して曲輪群を構築し、斜面を30mほど削平して意図的に急勾配の人工斜面を整形している。東端に位置する曲輪Ⅰは、南山麓の大手口から道路を進み方形の虎口に入った最初の曲輪で、井戸跡や水路がある。

次に西に向かうと方形の土塁で囲まれた櫓形と縦堀で区画された曲輪Ⅱがある。曲輪の西面には、幅16m～27m、高さ4m～6mをなす大規模な土塁が置れ、北側に7m～11m前後の土塁と帯曲輪が付随している。曲輪の平坦面は、方形状に整形された南北70m、東西60mを測る館山城最大の曲輪跡であり、主郭と考えられる。

北西の隅には北の土塁が南に折れて虎口を開き、堀底道へ続く大規模な堀切りが出現する。堀切りは、土塁の上端から対岸の端までの幅で最大28mを測り、最深のまでの比高差は10.36mをなしている。堀切りを越えると曲輪Ⅲの空間に入り、南に大規模な物見台が立地している。曲輪Ⅲは最後の縦堀と物見台の西側に堀り切りを有し、物見台と曲輪の接点と縦堀一部に土橋による虎口が開く。一方、土橋の西側は、寺跡の伝承を有する平坦地となっており、方形の区画や浅い溝などが残されている。

これら館山城の形態から想定される年代は、土塁や堀切の発達と虎口の形態から判断した場合、概ね戦国末期の16世紀後半頃と推測される。

次に歴史的な文献資料で館山城に関する記述を触れてみる。

まずは、性山公治家記録の記載に関するものとして、元亀元年（1570）伊達輝宗の家臣中野宗時、牧野久仲親子が謀叛を起した記述がある。中野、牧野親子の謀反が露見するや自分の邸宅に火を放ち城下はすべて破墟に帰した。但し、お城は「山上にありて恙なし」とある。山上は「館山城」を指しているものとみられる。

一方、天正12年（1584）には、伊達輝宗が隠居して息子の政宗に家督を譲ったことから、己は館山に隠居所を造り、普請の出来上るまで家臣鮎貝宗重宅に起居し、翌天正13年（1585）に移住したとある。

さらに、天正15年（1587）正月11日には伊達政宗が自ら館山に赴いて地取、2月7日再び同地に赴いて縄張り（測量）を為し築城計画を開始した旨の記述がある。

これら、伊達氏に係る城の存在については、昭和二〇年代～三〇年代にかけてさかんに議論の対象となったことがある。地元研究者の三原良吉、中沢千代、伊佐早謙、高橋堅治氏ら置賜

史談会の会員諸氏である。研究の中心は、米沢藩時代に編纂された「米沢鹿ノ子」宝暦年間頃（1755頃）・「米沢里人談」享和元年（1801）・「米沢地名選」文化元年（1804）・「米沢事跡考」文化六年（1809）等の記載されている館城跡の記述分析を前提にした考察や立証に関する私論が中心であったが、高橋堅治氏のように館山城を踏査した大胆な自説「アイヌチャシ跡説」を提唱するものもあった。館山城に係る論考を列挙すれば次のようになる。

- (1) 館山城を伊達氏の本城「米沢城」とする考え方。
  - ・館山城＝「米沢城」説。
- (2) 米沢城（松ヶ岬城）を伊達氏の「米沢城」とする考え方。
  - ・松ヶ岬城＝「米沢城」説。
- (3) 矢子山城を伊達氏の本城「米沢城」とする考え方。
  - ・矢子山城＝「米沢城」説。
- (4) 館山城を伊達輝宗の隠居跡とする考え方。
  - ・館山城＝「輝宗隠居跡」説。
- (5) 館山城をアイヌのチャシ（砦）とする考え方。
  - ・館山城＝「アイヌチャシ跡」説。
- (6) 田沢村の在地豪族の新田遠江守・同美濃守の居館とする考え方。
  - ・館山城＝「新田城」説。
- (7) 政宗が館山城の築城を着手したが完成に至らなかったとする考え方。
  - ・館山城＝「築城途上」説。

以上の7説が代表的な考え方であったが、昭和40代にアイヌ研究が進むにつれ、館山城に係るチャシ説は消滅した。その後、館山城に関する具体的な研究は停滞するが、昭和63年から開始された「山形県中世城館跡調査」が山形県下で実施され、一躍注目されるに至った。鮮明な城館跡の縄張図が掲載されると館山城の存在をめぐる論考がいくつか発表されている。ここではあえて説明を控えるが、概ね次の(1)の館山城「米沢城」説、(4)の館山城「輝宗隠居跡」説、(7)の館山城「築城途上」説の3者に集約されたが、基本的には伊達氏に係る城としては一致している。

#### 4・調査の経過

館山北館跡に(財)県南漁業協同組合が「内水面関連活性化事業」の一環として、養魚池造成工事を計画していることから米沢市教育委員会が平成12年度に試掘調査を実施した。

試掘は、計画予定範囲の6,000㎡を対象に2m×60m～70mのトレンチを6本（780㎡）を配して試掘調査を実施したところ、中世に属する柱穴や溝跡、土器片等が検出され、2,800㎡の範囲に遺構が分布することが判った。開発予定地は、伊達氏の山城とされる館山城の北側に接していることで、遺構の大半は城跡に関わる施設の一部と想定される。

館山城に関しては、以前から注目されてきた城跡であり、館山城の性格を考える上で重要な遺跡であるものと判断する一方で、記録保存を前提に開発側と協議を行い、2,800㎡を対象に

緊急発掘調査で対応すべきであることを報告した。

県南漁業協同組合が進める事業は、国と県の補助金を受けながら平成14年～平成16年の3ヶ年継続事業として計画するものであり、事業内容が営利目的に該当しないことや調査の経費が増大するなどの理由から、米沢市が平成13年度の国庫補助事業を採択して実施する。

調査は、米沢市教育委員会が主体となって平成13年5月10日の重機による粗掘作業から開始する。粗掘は表土と2層上面までを前提に剥離作業を進めたが、調査区の西側に関しては開田の際の影響で第2層の一部が攪乱を受けていることが判明した。従って、攪乱層の部分については第3層上面までの土砂を除去することにした。粗掘は5月25日までに終了。

5月14日には鍬入式を行い、粗掘と並行してグリット設定を5月15日から進める。試掘した際に確認した第3層上面までの面整理を順次東側から着手する。遺構確認面の直上には、後世の氾濫で運ばれたと推測される拳大から人頭大の礫群が多量に堆積していることもあって、遺構の観点から礫を残して掘り進めることにし、ほぼこの作業を6月4日で終了する。

6月7日と8日の両日で、調査区域における礫の分布状況を検討したが、意図的に配列された礫群でないことが判明する。6月9日からは、比較的礫の少ない東側の調査区から遺構確認の精査と並行し、礫の除去作業を行うことにした。

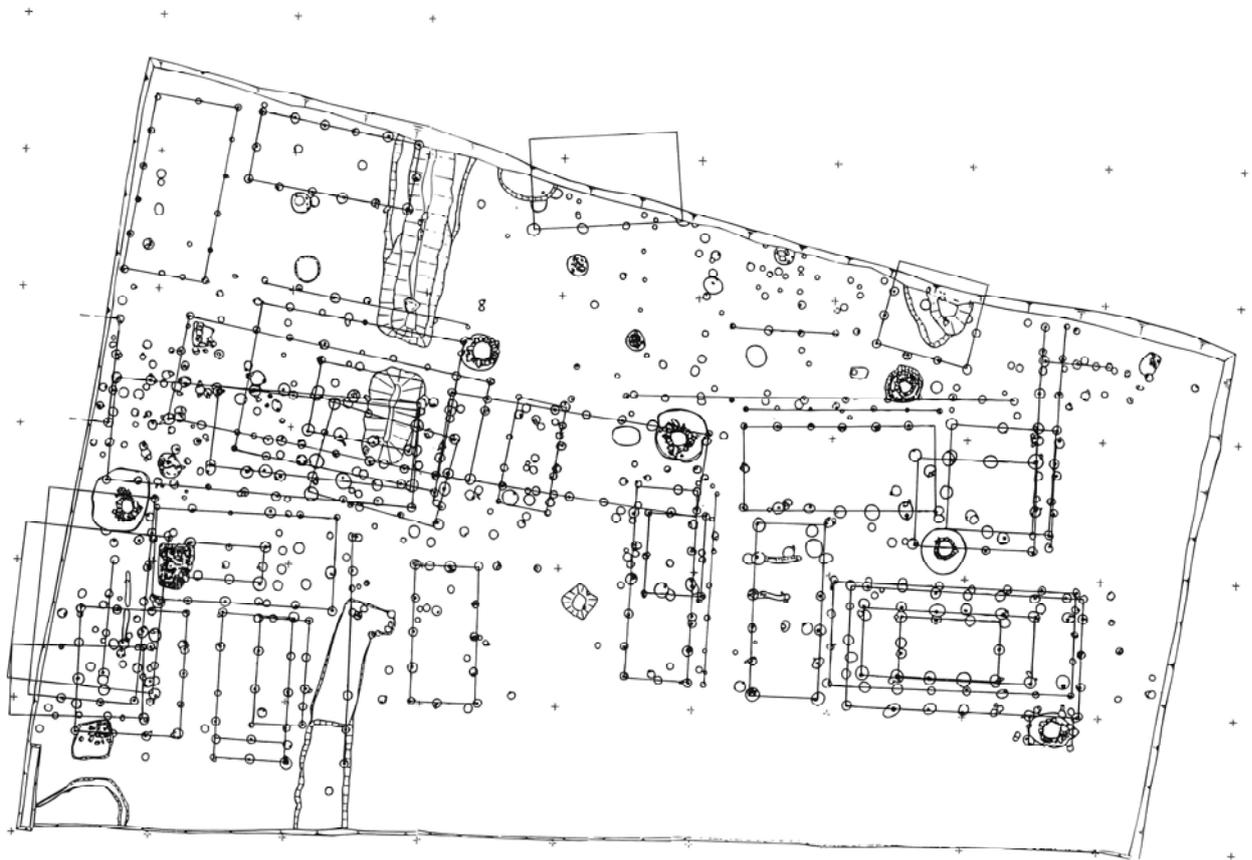
この結果、G8～16—8～12とG20～24—12～20付近を中心に掘建建物跡と推測される柱穴群が調査区全体に検出された。柱穴群の大半には複数の切り合い関係を示すものも含まれていた。また、自然礫と考えられていた礫層の一部には、井戸跡や意図的に礫を集結した集石遺構が存在することも判った。

6月26日からは、礫層が多く残る西側のG24～39—5～26付近の精査に入る。並行して東側で確認された柱穴の部分掘下げを開始する。順次、西側の遺構も確認次第、柱穴の掘下げに移る。この作業で、G28～32—4～24区にかけての南北方向に、幅約4m前後の空堀が存在することが判明した。空堀は、館山北館跡が機能した最初の段階に掘り込まれたものと推測されるものであり、意図的に埋め戻された後に新たな建物を構築している。ほぼ7月31日で遺構の確認調査を終了する。8月6日からは、遺構の新旧関係を把握しながら、柱穴の半裁と井戸の掘下げを行うことにした。特に、KY1～KY3の空堀が埋め戻された直後に構築されたと推測される建物跡（後にKY1と命名）の柱穴の掘り下げを先行することにした。同時に断面図と平面図作成と写真撮影を並行して進める。

柱穴の掘り下げ終了後の9月3日からは、空堀の掘り下げと集石遺構、それに数多く検出された柱穴に関しては、建物として存在する可能性が高く、新旧関係の吟味を確認しながら慎重に掘り下げを行う。その結果、約30棟の建物跡を確認することができた。

今回の調査での遺物出土は、極めて少なかったが、KY1とKY2の底面より、まとまって内耳把手の土塼が出土している。遺構の掘り下げを9月7日で完了したことから、調査区全体の空中写真の撮影を行った。9月10日からは、最終的な平面図作成と個々の遺構の断面図、写真撮影を並行しながら進め、9月21日をもって終了した。

今回の館山北館跡の調査における最終的な精査面積は約2,500㎡であった。



第3図 館山北館跡遺構全体図

## 第2節 調査の成果

### 1. 遺構の概要

今回の調査で検出された遺構は、第2層の下面の砂利層及びシルト層を掘り下げて構築したものであり、調査区のほぼ全域に亘って認められる。遺構の多くは掘立建物跡と推測される柱穴群を中心として、井戸跡、館跡の区画を示す薬研掘、集石遺構などの約 850基の遺構が検出している。これらの遺構群の全ては中世に属するもので、前方の館山城に密接に関連する遺構群とみられる。ここでは、検出された遺構の大半を占める建物群を中心に、各遺構について説明を加えることにしたい。

#### 1 掘立建物跡「第3図・付図」(BY表示)

今回の調査で検出された柱穴は、計 800基を数える。このうちで、建物跡として確認することができたのが33棟、目隠しもしくは建物の一部と考えられる柱列の6列となる。他にも、桁行や梁間と推測される柱穴が存在することで、さらに一〇棟前後の建物が存在していたものと想定している。柱穴が掘られた地山層の大半は、砂利層といった不安定な基盤層に構築したものが大半で、柱の安定を保つためにいくつかの工夫を講じている。

第一に、砂利層を深く掘り下げて柱穴としたもので、母屋施設とみられるBY8～BY11・BY14・BY23・BY25・BY22の柱穴に用いられている。

第二に、柱穴の柱痕跡に明瞭に残る粘土魂の存在である。これは、柱を埋める際に、土砂と柱を固定する目的として、粘土を薄くのばしたものを柱に巻き付けるように貼付して埋め戻したものと推測される。この手法による柱は、今回確認された大半の建物跡の柱穴に認められるものであり、軟弱な砂利層に対応する手段として確立したものと考えられる。

同様な柱の設置方法は、他に類例がないことで、この館山北館で独自に開発されたものといえる。伊達氏と中世の建築法を知る上でも注目される事例となろう。ここでは、便宜的に「粘土貼付柱痕跡」（以下、粘土貼付柱と呼ぶ）と仮称しておく。

第三に、柱の根本や上部に河原石を根固状に固定するもので、前者の柱穴上部に配するものとしてBY1・BY4・BY7・BY6・BY23・BY26・BY14の7棟の建物の一部に確認することができた。後者の底辺部に設置するものとしては、BY20・BY21・BY25の3棟の建物の一部に利用されている。ただし、地山層に多量の礫層を含んでいることも事実であり、意図的なものか、偶然、地山層に礫が混入したかについては断定できない。

建物の主軸方向についても特記すべきものがあつた。磁北方向を中心とする建物群と真北方向を基準とする建物群である。

前者の磁北に近い傾きを示す建物群は、確認された建物の約7割に相当する23棟がある。詳しく列挙すれば次の通りとなる。

- ・ N—3° —Wの傾きをなすもの20棟。
- ・ N—5° —Wの傾きをなすもの2棟。
- ・ N—6° —Wの傾きをなすもの1棟

後者の真北に近い傾きを示す建物群で10棟ある。

- ・ N—4° —Eの傾きをなすもの8棟。
- ・ N—9° —Eの傾きをなすもの2棟。

以上となる。注目されるのは、東側調査区から検出された建物群であり、柱穴の切り合いからBY11→BY10→BY9→BY8の順序で建替えを行っている。これらの建物は、薬研堀の設置から箱堀への移行、堀の埋め戻しの改変に伴って建替えられた可能性が指摘される。他の建物跡に関しても2回以上の建替えを行っていたことは確実で、柱穴の切り合い関係と主軸方向を参考に検討を加えた結果、第I期～第IX期の変遷に分類することが可能であった。

分類した建物群について年代順に概要と特徴について述べておく。なお、時期区分で分類した各建物と方位、間尺間の計測については、第1表 館山北館跡建物跡一覧表、第2表 館山北館跡建物計測表を参照。

#### (1) 第I期の建物群「第4図・第92図・第4図版」

東側のG6～14—7～20の範囲にかけて検出された2棟の建物跡で、梁間の方向がほぼ磁北を示すように構築している。堆積層の吟味から、KY1とKY2の薬研堀が掘られた時期に伴うものと考えている。井戸は、BY11の建物に付随するDY7とBY20の建物に伴うDN2の2基が確認される。また、DN2の北側に隣接するDN5は意図的な破壊を受けているこ

第1表 館山北館跡検出建物跡一覧表

建物記号	桁行	梁間( )	梁間( )	柱穴形状	時期	方位	備考
BY1	5間	2間(西)	2間(東)	円形	IX期	N-4°-E	
BY2	5間	2間(北)	3間(南)	円形	IX期	N-4°-E	
BY3	3間	3間(西)	3間(東)	円形	V期	N-9°-E	BY23を切る
BY4	4間	2間(北)	2間(南)	円形	II期	N-3°-W	
BY5	2間	2間(北)	2間(南)	円形	III期	N-3°-W	
BY6	6間	2間(西)	?間(東)	円形	III期	N-3°-W	北面廂
BY7	5間	1間(北)	1間(南)	円形	II期	N-3°-W	
BY8	7間	4間(西)	4間(東)	円形	IV期	N-3°-W	BY9を切る。井戸1間
BY9	7間	3間(西)	4間(東)	円形	III期	N-3°-W	BY8に切られる
BY10	6間	1間(西)	1間(東)	円形・楕円形	II期	N-3°-W	BY11を切る
BY11	3間	2間(西)	2間(東)	円形・楕円形	I期	N-5°-W	BY10に切られる
BY12	8間	3間(西)	2間(東)	円形	IV期	N-6°-W	BY14、BY22に切られる
BY13	3間	1間(北)	1間(南)	円形	III期	N-4°-E	
BY14	9間	3間(西)	3間(東)	円形	IX期	N-4°-E	BY12を切る
BY15	3間	1間(西)	1間(東)	円形	III期	N-4°-E	
BY16	4間	2間(北)	2間(南)	円形	II期	N-3°-W	
BY17	3間	1間(北)	1間(南)	円形	III期	N-3°-W	
BY18	3間	?間(西)	?間(東)	円形・楕円形	VII期	N-3°-W	BY31を切る
BY19	4間	3間(北)	3間(南)	円形	VI期	N-3°-W	
BY20	3間	1間(西)	2間(東)	円形	I期	N-5°-W	BY24に切られる
BY21	6間	1間(北)	2間(南)	円形	II期	N-3°-W	
BY22	7間	3間(西)	3間(東)	円形	VIII期	N-4°-E	BY12を切る
BY23	9間	3間(西)	2間(東)	円形	VI期	N-3°-W	BY3, 15, 25, 26に切られる
BY24	3間	?間(西)	2間(東)	円形	II期	N-3°-W	BY20を切る
BY25	6間	1間(西)	2間(東)	円形	VII期	N-3°-W	BY23を切る
BY26	2間以上	?間(西)	2間(東)	円形	VII期	N-3°-W	
BY27	3間	?間(西)	?間(東)	円形	III期	N-9°-E	
BY28	3間	?間(西)	?間(東)	円形	IX期	N-4°-E	
BY29	5間	2間(西)	2間(東)	円形	III期	N-3°-W	BY31, 32を切る
BY30	2間	1間(西)	1間(東)	円形	II期	N-3°-W	
BY31	5間	?間(北)	?間(南)	円形	IV期	N-3°-W	BY29に切られる
BY32	6間	?間(北)	?間(南)	円形	V期	N-3°-W	BY29に切られる
BY33	3間	?間(北)	?間(南)	円形	VIII期	N-4°-E	

第2表 館山北館跡建物計測表

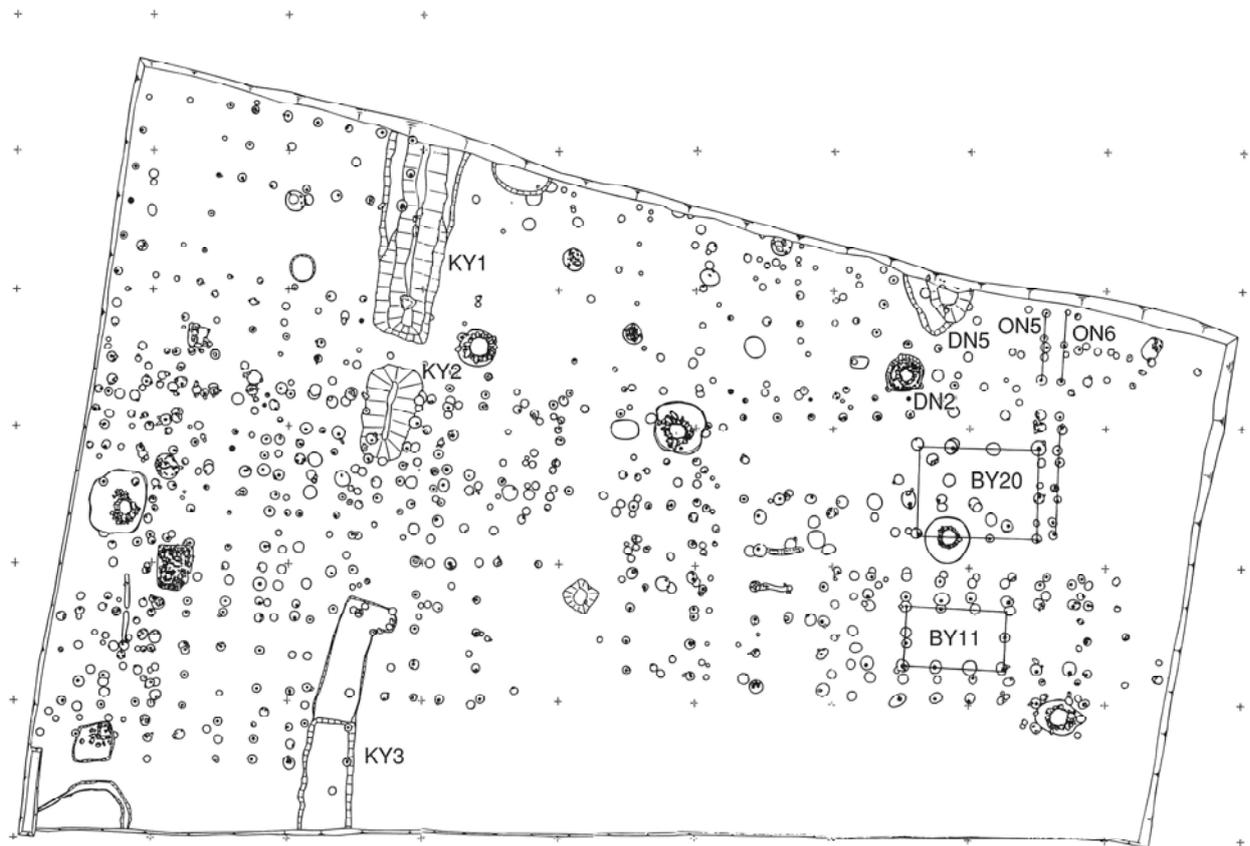
建物 No. 〔面積〕	上段：桁行 < > 内は柱穴番号 →は柱穴の方向。東西は東→西。南北は南→北。	
	下段：梁間 ・の数字は柱間の長さで、単位はcm㎡。	
B Y 1 〔37.83㎡〕	東西5間	南面 < T Y 146→159→158→157→156→T Y 155 > ・ 200→190→190→210→180 北面 < T Y 148→149→150→151→152→T Y 153 > ・ 180→220→180→190→200
	南北2間	東面 < T Y 146→147→T Y 148 > ・ 190→200 西面 < T Y 155→154→T Y 153 > ・ 190→200
B Y 2 〔51㎡〕	南北5間	東面 < T Y 118→119→120→121→122→T Y 123 > ・ 200→210→220→210→200 西面 < T Y 116→115→114→113→112→T Y 111 > ・ 210→200→210→210→210
	東西2間	南面 < T Y 118→311→117→T Y 116 > ・ 140→80→280 北面 < T Y 123→124→T Y 111 > ・ 240→260
B Y 3 〔40.04㎡〕	東西3間	南面 < T Y 674→553→564→T Y 235 > ・ 220→240→310 北面 < T Y 212→253→797→T Y 594 > ・ 220→310→240
	南北3間	東面 < T Y 674→654→213→T Y 212 > ・ 210→90→220 西面 < T Y 235→778→595→T Y 594 > ・ 180→170→170
B Y 4 〔28.8㎡〕	南北4間	東面 < T Y 7→8→9→10→T Y 711 > ・ 200→210→190→200 西面 < T Y 5→4→3→2→T Y 1 > ・ 200→210→200→190
	東西2間	南面 < T Y 7→6→T Y 5 > ・ 200→160 北面 < T Y 11→12→T Y 1 > ・ 170→190
B Y 5 〔15.64㎡〕	南北2間	東面 < T Y 17→521→18→T Y 19 > ・ 200→(50)→210 西面 < T Y 602→438→T Y 441 > ・ 220→240
	東西2間	南面 < T Y 17→522→T Y 602 > ・ 200→140 北面 < T Y 19→20→T Y 441 > ・ 200→140
B Y 6 〔54.72㎡〕	東西6間	南面 < T Y 502→38→37→36→35→34→T Y 33 > ・ 180→200→210→160→180→210 北面 < T Y ? →43→44→45→467→T Y 31 > ・ ? →180→210→190→200→190 北面廂 < T Y 742→53→52→138→50→49→T Y 48 > ・ 200→200→210→210→200→230
	南北2間	東面 < T Y 502→T Y ? > 西面 < T Y 33→32→T Y 31 > ・ 240→240
B Y 7 〔23㎡〕	南北5間	東面 < T Y 126→125→25→24→23→T Y 22 > ・ 160→150→140→156→160 西面 < T Y 26→27→28→29→30→T Y 21 > ・ 150→155→150→160→151
	東西1間	北面 < T Y 22→T Y 21 > ・ 300 南面 < T Y 126→T Y 26 > ・ 300
B Y 8 〔97.3㎡〕 〔4.32㎡〕	東西7間	南面 < T Y 75→135→91→90→89→88→87→T Y 166 > ・ 90→190→220→190→210→210→280 北面 < T Y 79→80→81→82→83→84→85→T Y 307 > ・ 100→180→210→200→200→210→280
	南北4間	東面 < T Y 75→76→77→78→T Y 79 > ・ 180→190→210→120 西面 < T Y 160→167→309→308→T Y 307 > ・ 180→200→200→120
	井戸1間	南面 < T Y 328→T Y 329 > ・ 260 北面 < T Y 75→T Y 91 > ・ 280 東面 < T Y 328→T Y 75 > ・ 160 西面 < T Y 329→T Y 91 > ・ 160
B Y 9 〔86.4㎡〕	東西7間	南面 < T Y 68→105→66→65→64→796→160→T Y 161 > ・ 210→200→210→200→210→200→210 北面 < T Y 55→56→57→58→59→60→310→T Y 164 > ・ 210→200→210→200→210→200→210 南門 < T Y 72→73→T Y 74 > ・ 210→200
	南北3間	東面 < T Y 68→69→70→71→T Y 55 > ・ 200→160→140→100 西面 < T Y 161→162→163→T Y 164 > ・ 200→200→200
B Y 10 〔48㎡〕	東西6間	南面 < T Y 100→101→102→103→104→67→T Y 92 > ・ 210→200→210→200→200→180 北面 < T Y 99→98→97→96→95→94→T Y 93 > ・ 210→200→190→220→200→180
	南北1間	東面 < T Y 92→T Y 93 > ・ 396 西面 < T Y 100→T Y 99 > ・ 400
B Y 11 〔20.5㎡〕	東西3間	南面 < T Y 101→102→103→104 > ・ 200→198→203 北面 < T Y 61→110→109→107 > ・ 201→202→197
	南北2間	東面 < T Y 104→106→T Y 107 > ・ 190→155 西面 < T Y 101→62→86→T Y 61 > ・ 122→65→155
B Y 12 〔76.5㎡〕	東西8間	南面 < T Y 511→20→189→206→205→204→203→202→T Y 201 > ・ 150→200→200→200→190→200→200→200 北面 < T Y 516→? →191→192→193→194→195→196→T Y 197 > ・ ? →? →200→210→200→180→220→220

B Y 12	南北 3 間	東面 < T Y 511→507→T Y 516 > · 200→260 ( 2 間 ? ) 西面 < T Y 201→200→198→T Y 197 > · 100→280→120
B Y 13 [12.8m <sup>2</sup> ]	南北 3 間	東面 < T Y 226→225→223→T Y 660 > · 210→200→230 西面 < T Y 227→228→230→T Y 661 > · 210→200→230
	東西 1 間	南面 < T Y 226→T Y 227 > · 220 北面 < T Y 660→T Y 661 > · 220
B Y 14 [112.85m <sup>2</sup> ]	東西 9 間	南面 < T Y 202→201→609→267→268→269→270→2714→312→T Y 318 > · 210→200→210→210→220→200→190→210→200 北面 < T Y 675→603→604→605→606→607→608→274→627→T Y 630 > · 210→180→220→180→230→210→210→210→200
	南北 3 間	東面 < T Y 202→? →210→T Y 675 > · ? →? →180 西面 < T Y 318→488→315→T Y 630 > · 200→210→200
B Y 15 [25.42m <sup>2</sup> ]	東西 3 間	南面 < T Y 278→277→276→T Y 275 > · 220→200→200 北面 < T Y ? →? →781→T Y 323 > · ? →? →220
	南北 1 間	東面 < T Y 278→? > ? 西面 < T Y 275→264→T Y 323 > · 200→210
B Y 16 [36.54m <sup>2</sup> ]	南北 4 間	東面 < T Y 290→543→289→288→287→T Y 286 > · 120→ ( 90 ) →220→220→220 西面 < T Y 291→546→293→294→295→T Y 296 > · 120→ ( 90 ) →180→260→210
	東西 2 間	南面 < T Y 290→292→T Y 291 > · 210→213 北面 < T Y 286→297→T Y 296 > · 200→223
B Y 17 [18.3m <sup>2</sup> ]	南北 3 間	東面 < T Y 301→302→303→T Y 549 > · 210→200→200 西面 < T Y 300→299→298→T Y 397 > · 215→215→200
	東西 1 間	南面 < T Y 301→T Y 300 > · 310 北面 < T Y 549→T Y 297 > · 300
B Y 18	東西 ? 間	南面 < T Y 367→378→376→T Y ? > · 210→190→? ( 3 間 ? ) 北面 < T Y 411→403→390→T Y ? > · 210→210→?
	南北 2 間	東面 < T Y 367→423→411 T Y > · 230→200 西面不明
B Y 19 [45.88m <sup>2</sup> ]	南北 4 間	東面 < T Y 392→393→394→629→T Y 396 > · 190→180→150→220 西面 < T Y 377→371→718→390→T Y 387 > · 170→160→210→200
	東西 3 間	南面 < T Y 392→366→769→T Y 377 > · 200→210→210 北面 < T Y 396→397→398→T Y 387 > · 200→210→210
B Y 20 [36.92m <sup>2</sup> ]	東西 3 間	南面 < T Y 127→134→? →T Y 795 > · 280→? →? 北面 < T Y 129→130→131→T Y 132 > · 270→250→190
	南北 2 間	東面 < T Y 127→128→T Y 129 > · 250→270 西面 < T Y 795→T Y 132 > · 520 ( 1 間 ? ) 南面廂 < T Y 744→336→338→T Y 340 > · 180→220→200
B Y 21 [35.84m <sup>2</sup> ]	南北 6 間	東面 < T Y 168→169→170→171→172→173→T Y 510 > · 180→200→180→200→180→180 西面 < T Y 179→178→177→176→439→13→T Y 190 > · 180→200→180→200→180→180 東面廂 < T Y 181→183→184→185→186→187→T Y 506 > · 190→190→160→200→190→190
	東西 2 間	南西 < T Y 168→180→T Y 179 > · 180→190 北面 < T Y 510→512→T Y 190 > · 120→250
B Y 22 [130.32m <sup>2</sup> ]	東西 7 間	南面 < T Y 610→279→280→? →281→282→283→T Y 483 > · 210→240→? →? →200→200→210 北面 < T Y 611→? →? →625→612→613→614→615→T Y 616 > · ? →? →? →100→160→200→200→220 ( 8 間 ? ) 北面廂 < T Y 624→623→? →622→621→620→619→T Y 618 > · 200→? →? →210→210→200→200
	南北 3 間	東面 < T Y 610→199→197→T Y 611 > · 270→330→300 西面 < T Y 483→313→314→T Y 616 > · 290→250→360

B Y 23 [106.14m <sup>2</sup> ]	東西 9 間	南面 < T Y 232→233→234→235→236→237→238→239→240 T Y →241 > ・ 210→200→200→210→190→220→190→210→200 北面 < T Y 229→? →251→264→249→248→262→246→245 T Y →244 > ・ ? →? →200→130→250→200→200→200→200
	南北 3 間	東面 < T Y 232→231→229 > ・ 240→340 西面 < T Y 241→242→243→244 > ・ 200→200→180
B Y 24 [38.44m <sup>2</sup> ]	南北 3 間	東面 < T Y 335→337→339→T Y 341 > ・ 210→210→200 西面 < T Y ? →40→41→T Y 42 > ・ ? →210→200
	東西 2 間	南面 < T Y 335→762→T Y ? > ・ 350→? 北面 < T Y 341→349→T Y 42 > ・ 340→280
B Y 25 [59.52m <sup>2</sup> ]	東西 6 間	南面 < T Y 255→256→257→258→259→260→T Y 261 > ・ 210→210→200→180→200→240 北面 < T Y 794→? →265→250→263→248→T Y 247 > ・ ? →? →200→160→250→220
	南北 2 間	東面 < T Y 255→254→T Y 794 > ・ 210→270 西面 < T Y 261→T Y 247 > ・ 480 (1 間?)
B Y 26	東西? 間	南面 < T Y 284→474→242→ ? →T Y ? > ・ 200→200→? →? 北面 < T Y 489→497→? →? →T Y ? > ・ 200→? →? →?
	南北 2 間	東面 < T Y 284→788→T Y 489 > ・ 240→250 西面不明
B Y 27	東西 3 間	南面 < T Y 693→694→695→T Y 696 > ・ 320→270→290 北面不明
	南北不明	
B Y 28	東西 3 間	南面 < T Y 773→140→743→T Y 771 > ・ 180→190→190 北面不明
	南北? 間	東面 < T Y 773→772→T Y ? > ・ 220→? (2 間?) 西面 < T Y 771→770→764→T Y ? > ・ 180→140→? (3 間?)
B Y 29 [56.71m <sup>2</sup> ]	東西 5 間	南面 < T Y 550→578→576→575→468→T Y 407 > ・ 220→220→200→230→200 北面 < T Y 563→583→571→572→465→T Y 466 > ・ 220→180→240→220→210
	南北 2 間	東面 < T Y 550→561→T Y 563 > ・ 210→320 西面 < T Y 407→457→T Y 466 > ・ 320→200
B Y 30 [8.8m <sup>2</sup> ]	東西 2 間	南面 < T Y 581→430→T Y 462 > ・ 220→220 北面 < T Y 568→573→T Y 461 > ・ 220→220
	南北 1 間	東面 < T Y 581→T Y 568 > ・ 200 西面 < T Y 462→T Y 461 > ・ 200
B Y 31	南北 5 間	東面 < T Y 425→417→410→427→? →T Y 459 > ・ 170→180→200→? →? 西面不明
	東西不明	南面 < T Y 425→421→? →T Y ? > ・ 240→? →? (3 間?) 北面 < T Y 459→455→T Y ? > ・ 380→? (2 間?)
B Y 32 (94m <sup>2</sup> )	南北 6 間	東面 < T Y 499→400→409→406→381→458→T Y 467 > ・ 200→200→200→200→200→200 西面不明
	東西? 間	南面 < T Y 499→370→372→T Y ? > ・ 200→210→? (3 間?) 北面不明
B Y 33	南北 3 間	東面 < T Y 478→495→399→T Y 666 > ・ 190→210→200 西面不明
	東西? 間	南面不明 北面不明

第 3 表 館山北館跡柱列計測表

ON No.	< > 内は柱穴番号 →は柱穴の方向。・の数字は柱間の長さで、単位はcm。
ON 1	東西11間 < T Y 732→722→142→723→724→725→305→726→727→729→687→T Y 685 > ・ 200→170→200→190→220→250→240→180→180→220→220
ON 2	南北 3 間 < T Y 419→414→384→T Y 382 > ・ 220→230→200
ON 3	南北 7 間 < T Y 541→540→539→? →538→560→557→T Y 555 > ・ 200→200→? →? →140→100→200
ON 4	東西 3 間 < T Y 137→746→762→T Y 730 > ・ 200→170→240
ON 5	南北? 間 < T Y 352→360→350→720→T Y ? > ・ 130→110→150→?
ON 6	南北? 間 < T Y 353→358→731→T Y ? > ・ 200→200→?



第I期建物群

第4図 館山北館跡建物変容想定図(1)

とから明確にできないが、I期もしくはそれ以前に構築したものとみられる。並行して存在するON5とON6は、調査区の北側に延びた2間以上の柱列で、建物の可能性も考慮して精査を行ったが他の柱穴が確認されなかった。

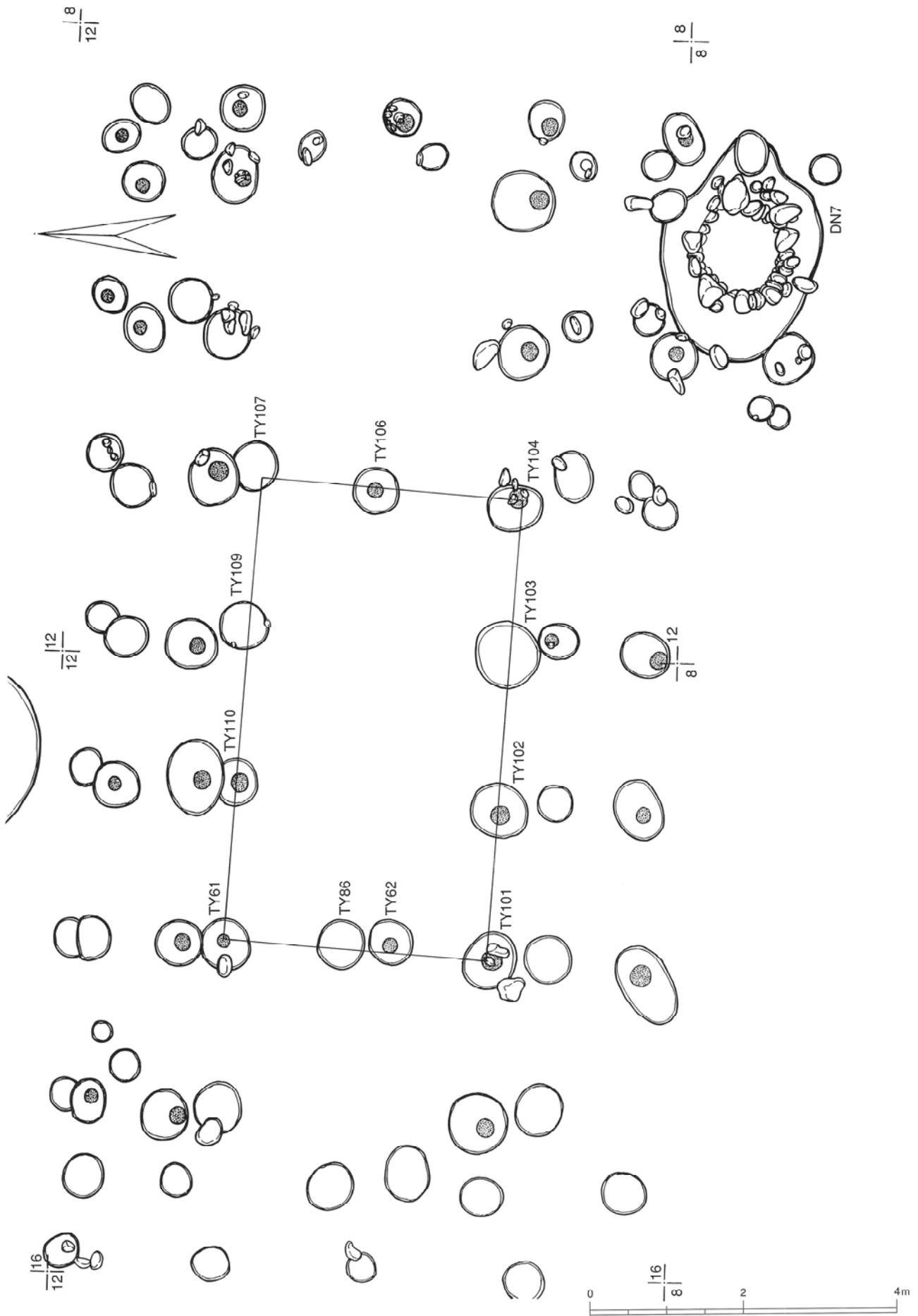
・BY11「第5図・第6図」

桁行3間、梁間2間の東西長の建物で、南東部にDN7の井戸を伴っている。直径70cm前後の円形状の掘り方をなすもので、大半の柱穴に14~26cmの柱痕跡が認められ、全てに粘土貼付柱を示していた。間尺は、桁行で197~202cmを測ることから柱痕跡を除くとほぼ6尺、梁間の2間が6尺と5尺と変則的であった。ただし、TY62に関しては、当初のTY86の柱穴を立替えたものと判断される。

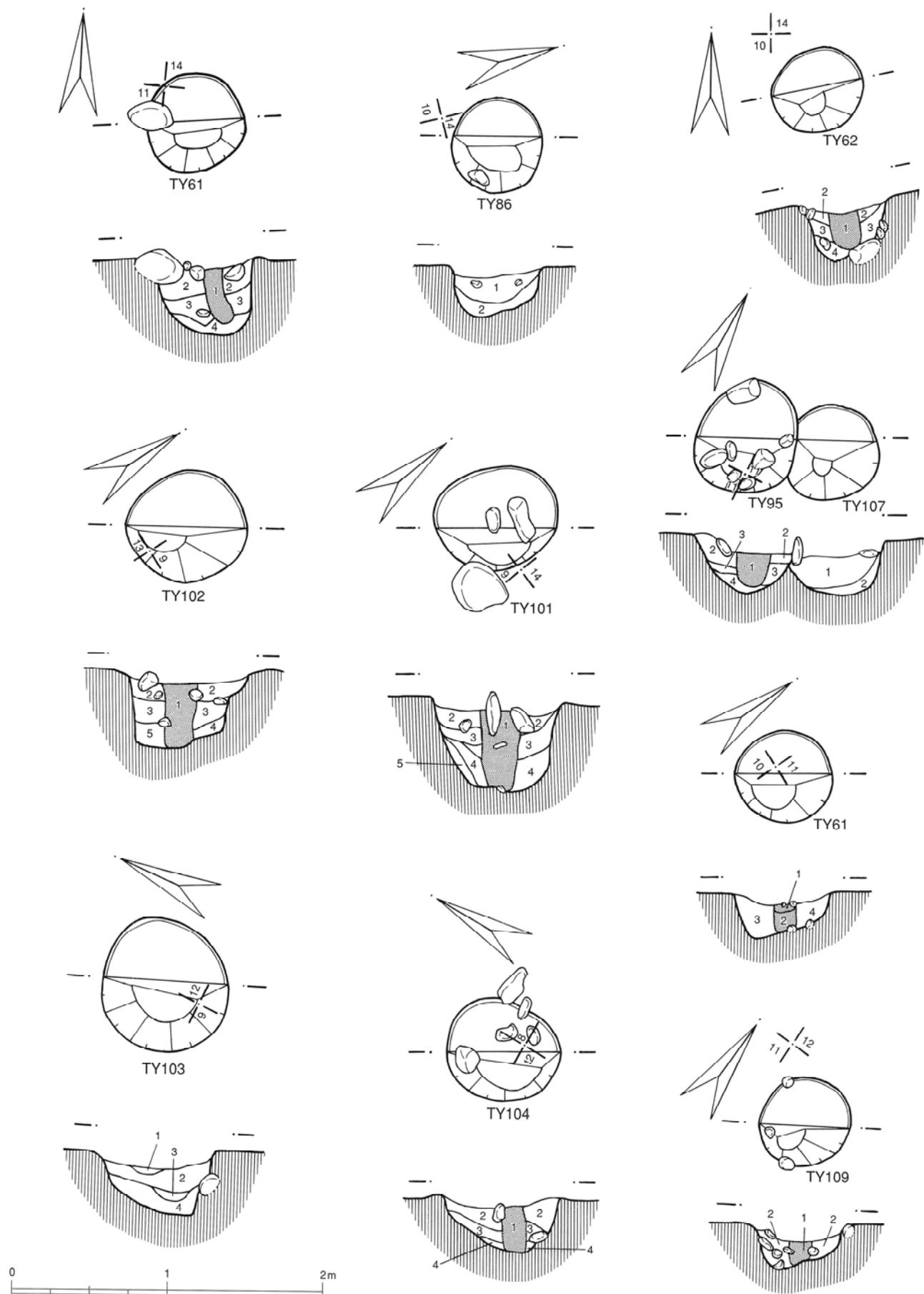
・BY20「第7図・第8図・第10図・第5図版」

桁行南面の一部がII期に掘られたDN1によって破壊されている。桁行3間、梁間2間と1間の東西長の建物で、東側に6尺3間の廂が付随する。掘り方は、ほぼ円形プランの40~87cm、深さが35~57cmと一定しているが、桁行の南面と北面で大きさが異なっている。南面の直径が45cm前後を示すのに、北面は70cm前後と一回り大きくなっている。

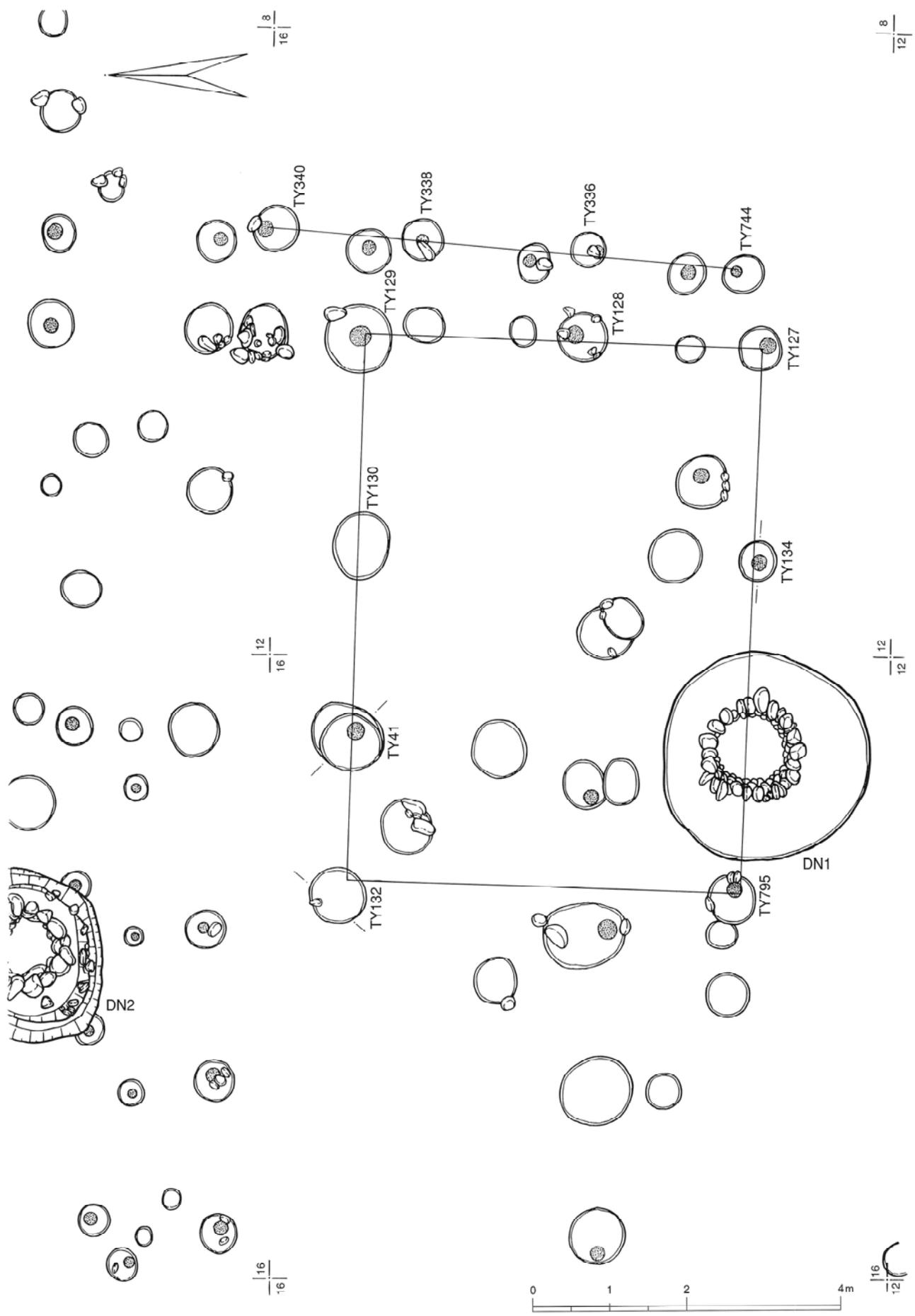
このことは、地山層が粘質シルトと砂利層との関係で、崩れやすい砂利層を意図的に狭く意識して掘ったものと思われる。確認された柱痕跡は、概ね20cm前後を平均とした粘土貼付柱である。間尺は、桁行が9尺・8尺・6尺の変則、梁間の東面が8尺と9尺を示すが、西面は1間となっている。



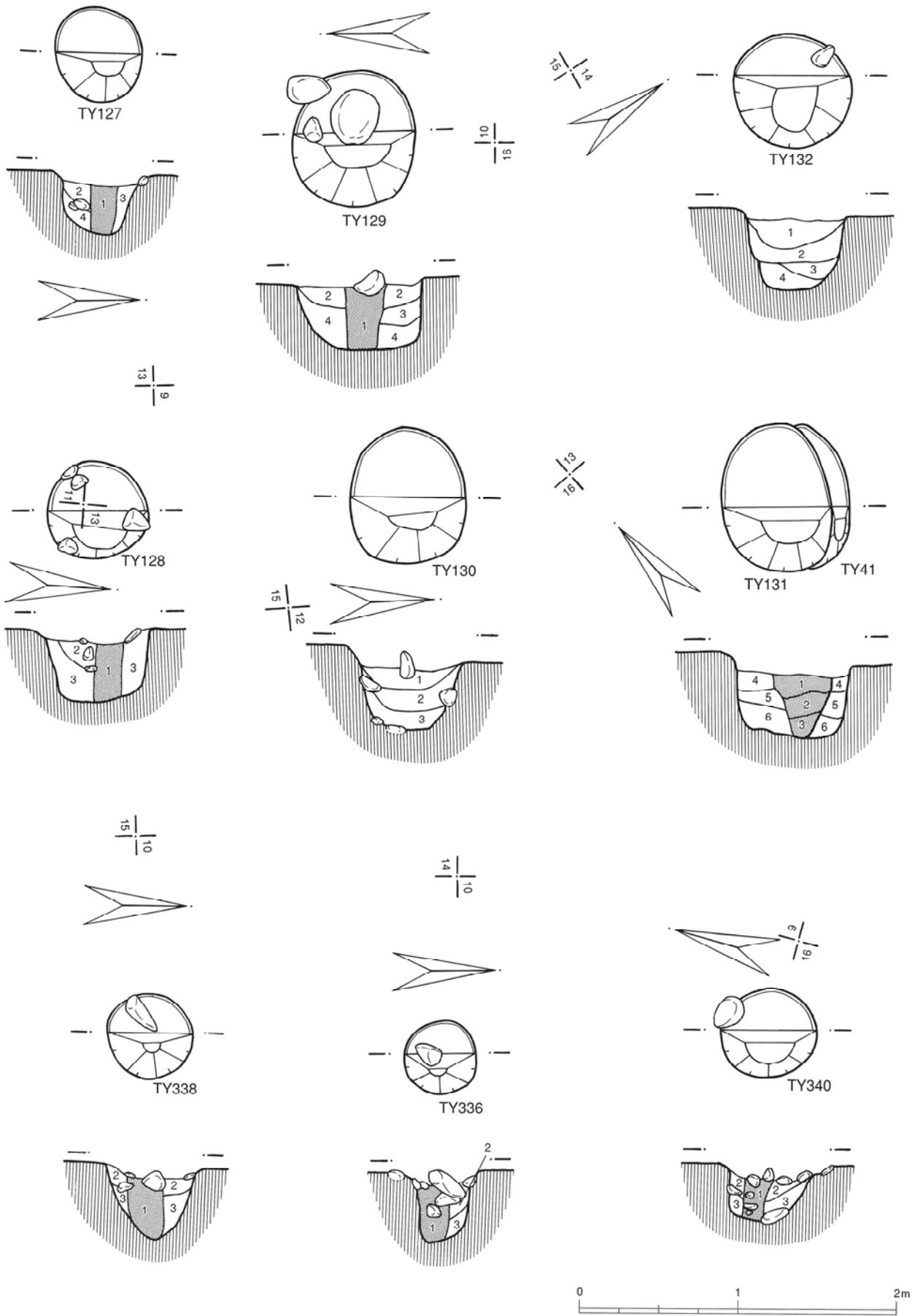
第5図 館山北館跡B Y11平面図



第6图 馆山北馆跡B Y11柱穴平面图



第7図 館山北館跡B Y 20平面図



第8図 館山北館跡B Y20柱穴平面図



第Ⅱ期建物群

第9図 館山北館跡建物変容想定図(2)

(2) 第Ⅱ期の建物群「第9図・第92図・第2図版・第4図版」

BY10の母屋に北のBY24、西のBY7とBY21の4棟が「コ」の字状に配置された東側の建物群とKY3を境にBY4・BY16・BY30の3棟で構成する西側の建物群の7棟が存在する。かつて菓研堀であったKY1は拡張して箱堀に改変する一方で、KY2は埋め戻され、新たに南側にKY3の箱掘りが設置される。このことで、KY1とKY3の間に空間が開いている。この空間には、建物が存在しないことから広義の虎口と推測され、東西の屋敷を区画していた可能性も指摘される。また、Ⅱ期の段階にはBY24に伴うDN1、BY7とBY21に付随するDN4の2基の井戸が新たに設置される。同時に北側のDN2とDN5の2基の井戸は、破壊して埋め戻された。Ⅱ期の建物の主体となるのが東側の建物群であり、北側に面してほぼ6尺間隔の11間によるON1の柱列が設置されている。井戸と建物の関係は、BY24の建物にDN1の井戸。BY10にはDN7、BY7とBY21がDN4、BY16・BY4・BY30の3棟の建物にDN3の井戸跡が付随するものと考えている。

・BY4「第10図・第11図・第5図版」

KY3の東側に隣接するように検出された桁行4間、梁間2間の南北長の建物跡である。掘り方は、50cm前後の円形プランで、深さ17cm～29cmと比較的浅く掘り込んでいる。柱穴の中には、上部に拳大の礫で固定するTY12等7基が認められている。柱痕跡は15cm前後を示し、粘土貼付柱を含むものが9基あった。間尺は、桁行が概ね6尺。梁間が南面で6尺と5尺、北路

面が概ね6尺となっている。

・B Y 7「第12図・第13図・第15図・第5図版・第18図版」

母屋となるB Y 10の西側に対して直角に配置された建物で、南北長の桁行5間、梁間1間をなす。掘り方は、円形プランないし楕円形を示すもので、直径が52cm～85cm、深さ22cm～66cmと安定している。柱痕跡は、平均が15cmで粘土貼付柱を基本としている。間尺は、桁行5尺の等間隔。梁間が10尺1間となる。

・B Y 10「第14図・第15図・第17図」

I期のB Y 11を立替した建物で、当初の桁行を東に2間、西に1間を延長し、梁間の長さを2尺詰めて1間とした桁行6間、梁間1間の東西長の建物である。柱穴の掘り方は、桁行の北面をI期のB Y 11を切って掘り下げるのに対し、南面の柱穴は、当初のB Y 11の柱穴となるT Y 101～T Y 104の3間を利用している。柱穴の大きさは、B Y 11よりも一回り大きい平均80cmを示し、深さは18cm～50cmと一定していない。柱痕跡の直径は15cm～28cmで粘土貼付柱を基本としている。間尺は、桁行が6尺と7尺を交互に配するのが特徴で、梁間は13尺1間となる。

・B Y 16「第16図・第17図・第19図」

K Y 3の西側に沿って検出された桁行4間、梁間2間の南北長の建物跡で、南1間の中間に間仕切りをもつ。掘り方は、円形を基本に直径が38cm～79cm、深さ22cm～49cmとなる。柱痕跡の平均は15cmで、約半数の柱穴内に粘土貼付柱の痕跡が認められた。

間尺は、桁行の東面が7尺の等間隔を示すが、西面は6尺・7尺・8尺と不安定である。間仕切りは北側から3尺に設置されている。梁間は概ね7尺である。

・B Y 21「第18図・第19図・第20図・第21図版・第22図版」

東側のB Y 7と並立して設置する桁行6間、梁間2間の南北長の建物跡であり、東側に廂をもつ。柱穴の掘り方は、円形プランを基本とした平均45cm前後、深さ25前後と浅い。柱痕跡の平均が15cmを示し、大半の柱穴に粘土貼付柱を施してある。間尺は、桁行が6尺の等間隔を示すが、梁間は南面の6尺に対し、北面は4尺と8尺の変則であった。廂は、東に3尺の空間を設けて設置し、間尺間は160cm～200cmを測り、6尺を基本と想定しているが一定していない。

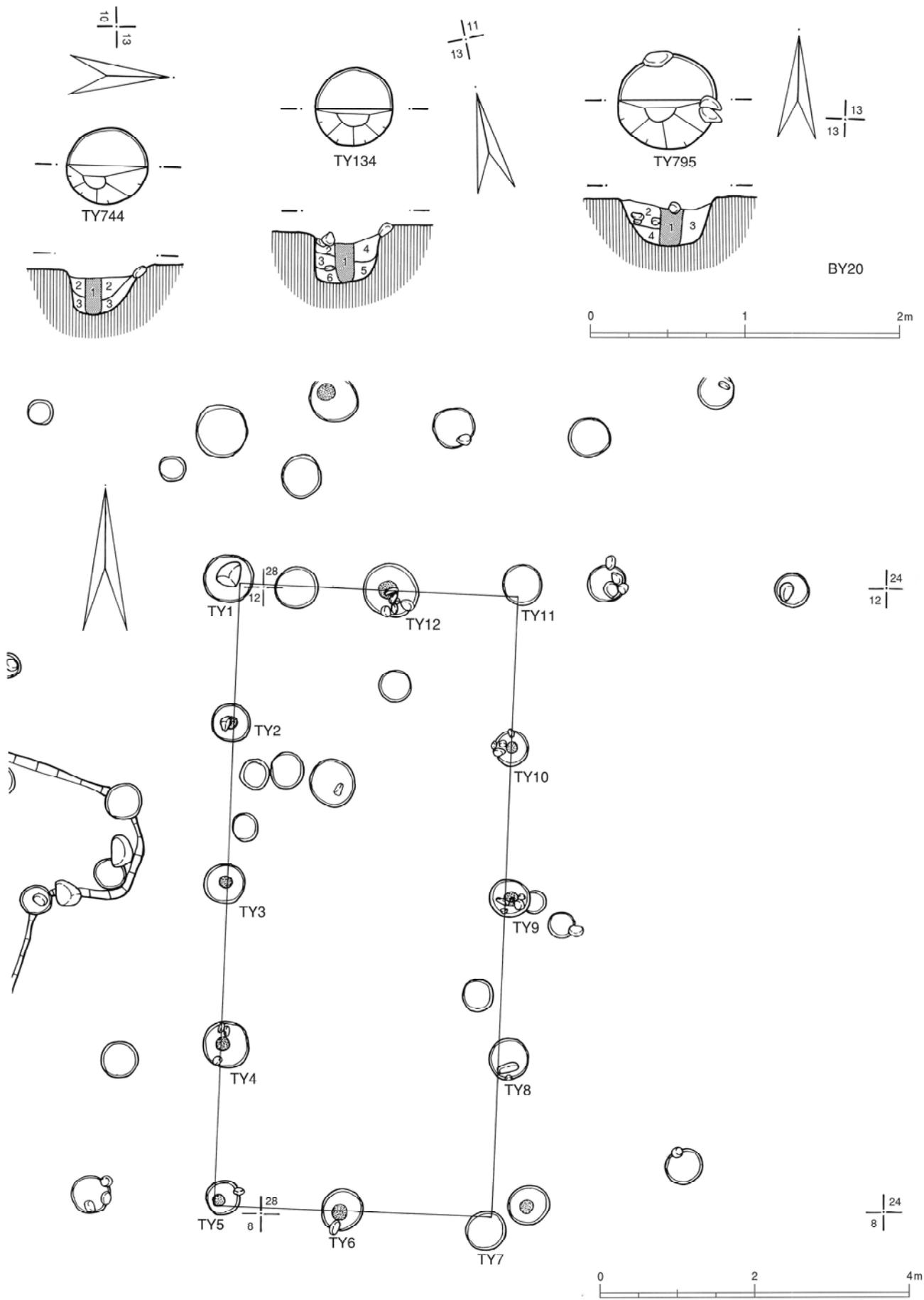
・B Y 24「第21図・第22図」

I期のB Y 20の後に立替えられた桁行3間、梁間2間をなす正方形の建物跡である。南西に位置するD N 1がこの建物に付随するものと考えられる。柱穴の掘り方は、直径が50cm～94cmの円形プランをなし、桁行西面の平均が85cmと大きめである。深さは比較的深く、平均で42cmを測り、確認された柱痕跡は13cm～20cmを示している。粘土貼付柱は認められない。

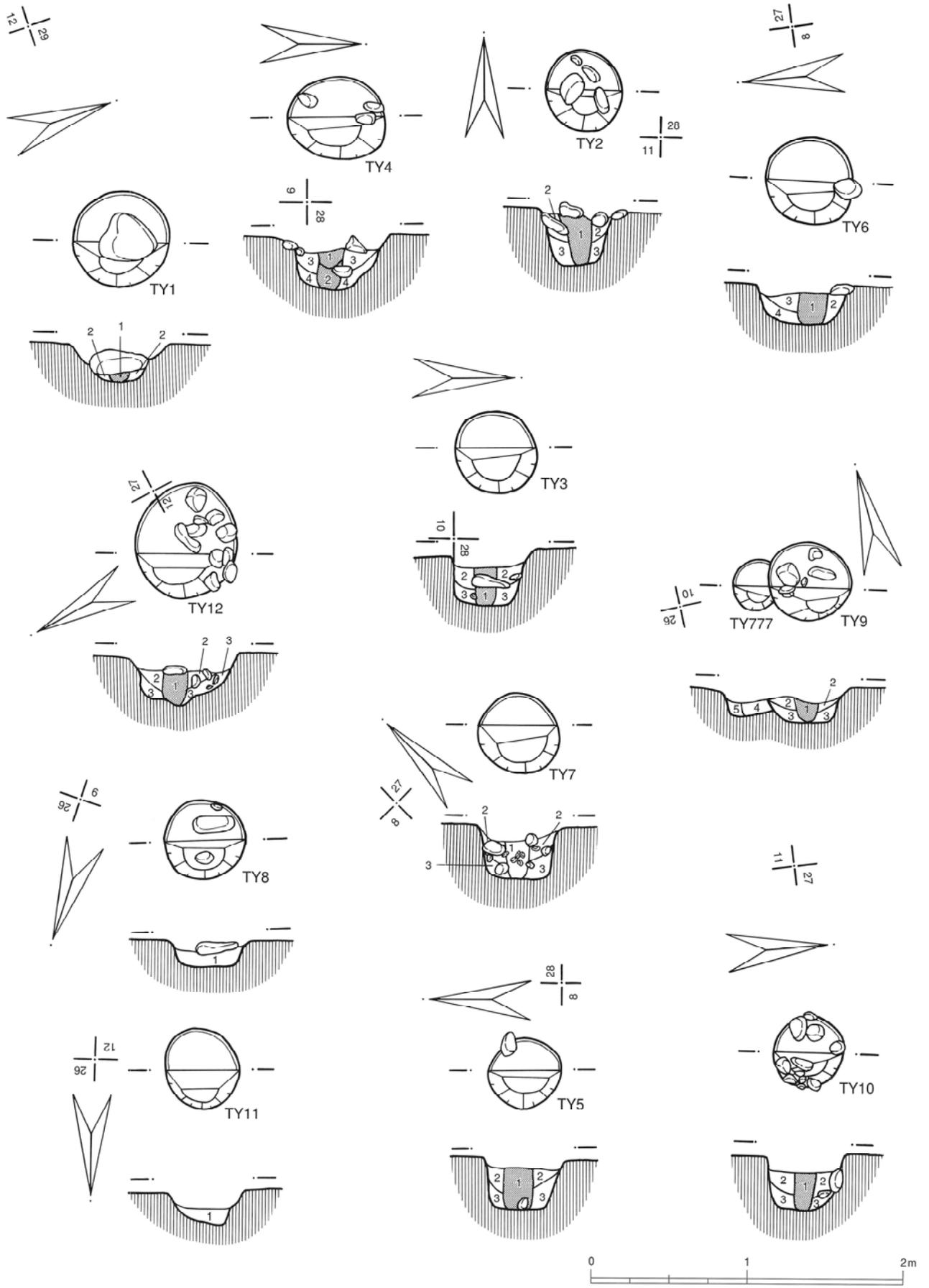
間尺は、桁行がほぼ7尺、梁間に関しては10尺前後の2間とみているが明確ではない。

・B Y 30「第23図」

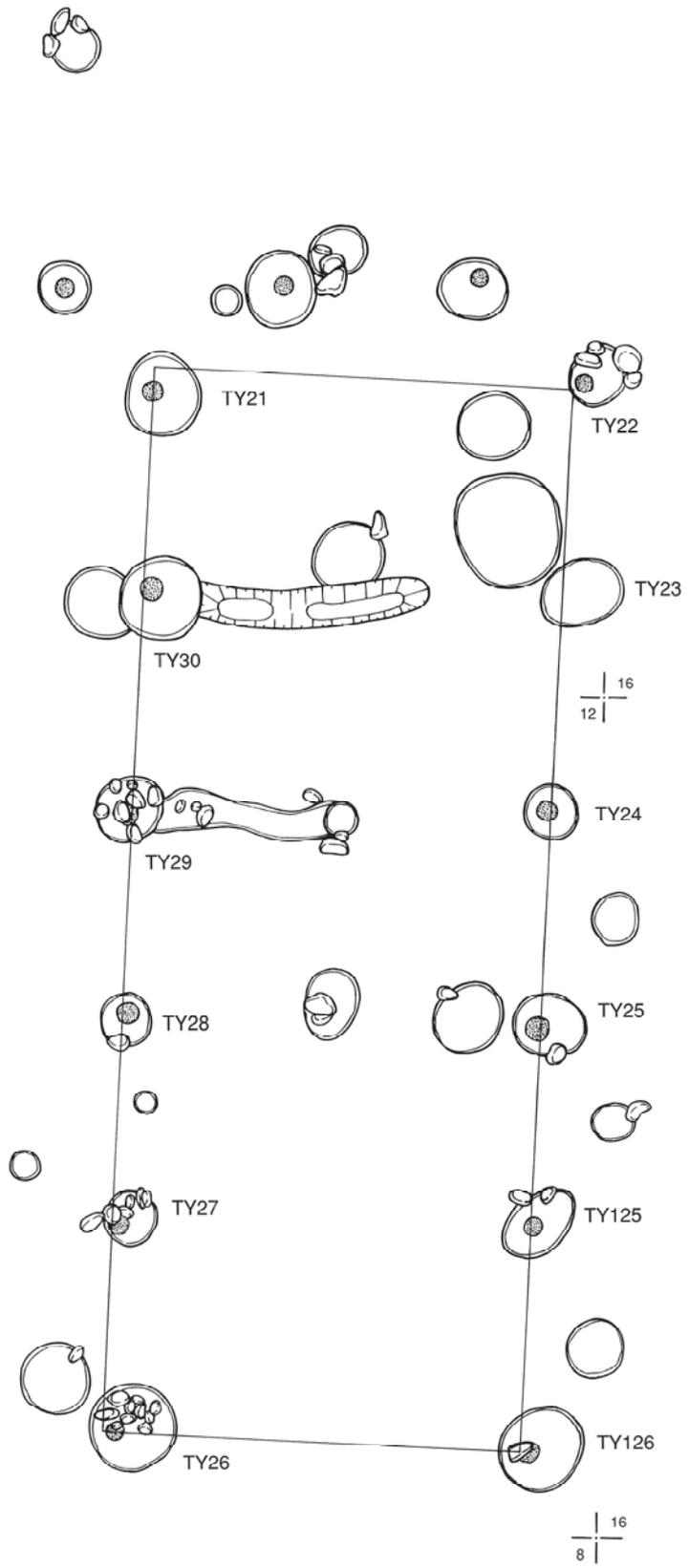
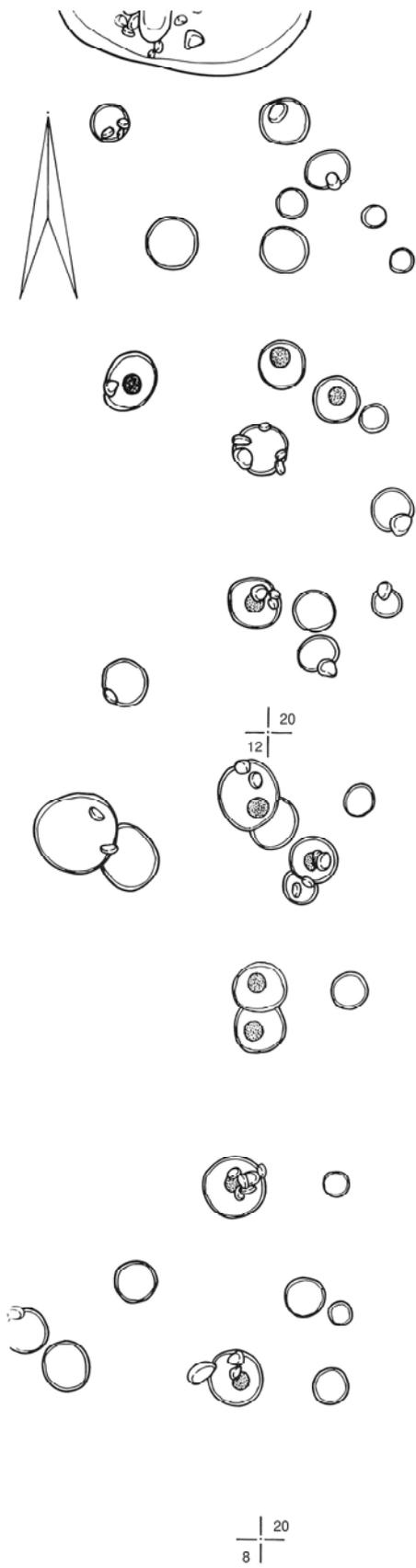
東西長の桁行2間、東西1間の小規模な建物跡である。建物内に存在する上部構造の基礎部と推測されるⅢ期の遺構のS Y 5に切られている。掘り方は円形で80cm前後、深さもT Y 461を除けば50cmと深く、粘土貼付柱の痕跡が明瞭に残っていた。間尺は、桁行が7尺、梁間6尺をなす。厩と想定している。



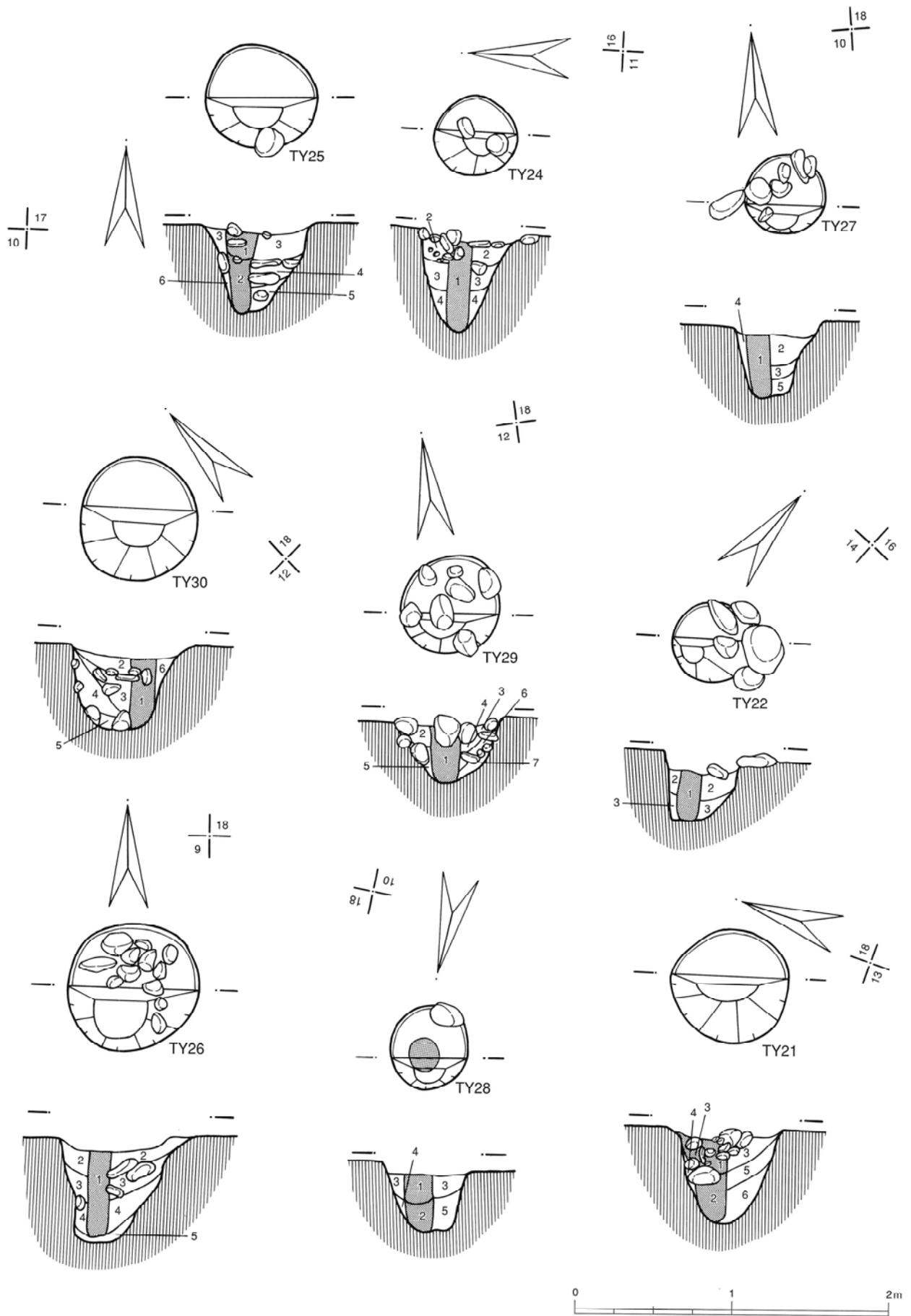
第10图 館山北館跡BY20柱穴平面図・BY4平面図



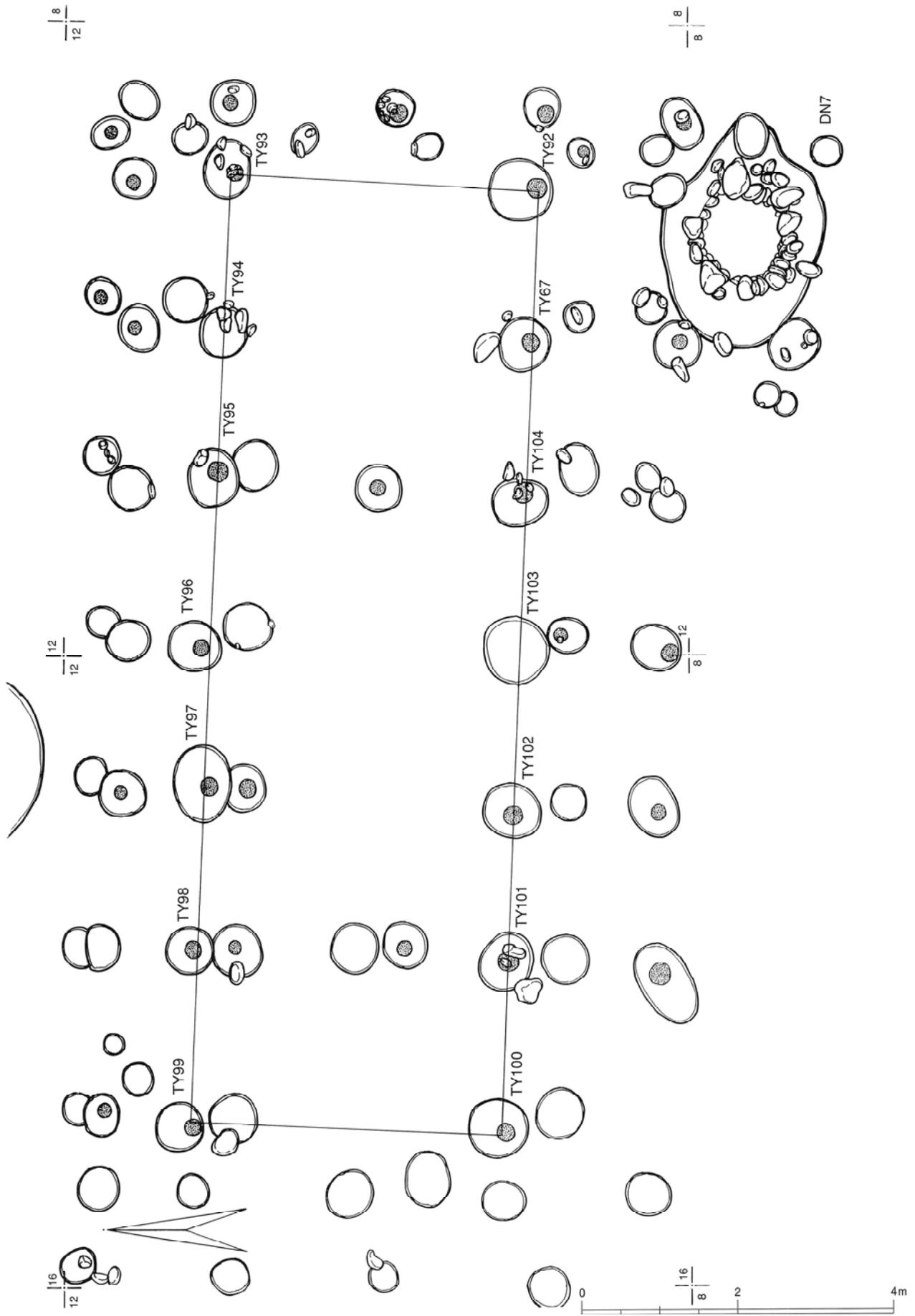
第11図 館山北館跡BY4柱穴平面図



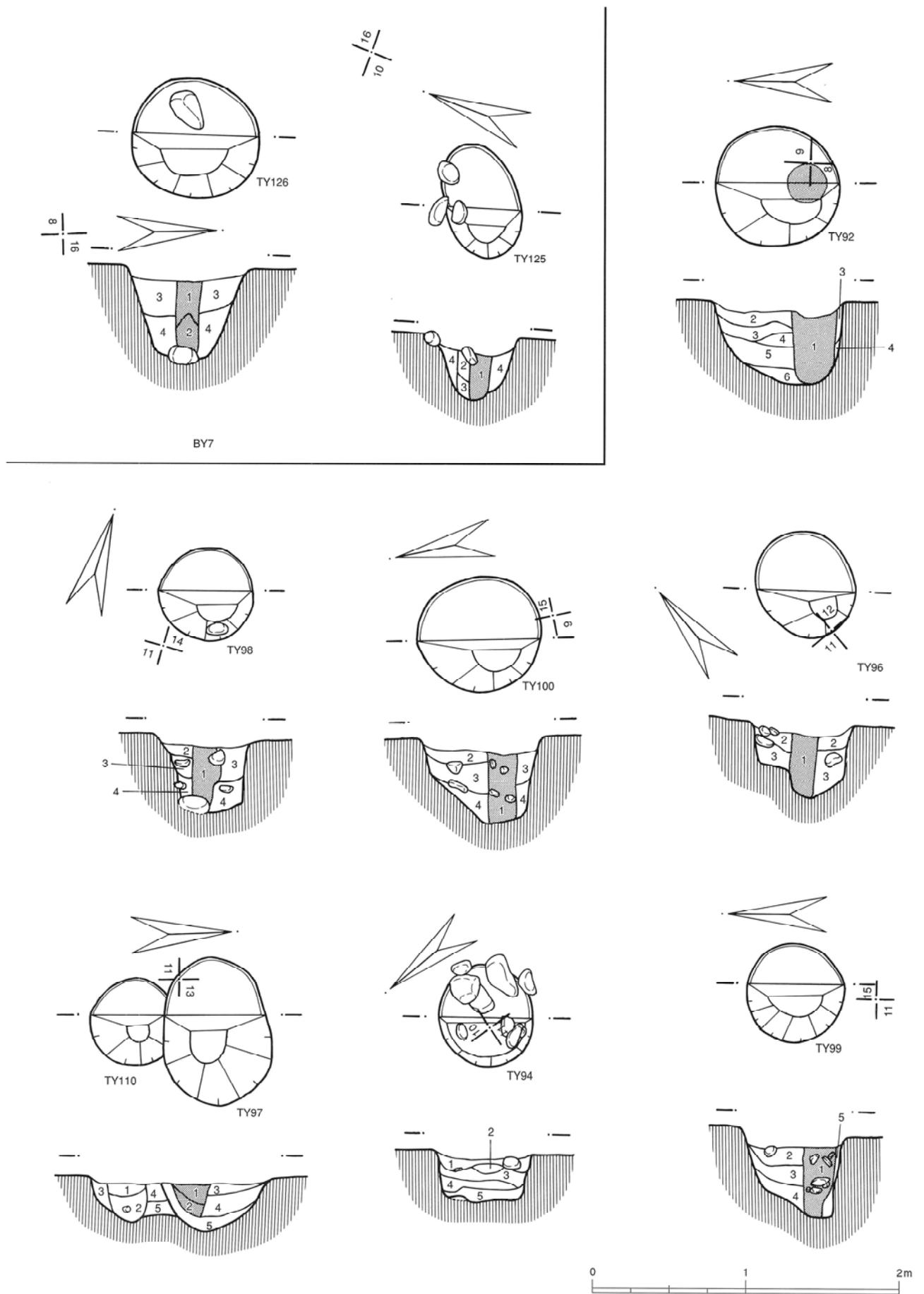
第12図 館山北館跡BY7平面図



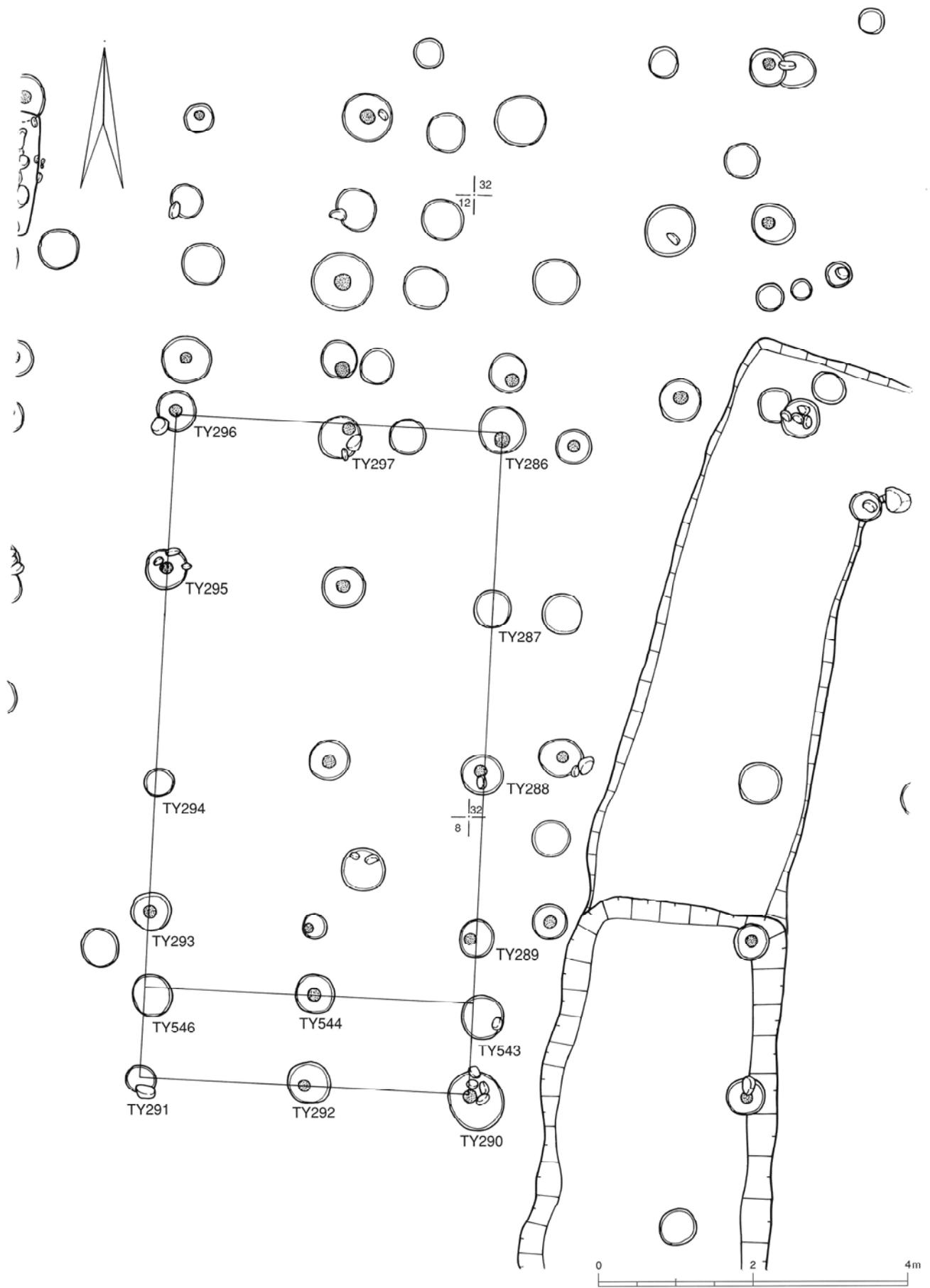
第13图 館山北館跡BY7柱穴平面図



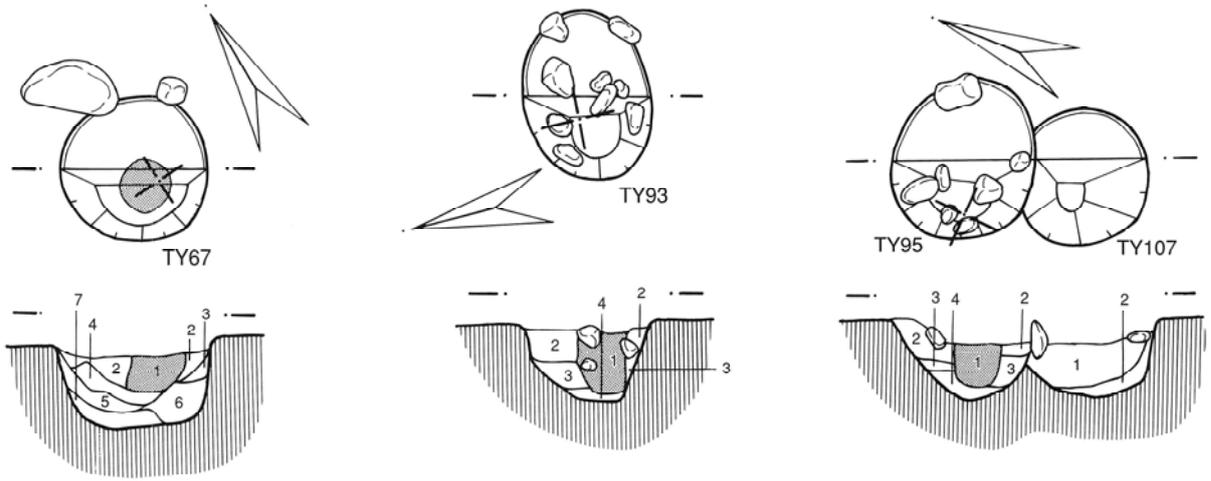
第14図 館山北館跡B Y10平面図



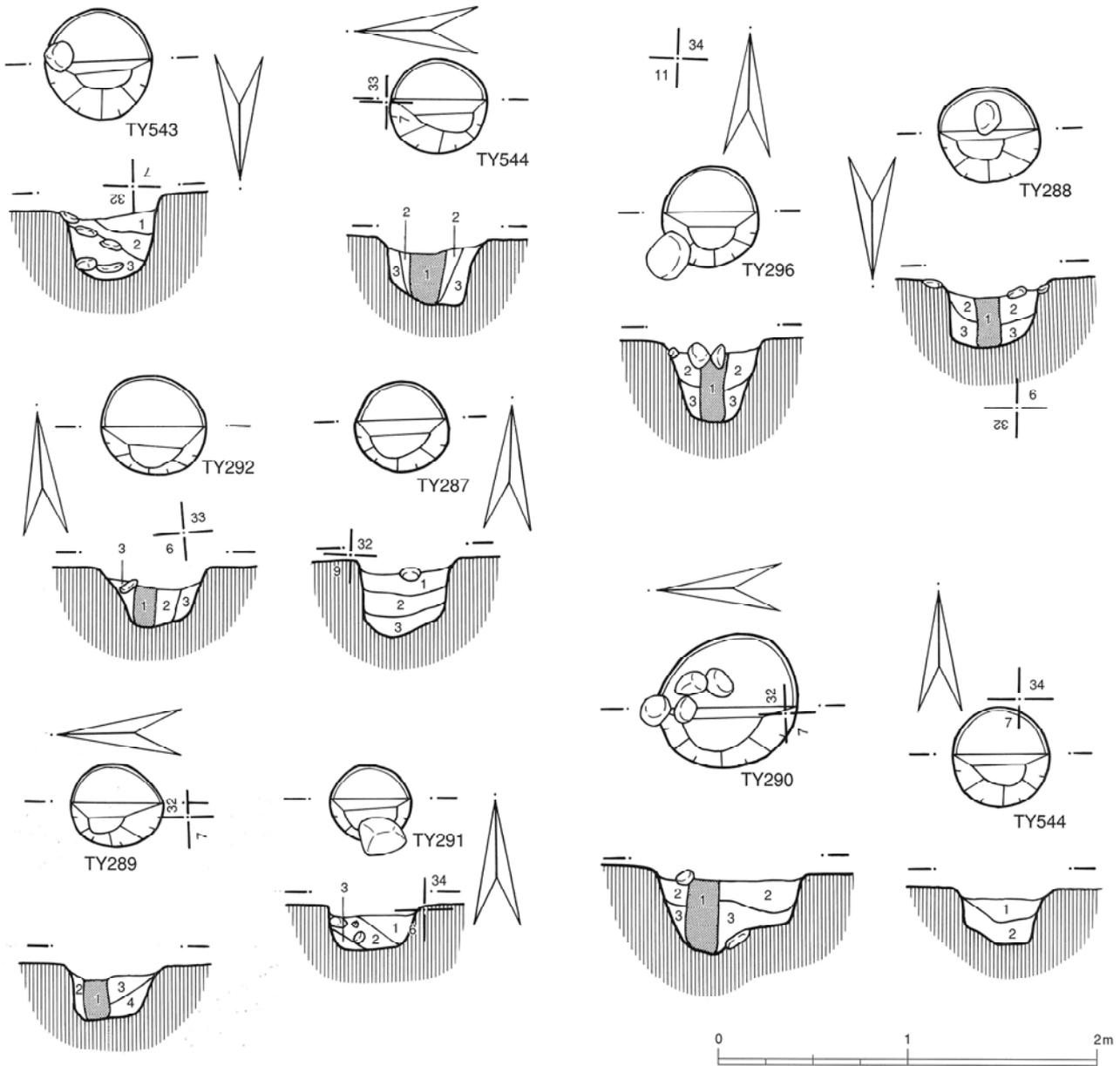
第15図 館山北館跡BY7・BY10柱穴平面図



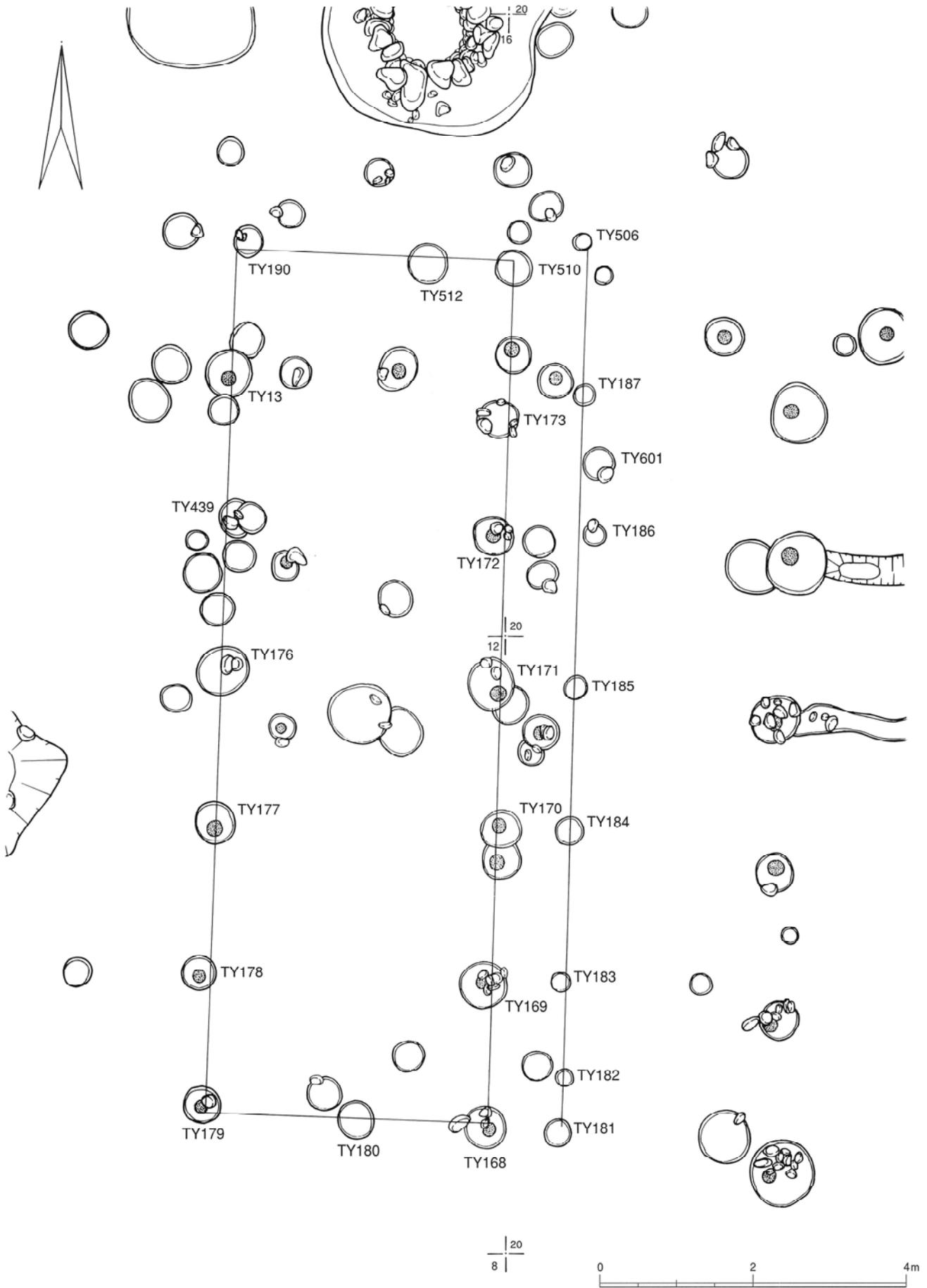
第16図 館山北館跡 B Y 16平面図



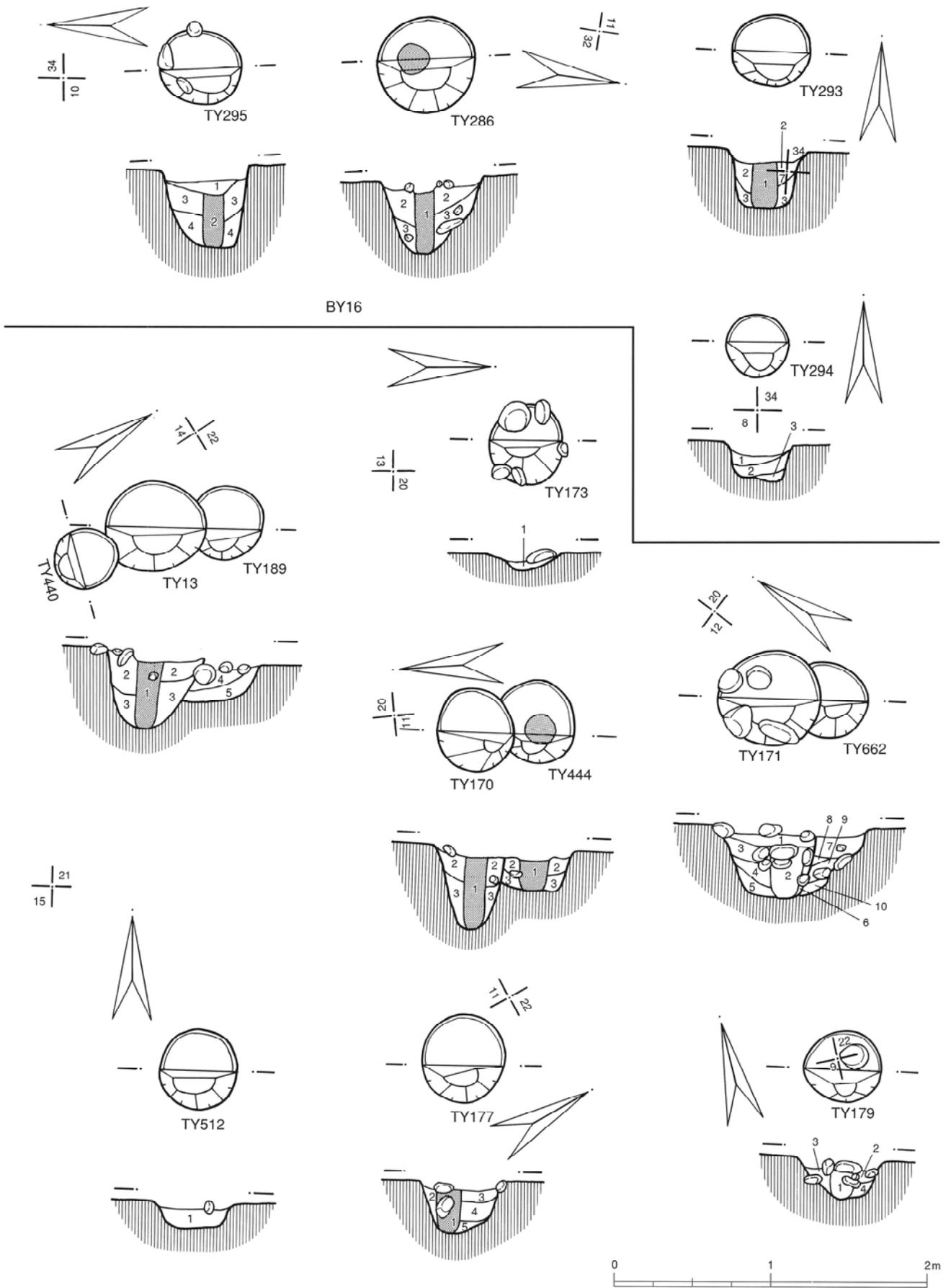
BY10



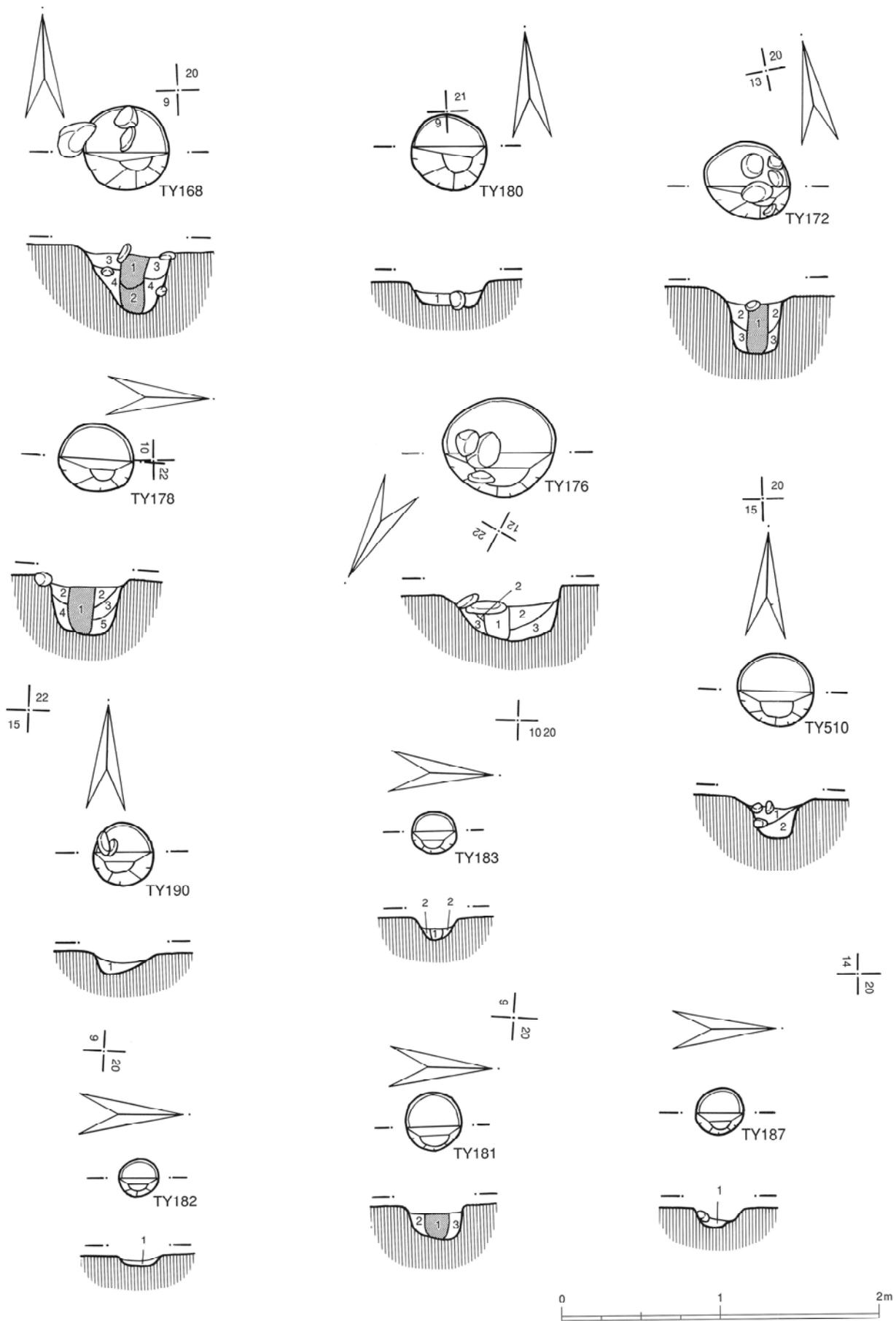
第17図 館山北館跡BY10・BY16柱穴平面図



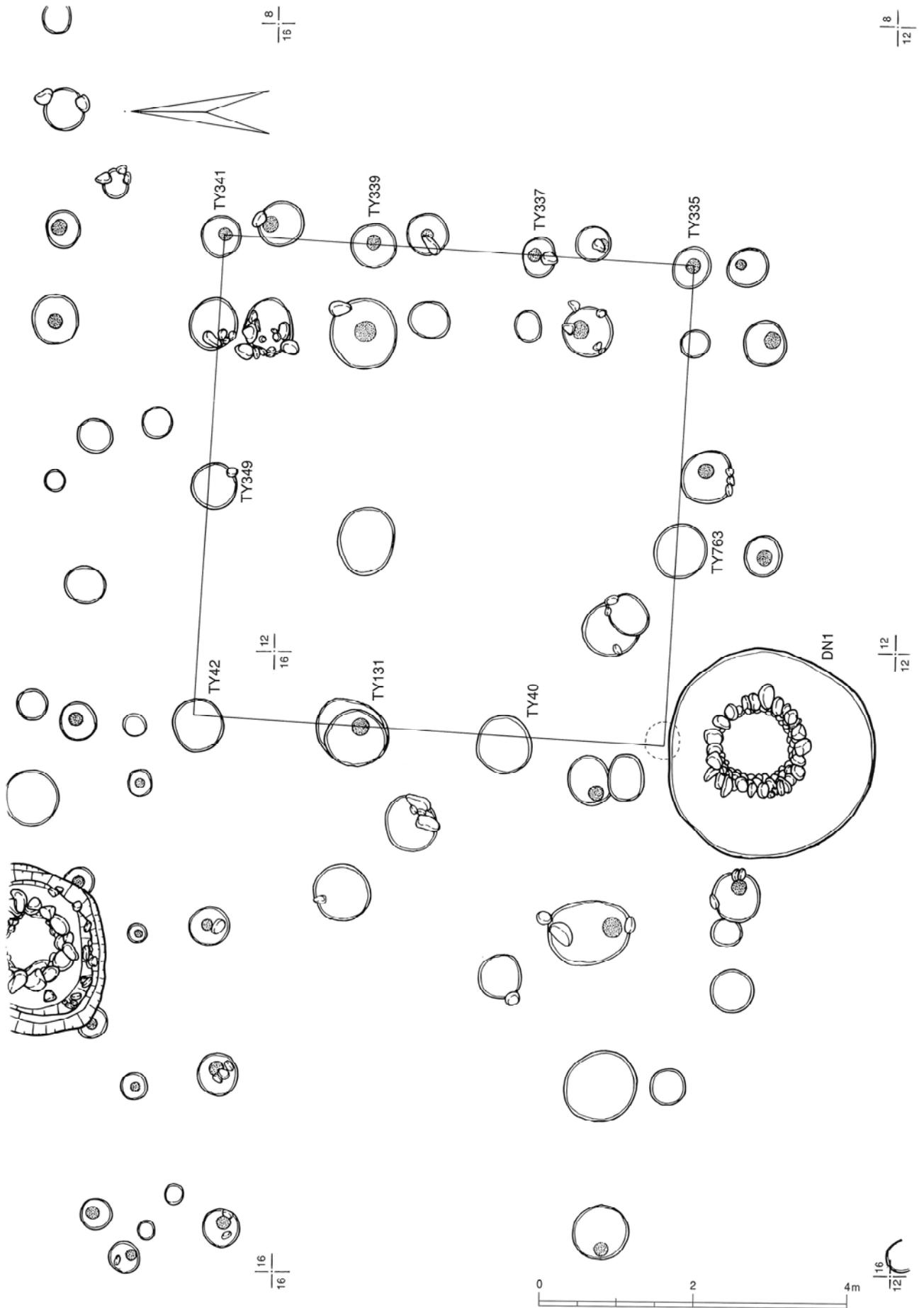
第18図 館山北館跡 B Y 21 平面図



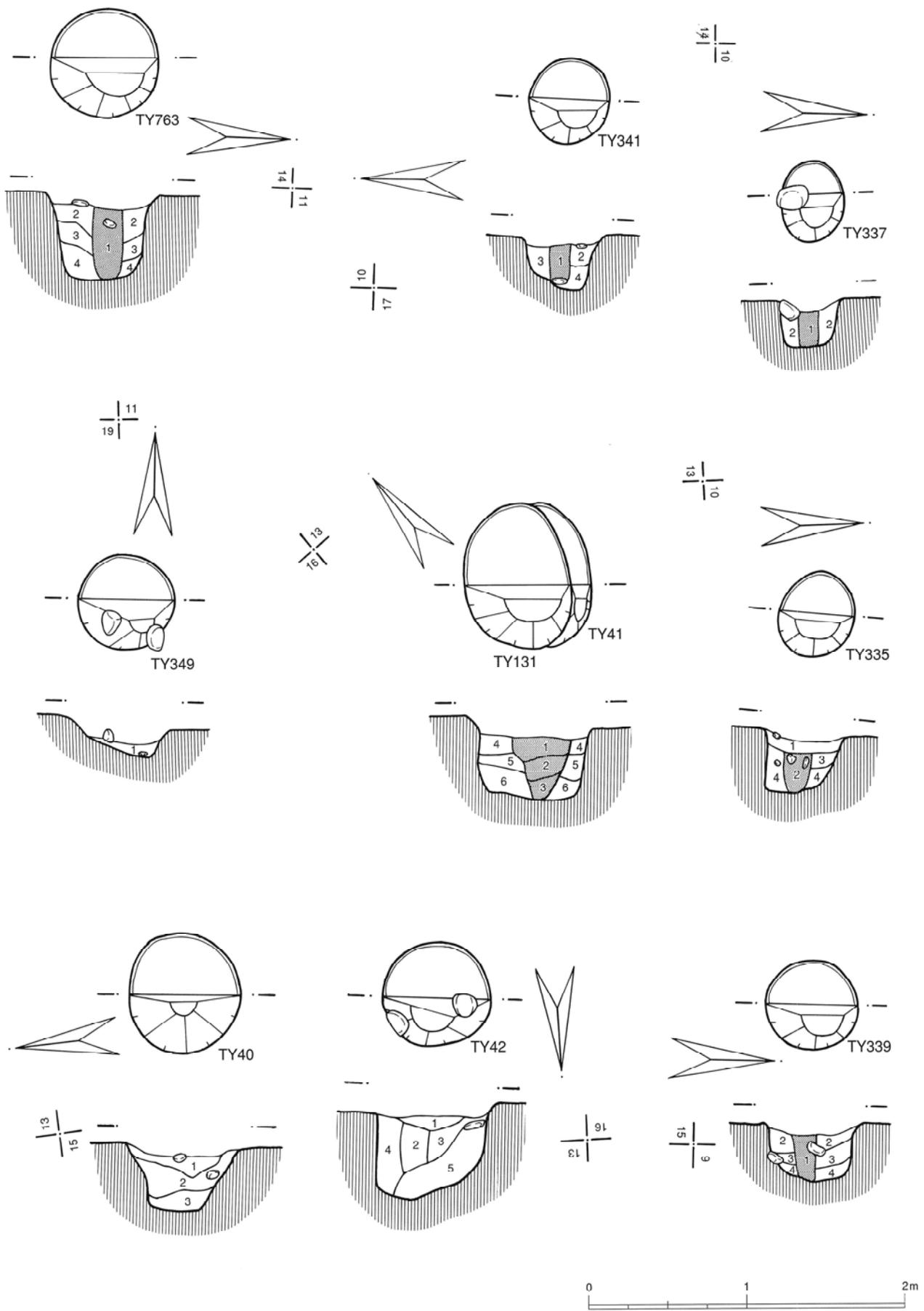
第19図 館山北館跡B Y16・B Y21柱穴平面図(1)



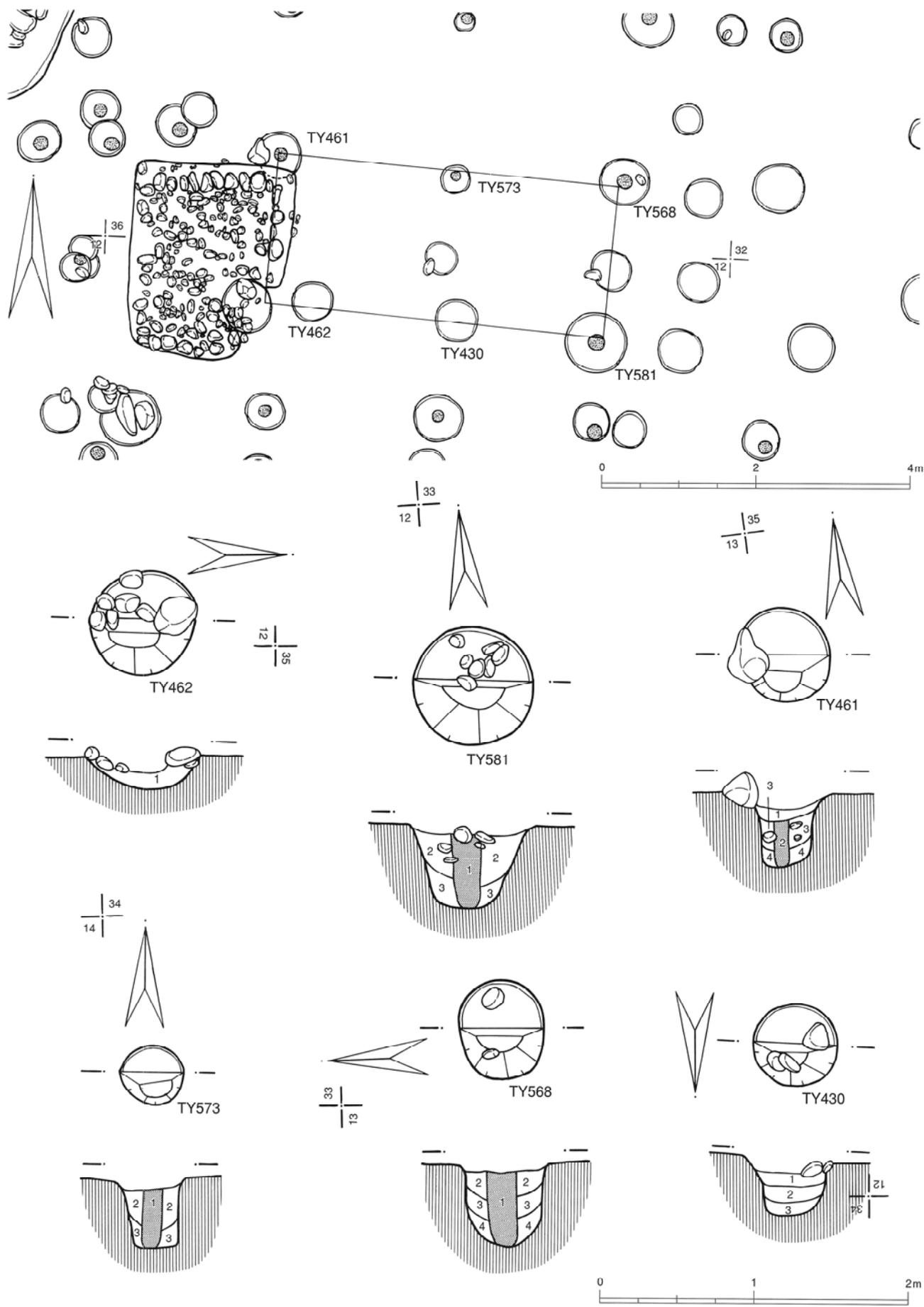
第20图 館山北館跡B Y21柱穴平面图(2)



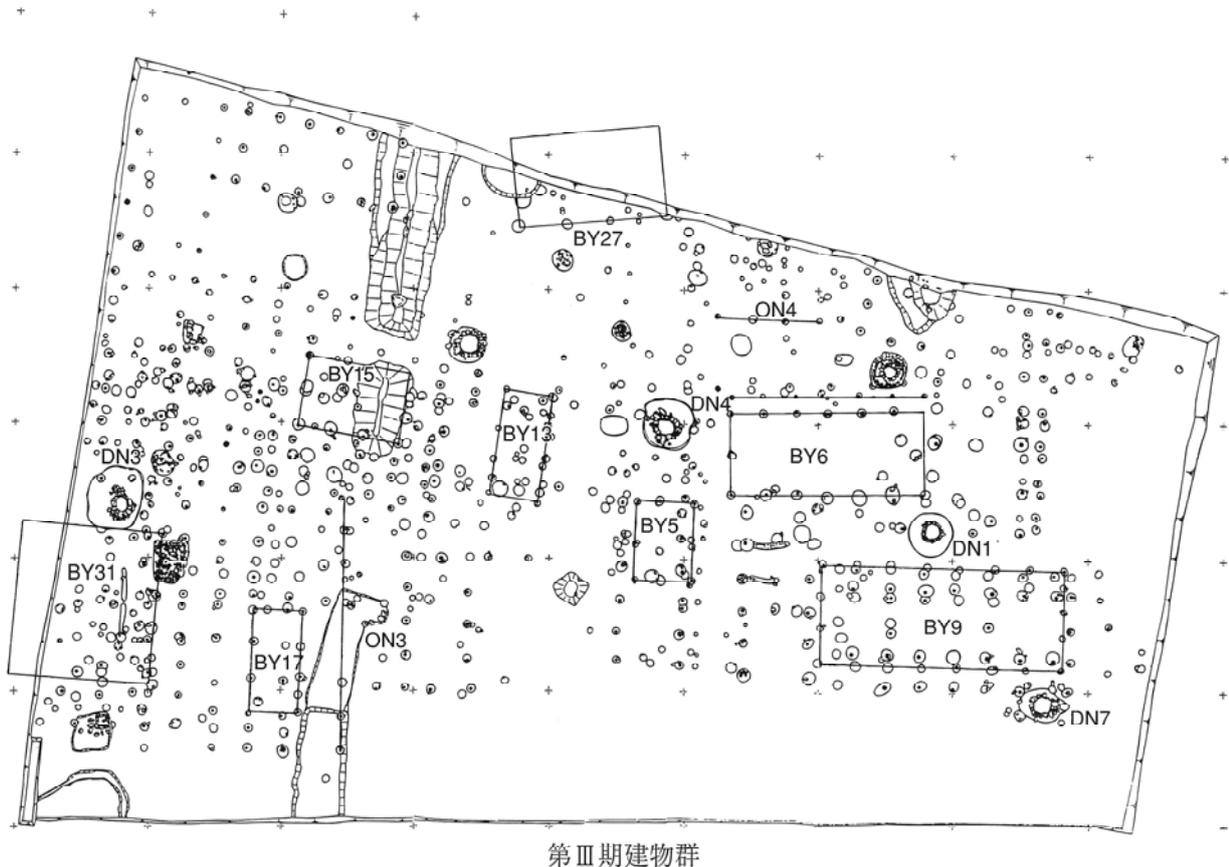
第21図 館山北館跡B Y 24平面図



第22図 館山北館跡B Y24柱穴平面図



第23图 館山北館跡B Y 30平面図・同柱穴平面図



第24図 館山北館跡建物変容想定図(3)

(3) 第Ⅲ期の建物群「第24図・第92図・第二図版」

空堀を埋めた整地後の建物群で、8棟で構成される。BY9の母屋を中心とした東側建物群5棟とBY29の母屋を中心とする西側建物群3棟とに分けられる。前者の東側建物群は、Ⅱ期の母屋であったBY10をBY9に、方形のBY24が東西長のBY6に、BY21は縮小した2間のBY5に建替えられたものと想定されるが、BY7はⅢ期の段階で消滅した。3間1間のBY21は、新たに設置した建物で、西側のBY15と並立して構築したものと考えている。また、北側にも新たに3間(2間?)の南北長のBY27が構築されが、目隠しのON1は極端に短くなって3間のON4として残る。

後者の西側建物群は、Ⅱ期の母屋であったBY16の後に小規模な施設のBY17が置かれ、BY30の後には、桁行5間の南北長の母屋BY31が登場する。一方、KY3の東側に接するBY4は消滅し、KY3の跡に南北のON3の新たな柱列が備えられる。また、KY2を埋め戻した跡地にも3間2間のBY15が新たに建てられる。井戸は、Ⅱ期に引き継ぐもので、BY9の建物にはDN7の井戸。以下、BY6にDN1、BY5・BY13・BY27の建物にDN4の井戸、BY15・BY17・BY29の西側建物群の3棟にDN3の井戸が付随する。

・BY5「第26図」

BY21の建替えによるもので、桁行2間に梁間2間の小規模な建物である。50cm前後の円形を示す掘り方に、15cm~20cmの柱痕跡が認められるが、粘土貼付柱を有するものはTY20の1基のみであった。間尺は、桁行が7尺と8尺、梁間は6尺と4尺となっており、梁間を狭くす

ることで、南北長の建物保っている。

・ B Y 6 「第27図・第28図・第30図・第7図版・第17図版」

北東隅の柱穴1基が確認されていないものの、桁行6間、梁間2間の東西長である。北側に3尺の空間を置いた廂を伴っている。掘り方は、円形ないし楕円形を有するもので、40cm～107cm、深さ12cm～59cmと不規則である。特に桁行の南面の掘り方が大きいのに対し、北面は50cmと小さくなっている。このことは、北側の地山層が粘土質に対し、南側が砂利層といった条件によるものと推測される。廂に関しては、ほぼ円形の30cm前後と一定していた。柱痕跡は15cm～23cm、廂が8cm前後で、確認された全てが粘土貼付柱を示していた。

桁行の柱間は、160cm～210cmを数えることで、明確に間尺を当てはめることは難しいが、6尺と7尺の柱間を交互に配していたと考えている。

・ B Y 9 「第29図・第30図・第31図」

B Y 10の後に建替えられた東西長の建物跡である。桁行を7間、梁間が西面3間に対し、東面を4間とした変則的な柱間を有している。南東寄りに付随する入口状の2間の柱穴は、隣接する井戸に係る施設の可能性もある。掘り方は、ほぼ円形をなす35cm～70cm、深さ9cm～34cmと浅いのを特徴としている。柱痕跡を残すものは4基と少なく粘土貼付柱は認められなかった。間尺は、桁行が6尺と7尺を交互に配したもので、梁間は西の3間が6尺の等間隔に対し、東面4間は6尺・5尺・5尺・3尺となっている。

・ B Y 13 「第32図」

G24～26—13～17の範囲にかけて検出された建物跡で、Ⅲ期に初めて建物が存在する。桁行3間、梁間1間の小規模な建物は、平均40cm前後の掘り方と25cm未満の深さを測る。柱痕跡はT Y 223に1基確認された。桁行の間尺は中央が6尺、左右に7尺、梁間7尺をなしている。

・ B Y 15 「第33図・第18図版」

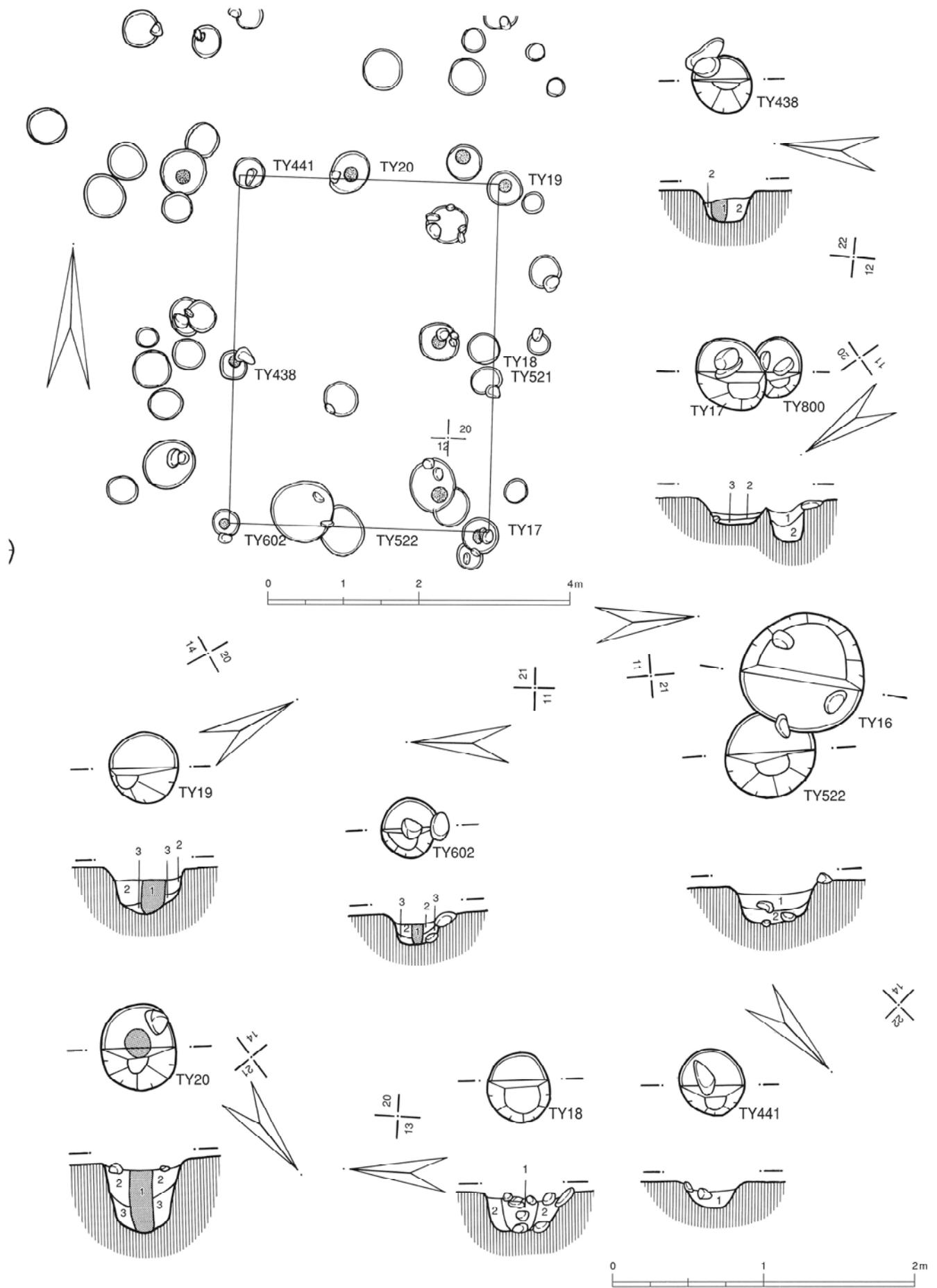
K Y 2を埋め戻した箇所に構築した建物跡で、桁行3間、梁間2間をなす。桁行北面の東側柱穴2基は、K Y 2の埋め戻した砂利層が崩れたこともあって確認することが困難であった。柱の掘り方は、円形プランで直径が55cm～85cm、深さ35cm～66cmと今回検出された建物の中では最もしっかりとしている。柱痕跡は、平均15cmを測り、確認された全ての柱穴に粘土貼付柱が明瞭に残っていた。桁行の間尺は、南を前提に6尺、梁間が西側を参考にした6尺と推測している。

・ B Y 17 「第33図」

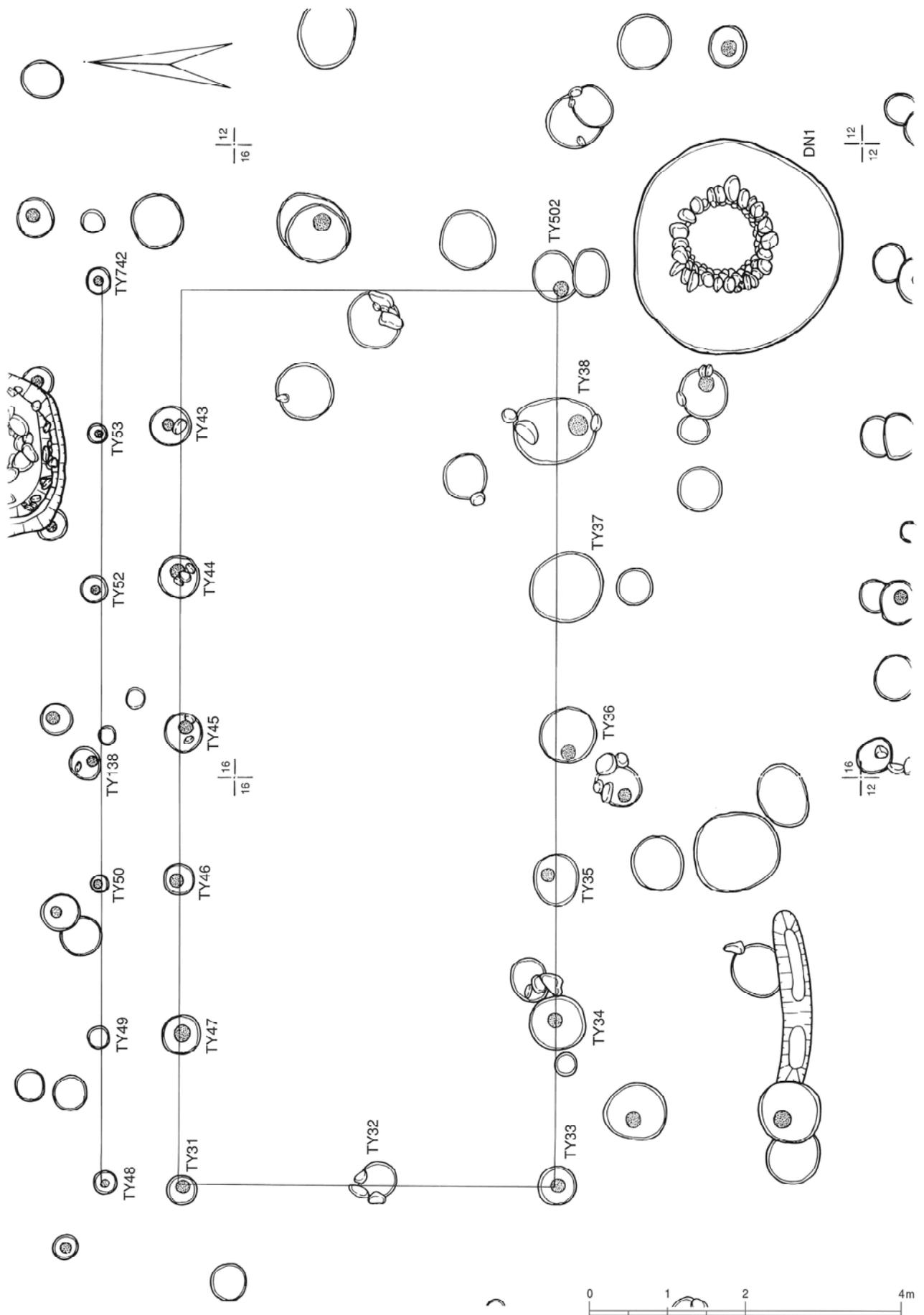
Ⅱ期のB Y 16の後に建替えた南北長の建物跡で、桁行3間、梁間1間をなす。柱の掘り方はほぼ円形を示す平均が50cm前後、深さ20cm～45cmを測る。柱痕跡は明瞭で、12cm～15cmの粘土貼付柱を残している。柱間の間尺は、桁行の東西面で若干事なるが概ね7尺を測る。梁間は10尺1間である。

・ B Y 27 「第34図・第7図版」

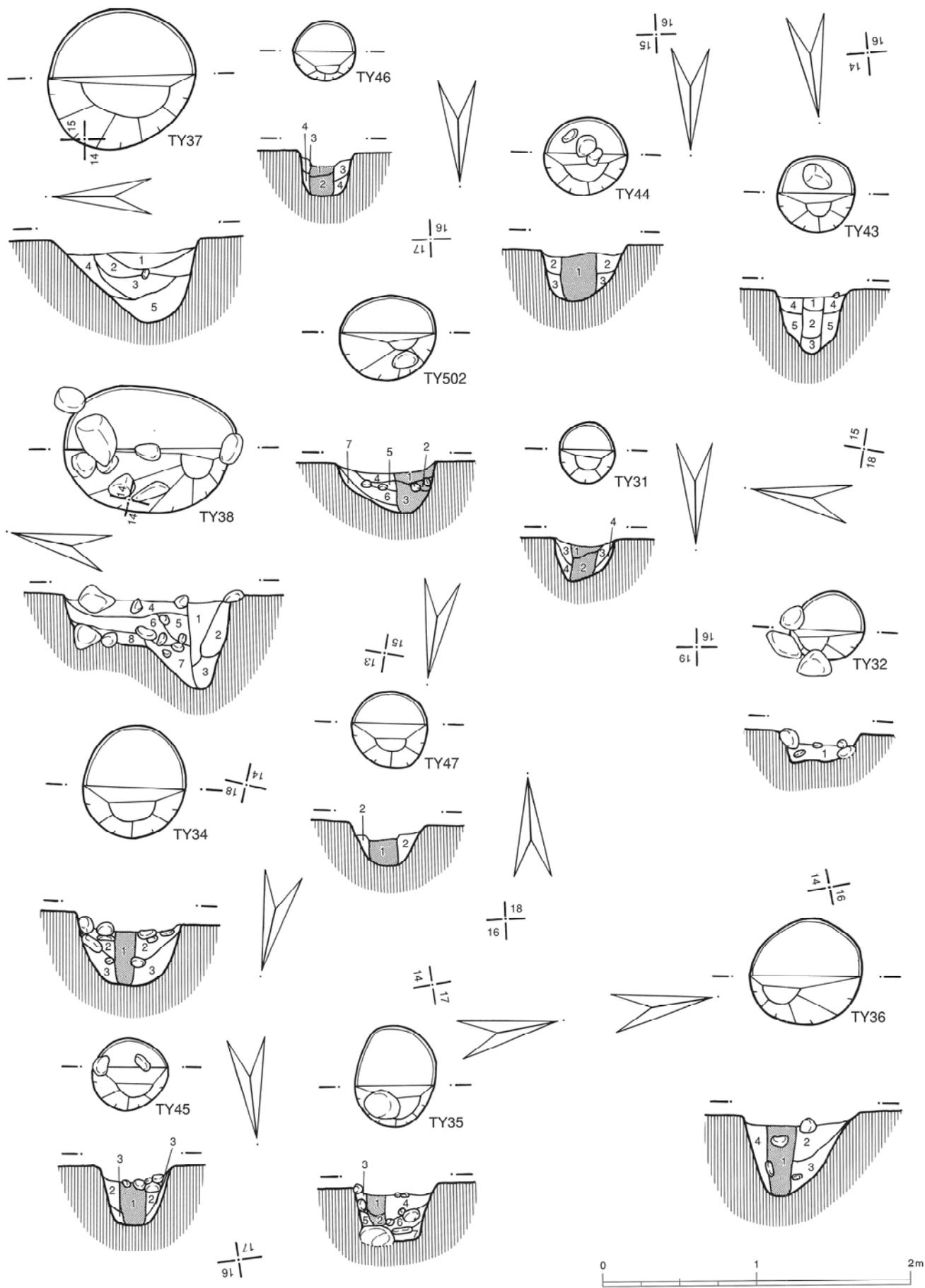
G21～25—22～24にかけた範囲より認められるもので、約半分が調査区外の壁面に隠れている。掘り方は円形及び楕円形を示し、47cm～82cmと統一性がなく、深さも20cm前後と極端に浅



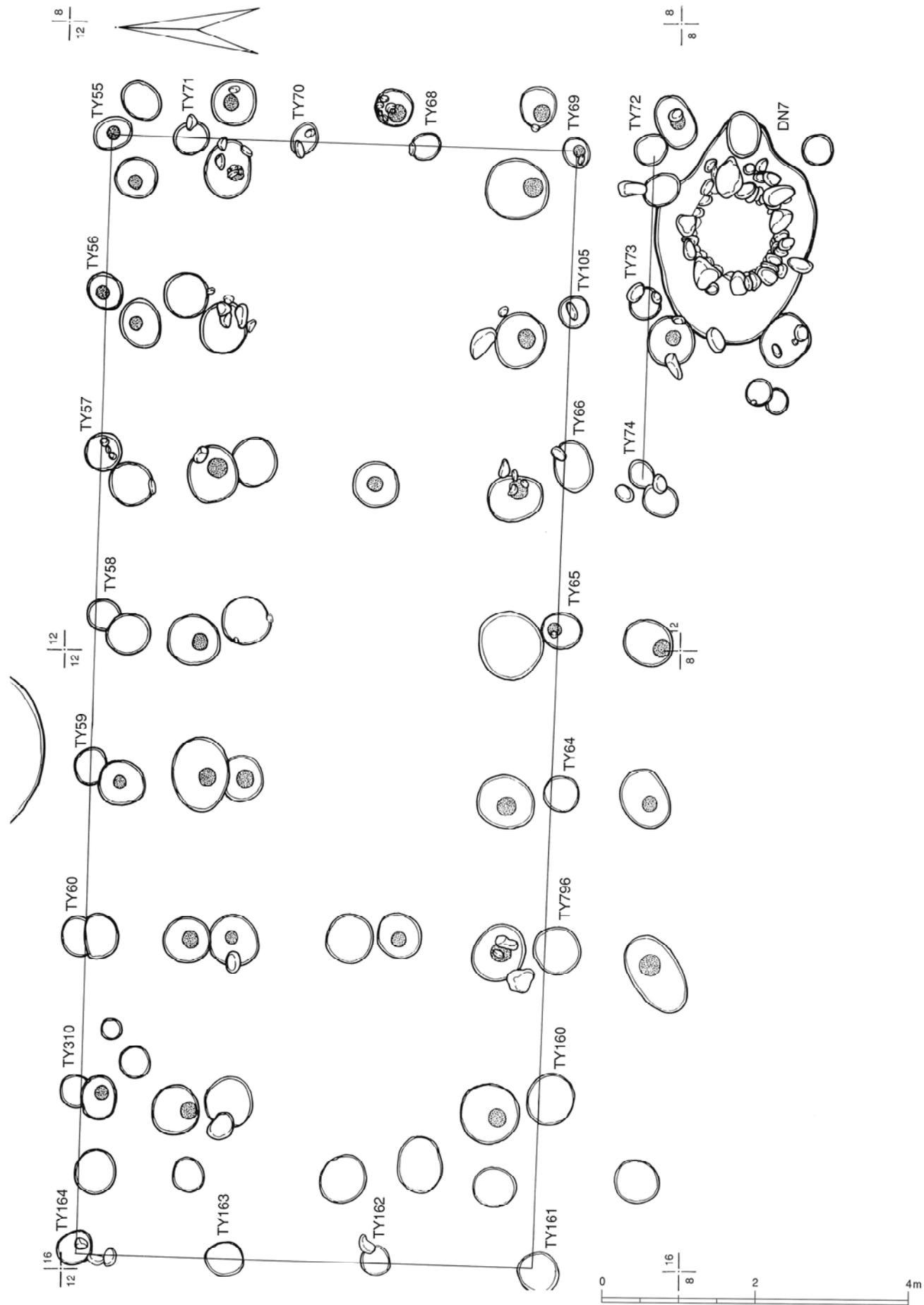
第25図 館山北館跡BY5平面図・同柱穴平面図



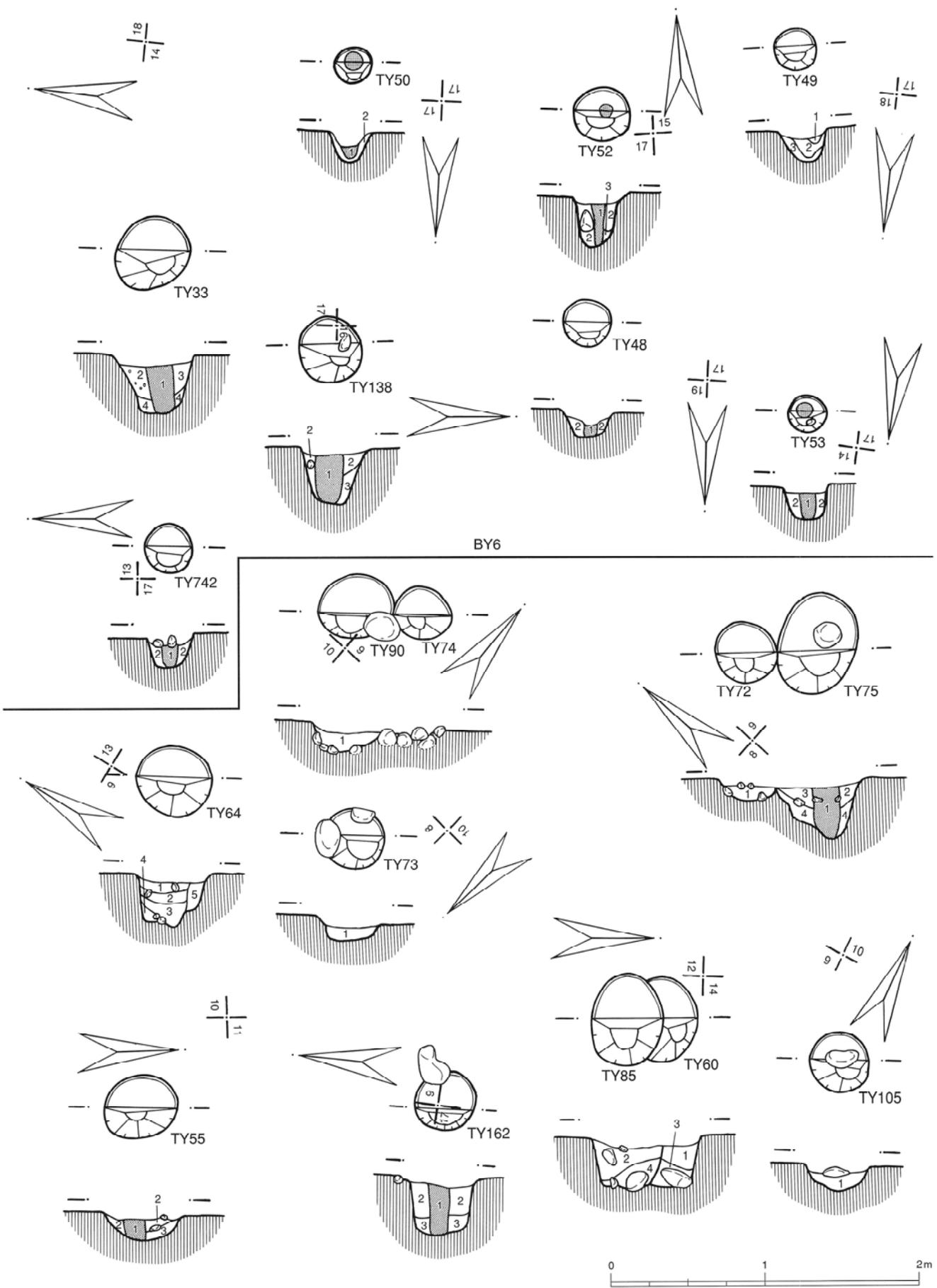
第26图 馆山北馆跡B Y 6平面图



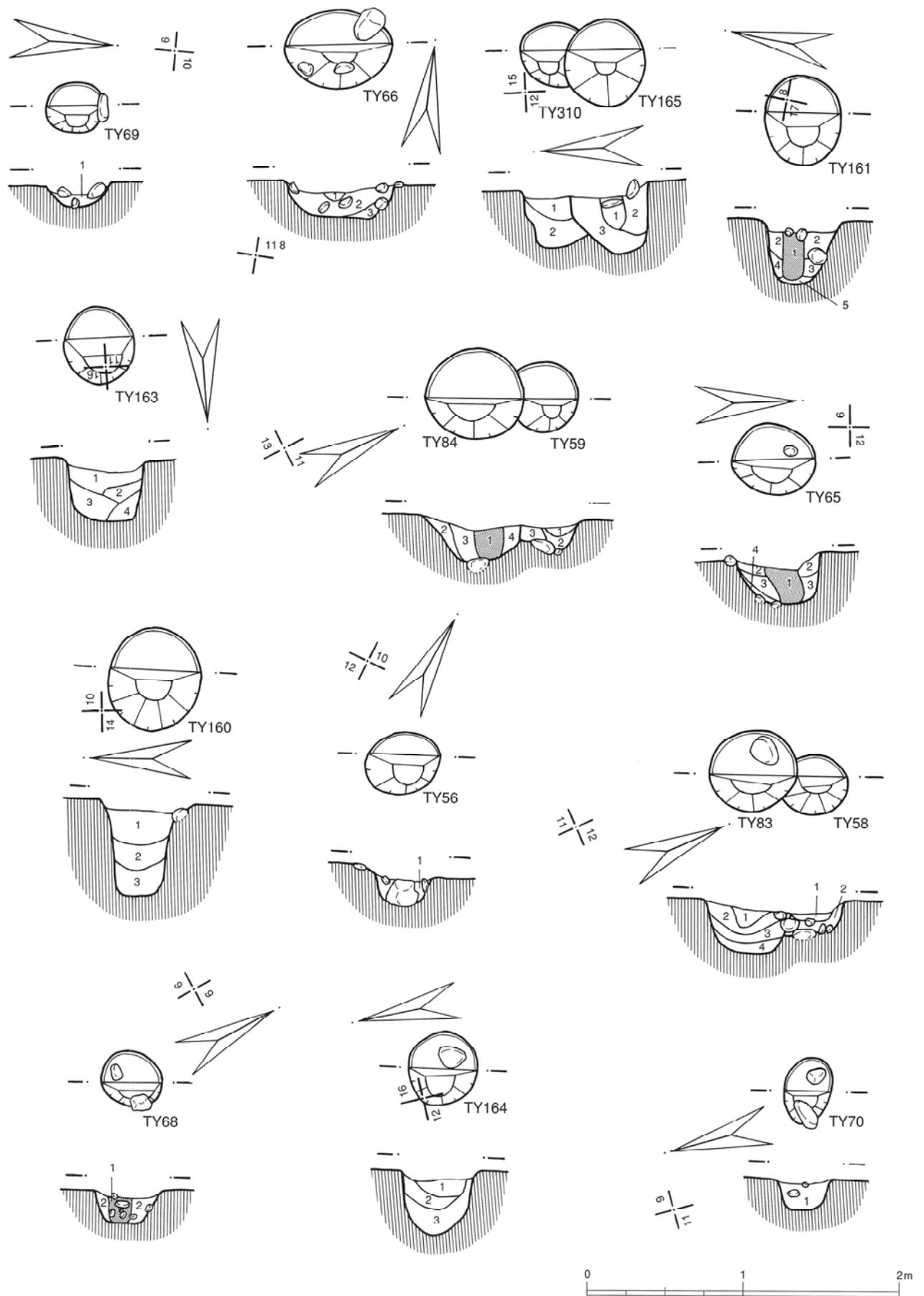
第27図 舘山北舘跡B Y 6柱穴平面図



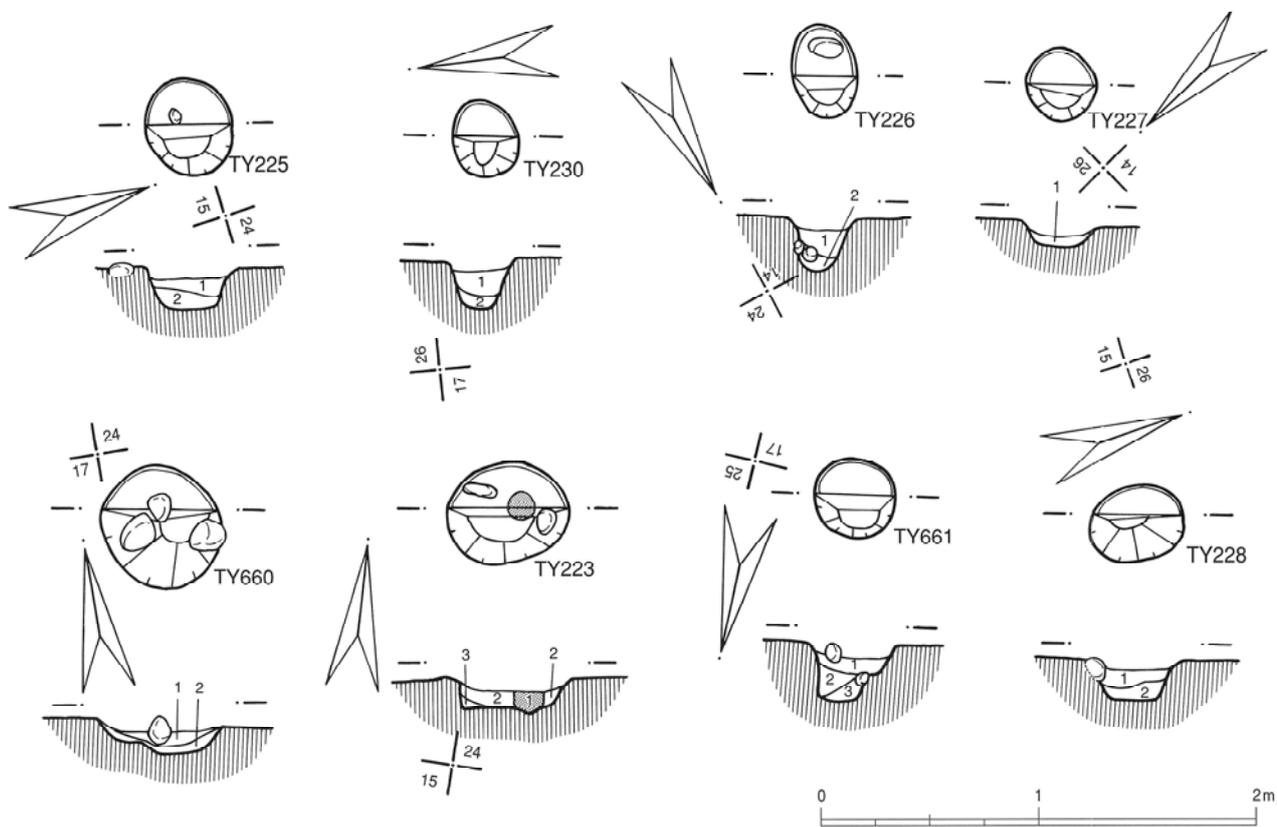
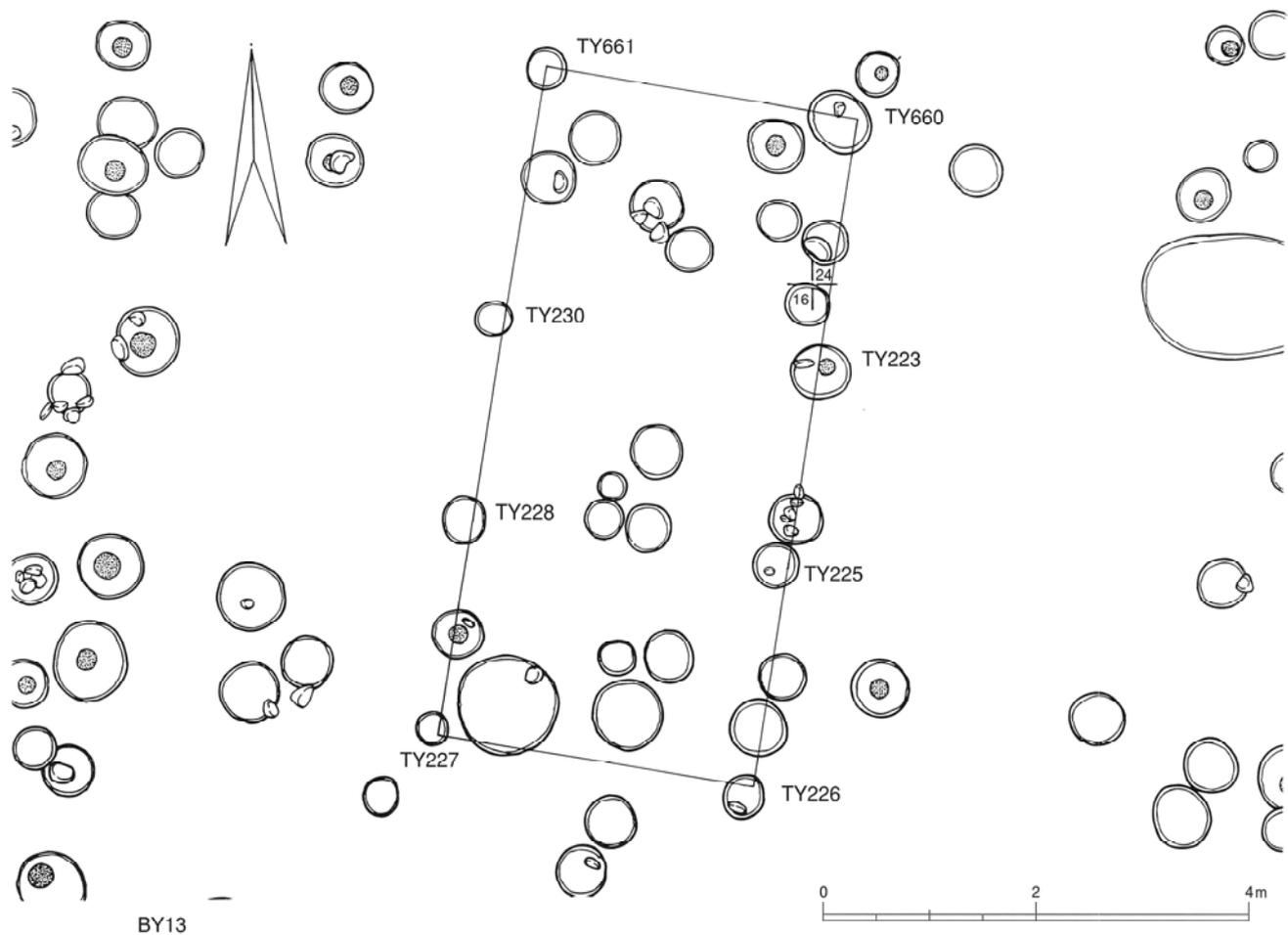
第28図 館山北館跡BY 9 平面図



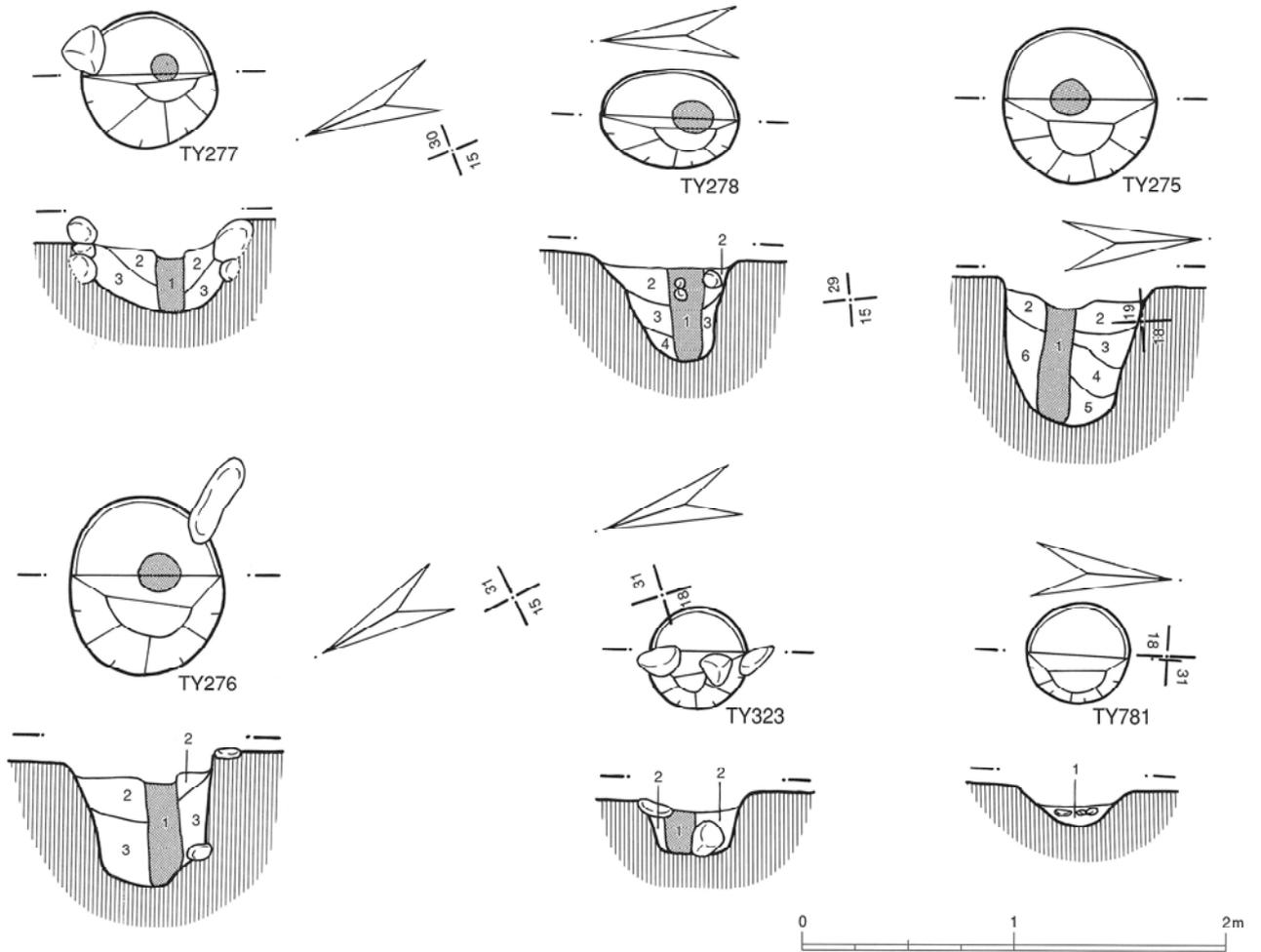
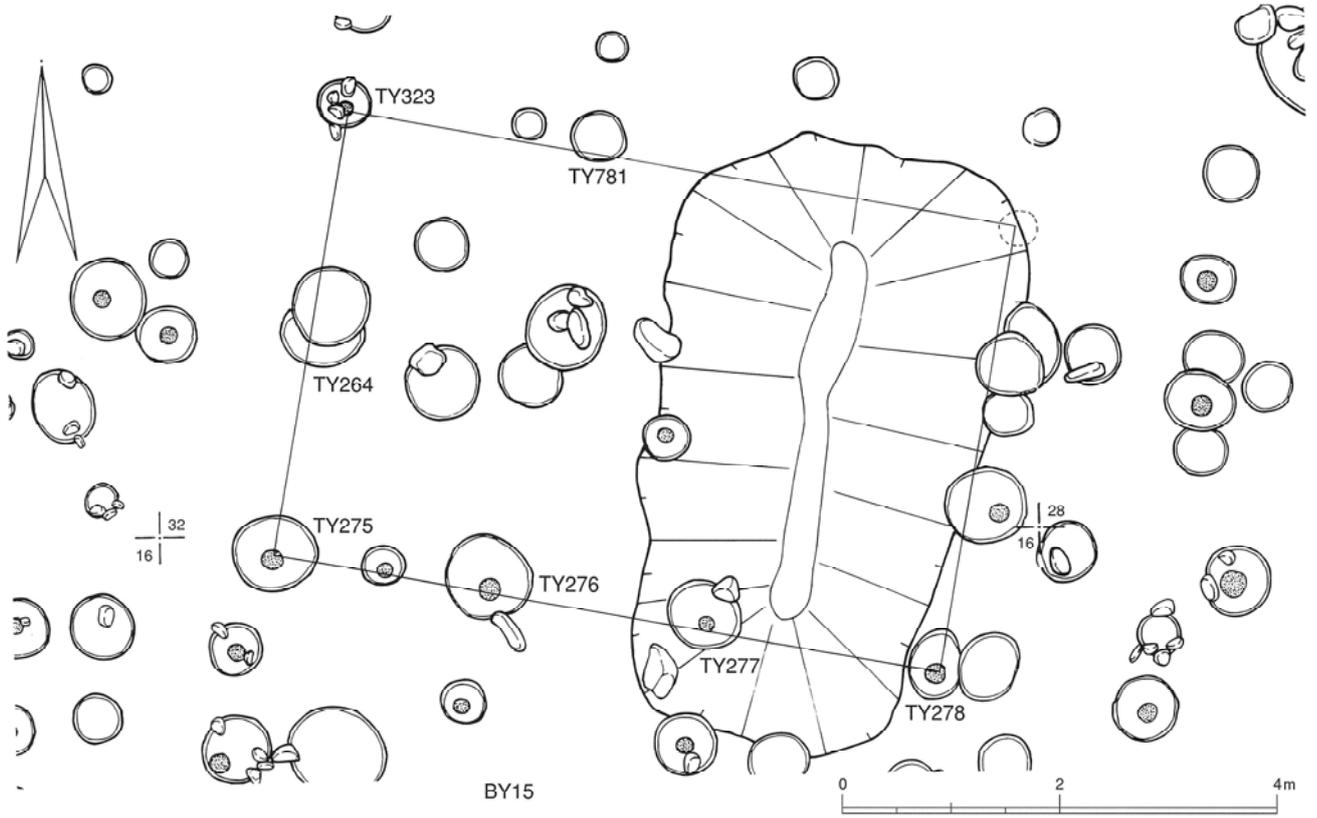
第29図 館山北館跡BY6・BY9柱穴平面図(1)



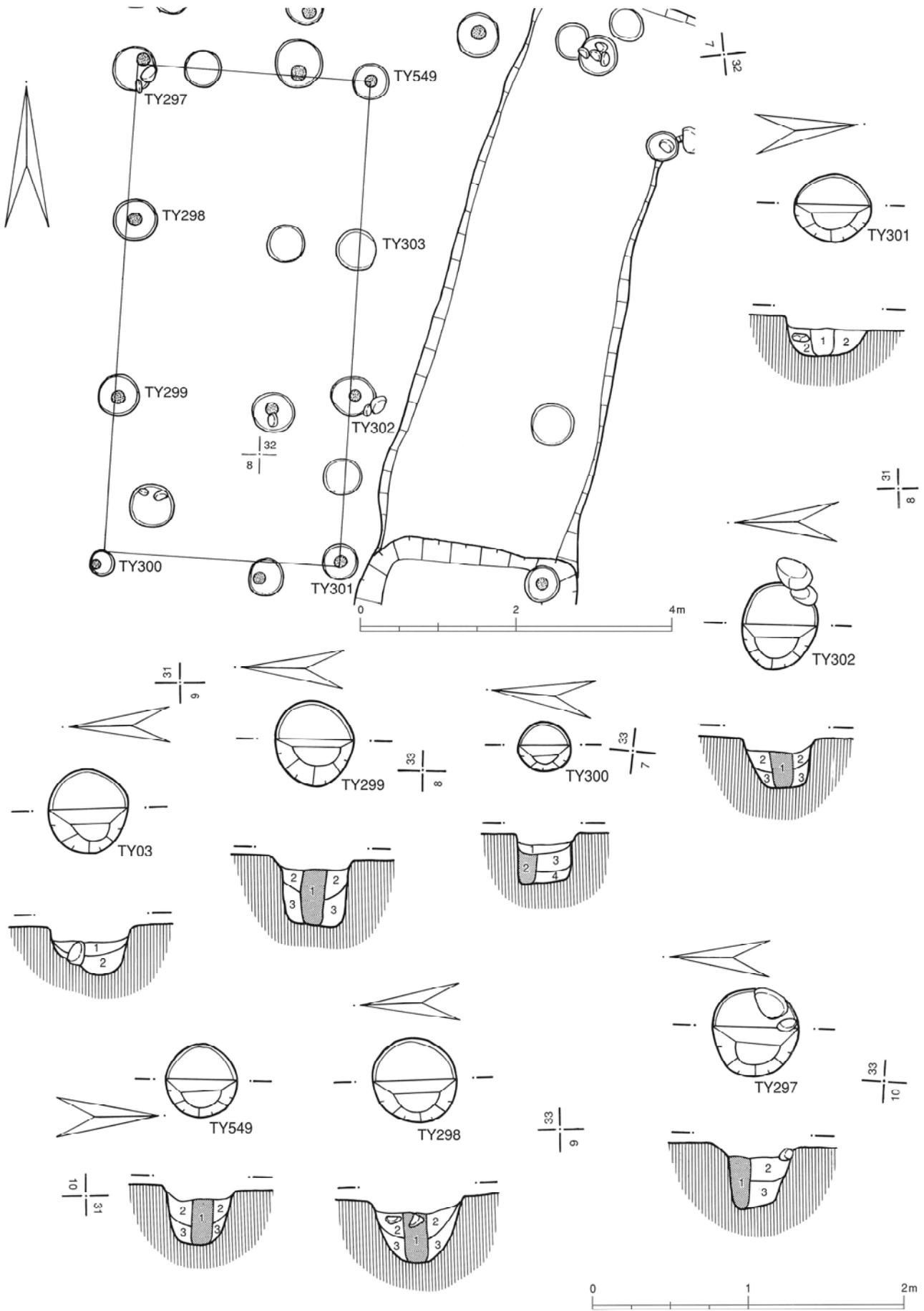
第30图 館山北館跡BY9柱穴平面図(2)



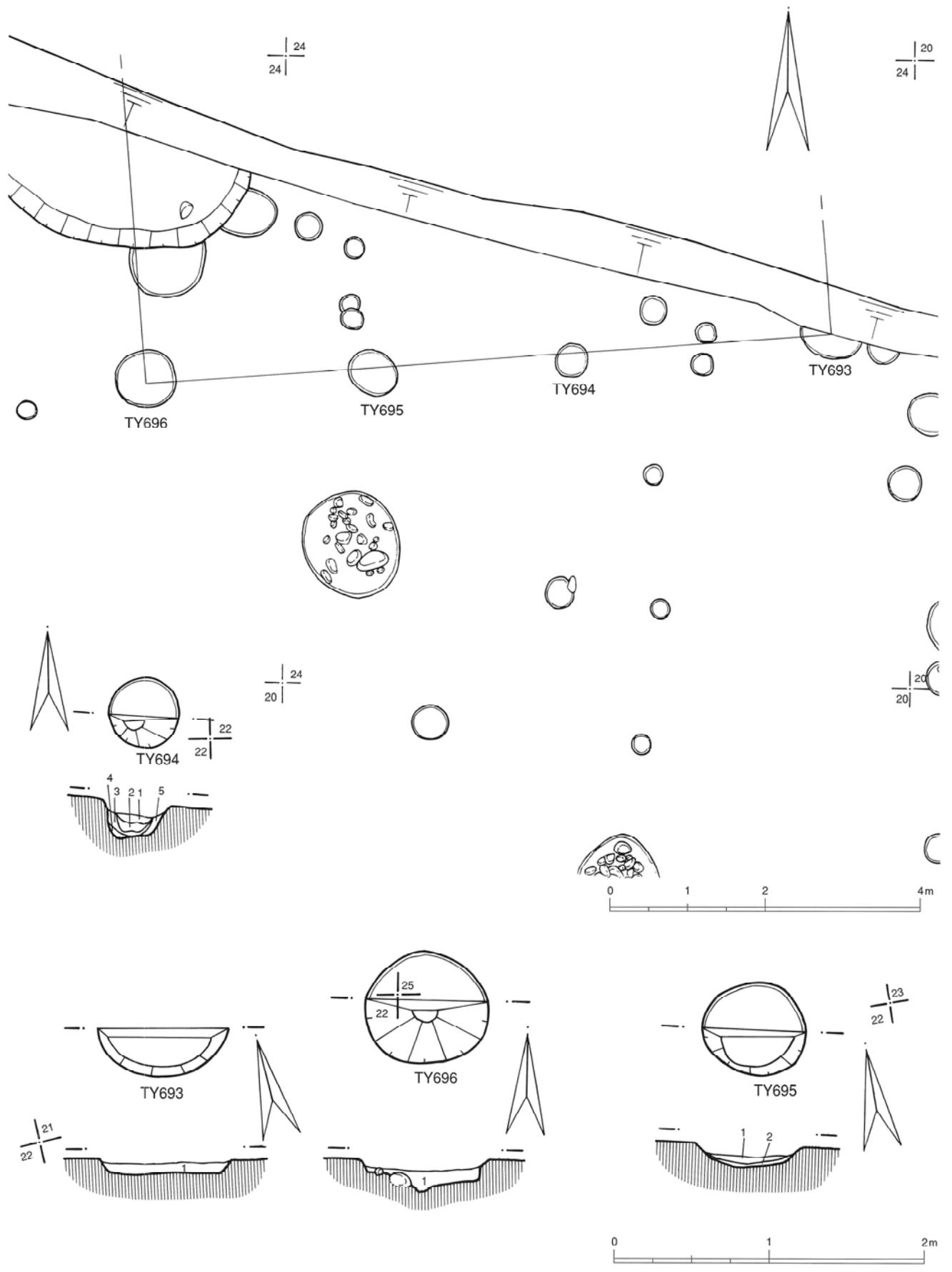
第31图 館山北館跡BY13平面図・同柱穴平面図



第32図 館山北館跡 B Y15平面図・同柱穴平面図



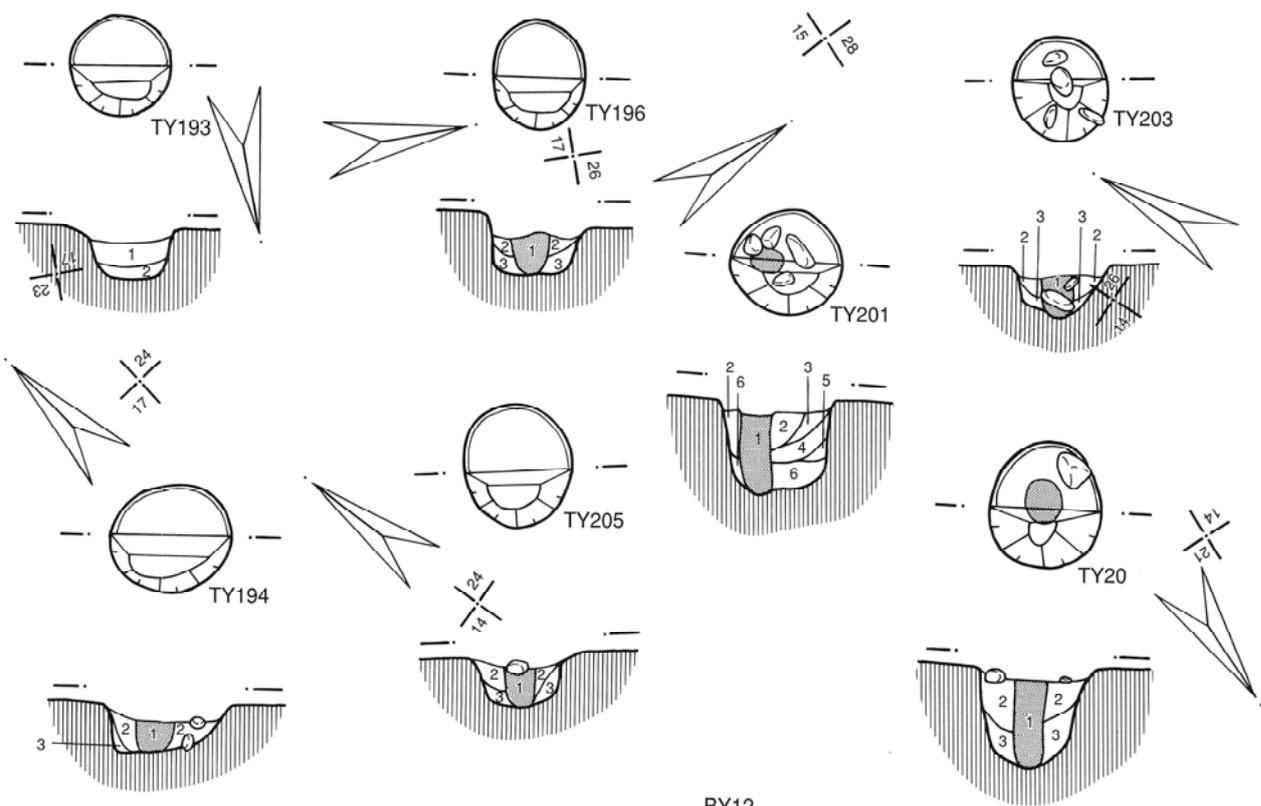
第33图 館山北館跡B Y17平面図・同柱穴平面図



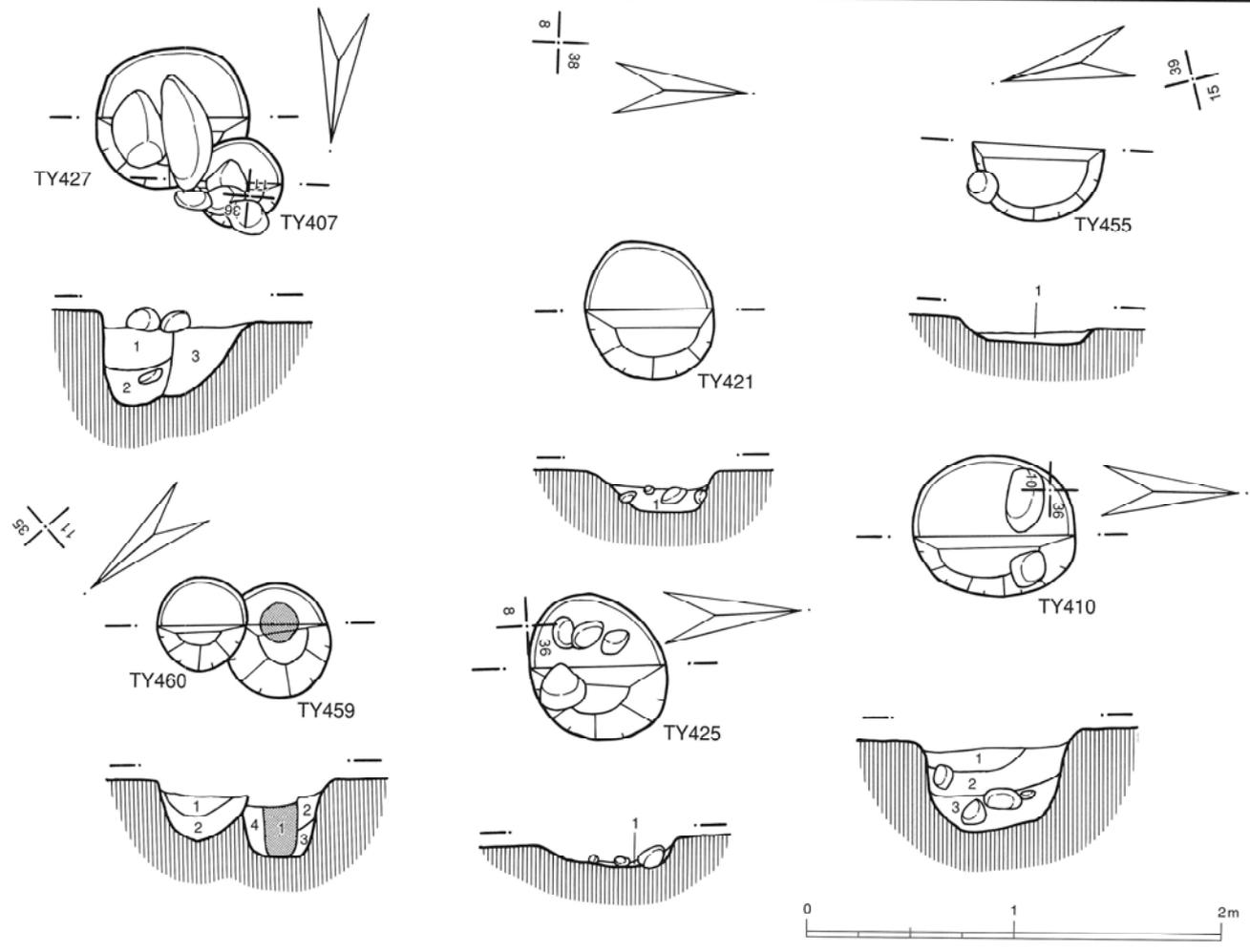
第34図 館山北館跡B Y27平面図・同柱穴平面図



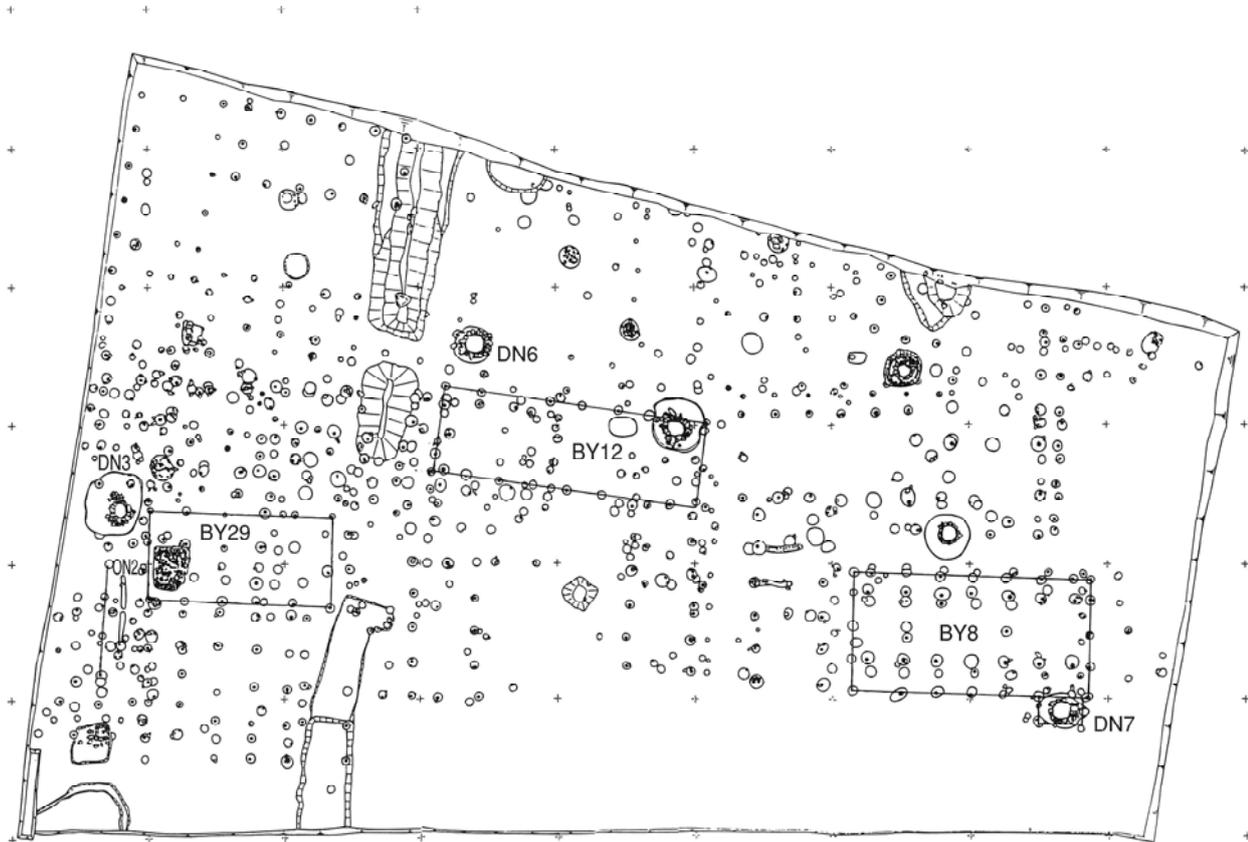
第35図 館山北館跡B Y 31平面図



BY12



第36图 館山北館跡BY12・BY31柱穴平面图



第IV期建物群

第37図 館山北館跡建物変容想定図(4)

いともいえる。柱痕跡も認められないことから建物跡でない可能性も残る。間尺は10尺と9尺を用いてあった。

・ B Y 31 「第35図・第36図」

DN 3 に隣接するように検出されたもので、建物の西側が未調査区に入っていることから全体の規模は明確にできないが桁行5間、梁間3間の南北長の建物と想定される。VI期の建物B Y 29に付随するS Y 5によって柱穴の一部が切られている。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を占め平均70cm前後と大きめである。深さは極端に浅いものと約60cmをなすものとに分けられる。柱の痕跡は、唯一T Y 459に粘土貼付柱が認められた。

間尺は、桁行が6尺等間隔、梁間は明確にできないが、南面に残る柱穴を参考にするなら8尺3間と推測する。

(4) 第IV期の建物群「第37図・第92図」

東西長の母屋3棟で構成するもので、Ⅲ期でみられた付随施設は消滅する。3棟の建物は、B Y 9の建替えしとなるB Y 8、Ⅲ期のB Y 5とB Y 13の跡地に新設したB Y 12、西側建物を集約したB Y 29で構成する。井戸跡は、第IV期建物の建設によってDN 1とDN 4の2基の井戸が廃絶され、新たにB Y 12に付随するDN 6が構築されている。

さらに、B Y 29の西側から南に延びる3間のON 2が設置された。ON 2に関しては建物跡

になる可能性もあるが、西側に梁間に相当する柱穴が認められないことから、あえてここでは柱列の仲間としている。今後検討の余地があろう。

特に注目したいのは、B Y 8 の存在である。B Y 8 が建てられた箇所に関しては、過去にB Y 9 → B Y 10 → B Y 11 と 3 棟の建物が同じ場所に建替えしを行っており、B Y 8 が 4 回目の建物となる。しかも、建替えす度に建物の規模が大きくなるといった特徴を示していたが、B Y 8 の建物を最後に新たな建物を東側に築くことはないのである。

井戸も同様に、当初の B Y 11 の建物に設置された D N 7 の井戸を B Y 8 まで 4 時期に亘って継続して利用したことになる。

・ B Y 8 「第40図・第41図・第42図・第 8 図版」

桁行 7 間、梁間 4 に井戸 1 間を加えた東西長の建物である。柱穴は、円形及び楕円形の掘り方を有するもので、桁行北面の掘り方は前の B Y 9 の柱穴を切って掘られるのに対し、南面は意図的に南側に外して掘り込んでいる。同様に梁間東面も東に外して掘り込み、西面は前の B Y 9 の柱間の中間に配置している。こうした掘り方を示すのは、母屋の移動が困難な理由を前提に建替えを行わざるを得なかった事情に、過去 3 回の建替えによる乱立した柱穴を避けた結果と推測している。掘り方の大きさは、41cm ～75cm、深さ 11cm ～53cm と一定していない。柱痕跡は、桁行南面と梁間の東面に残っており、平均で 20cm 前後を測る。

間尺は、桁行の東西各 1 間を 9 尺に置き、間を 7 尺もしくは 6 尺として 6 間をなしている。ただし、東端の 1 間に 3 尺 1 間を加えて、6 尺と 3 尺による 2 間としていることから、実際は桁行 7 間の建物とするのが妥当である。梁間も一定ではない。概ね柱間は 6 尺を基本に配されてはいるが、北側の 1 間だけが 4 尺と狭くしている。前述したように乱立した柱穴を避けるためにこうした不自然な柱間を設置した可能性もある。

・ B Y 12 「第36図・第38図・第39図」

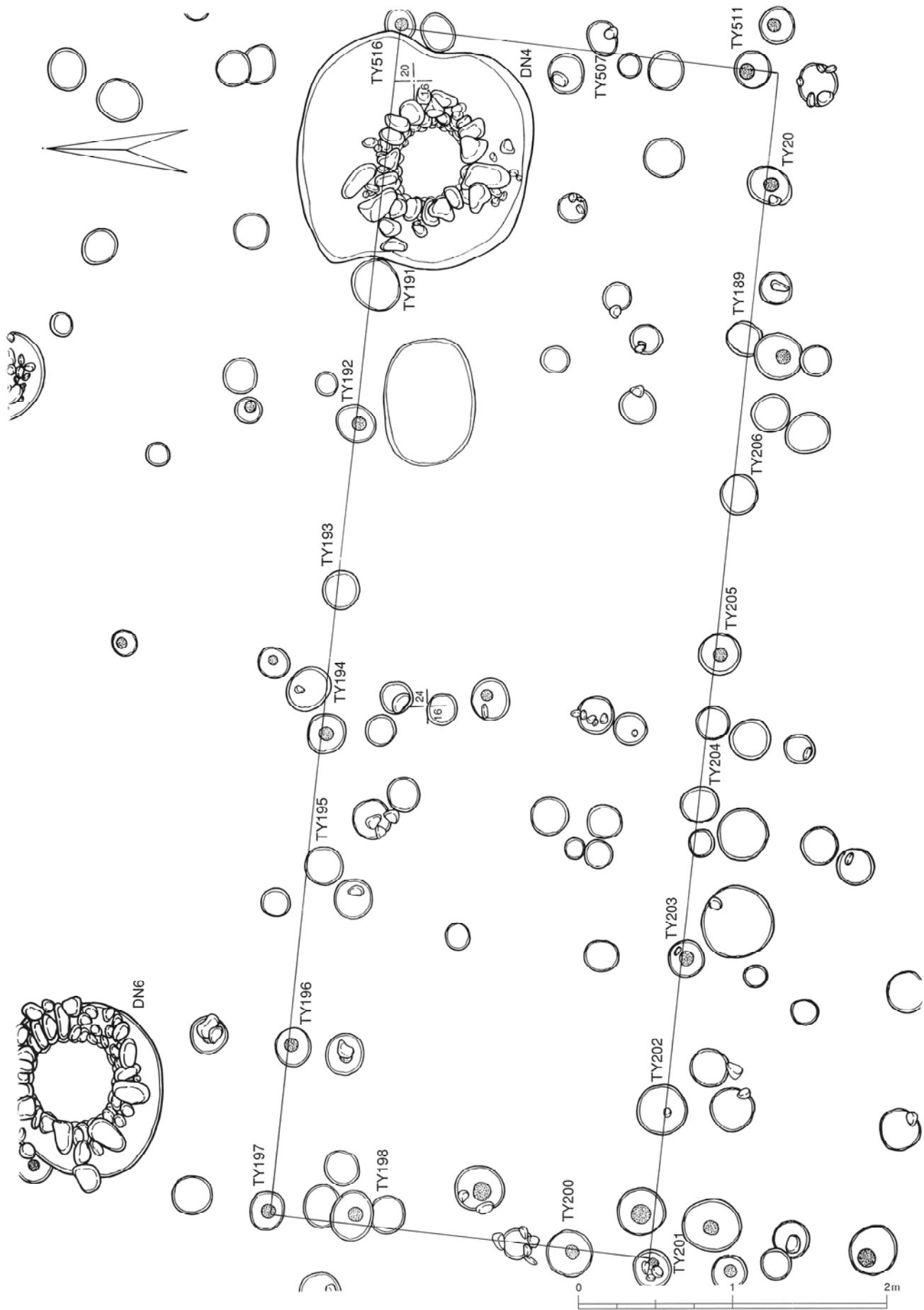
桁行 8 間、梁間 3 を有する東西長の建物で、D N 4 の井戸跡を埋め戻した後に建てられている。建物の切り合い関係を吟味すれば、Ⅲ期の B Y 5 ・ B Y 13 ・ B Y 15 の小規模な建物を集約した可能性もある。柱穴の掘り方は、ほぼ円形をなすもので、直径 32cm ～65cm、深さは極端に浅い掘り込みをもつ T Y 189 以外は、14cm ～66cm と一定していない。

柱の痕跡は、約半数に確認されている。13cm ～20cm のアタリの大半に粘土貼付柱の痕跡が認められた。

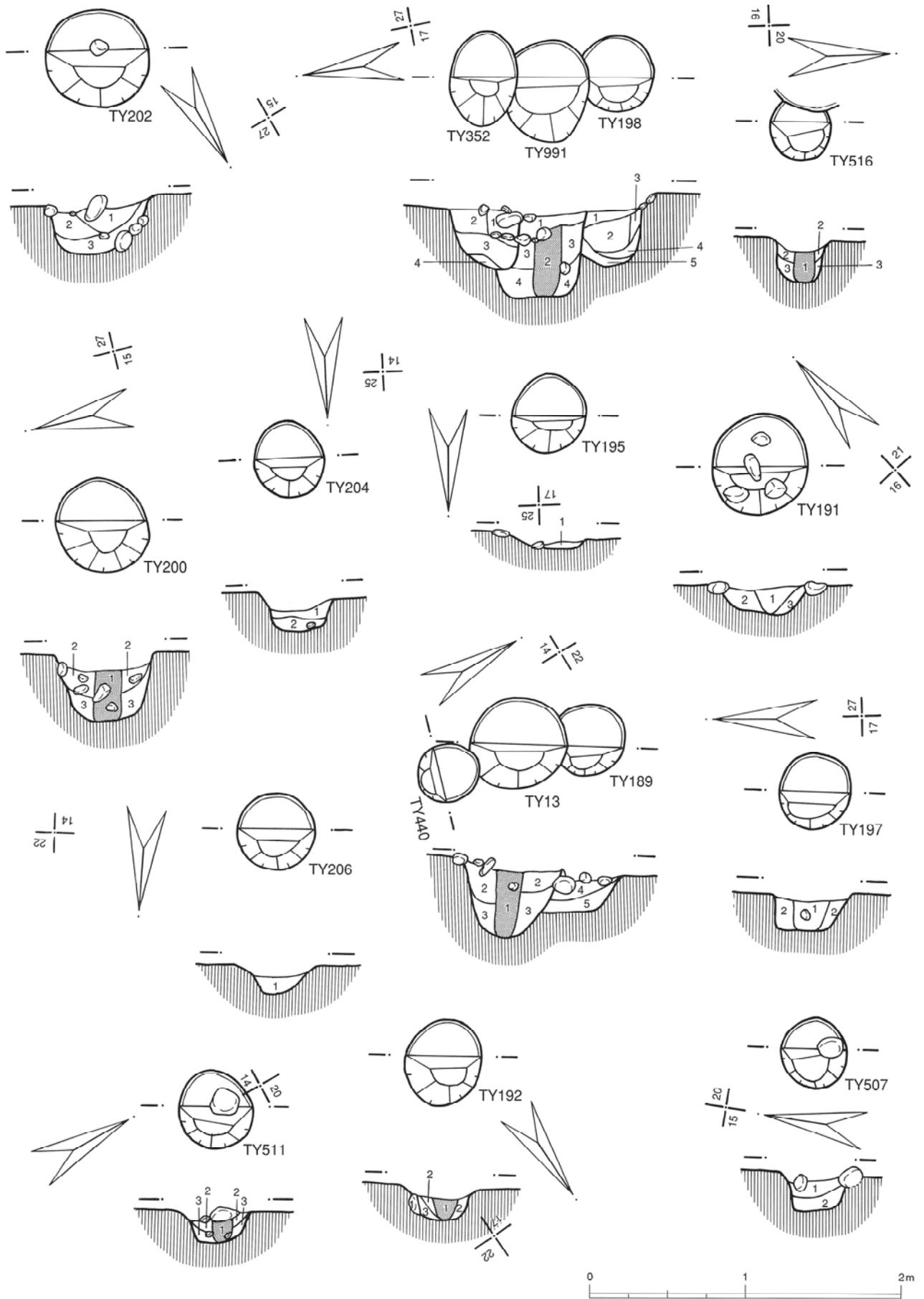
・ B Y 29 「第43図・第44図」

Ⅱ期の B Y 30 の西側に建てられた東西長の建物であり、桁行が 5 間、梁間 2 間を有する。柱穴の掘り方は、ほぼ円形の 40cm ～70cm、深さ 18cm ～55cm となる。柱痕跡は、平均 15cm 前後を示し、確認された全ての柱穴に粘土貼付柱が明瞭に残っていた。間尺は、桁行で 7 尺、梁間で 7 尺と 10 尺の変則 2 間で構成している。

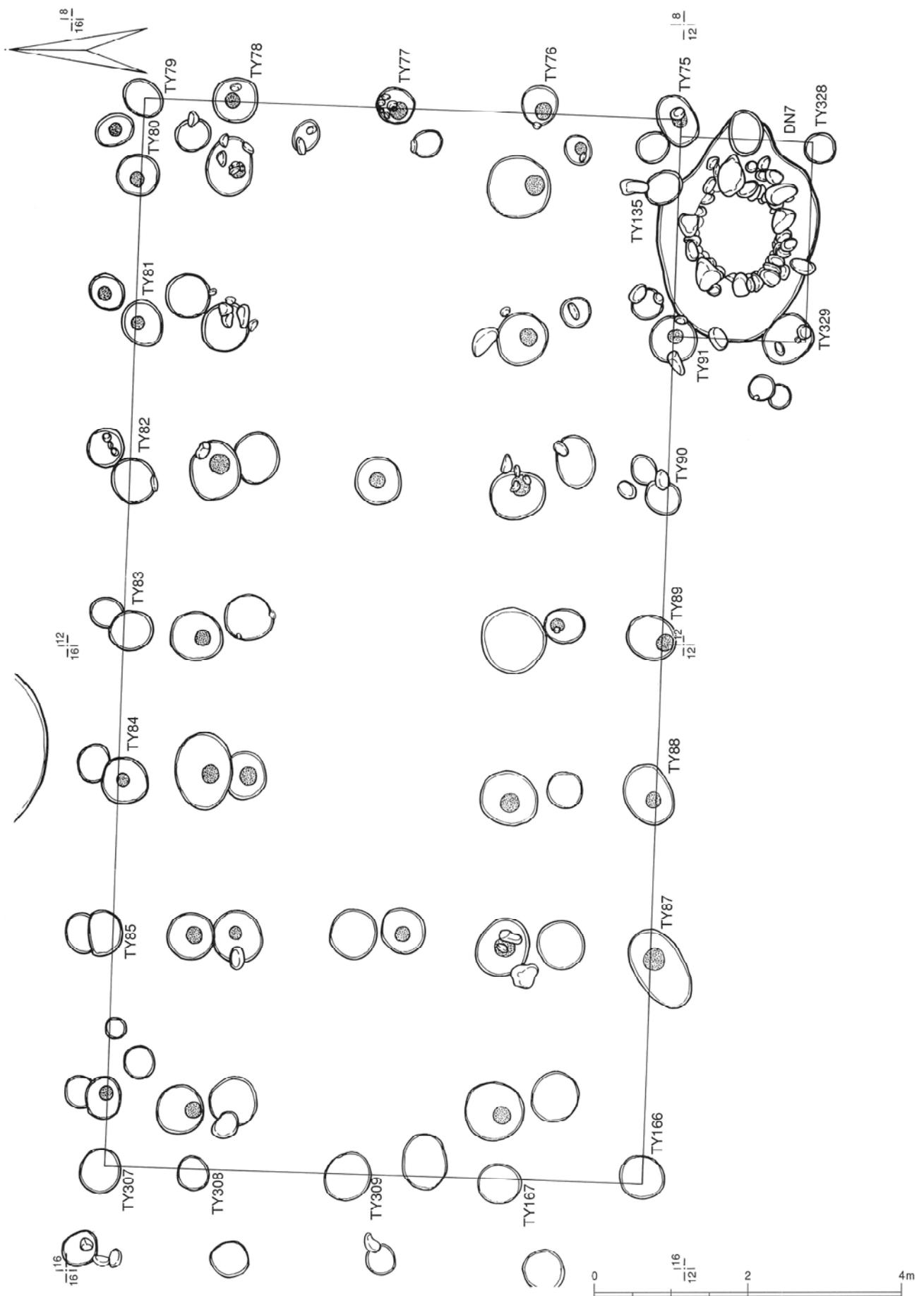
注目されるのが、建物西側の南寄りに存在する長方形の石積遺構 S Y 5 で、約 25cm ほど掘凹めた縦穴に粘土とシルトで版築し、上部に礫を丁寧敷き詰めている。今回の調査では、この建物だけに認められる遺構である。屋内で使用するなんらかの施設の基礎部分と想定する。



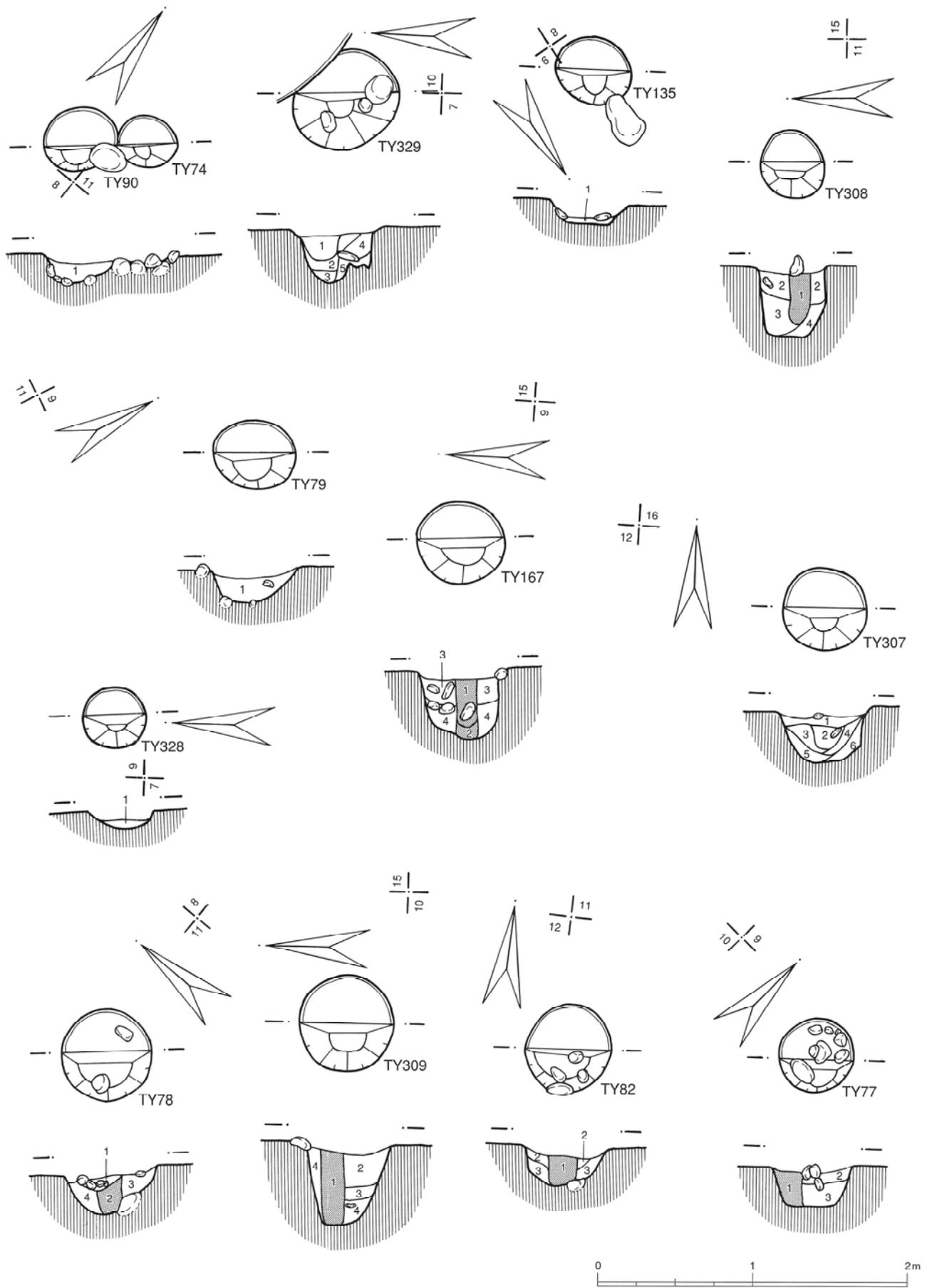
第38図 館山北館跡 B Y12平面図



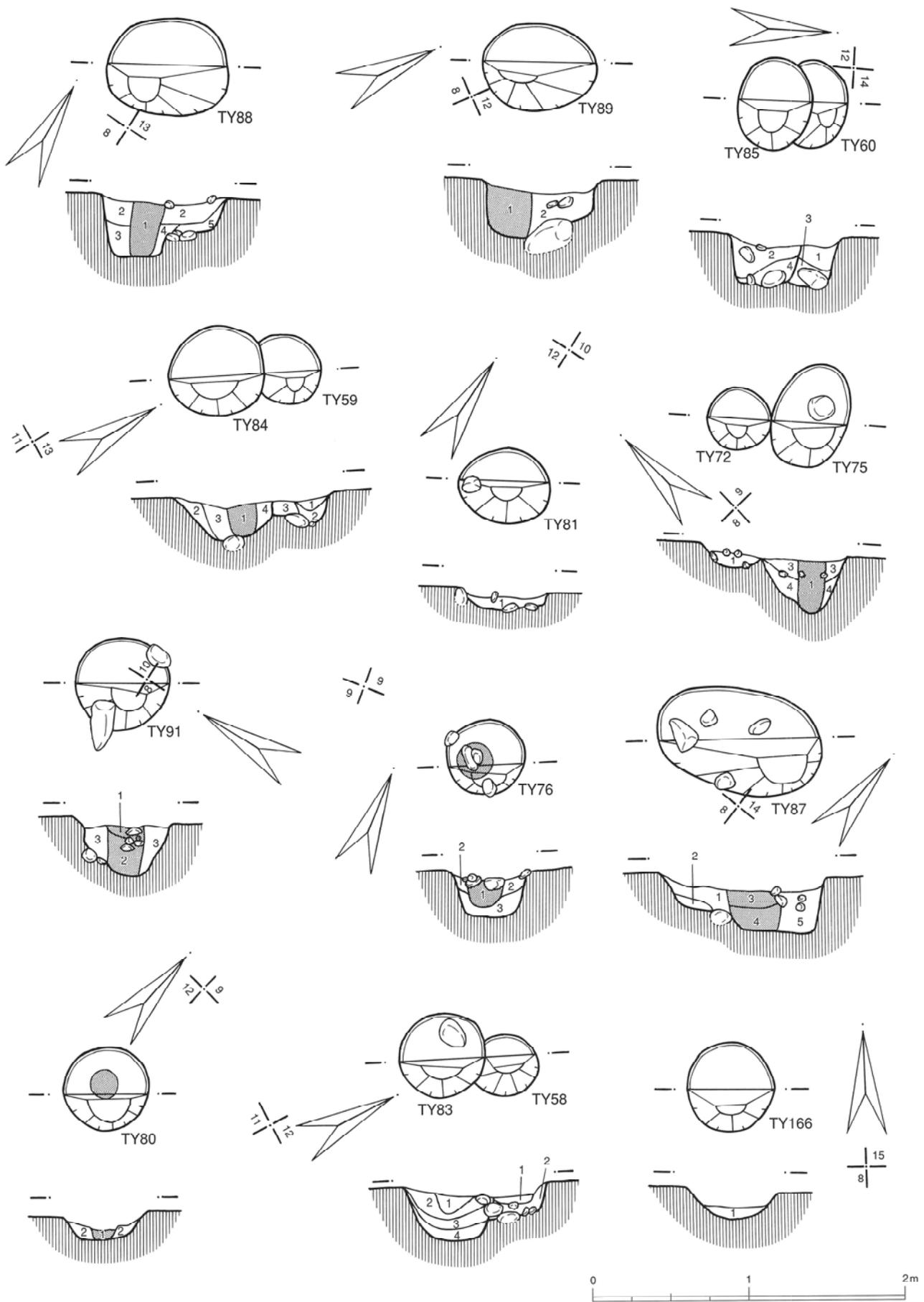
第39図 館山北館跡B Y 12柱穴平面図



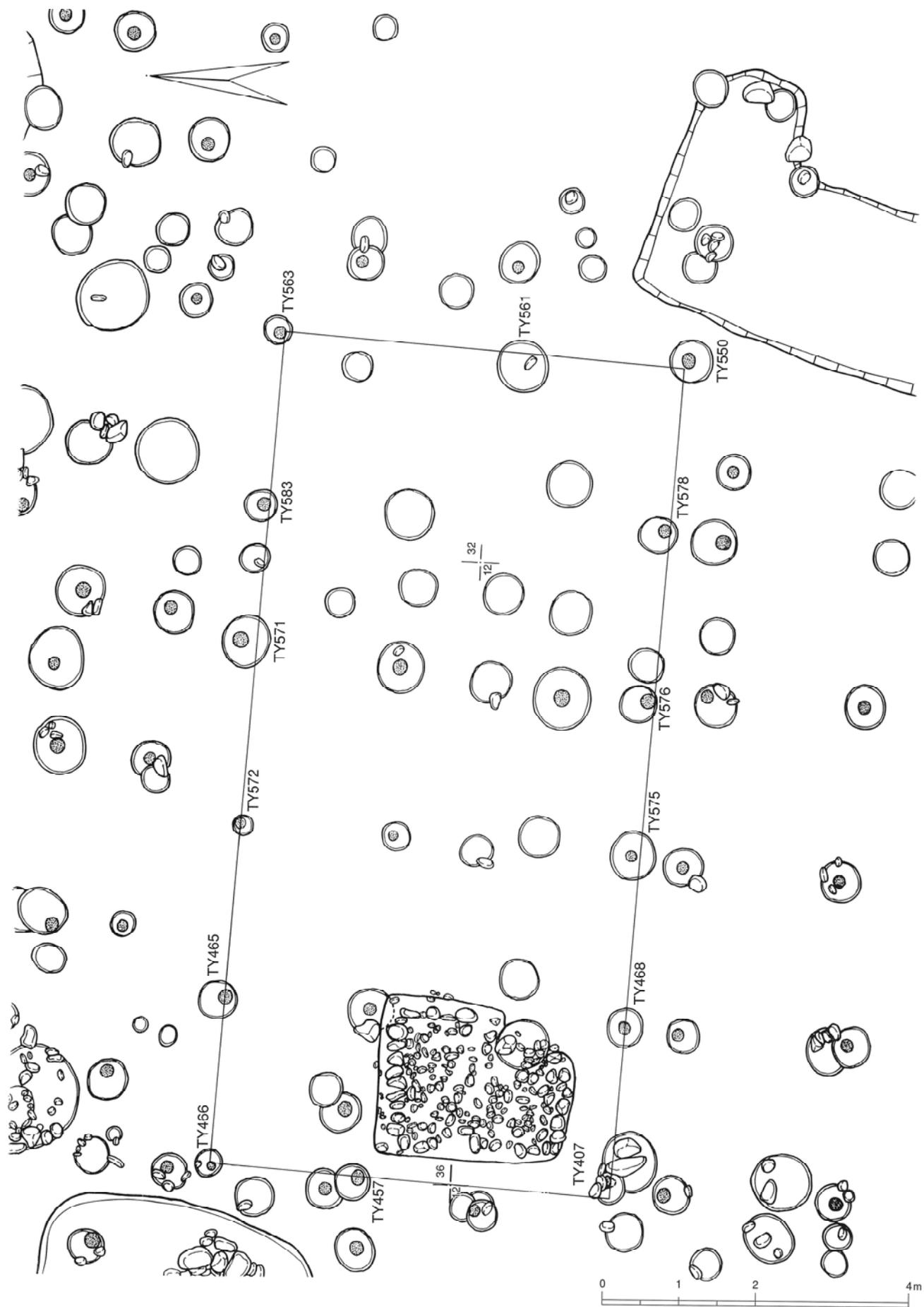
第40図 館山北館跡B Y 8平面図



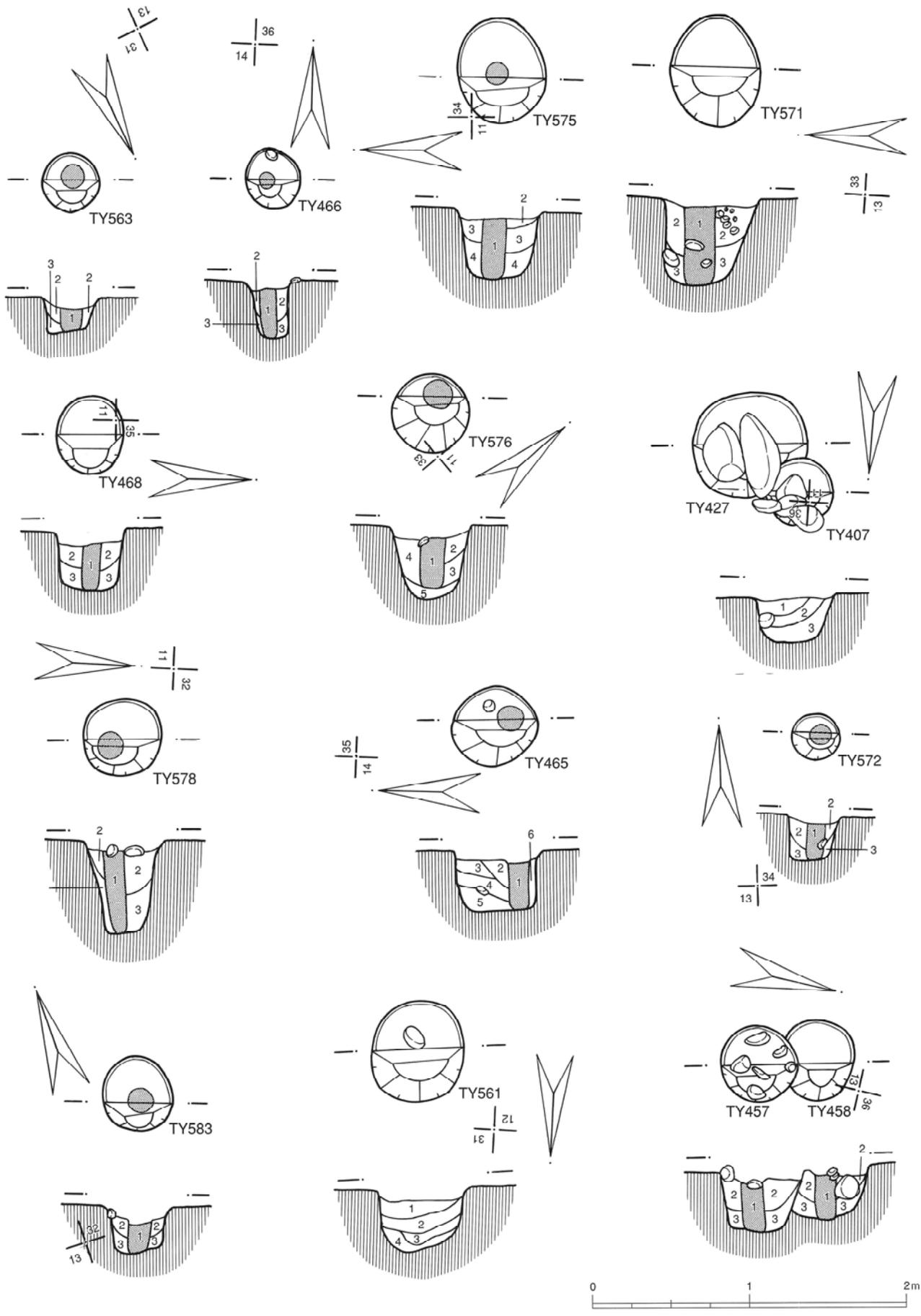
第41図 館山北館跡BY8柱穴平面図(1)



第42図 館山北館跡BY8柱穴平面図(2)



第43図 館山北館跡B Y 29平面図



第44图 舘山北舘跡B Y29柱穴平面图



第45図 館山北館跡建物変容想定図(5)

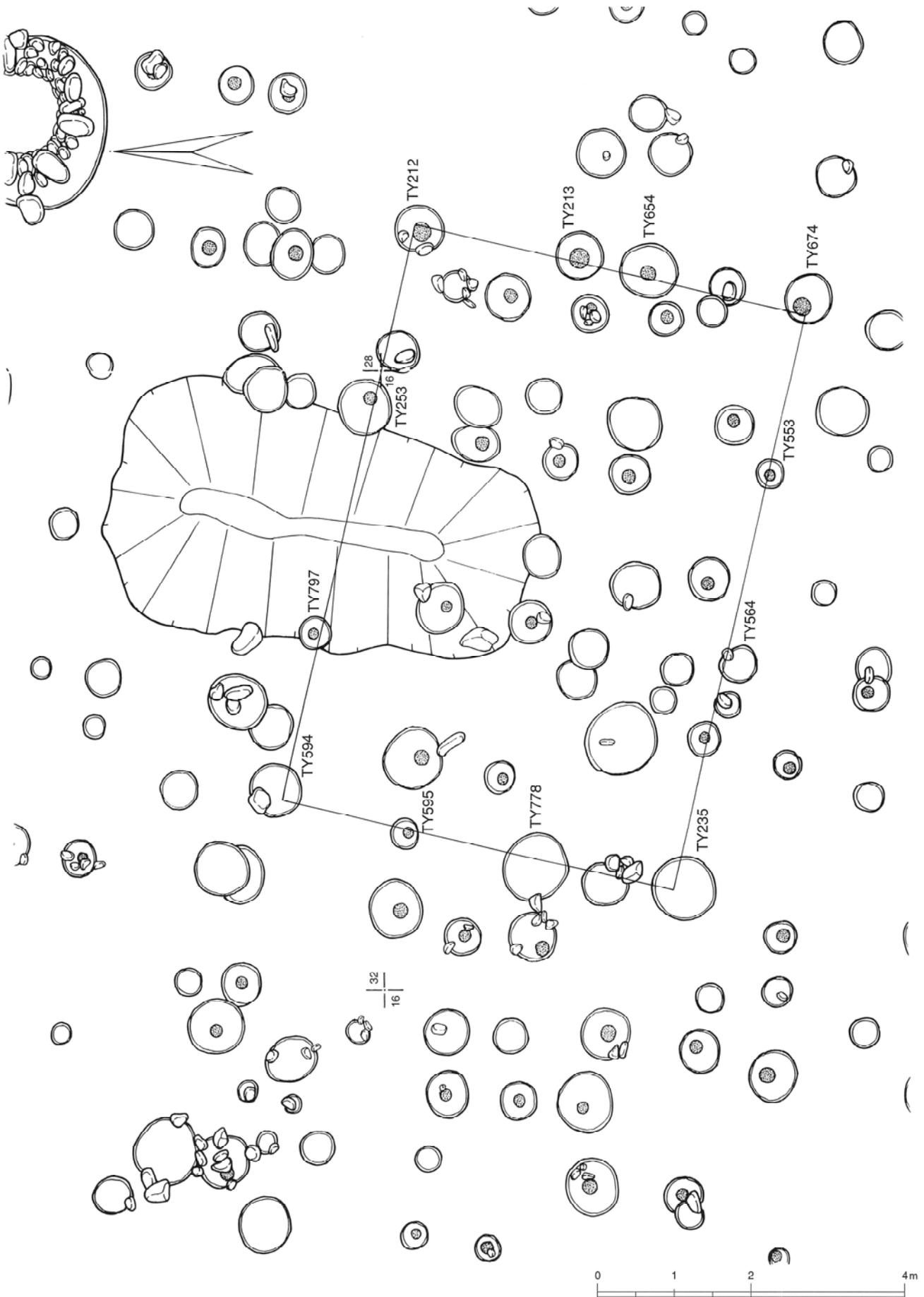
(5) 第V期の建物群「第45図・第92図」

西側遺構群のBY3とBY32の2棟の建物だけで構成する。東の建物群は、BY8の廃絶を最後に、IX期までの間は建設されないのである。ここでは、I期～IX期までの西側建物群を分析すると、I期からII期に伴っていたKY1～KY3の薬研堀及び箱堀を境にして南北の屋敷に区画されていたものと考えられる。その後、堀の埋め戻しに伴って境界が不明瞭となるのがIII期の時期である。そして、IV期に設置されたDN6の井戸跡を境に東西の建物群が区分された可能性がある。本来、東建物群を任せられていた屋敷主の都合で、新たな建物建設を断念せざるを得なくなったと仮定すれば、ここで示すV期以降の遺構存在に一応の理由が見つかる。

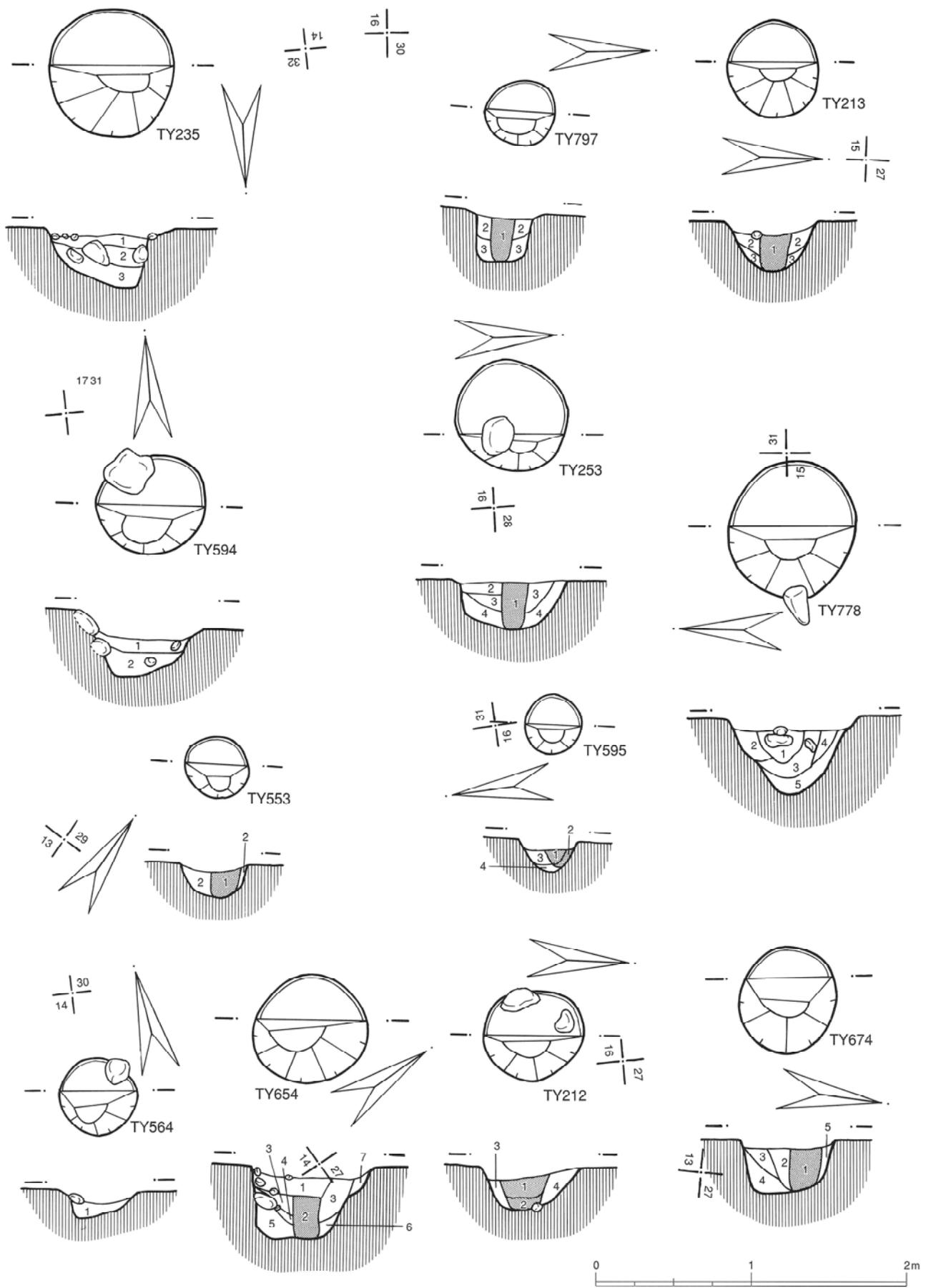
注目しているのが、調査区の西側に隣接する一町四方の館跡の存在である。この館跡が、どのような背景で、いつの時期に成立したかが重要になってくる。少なくともV期以降の東側に建物跡が存在しなくなった要因である可能性を指摘しておきたい。事の真相は別にしても、建物跡の柱穴の切り合い関係の吟味から、V期以降に新たに建物が構築されなかったことは事実である。

・BY3「第46図・第47図」

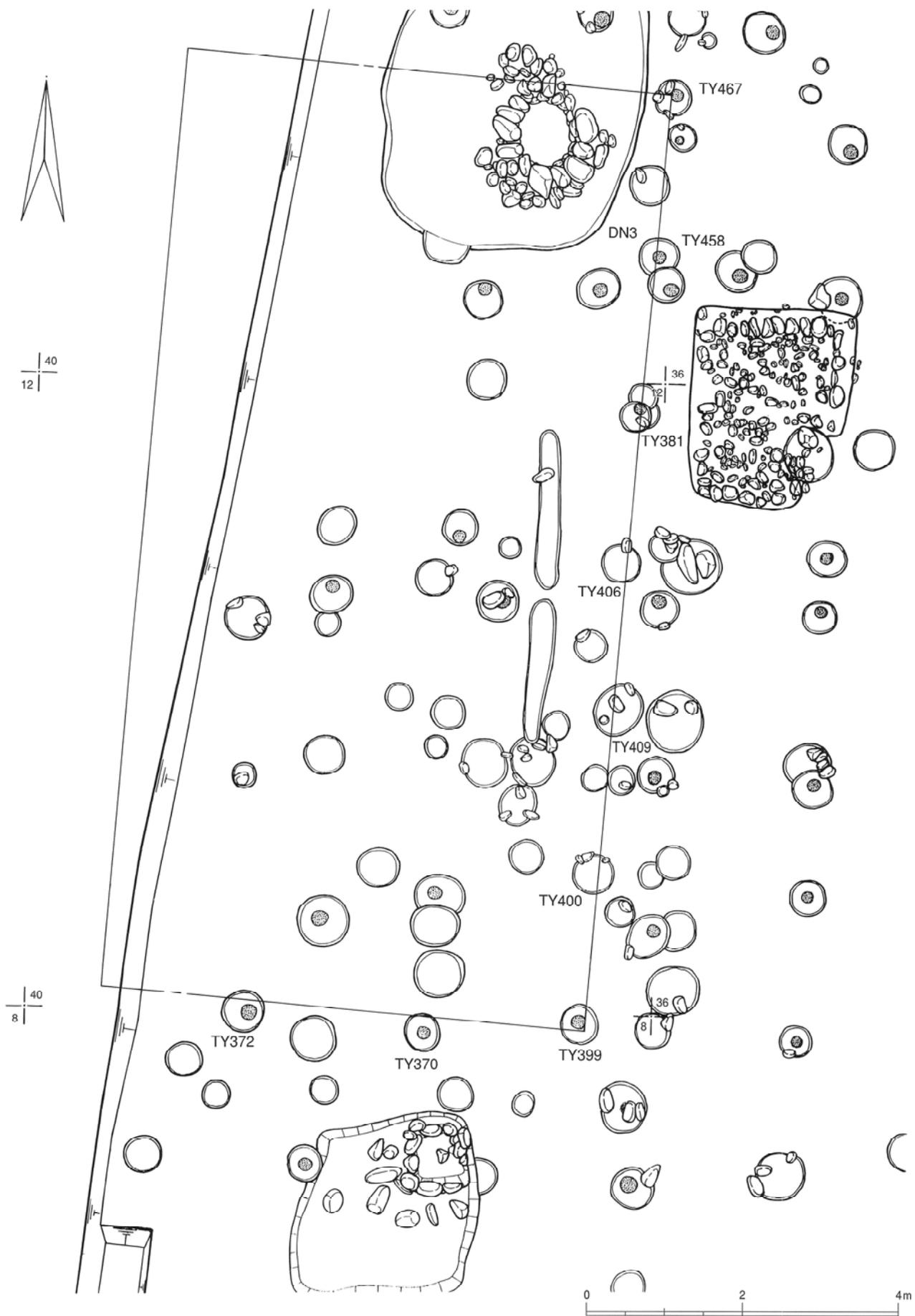
かつてIII期のBY15が建てられた箇所である。IV期に消滅した建物は、V期の段階になって桁行、梁間各3間の東西長の建物跡として構築された。変則的な柱間を有するのが特徴で、桁行の南面が7尺・8尺・10尺に対し、北面は10尺7尺・10尺・8尺と置き換えている。一方梁間は、西面が弱6尺に対し、東面は中心を3尺と極端に狭くして左右を7尺とした異質な柱間



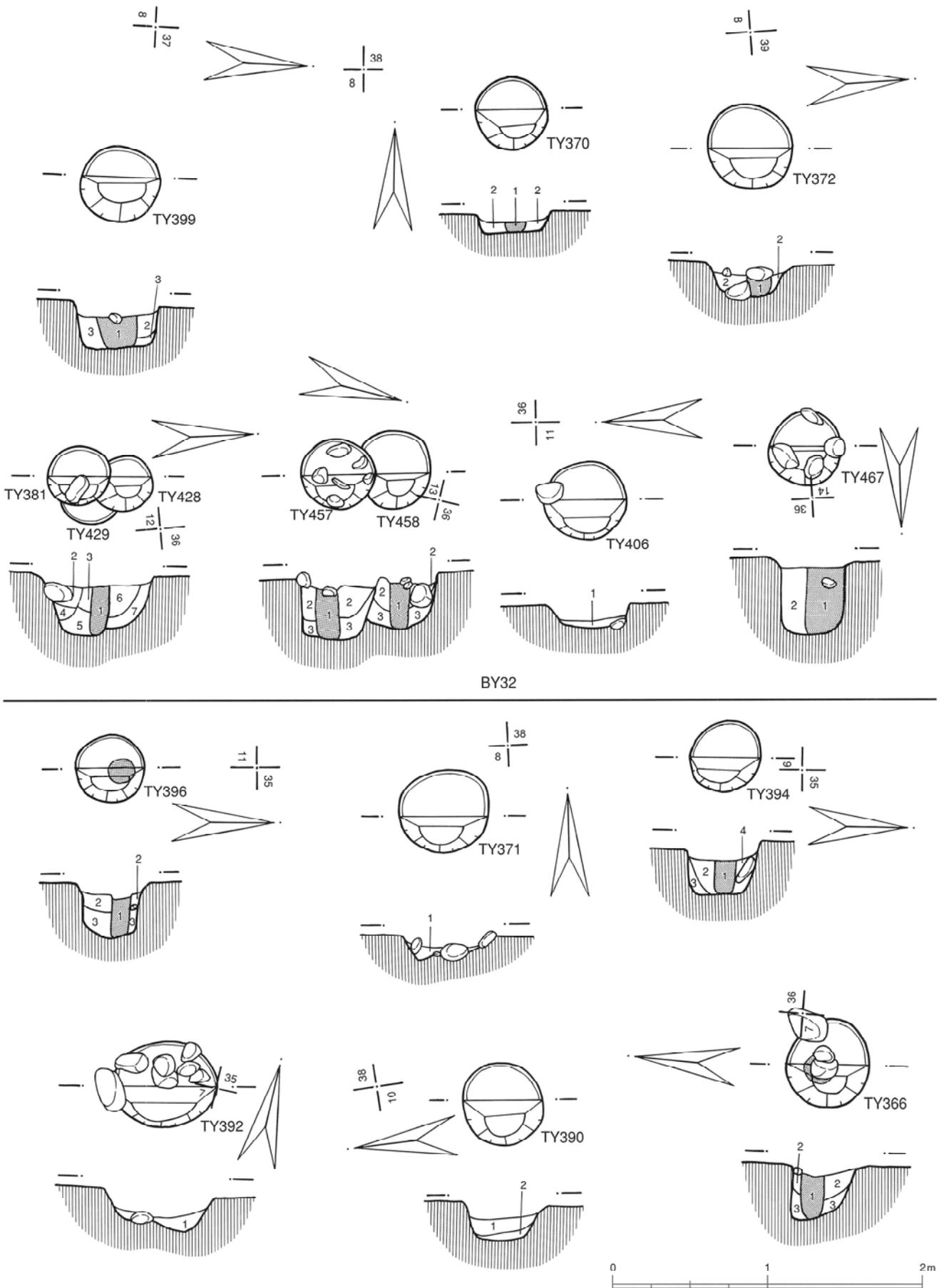
第46図 館山北館跡B Y 3平面図



第47図 館山北館跡BY3柱穴平面図



第48図 舘山北館跡 B Y 32平面図



第49図 館山北館跡BY32・BY19柱穴平面図



第50図 館山北館跡建物変容図(6)

を有している。柱穴は、直径が38cm～88cmのほぼ円形、深さは20cm～46cmと一定していないものの、柱痕跡に関しては、20cm前後と比較的しっかりしており、確認された全てに粘土貼付柱が明瞭に残っていた。

・BY32「第48図・第49図・第8図版」

IV期のBY31の後に建替えられた建物である。西側が未調査部分に含むことから建物の全体は明確にできないが、桁行6間、梁間3の南北長の建物跡と想定される。柱穴は、約50cmの円形プラン、深さはTY406やTY370といった極端に浅い柱穴を除けば45cmを測る。柱痕跡は13cm～24cmで、TY381とTY458に粘土貼付柱が認められた。

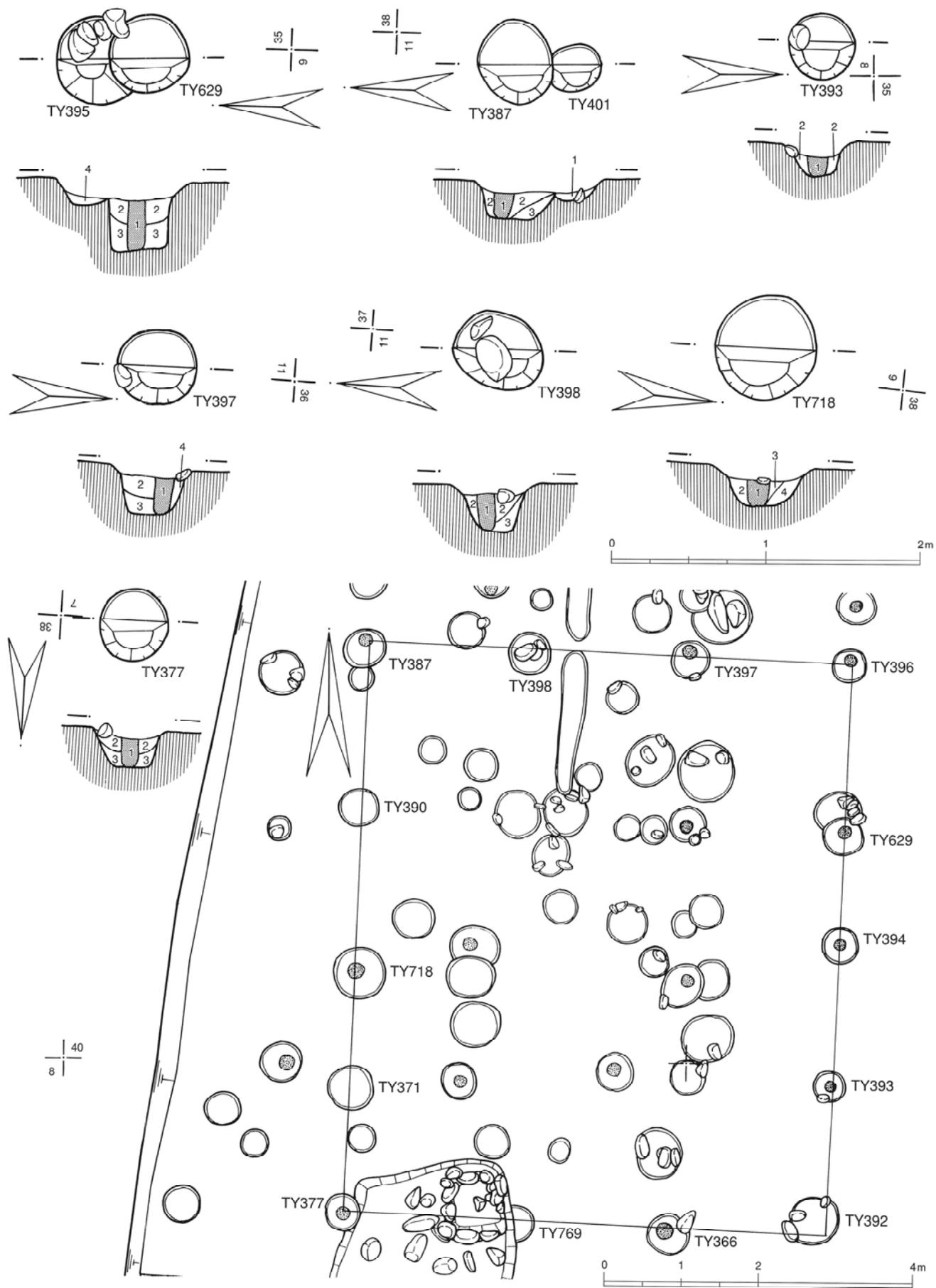
間尺は、桁行が概ね6尺、梁間も南のTY372・TY370・TY399から想定し、6尺と考えられる。DN3の井戸に関しては、建物の北東寄りに家屋内に取り込んで設置されている。

(6) 第VI期の建物群「第50図・第92図」

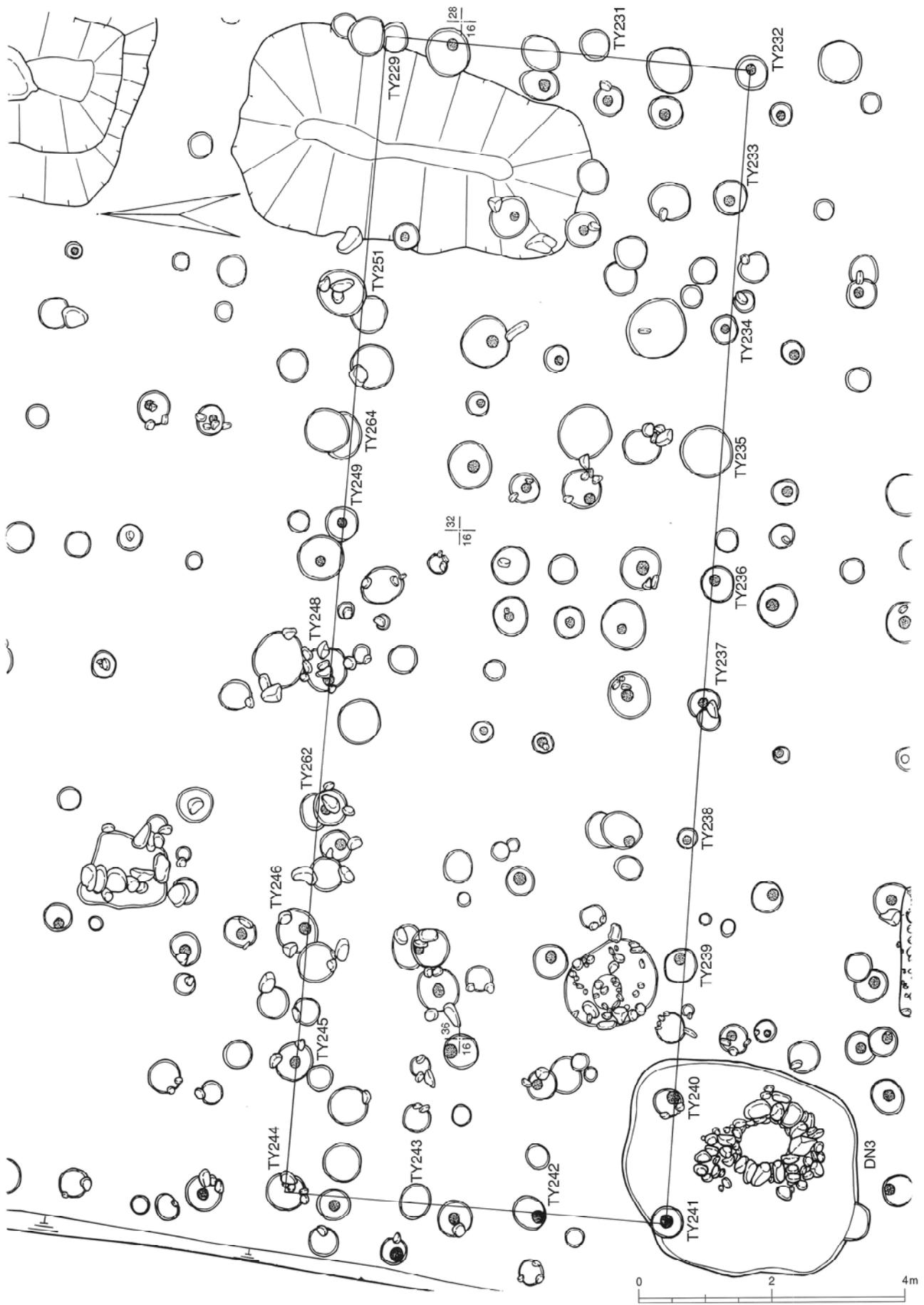
BY23の母屋とBY19の2棟を「L」字状に配置している。東西長を有する大型の建物BY23は、後述するIX期のBY14と同様に、検出された建物跡の中では最大規模を誇る。井戸は、BY23にDN6、BY19はDN3とそれぞれV期から引き継ぐものである。

・BY19「第49図・第51図」

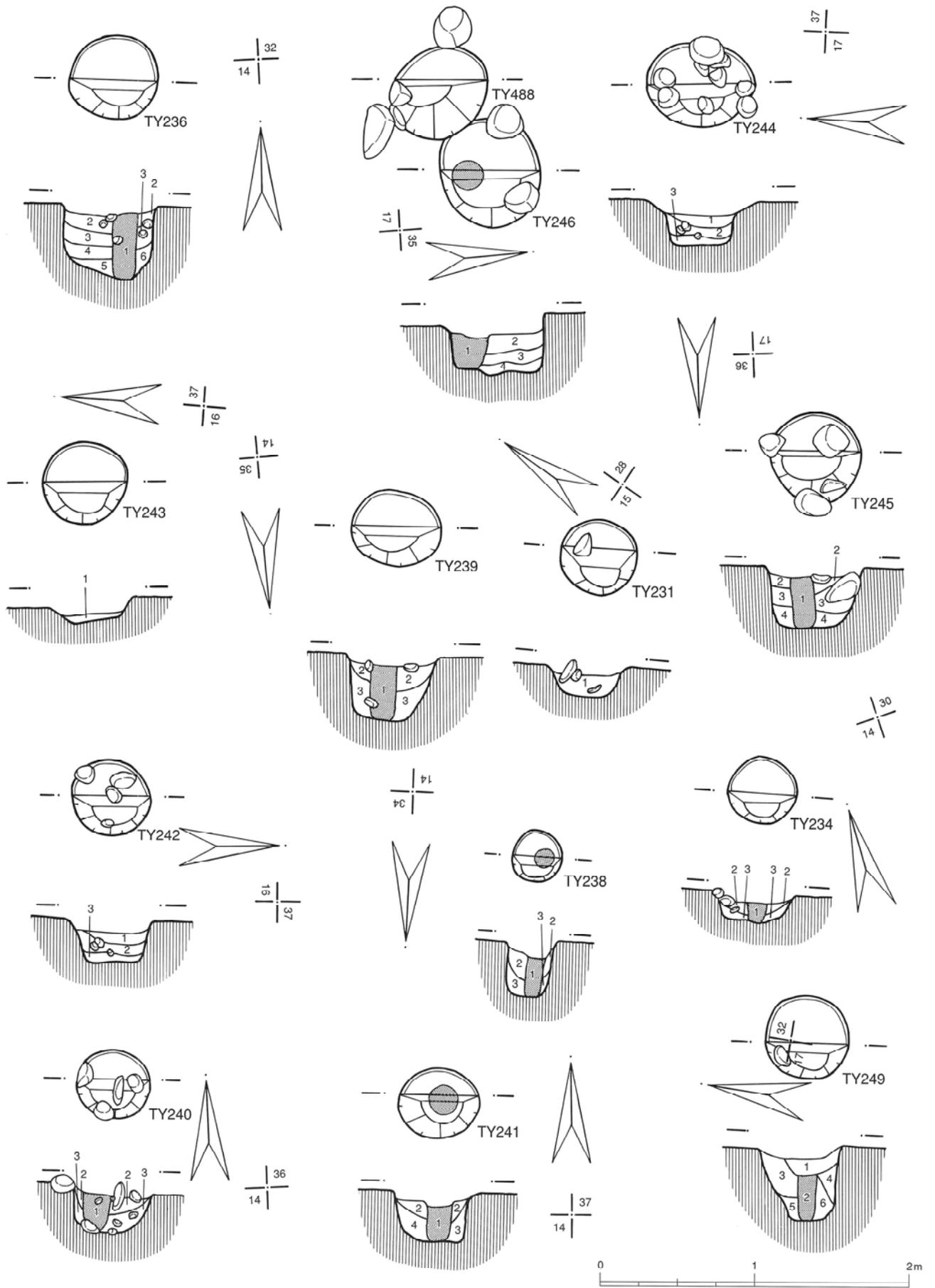
桁行4間、梁間3間の建物で、V期のBY32を建替えたものである。柱穴は、42cm～65cmの円形状をなし、深さ15cm～31cmと比較的浅い掘り方が特徴である。直径11cm～15cmを示す柱痕



第51図 館山北館跡B Y 19平面図・同柱穴平面図



第52図 館山北館跡 B Y23平面図



第53图 馆山北馆跡B Y 23柱穴平面图



第Ⅶ期建物群

第54図 舘山北館跡建物変容図(7)

跡は、全てに粘土貼付柱を確認することができた。間尺は、桁行が変則的で、東面の5間を南から6尺→6尺→5尺→7尺を測るが、西面は6尺→5尺→7尺→6尺と微妙に異なっているが、基本的には6尺であろう。

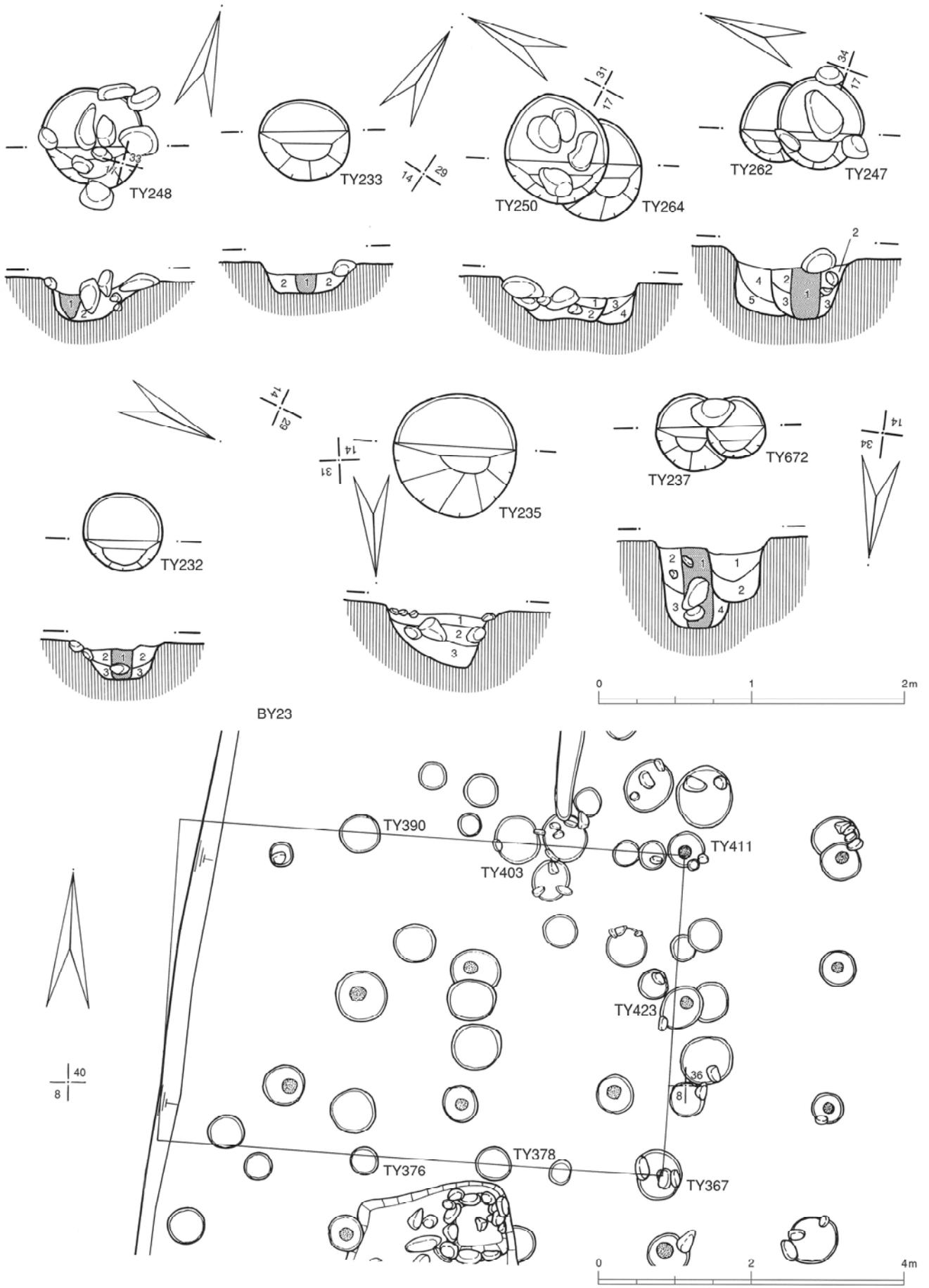
・BY23「第52図・第53図・第55図」

V期のBY3を大規模に建替えたもので、建床面積で106㎡を測る。桁行9間、梁間3間の東西長の大型建物は、Ⅶ期のBY25の一部の柱穴に切られており、明確に新旧関係が判断される。ほぼ円形を示す柱穴は、直径33cm～82cmの平均60cm、深さ25cm～59cmを測り、15cm前後の柱痕跡に対し、明瞭な粘土貼付柱を残している。間尺としては、桁行間が190cm～210cmを示すことで、6尺と7尺を交互に併用しているものと推測する。一方、梁間は西面を6尺、東面を8尺と10尺の2間となっている。

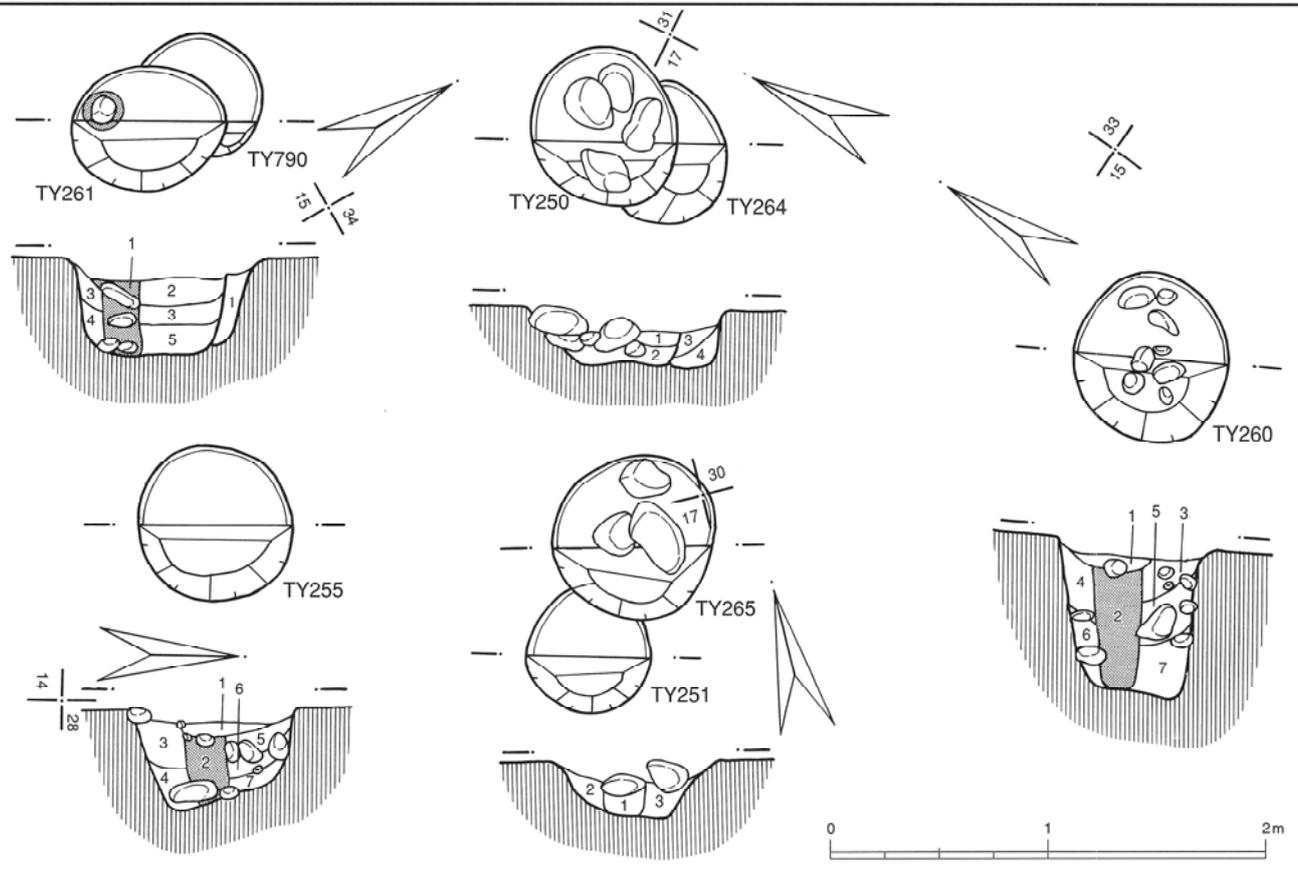
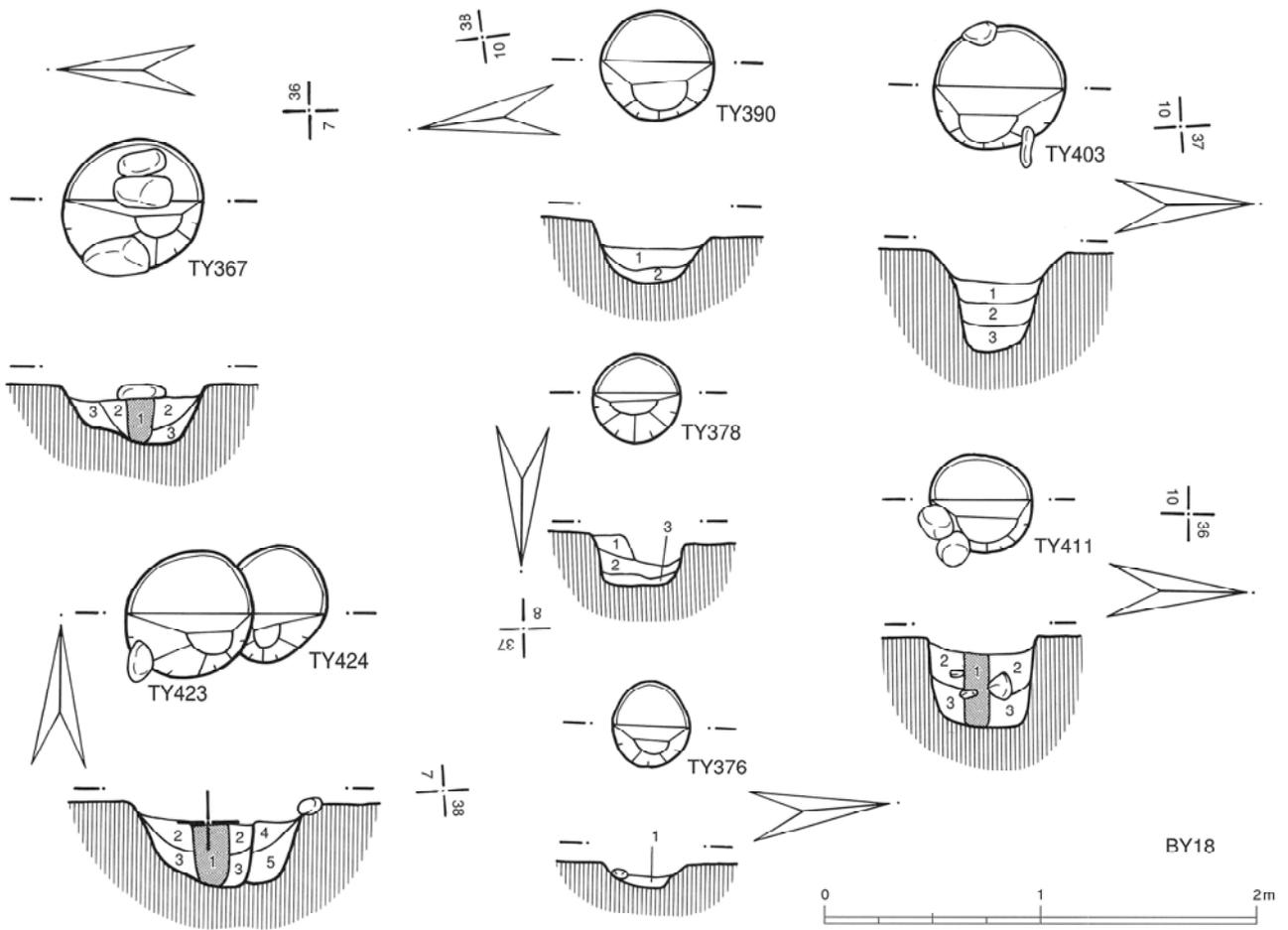
(7) 第Ⅶ期の建物群「第54図・第92図」

東西長の建物3棟で構成する。Ⅵ期の大型建物のBY23を建替えて、BY25とBY26の建物が2棟の建物として並立して建てられた。その中の6間を有するBY25は母屋施設と考えられる。南側のBY18は、BY25とDN3を挟んで建てられたものであり、Ⅵ期のBY19の建替えに伴うものとみられる。

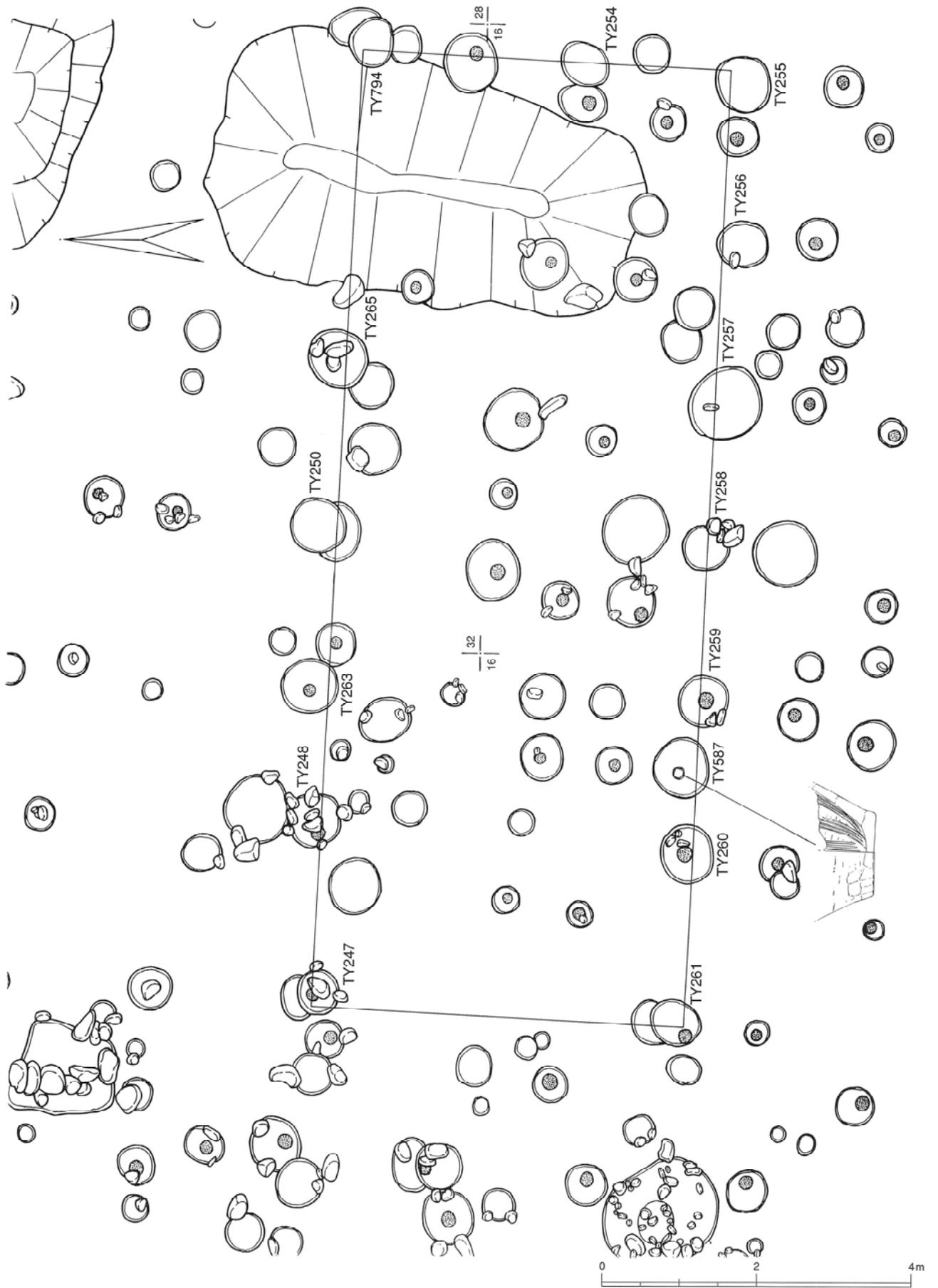
井戸跡は、V期から引き継ぐもので、DN6はBY25とBY26の2棟の建物に、DN3はBY18に付随するものとみられる。



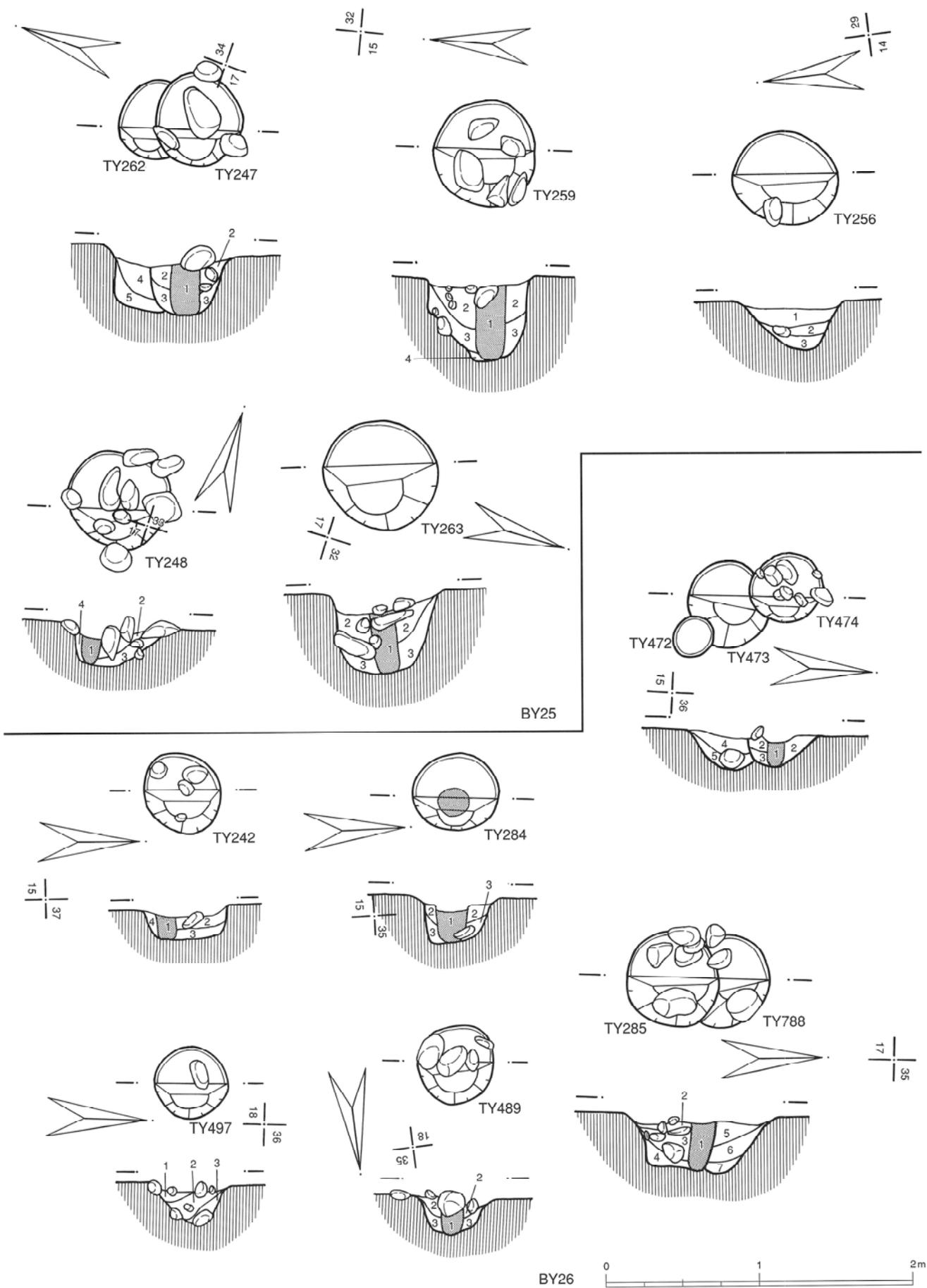
第55図 館山北館跡B Y23柱穴平面図・B Y18平面図



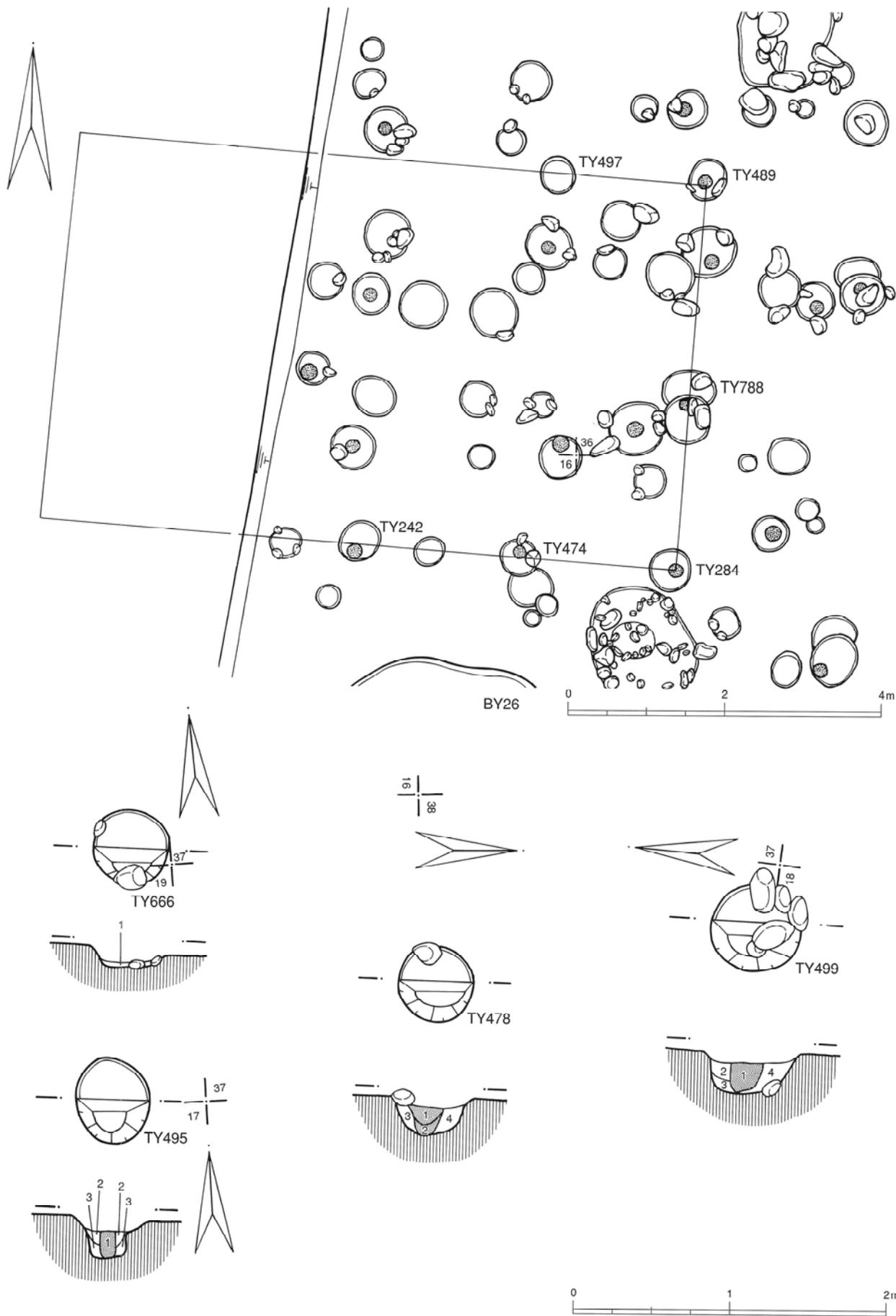
第56図 館山北館跡 B Y 18・B Y 25同柱穴平面図



第57図 館山北館跡 B Y 25平面図



第58図 館山北館跡BY26柱穴平面図



第59図 館山北館跡 B Y 26平面図・B Y 33柱穴平面図

・ B Y 18 「55第図・第56図」

西面の梁間が未調査区のために明確にできないが、桁行3間、梁間2間の建物と推測する。柱の掘り方が円形の直径が38cm～70cmをなす。深さは、T Y 376が10cmと極端に浅くなっているが、平均40cm前後を示している。柱痕跡は、T Y 367・T Y 423・T Y 411の3箇所柱穴に認められ、38cm～70cmの幅で、粘土貼付柱を残していた。間尺は、桁行が6尺と7尺の併用、梁間が7尺と判断される。

・ B Y 25 「第56図・第57図・第58図」

6期のB Y 23を建替えた東建物で、桁行6間、梁間2間の東西長の建物である。柱の掘り方は、円形及び楕円形を測る60cm～95cm、深さ26cm～79cmをなし、柱穴の上部には拳大の礫による根固を用いた柱穴も含まれており、今回検出された建物跡群の中では、最もしっかり掘られている。柱痕跡は12cm～28cmをなし、全ての柱に黄褐色の粘土を使用した粘土貼付柱の手法が明瞭に確認されている。

間尺は、桁行の一間に8尺を用いるなど不合理的さは残るが基本的には6尺を前提としているものとみる。梁間は、東面が7尺と9尺の組み合わせ、西面は16尺と不自然な1間を示しているが、東面と同様に2間を示していた公算が高い。

・ B Y 26 「第58図・第59図」

B Y 25の西側に1間離して構築したもので、西半分が未調査区に加わっていることで全体の規模は明確にできないが、B Y 25と並立する東西長の建物と考えている。ほぼ円形で、45cm～93cmの掘り方と22cm～35cmの深さを測る柱穴には、B Y 25と同じく上部柱穴に礫による根固が確認されている。柱痕跡は14cm位で、T Y 284のみに粘土貼付柱が認められた。間尺は桁行の推測6尺、梁間は8尺の等間隔で、4間×2間の建物と推測している。

(8) 第Ⅷ期の建物群「第60図・第92図」

旧K Y 2の跡地に建てられた建物跡であり、Ⅲ期のB Y 15からⅦ期のB Y 25の4棟の建物跡が既にこの周辺に建替えられている。こうした複数の建物が同じ箇所に多用することによって柱穴が乱立し、地山層が軟弱となる。前述した東側建物群のB Y 8～B Y 11は、新たに設ける柱穴を左右に移動することで解決してきた。

大型の建物として建替えられたB Y 22も同様に桁行の北面を大きく北側に移動する方法をとっている。並立するB Y 33も西側に移動する。南側の建物は、D N 3とともに消滅した。

・ B Y 22 「第61図・第62図・第63図・第66図・第9図版」

Ⅵ期のB Y 25の建替えによるもので、北側に廂を配する桁行7間、梁間4間を有する大型の建物であり、床面積が130.3㎡を測る。一部の柱穴に関しては、K Y 1の埋め土が崩れたことによる影響で確認困難な柱穴も存在したが、直径を37cm～67cmと比較的小さな円形及び楕円形の柱穴を多用している。深さは、乱立する柱穴を意識したためか8cm～60cmと不安定であった。柱痕跡は10cm～14cmを測り、大半が粘土貼付柱の痕跡を示していた。桁行の間尺は、南面が概ね7尺に対し、北面は、補強の目的でT Y 612を加えたことで8間となっている。梁間は不



第60図 館山北館跡建物変容想定図(8)

規則な9尺~12尺の組み合わせによる3間であった。廂は約4尺の空間を置いて北側に設置しており、ほぼ円形で、28cm~60cmの掘り方と9cm~26cmの深さと小規模であるが、柱痕跡は10cm~13cmでしっかりと粘土貼付柱を残してある。間尺は、ほぼ6尺を示していた。

・BY33「第59図・第61図」

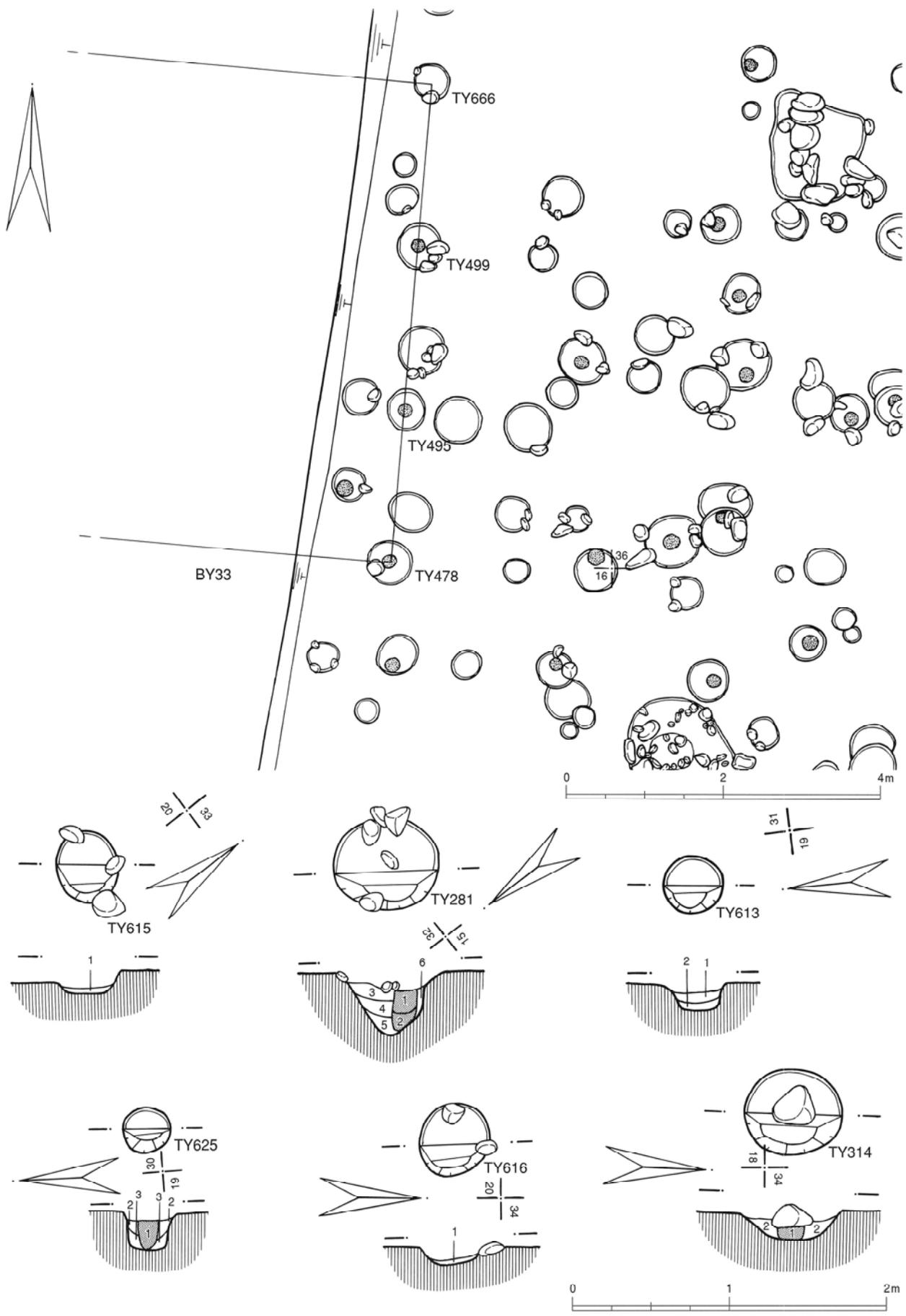
調査区西側に沿って確認された3間の建物跡で、大半が調査区外に含まれていることから全容を明らかにすることはできないが、BY22と並立することを前提としているので、東西長の建物跡と推測としている。柱の掘り方は、円形50cm前後、深さ50cm~56cmをなす。柱痕跡はTY666以外の3柱穴に残っており、粘土貼付柱で占められる。間尺は6尺となる。

(9) 第Ⅸ期の建物群「第64図・第92図」

館山北館跡の遺構としては、最後の建物群となるもので、調査区の北西側に沿って検出されている。建物群は、母屋施設と想定されるBY14を南側に置き、西にBY2、北にBY1の計3棟を「コ」の字状に配置して屋敷群を構成している。また、東側に離れて存在するBY28に関してはこの時期に伴うものなのか断定できない。

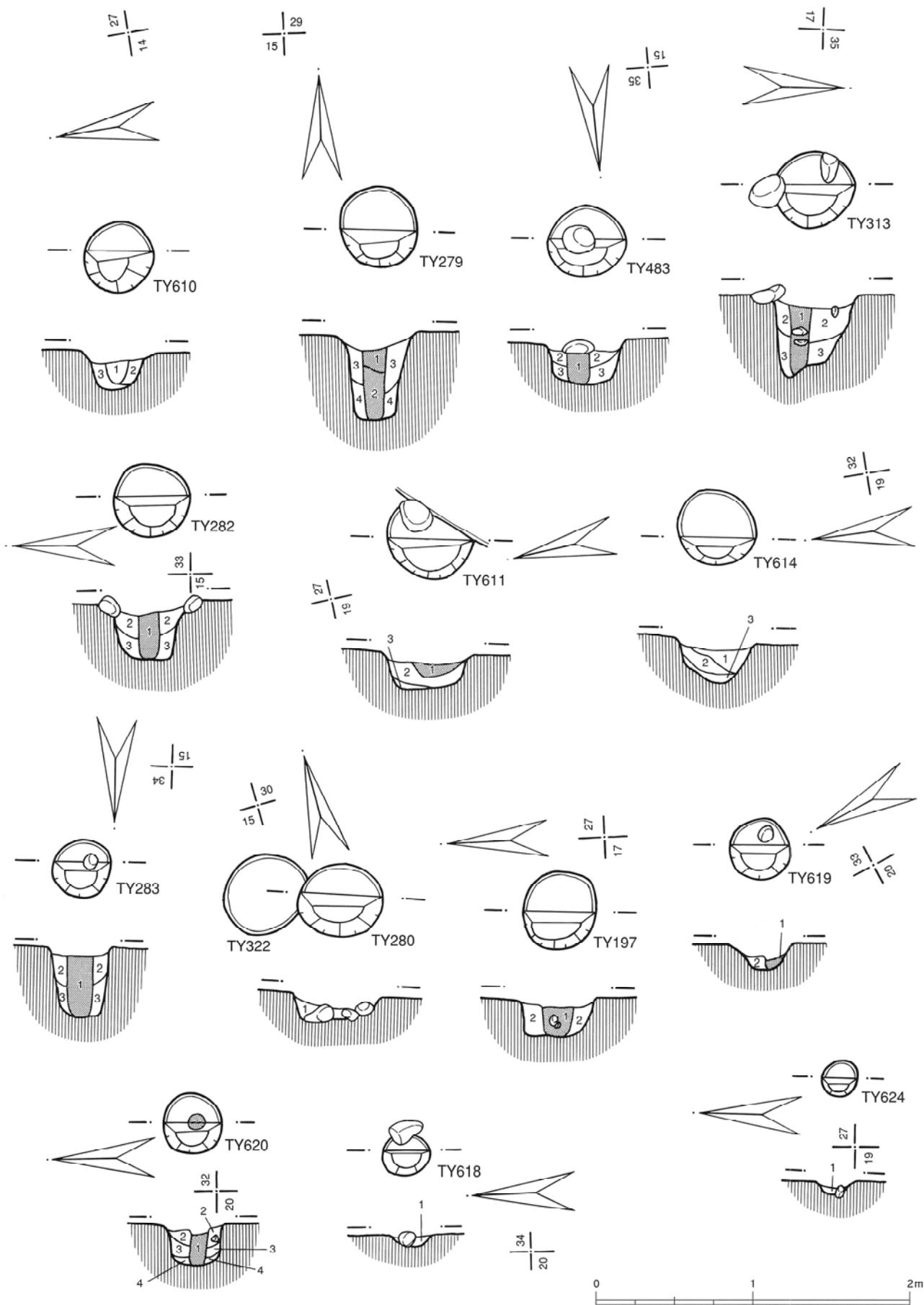
・BY1「第65図・第66図・第68図・第9図版・第17図版」

桁行5間、梁間2間の東西長の建物跡である。円形の掘り方をもつ柱穴は、直径が55cm前後を測り、深さはTY154の14を除けば、27cm~69cmを測る。柱痕跡は、全て明瞭な粘土貼付柱を示しており、12cm~18cmで認められた。遺物は唯一、TY146の上部より第85図—12の中国

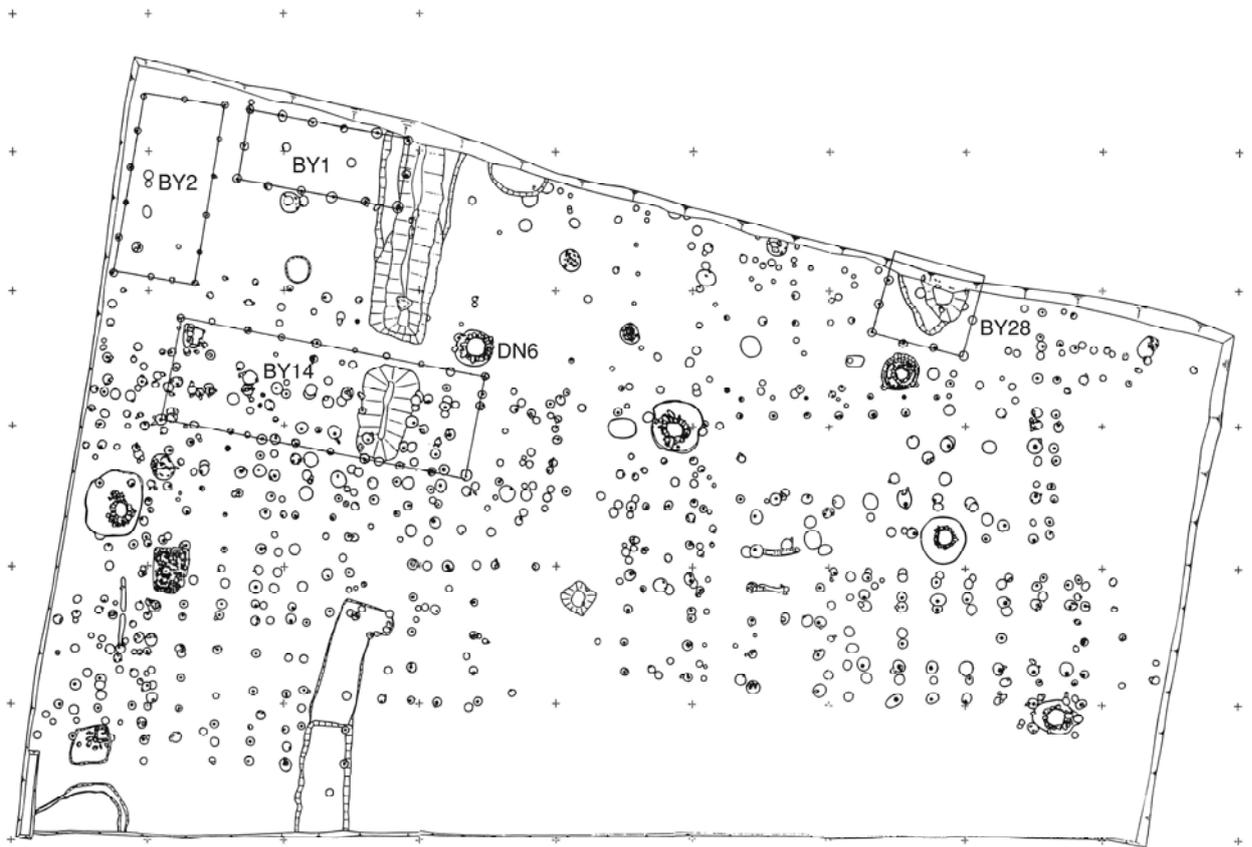


第61図 館山北館跡BY33平面図・BY22柱穴平面図





第63図 館山北館跡B Y22柱穴平面図



第Ⅸ期建物群

第64図 館山北館跡建物変容図(9)

北宗時代の宗銭「熙寧元宝」(A. D. 1068) 1点が検出されている。間尺は、桁行、梁間とも6尺等間隔をなす。

・BY2「第67図・第68図」

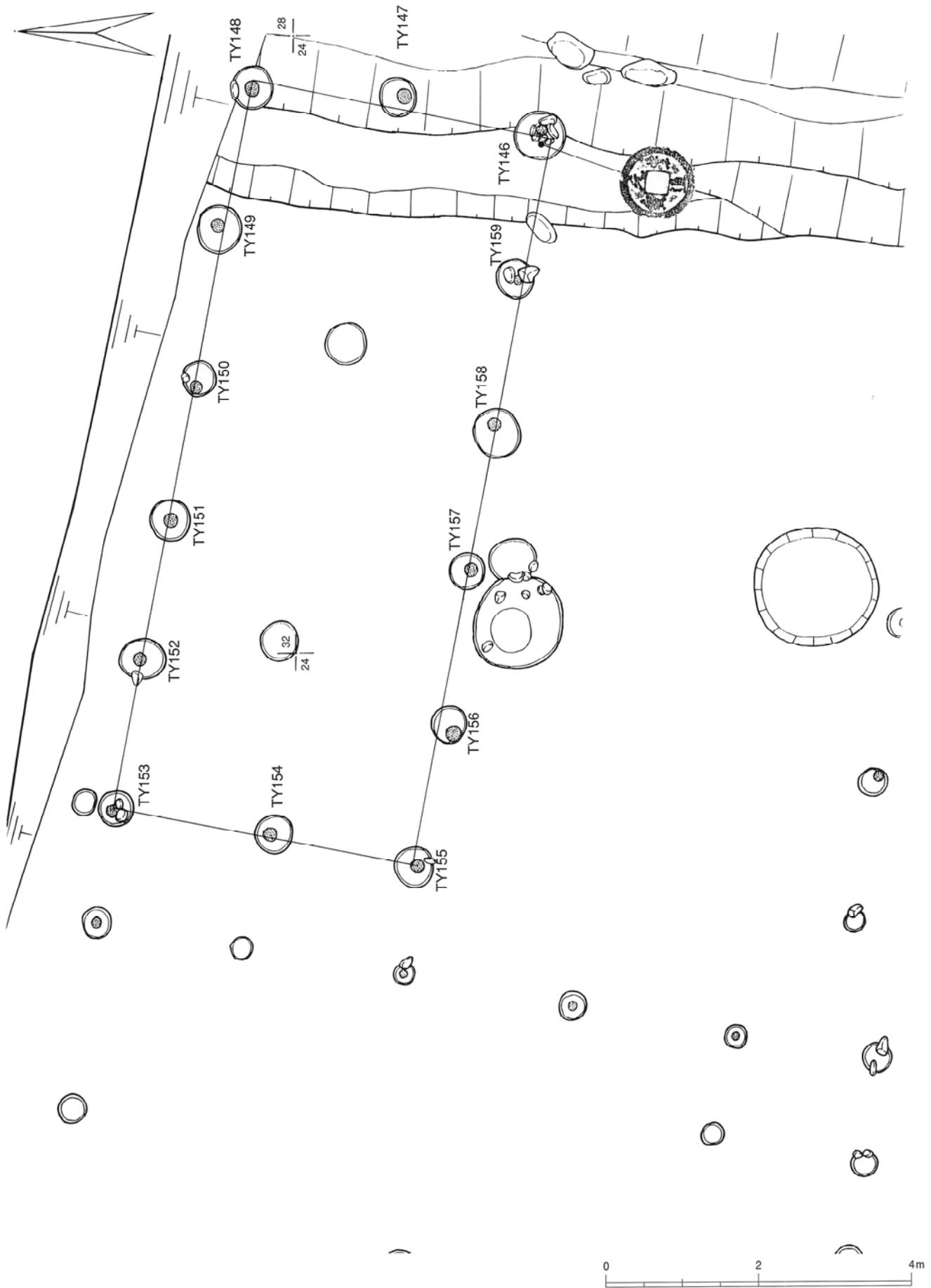
BY1のすぐ西側に隣接する建物で、6尺の間隔を開けて南北方向に配置されている。桁行5間、梁間2間を基本としたBY2の建物は、BY1とほぼ直角に置かれ、BY2の梁間とBY1の桁行が一直線上に並ぶことなどから、曲屋的な構造で棟続きであった可能性も指摘される。柱の掘り方は、32cm~49cmと小規模で、深さも7cm~43cmと浅いのを特徴としている。柱痕跡は平均13cm前後で、粘土貼付柱の痕跡は認められなかった。間尺は、桁行・梁間とも6尺で統一している。

・BY14「第69図・第70図・第71図・第18図版」

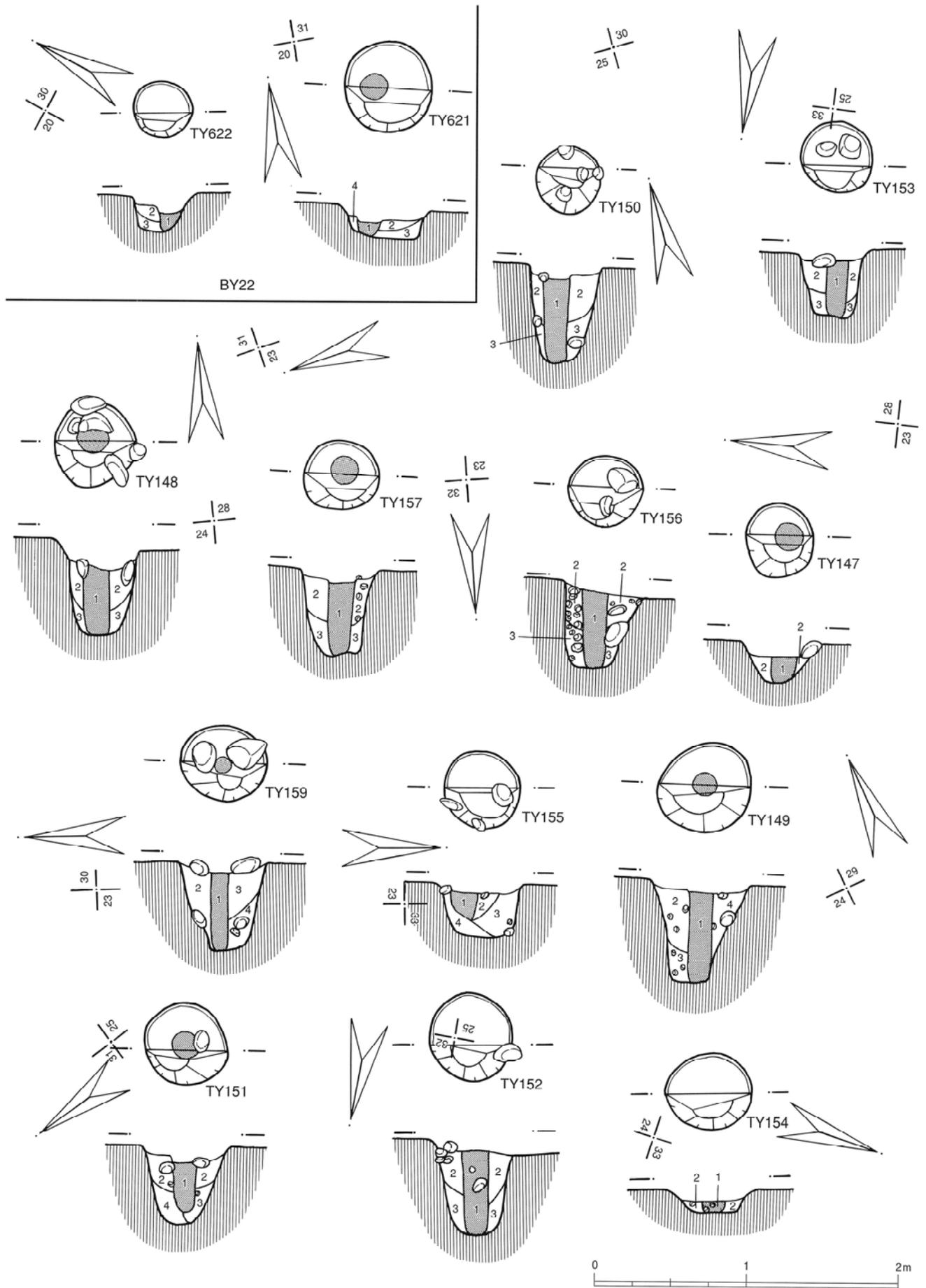
BY2の南東隅から東方向に配置された建物で、桁行9間、梁間3間を示す。建物の東側にあるKY2を避けるように桁行を置く。柱穴の掘り方は、大型建物の割には小さく、直径41cm~64cm、深さ23cm~42cmを測る。柱痕跡は10cm~17cmなし、確認された全てに粘土貼付柱が認められる。さらに、柱穴の上部と底面には、礫を意図的に埋めたとみられる根固めを施した柱穴も含まれる。間尺は、桁行・梁間とも6尺と7尺を交互に配するものと推測する。

・BY28「第66図・第67図」

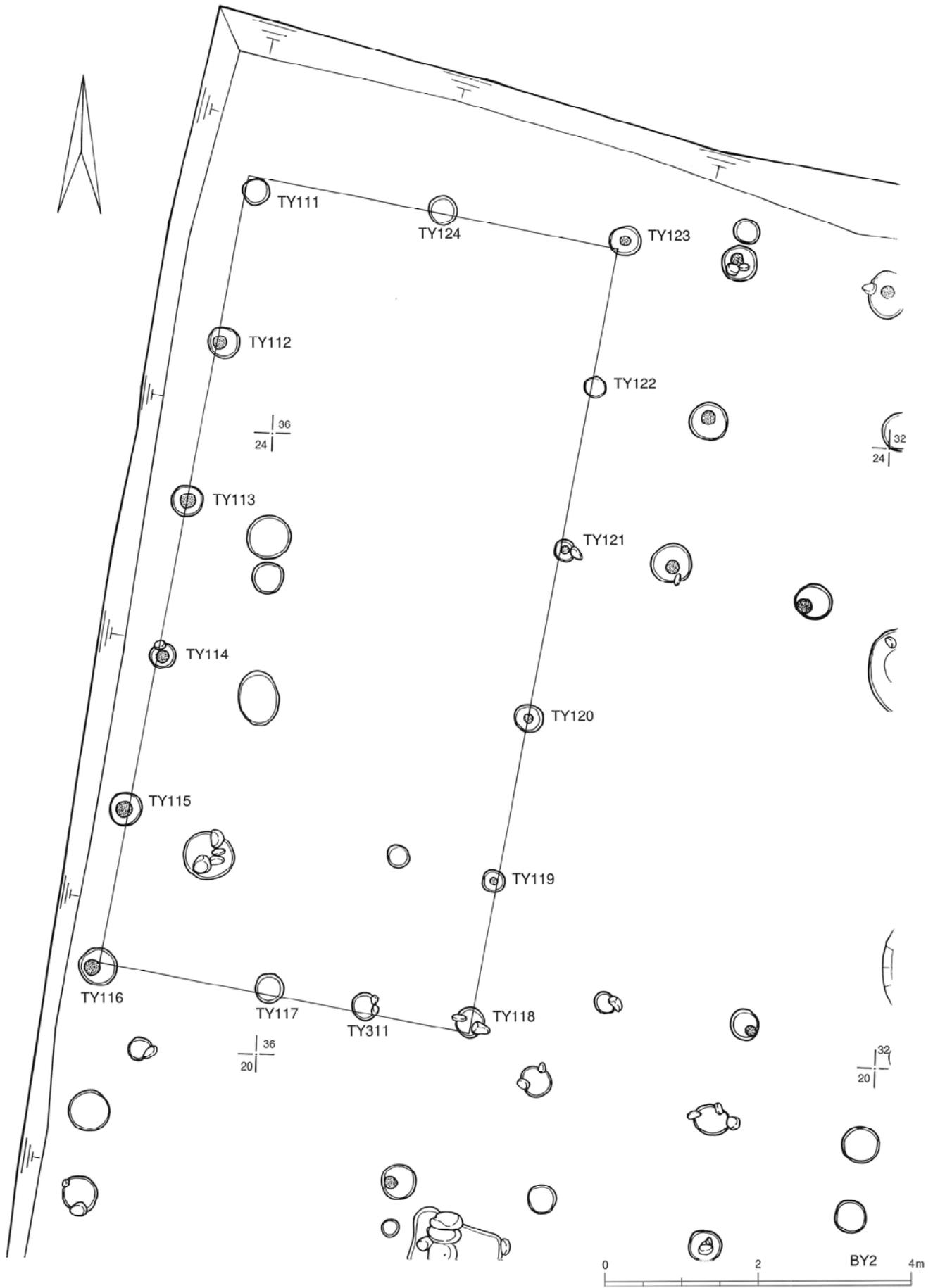
東側から検出されたもので、母屋となるBY14から約22mほど離れて存在する。ほぼ方形を占める建物は、梁間の一部が未調査区に加わっている。桁行・梁間とも3間の建物は、円形及



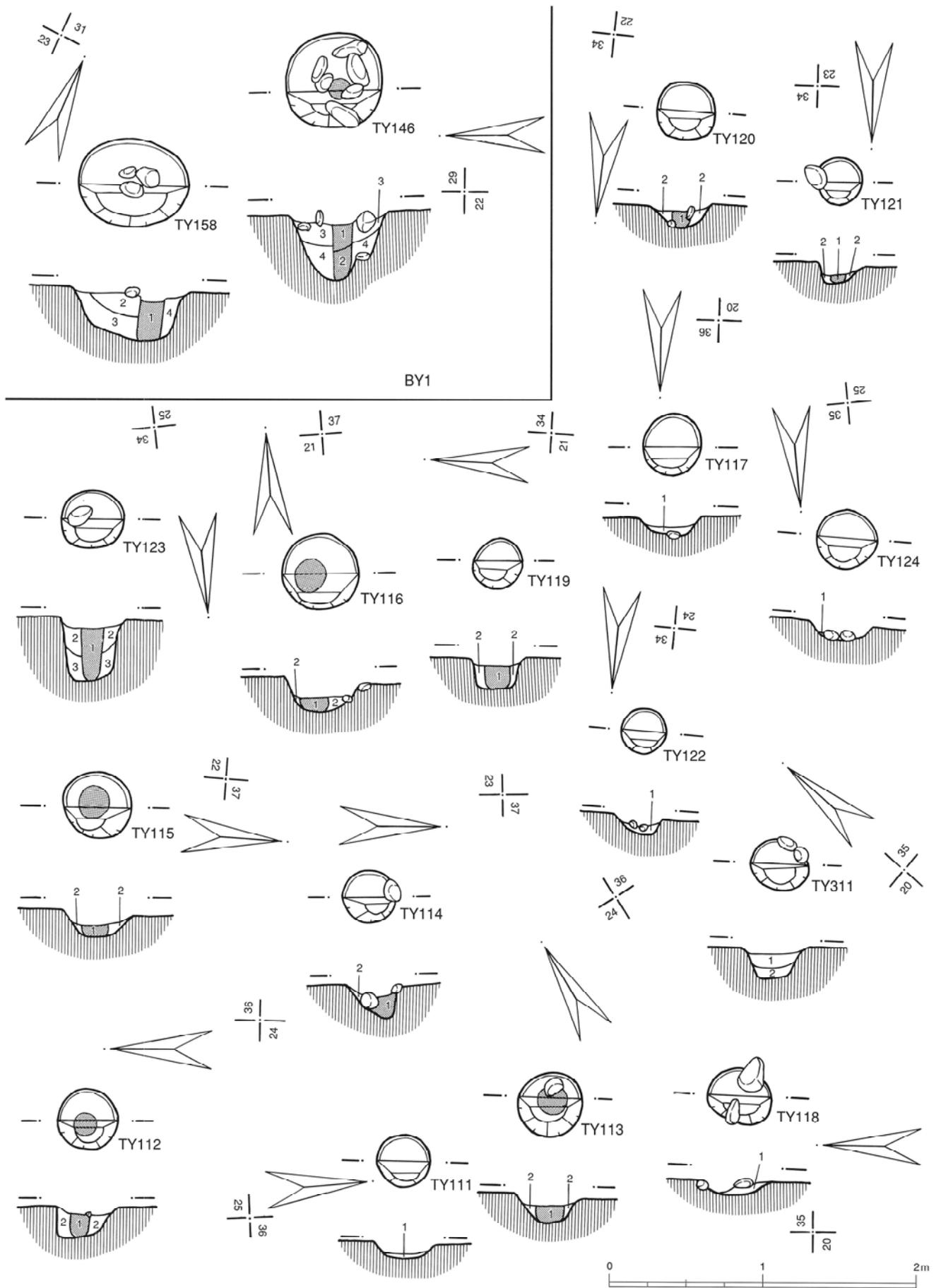
第65図 館山北館跡BY1平面図



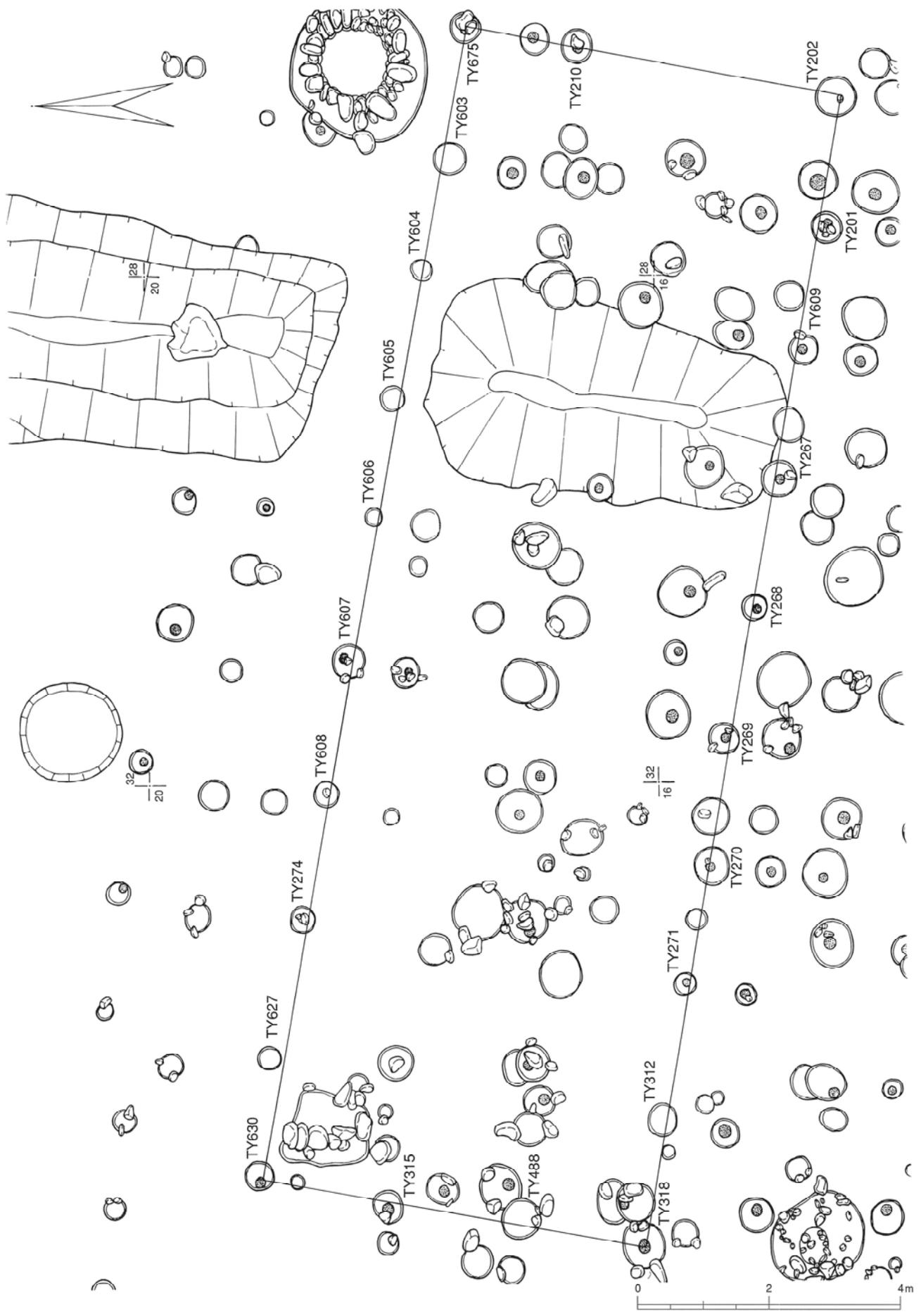
第66図 館山北館跡BY22・BY1柱穴平面図



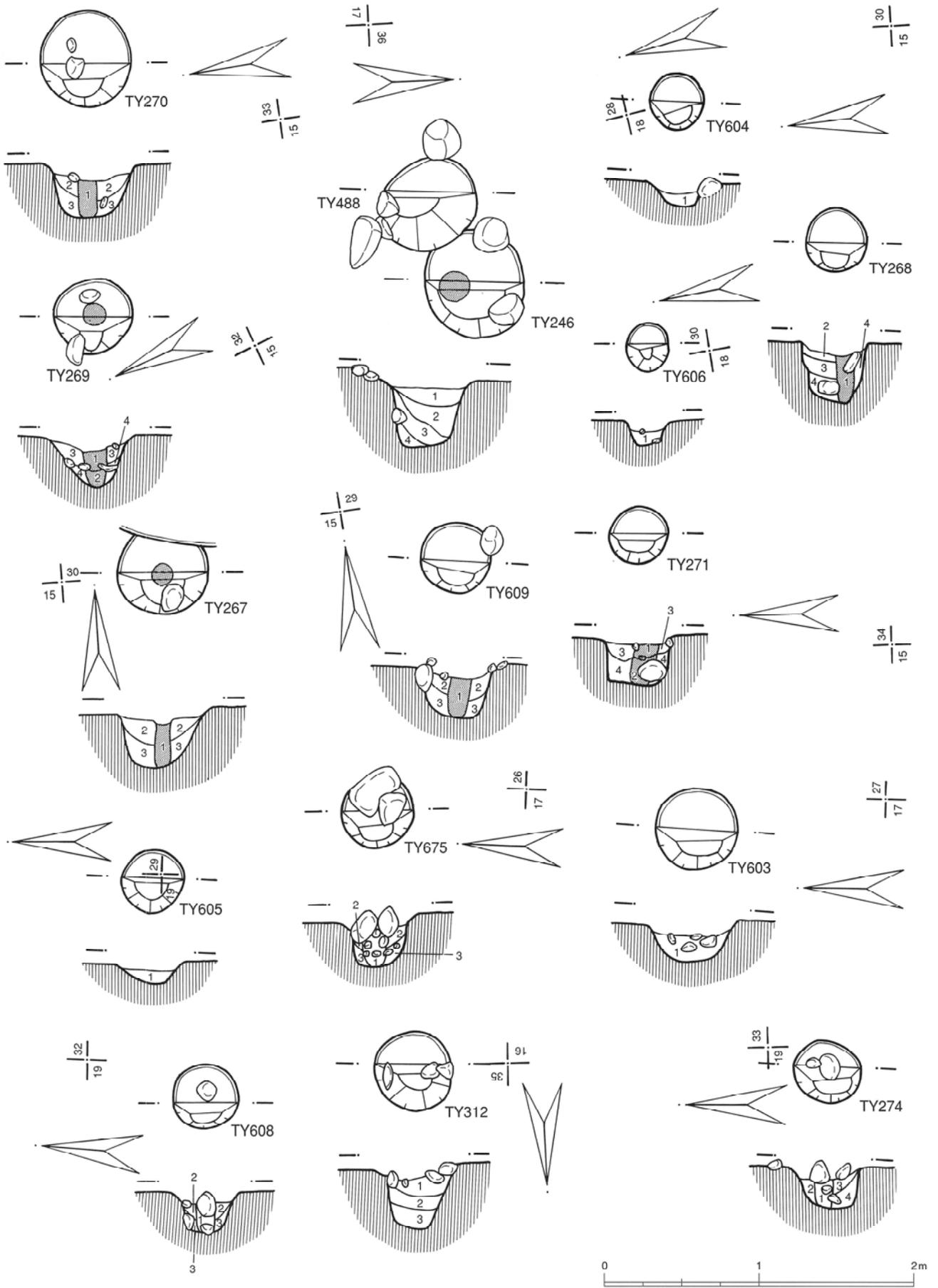
第67図 館山北館跡BY2平面図



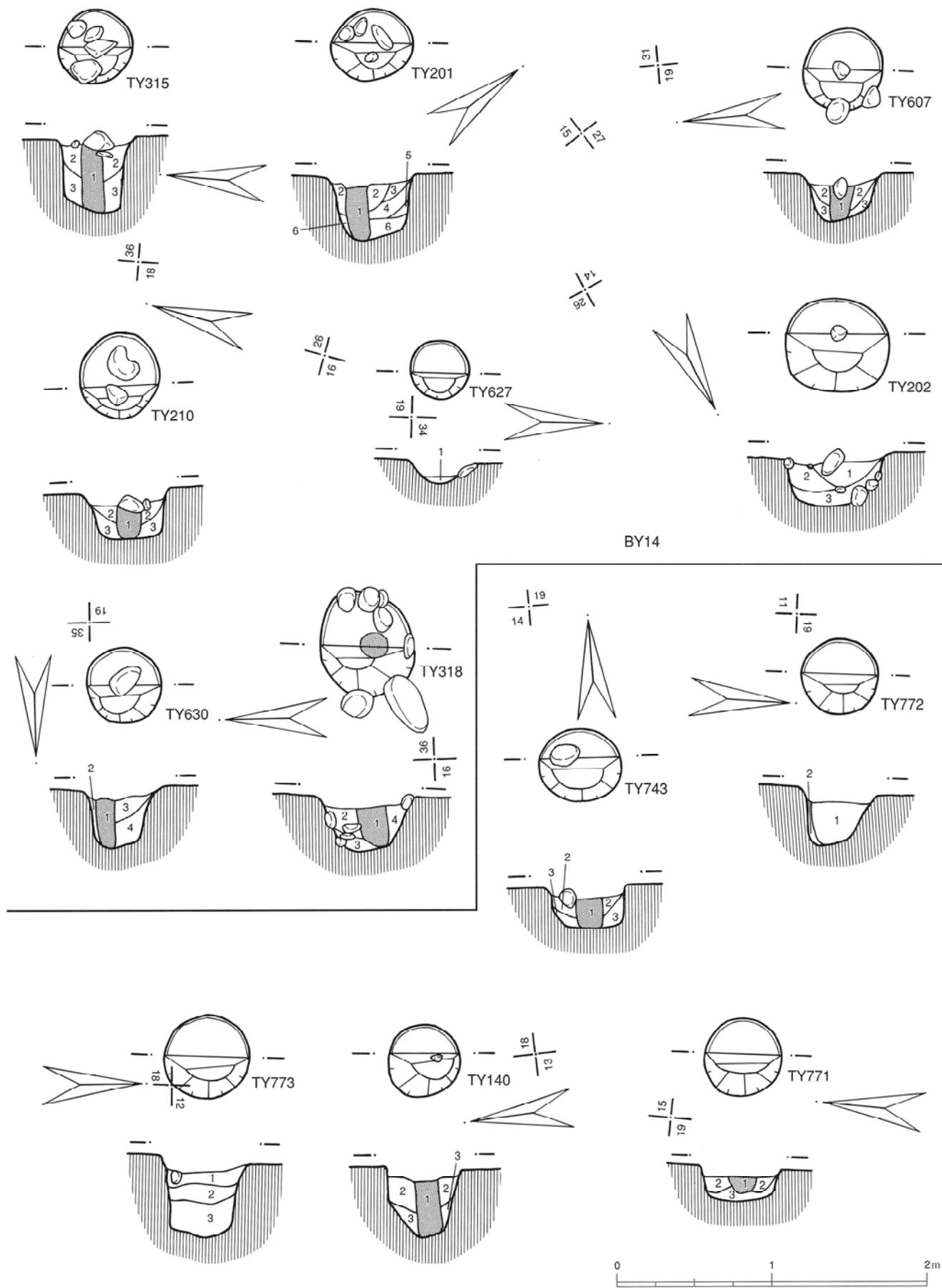
第68図 館山北館跡BY1・BY2柱穴平面図



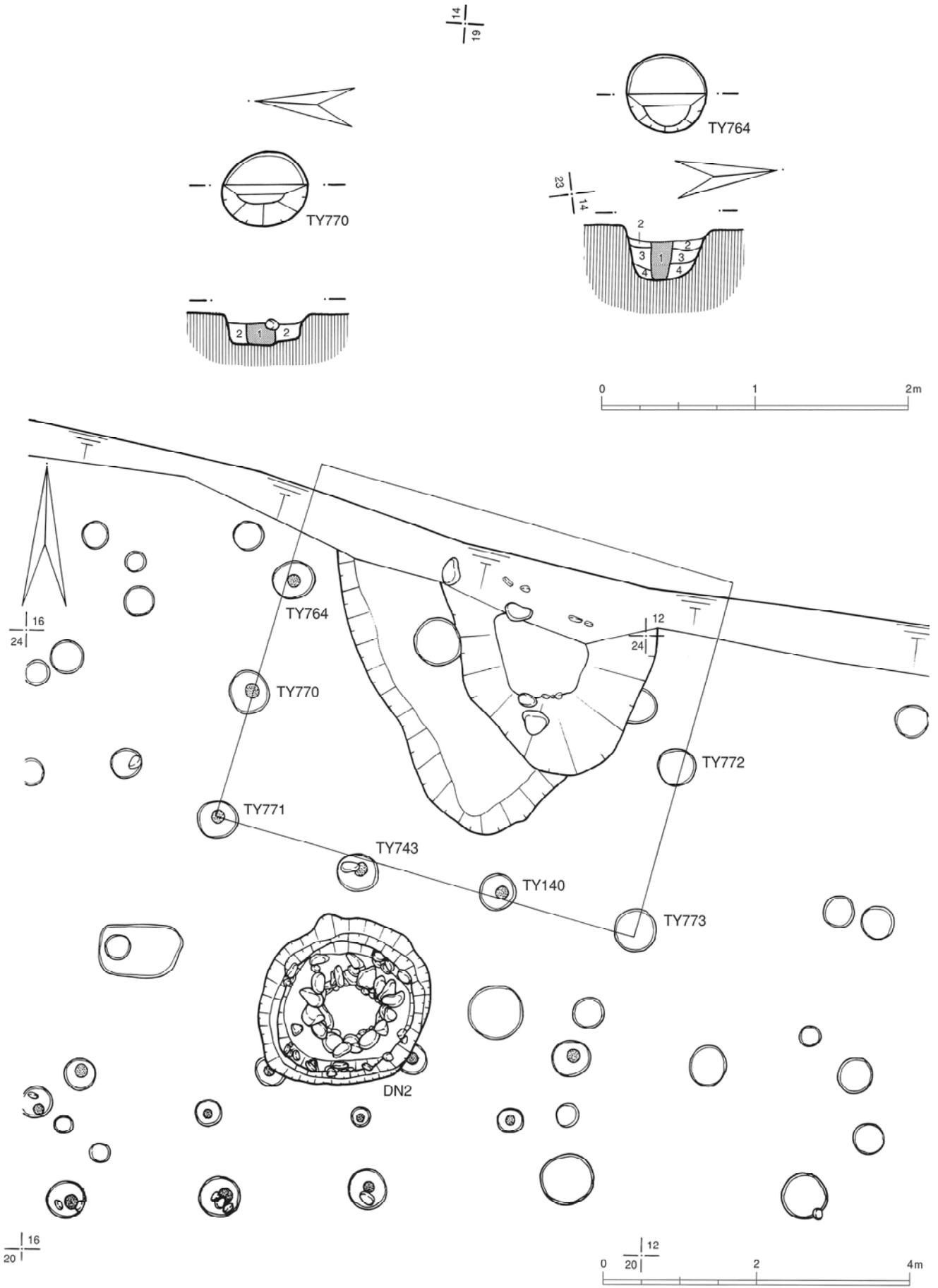
第69図 館山北館跡B Y14平面図



第70図 館山北館跡B Y14柱穴平面図



第71図 館山北館跡 B Y 14・B Y 28柱穴平面図



第72図 館山北館跡B Y28平面図・同柱穴平面図

び楕円形状の掘り方をなし、50cm～57cm、深さが19cm～41cmを測る。柱痕跡は、13cm～18cmをなし、T Y140とT Y743に粘土貼付柱が認められた。間尺は、桁行が6尺等間隔に対し、梁間は中央が5尺の左右6尺と推定している。

## 2 柱列「第92図」

建物群の区画ないし目隠しとして用いられたものと考えている。今回確認されたI期～IV期の遺構群より6箇所検出している。以下、簡単にその概要について述べる。

### ・ON1「第73図・第74図」

II期の東側建物の北側を区画するために設けられた柱列と推測される。今回検出された柱列では最も長い22.7m測るもので東西11間をなす。一部I期の井戸DN2を切って構築している。柱穴の掘り方は、約30cm前後の円形で、12cm～49cmの深さを測る。柱痕跡は、11cm～18cmと建物よりも幾分小さめではあるが、粘土貼付柱の痕跡を明瞭に示していた。間尺間の統一はないようで、6尺～8尺をなしている。

### ・ON2「第73図・第75図」

IV期の西側建物群の西側目隠しとして用いられたものとみている。ただし、南北3間のありかたから西に延びる建物の可能性もある。掘り方は、46cm～63cm前後の円形で、12cm～38cmの深さを測る。柱痕跡は、15cmで間尺は7尺を測る。

### ・ON3「第68図・第70図」

III期の西側建物群の東側目隠しとして用いられたものであろう。B Y29とB Y17を区画する南北の柱列である。掘り方は、円形を示す43cm～60cmで12cm～34cmの深さを測る。柱痕跡は、15cmで、間尺は6尺を基本としているが不規則であった。

### ・ON4「第69図・第70図」

III期のB Y6の北側に設置された目隠しで、東西3間がある。柱穴の掘り方は、32cm～51cmの円形で、17cm～29cmの深さを測る。柱痕跡は平均15cmを測り、粘土貼付柱が認めらる。間尺は概ね7尺ないし8尺を示している。

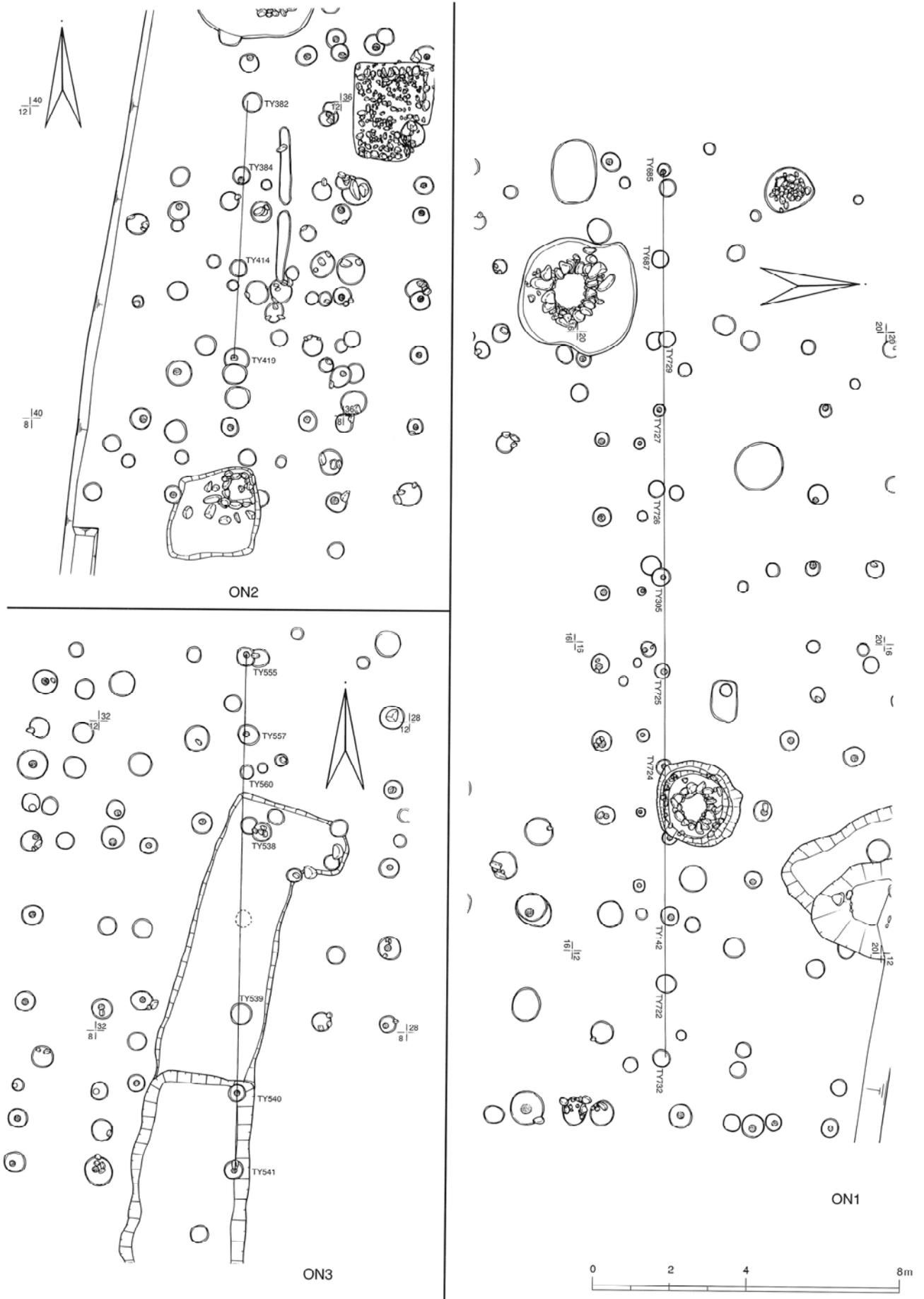
### ・ON5「第69図・第70図」

I期の北東部にON6と並行して存在するもので柱列としているが、I期のB Y20の東側廂と一致することを注意したい。柱穴の掘り方は、43cm～65cm前後の円形で、10cm～16cmの深さを測る。柱痕跡は13cm～18cmを測り、全てに粘土貼付柱の痕跡が認められた。間尺は4尺と5尺とみられるが一定していない。

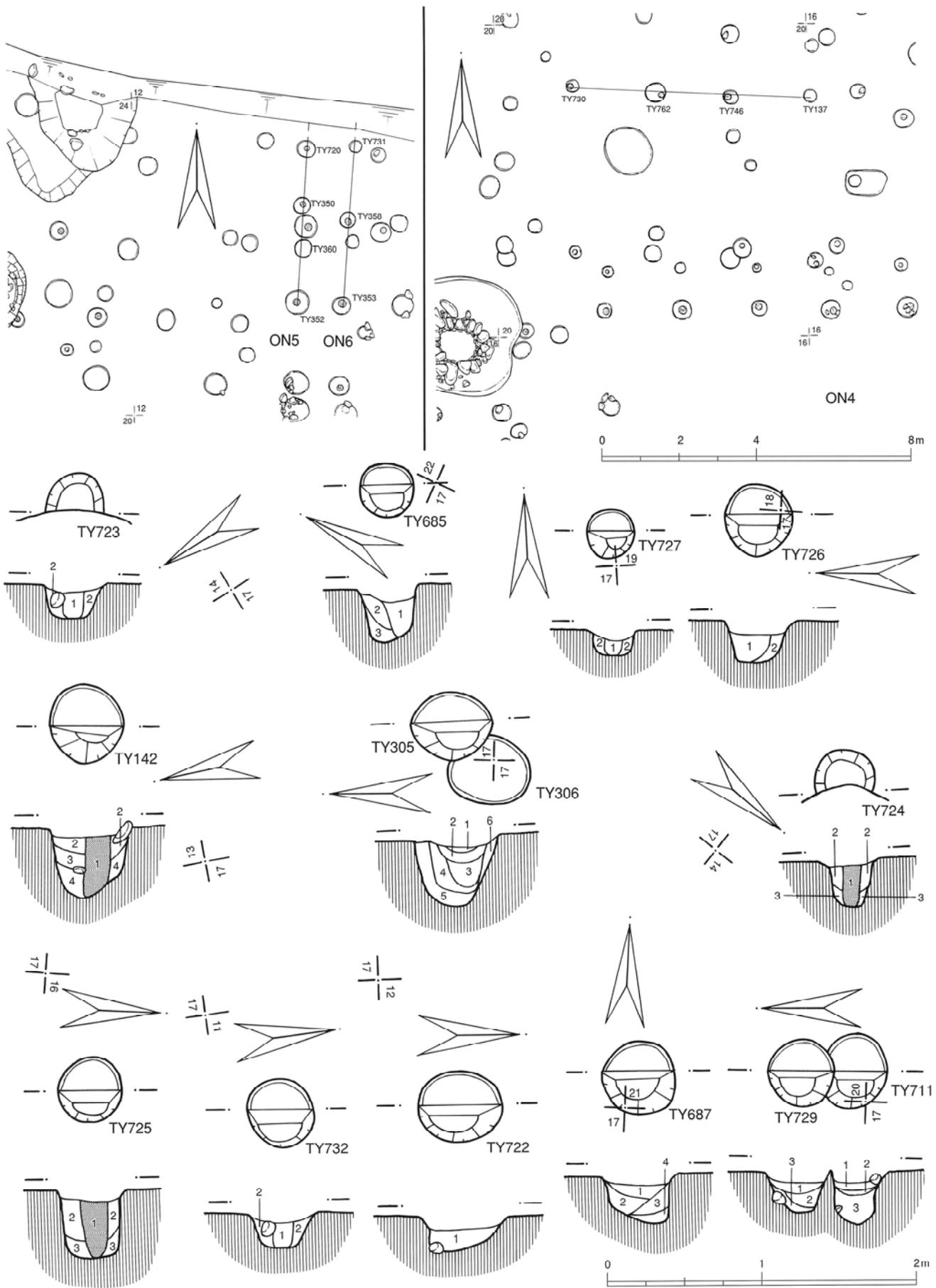
### ・ON6「第69図・第70図」

I期の北東部にON5と並行して存在するもので柱列としているが、II期のB Y24の東面梁間と一致することを注意したい。柱穴の掘り方は、30cm～47cm前後の円形で、13cm～22cmの深さを測る。柱痕跡は11cm～16cmを測り、T Y353とT Y358に粘土貼付柱の痕跡が認められた。

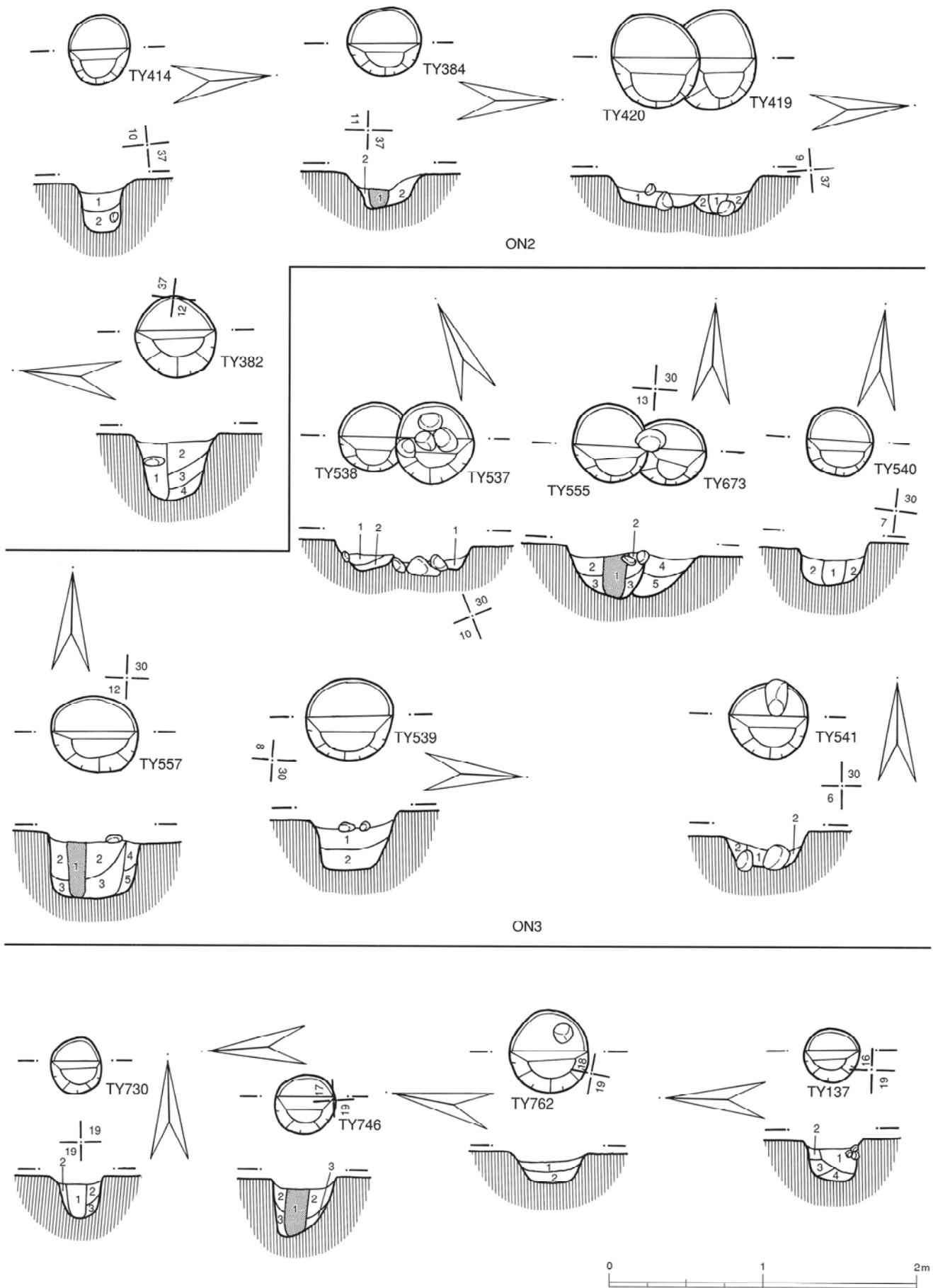
遺物としては、T Y353の埋め土の上部より、意図的に砕いたと考えられる第85図—14の瀬戸系の小皿1点が出土している。間尺は6尺と思われる。



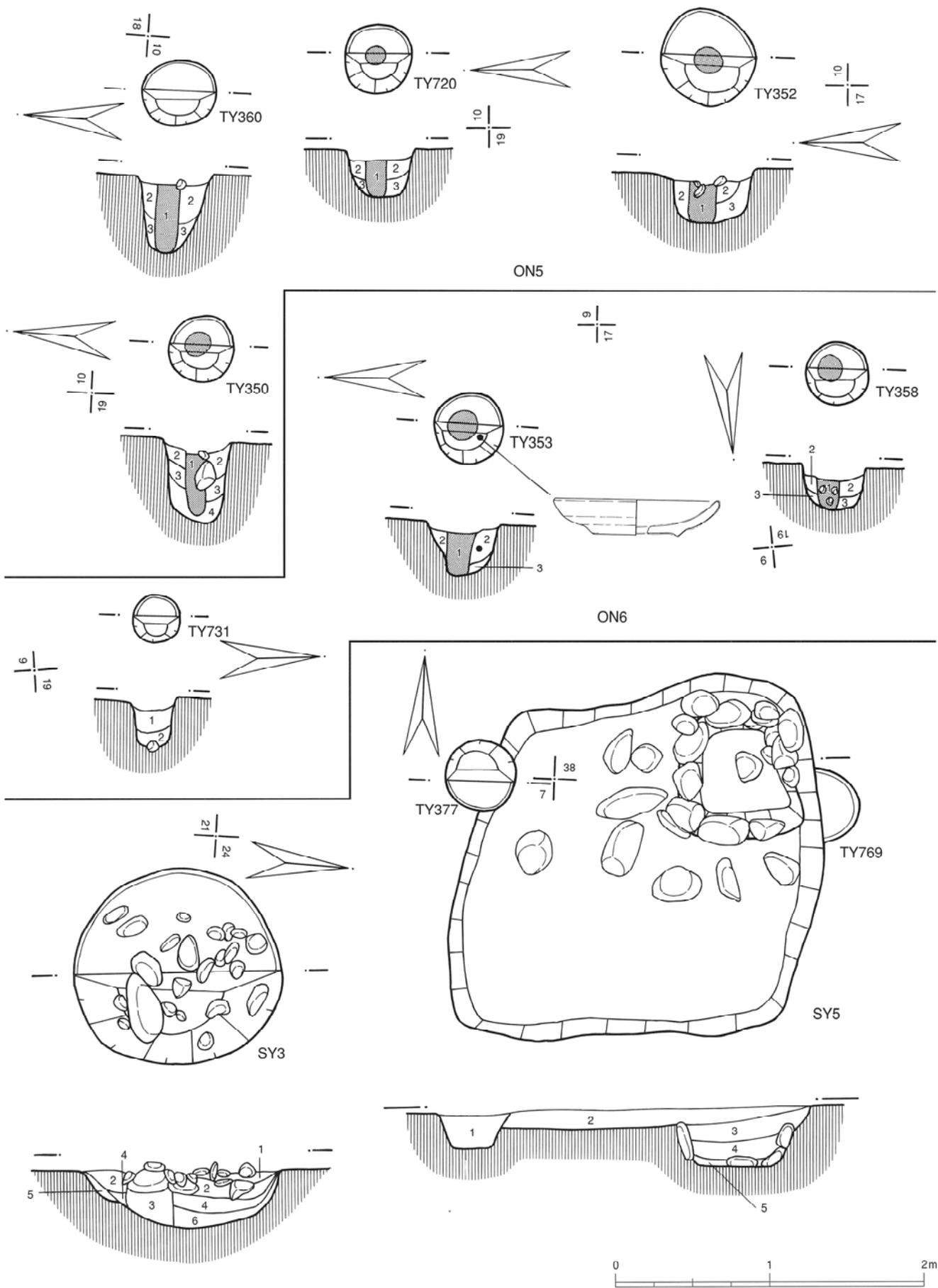
第73図 館山北館跡ON1・ON2・ON3平面図



第74図 館山北館跡ON4・ON5・ON6平面図・ON1柱穴平面図



第75図 館山北館跡ON2・ON3・ON4柱穴平面図



第76図 館山北館跡ON5・ON6柱穴平面図・SY3・SY5平面図

第4表 館山北館跡柱穴計測表

柱穴No	出土地区	建物No	形状	長径	短径	深さ	柱根	時期	挿図頁	備考
TY 1	G29-12・13	BY 4	円形	60	60	25	12	II	10・11	
TY 2	G29-12	BY 4	楕円形	53	47	32	16	II	10・11	
TY 3	G29-11	BY 4	円形	54	50	33	15	II	10・11	
TY 4	G29-9・10	BY 4	楕円形	64	51	40	15	II	10・11	
TY 5	G29-9	BY 4	円形	47	42	34	18	II	10・11	
TY 6	G28-8・9	BY 4	円形	55	55	27	18	II	10・11	
TY 7	G27-8・9	BY 4	円形	51	46	25	15	II	10・11	
TY 8	G27-9・10	BY 4	楕円形	50	48	17	—	II	10・11	
TY 9	G27-10・11	BY 4	円形	50	45	20	13	II	10・11	TY 777を切る
TY 10	G27-11・12	BY 4	円形	47	40	34	13	II	10・11	
TY 11	G27-12・13	BY 4	楕円形	52	44	21	—	II	10・11	
TY 12	G28-12・13	BY 4	楕円形	76	60	29	16	II	10・11	
TY 13	G22-14	BY 21	楕円形	62	56	21	15	II	18・19	TY 440 TY 189に切られる
TY 14	G22-23	—	円形	26	25	7	—	—	—	
TY 15	G23-12	—	円形	41	39	18	18	—	—	
TY 16	G21・22-12	—	円形	82	80	14	—	—	—	TY 522を切る
TY 17	G20-12	BY 5	楕円形	54	40	28	21	III	25	TY 800を切る
TY 18	G20-13	BY 5	楕円形	43	38	17	22	III	25	
TY 19	G20-14	BY 5	円形	45	45	31	15	III	25	
TY 20	G21-14	BY 12	楕円形	59	46	43	15	IV	38	
TY 21	G19-14	BY 7	楕円形	77	70	58	26	II	12・13	
TY 22	G17-14	BY 7	円形	50	45	22	14	II	12・13	
TY 23	G17-13	BY 7	楕円形	80	56	52	—	II	12	
TY 24	G17-12	BY 7	円形	51	47	54	14	II	12・13	
TY 25	G17-11	BY 7	楕円形	72	60	51	16	II	12・13	
TY 26	G19-9	BY 7	円形	85	82	66	14	II	12・13	
TY 27	G19-10	BY 7	円形	50	50	41	15	II	12・13	
TY 28	G19-11	BY 7	円形	52	47	39	18	II	12・13	
TY 29	G19-12	BY 7	円形	63	62	32	18	II	12・13	
TY 30	G19-13	BY 7	円形	77	70	55	15	II	12・13	TY 434を切る
TY 31	G19-17	BY 6	円形	37	36	26	15	III	26・27	
TY 32	G19-15・16	BY 6	円形	44	41	14	—	III	26・27	
TY 33	G19-14・15	BY 6	楕円形	53	43	32	17	III	26・29	
TY 34	G18-14・15	BY 6	円形	74	67	18	13	III	26・27	
TY 35	G17-14	BY 6	楕円形	67	49	32	12	III	26・27	
TY 36	G16-14・15	BY 6	楕円形	76	69	48	17	III	26・27	
TY 37	G15・16-14・15	BY 6	円形	97	90	35	—	III	26・27	
TY 38	G14・15-14・15	BY 6	楕円形	107	78	59	17	III	26・27	
TY 39	G13-14	—	楕円形	58	42	46	15	—	—	TY 502を切る
TY 40	G13-15	BY 24	円形	77	70	43	—	II	21・22	
TY 41	G13-16	BY 24	楕円形	94	77	46	36	I	22	TY 131に切られる
TY 42	G13-17	BY 24	円形	67	65	58	—	II	21・22	
TY 43	G14-17	BY 6	円形	51	50	30	13	III	26・27	
TY 44	G15-17	BY 6	円形	55	50	24	23	III	26・27	
TY 45	G16-17	BY 6	楕円形	51	44	33	17	III	26・27	
TY 46	G17-17	BY 6	円形	40	40	23	16	III	26・27	
TY 47	G18-17	BY 6	円形	50	45	21	18	III	26・27	
TY 48	G19-17	BY 6	円形	30	28	9	8	III	26・29	北面廂
TY 49	G18-17	BY 6	円形	26	25	18	—	III	26・29	北面廂
TY 50	G17-17	BY 6	円形	23	23	15	9	III	26・29	北面廂
TY 51	G16-17	—	円形	24	20	13	8	—	—	
TY 52	G15-17	BY 6	円形	37	33	35	8	III	26・29	北面廂
TY 53	G14-17	BY 6	円形	25	25	22	10	III	26・29	北面廂
TY 54	G13-17	—	円形	30	30	22	—	—	—	
TY 55	G 9-12	BY 9	楕円形	47	38	18	14	III	28	
TY 56	G10-12	BY 9	円形	47	40	23	—	III	28・30	
TY 57	G11-12	BY 9	円形	50	45	30	—	III	28	
TY 58	G12-12	BY 9	円形	42	38	25	—	III	28・30	
TY 59	G13-12	BY 9	円形	44	34	17	—	III	28・30	TY 84に切られる
TY 60	G14・15-12	BY 9	楕円形	66	58	33	—	III	28	TY 85に切られる
TY 61	G15-11・12	BY 11	円形	66	62	47	12	I	5・6	TY 98に切られる
TY 62	G14・15-11	BY 11	円形	60	54	36	19	I	5・6	
TY 63	G12-14	—	楕円形	55	43	50	10	—	—	TY 347を切る
TY 64	G13・14-9	BY 9	円形	50	46	34	—	III	28	
TY 65	G12-9	BY 9	円形	53	45	27	19	III	28・30	

TY66	G11・12-9	BY9	楕円形	70	48	22	—	Ⅲ	28・30	
TY67	G10・11-9・10	BY10	円形	68	63	41	25	Ⅱ	14・17	
TY68	G9-9	BY9	円形	38	35	20	15	Ⅲ	28・30	
TY69	G9-10	BY9	楕円形	35	29	22	—	Ⅲ	28・30	
TY70	G9-11	BY9	楕円形	41	26	19	—	Ⅲ	28	
TY71	G9-12	BY9	楕円形	45	37	9	—	Ⅲ	28	
TY72	G9-9	BY9	円形	41	38	14	—	Ⅲ	28・29	南面廂
TY73	G10-9	BY9	円形	38	36	13	—	Ⅲ	28	南面廂
TY74	G11-9	BY9	円形	40	33	10	—	Ⅲ	28	南面廂TY90に切られる
TY75	G9-8・9	BY8	楕円形	66	48	38	17	Ⅳ	40・42	
TY76	G9-9・10	BY8	円形	47	46	32	22	Ⅳ	40・42	
TY77	G9-10・11	BY8	円形	49	45	27	15	Ⅳ	40・41	
TY78	G9-11・12	BY8	円形	58	57	28	16	Ⅳ	40・41	
TY79	G9-12	BY8	楕円形	54	47	23	—	Ⅳ	40・41	
TY80	G9・10-12	BY8	円形	56	51	17	15	Ⅳ	40・42	
TY81	G10・11-12	BY8	楕円形	56	46	12	—	Ⅳ	40・42	
TY82	G11・12-12	BY8	円形	57	53	25	18	Ⅳ	40・41	
TY83	G12・13-12	BY8	円形	58	51	31	—	Ⅳ	40・42	
TY84	G13・14-12	BY8	円形	58	54	25	18	Ⅳ	40・42	TY59を切る
TY85	G14・15-12	BY8	楕円形	66	60	31	—	Ⅳ	40・42	TY60を切る
TY86	G14・15-11	BY11	円形	65	58	31	—	Ⅰ	5・6	
TY87	G14・15-9	BY8	楕円形	60	53	35	34	Ⅳ	40・42	
TY88	G13・14-9	BY8	楕円形	75	59	38	20	Ⅳ	40・42	
TY89	G12・13-9	BY8	円形	73	54	35	28	Ⅳ	40・42	
TY90	G11・12-9	BY8	円形	47	41	19	—	Ⅳ	40・41	TY74を切る
TY91	G10・11-8・9	BY8	円形	62	57	33	23	Ⅳ	40・42	
TY92	G9・10-9・10	BY10	円形	80	78	53	28	Ⅱ	14・15	
TY93	G9・10-11・12	BY10	楕円形	76	58	37	22	Ⅱ	14・17	
TY94	G10・11-11・12	BY10	円形	65	60	31	—	Ⅱ	14・15	
TY95	G11・12-11・12	BY10	円形	72	65	33	20	Ⅱ	14・17	TY107を切る
TY96	G12-11	BY10	円形	70	60	18	17	Ⅱ	14・15	
TY97	G13・14-11・12	BY10	楕円形	95	62	30	21	Ⅱ	14・15	TY110を切る
TY98	G14・15-12	BY10	円形	62	60	44	18	Ⅱ	14・15	TY61を切る
TY99	G15・16-12	BY10	円形	64	63	42	21	Ⅱ	14・15	
TY100	G15・16-10	BY10	楕円形	81	75	50	18	Ⅱ	14・15	
TY101	G14・15-10	BY11	楕円形	80	65	53	24	Ⅰ	5・6	
TY102	G13・14-9・10	BY11	楕円形	74	67	49	20	Ⅰ	5・6	
TY103	G12・13-9・10	BY11	円形	87	80	42	—	Ⅰ	5・6	
TY104	G11・12-9・10	BY11	楕円形	74	64	33	15	Ⅰ	5・6	
TY105	G10-9	BY9	円形	37	37	16	—	Ⅲ	28	
TY106	G11・12-10・11	BY11	円形	64	60	29	14	Ⅰ	5	
TY107	G11-11	BY11	円形	60	59	32	—	Ⅰ	5・6	TY95に切られる
TY108	G11-8	—	円形	35	34	10	—	—	—	TY330を切る
TY109	G12-11	BY11	円形	60	60	26	14	Ⅰ	5・6	
TY110	G13-11	BY11	円形	56	50	26	25	Ⅰ	5	TY97に切られる
TY111	G37-26	BY2	円形	33	33	22	—	Ⅸ	67・68	
TY112	G37-25	BY2	円形	41	38	21	12	Ⅸ	67・68	
TY113	G37-24	BY2	円形	42	40	7	18	Ⅸ	67・68	
TY114	G37-23	BY2	円形	32	31	19	13	Ⅸ	67・68	
TY115	G37-22	BY2	円形	44	43	20	13	Ⅸ	67・68	
TY116	G37・38-21	BY2	円形	49	49	17	18	Ⅸ	67・68	
TY117	G36-21	BY2	円形	40	38	9	—	Ⅸ	67・68	
TY118	G35-21	BY2	楕円形	43	29	9	—	Ⅸ	67・68	
TY119	G35-22	BY2	円形	33	29	21	16	Ⅸ	67・68	
TY120	G35-23	BY2	円形	39	35	7	12	Ⅸ	67・68	
TY121	G35-24	BY2	円形	27	27	8	10	Ⅸ	67・68	
TY122	G34・35-25	BY2	円形	31	30	10	—	Ⅸ	67・68	
TY123	G34-26	BY2	円形	42	35	43	14	Ⅸ	67・68	
TY124	G35・36-26	BY2	円形	38	38	12	—	Ⅸ	67・68	
TY125	G17-10	BY7	楕円形	78	47	34	13	Ⅱ	12・15	
TY126	G17-9	BY7	楕円形	85	79	49	15	Ⅱ	12・15	
TY127	G10・11-13	BY20	円形	58	54	37	17	Ⅰ	7・8	
TY128	G10・11-14・15	BY20	円形	65	62	44	17	Ⅰ	7・8	
TY129	G11-15・16	BY20	円形	87	79	44	23	Ⅰ	7・8	
TY130	G12-16	BY20	楕円形	83	72	57	—	Ⅰ	7・8	
TY131	G13-16	BY20	円形	40	37	—	—	Ⅱ	7・8	TY41を切る
TY132	G14-16	BY20	円形	74	70	53	—	Ⅰ	7・8	

TY133	G14-13・14	—	楕円形	45	32	20	—	—	—	
TY134	G12-13	BY20	円形	50	48	35	13	I	7・10	
TY135	G9・10-9	BY8	楕円形	48	40	14	—	IV	40・41	
TY136	G16-20	—	円形	40	36	48	—	—	—	
TY137	G16・17-20	ON4	楕円形	35	30	29	—	III	74・75	
TY138	G16・17-17・18	BY6	円形	40	40	23	18	III	26・29	北面廂
TY139	G16-17	—	楕円形	27	23	27	20	—	—	
TY140	G13・14-19	BY28	円形	48	46	30	16	IX	71・72	
TY141	G13・14-18	—	円形	73	70	45	23	—	—	
TY142	G13-18	ON1	円形	50	47	46	17	II	73・74	
TY143	G16-20	—	円形	42	40	45	14	—	—	
TY144	G16-21	—	円形	35	33	32	12	—	—	
TY145	G14-20・21	—	円形	62	60	—	—	—	—	
TY146	G29-23	BY1	円形	63	60	41	14	IX	65・68	
TY147	G29-24	BY1	円形	49	42	27	12	IX	65・66	
TY148	G29-25	BY1	円形	59	53	52	14	IX	65・66	
TY149	G30-25	BY1	円形	60	59	69	15	IX	65・66	
TY150	G31-25	BY1	円形	45	42	63	18	IX	65・66	
TY151	G32-25	BY1	円形	55	50	53	14	IX	65・66	
TY152	G32・33-25・26	BY1	楕円形	61	46	55	15	IX	65・66	
TY153	G33・34-26	BY1	円形	49	44	43	14	IX	65・66	
TY154	G34-25	BY1	楕円形	53	45	14	14	IX	65・66	
TY155	G34-24	BY1	円形	52	50	38	17	IX	65・66	
TY156	G33-23・24	BY1	円形	48	45	53	15	IX	65・66	
TY157	G32-23・24	BY1	円形	50	46	57	16	IX	65・66	
TY158	G31-23	BY1	楕円形	70	58	33	16	IX	65・68	
TY159	G30-23	BY1	楕円形	56	48	59	14	IX	65・66	
TY160	G15・16-9	BY9	楕円形	64	59	54	—	III	28・30	
TY161	G16・17-9・10	BY9	円形	56	49	35	14	III	28・30	
TY162	G16・17-10・11	BY9	円形	40	36	36	14	III	28	
TY163	G16・17-11・12	BY9	円形	50	44	10	—	III	28・30	
TY164	G16・17-12	BY9	楕円形	50	45	36	—	III	28・30	
TY165	G15・16-12	—	円形	54	48	37	15	—	—	TY310を切る
TY166	G16-9	BY8	円形	57	53	28	—	IV	40・42	
TY167	G16-10	BY8	円形	57	50	38	13	IV	40・41	
TY168	G21-9	BY21	円形	53	50	35	15	II	18・20	
TY169	G21-10	BY21	円形	64	57	37	16	II	18	
TY170	G20・21-11	BY21	楕円形	56	53	26	13	II	18・19	TY444を切る
TY171	G20・21-12	BY21	楕円形	57	44	47	18	II	18・19	TY662を切る
TY172	G20・21-13	BY21	円形	53	45	38	13	II	18・19	
TY173	G20・21-14	BY21	円形	50	47	9	—	II	18・19	
TY174	G23-15	—	楕円形	51	48	25	—	—	—	
TY175	G22-13	—	円形	40	40	16	—	—	—	
TY176	G22・23-12	BY21	円形	70	61	30	16	II	18・20	
TY177	G22・23-12	BY21	円形	57	51	30	16	II	18・20	
TY178	G22・23-10	BY21	楕円形	46	39	33	15	II	18・20	
TY179	G22・23-9・10	BY21	円形	47	43	22	14	II	18・20	
TY180	G21・22-9	BY21	円形	49	45	17	—	II	18・20	
TY181	G20-9	BY21	円形	35	35	20	15	II	18・20	東面廂
TY182	G20-10	BY21	円形	24	21	8	—	II	18・20	東面廂
TY183	G20-10	BY21	円形	26	24	15	9	II	18・20	東面廂
TY184	G20-11	BY21	円形	35	34	10	—	II	18	東面廂
TY185	G20-12	BY21	楕円形	35	34	10	—	II	18	東面廂
TY186	G20-13	BY21	円形	32	28	3	—	II	18	東面廂
TY187	G20-14	BY21	円形	32	25	12	—	II	18・20	東面廂
TY188	G20-15	—	円形	27	22	7	—	—	—	
TY189	G22-14・15	BY12	楕円形	47	30	5	—	IV	38・39	TY13に切られる
TY190	G22-15	BY21	円形	42	36	69	—	II	18・20	
TY191	G22-17	BY12	楕円形	65	60	20	20	IV	38・39	
TY192	G23-17	BY12	円形	54	45	63	13	IV	38・39	
TY193	G24-17	BY12	円形	48	41	66	—	IV	38・39	
TY194	G25-17	BY12	円形	55	48	23	17	IV	38・39	
TY195	G25・26-17	BY12	円形	52	45	7	—	IV	38・39	
TY196	G27-17・18	BY12	円形	47	42	24	16	IV	38・39	
TY197	G28-18	BY22	円形	49	45	29	18	VIII	62・63	
TY198	G28-17	BY12	円形	48	40	41	—	IV	38・39	TY791に切られる
TY199	G28-16	BY22	円形	38	37	—	—	VIII	61	

TY200	G28-16	BY12	円形	62	53	40	17	IV	38・39	
TY201	G28-15	BY14	円形	52	46	40	14	IX	69・71	
TY202	G27-15	BY14	円形	62	62	33	—	IX	69・71	
TY203	G26-15	BY12	円形	46	43	22	15	IV	36・38	
TY204	G25-15	BY12	楕円形	51	41	26	—	IV	38・39	
TY205	G24-15	BY12	楕円形	55	47	24	13	IV	38	
TY206	G23-15	BY12	円形	53	46	22	—	IV	38・39	
TY207	G24・25-17	—	円形	45	41	24	—	—	—	
TY208	G25-17	—	円形	53	47	11	—	—	—	
TY209	G26-17	—	円形	50	47	26	—	—	—	
TY210	G27-17	BY14	円形	55	51	5	16	IX	—	
TY211	G27・28-17	—	楕円形	50	43	14	—	—	—	
TY212	G27・28-12	BY3	円形	64	58	29	24	III	46・47	
TY213	G28-15	BY3	円形	61	58	30	17	III	46・47	
TY214	G28-14	—	円形	48	47	32	—	—	—	
TY215	G28-13	—	円形	58	53	14	—	—	—	
TY216	G28-12・13	—	円形	53	50	31	—	—	—	
TY217	G27-12・13	—	楕円形	51	44	26	—	—	—	
TY218	G26-12・13	—	円形	45	45	15	—	—	—	
TY219	G25-12・13	—	楕円形	52	38	26	—	—	—	
TY220	G25-13・14	—	円形	50	47	38	—	—	—	
TY221	G25-14・15	—	円形	53	53	31	—	—	—	
TY222	G24・25-15・16	—	円形	48	48	22	—	—	—	
TY223	G24・25-16	BY13	楕円形	57	45	14	15	V	31	
TY224	G25-17	—	楕円形	40	30	19	—	—	—	
TY225	G25-15	BY13	円形	44	40	21	—	V	31	
TY226	G25-14	BY13	楕円形	44	26	23	—	V	31	
TY227	G26-14・15	BY13	円形	30	28	8	—	V	31	
TY228	G30-11・12	BY13	楕円形	40	31	17	—	V	31	
TY229	G29-17	BY23	円形	—	41	35	—	VI	52	
TY230	G26-12・13	BY13	円形	36	30	22	—	V	31	
TY231	G29-15・16	BY23	円形	50	49	20	—	VI	52・53	
TY232	G29-14	BY23	円形	53	50	27	13	VI	52・55	
TY233	G30-14	BY23	円形	58	54	21	13	VI	52・55	
TY234	G31-14	BY23	円形	46	42	13	11	VI	52・53	
TY235	G32-14・15	BY23	円形	82	80	35	—	VI	52・55	
TY236	G33-14・15	BY23	円形	59	51	44	16	VI	52・53	
TY237	G34-14・15	BY23	楕円形	52	—	59	13	VI	52・55	
TY238	G35-15	BY23	円形	33	31	34	13	VI	52・53	
TY239	G36-15	BY23	円形	57	51	41	16	VI	52・53	
TY240	G37-15	BY23	円形	46	44	29	18	VI	52・53	
TY241	G38-15	BY23	円形	50	46	25	13	VI	52・53	
TY242	G38-16	BY26	楕円形	57	44	21	13	VII	58・59	
TY243	G38-17	BY23	円形	55	53	17	—	VI	52・53	
TY244	G34-18	BY23	楕円形	70	58	29	—	VI	52・53	
TY245	G37-18	BY23	円形	76	75	38	14	VI	52・53	
TY246	G35・36-14	BY23	楕円形	78	61	33	23	VI	52・53	TY488に切られる
TY247	G35-18	BY25	円形	64	53	45	18	VII	57・58	TY262を切る
TY248	G33・34-17・18	BY25	円形	78	68	26	13	VII	57・58	
TY249	G32・33-17・18	BY23	円形	54	51	45	12	VI	52・53	
TY250	G32-17・18	BY25	円形	70	63	29	—	VII	56・57	TY264を切る
TY251	G31-17	BY23	円形	60	59	30	—	VI	52	TY265に切られる
TY252	G28-17	—	円形	50	53	20	—	—	—	
TY253	G29-16・17	BY3	楕円形	76	67	32	15	III	46・47	
TY254	G29-16	BY25	円形	61	53	26	—	VII	57	TY278を切る
TY255	G29-15	BY25	円形	72	70	43	19	VII	56・57	
TY256	G29-15	BY25	楕円形	67	57	31	—	VII	57・58	
TY257	G31-15	BY25	楕円形	95	83	79	—	VII	57	
TY258	G32-15	BY25	円形	60	53	40	—	VII	57	
TY259	G33-15	BY25	円形	69	65	54	20	VII	57・58	
TY260	G34-15	BY25	楕円形	76	71	64	23	VII	56・57	
TY261	G35-15	BY25	楕円形	71	55	45	18	VII	56・57	TY279を切る
TY262	G35-18	BY23	楕円形	57	—	45	18	VI	52・55	TY247に切られる
TY263	G33-17・18	BY25	円形	75	70	42	16	VII	57・58	
TY264	G32-17・18	BY23	円形	—	76	29	—	VI	52・55	TY250に切られる
TY265	G30・31-17・18	BY25	楕円形	79	70	23	20	VII	56・57	TY251を切る
TY266	G30-15・16	—	円形	52	32	—	—	—	—	

TY267	G30-15・16	BY14	円形	57	—	39	10	IX	69・70	
TY268	G31-16	BY14	円形	41	41	38	13	IX	69・70	
TY269	G32-16	BY14	円形	52	47	35	15	IX	69・70	
TY270	G33-16	BY14	円形	64	57	33	12	IX	69・70	
TY271	G34-16	BY14	円形	40	33	33	15	IX	69・70	
TY272	G34-17	—	円形	70	68	47	20	—	—	
TY273	G34-18	—	円形	50	50	39	—	—	—	
TY274	G33・34-19	BY14	円形	42	40	23	12	IX	69・70	
TY275	G32-16・17	BY15	楕円形	78	62	66	14	III	32	
TY276	G31-16	BY15	楕円形	85	66	58	15	III	32	
TY277	G30-16	BY15	円形	65	60	35	13	III	32	
TY278	G29-16	BY15	楕円形	66	47	49	16	III	32	TY254に切られる
TY279	G29-15	BY22	楕円形	54	47	52	15	VIII	62・63	
TY280	G30-15	BY22	楕円形	52	44	17	—	VIII	62・63	TY322を切る
TY281	G32-15・16	BY22	楕円形	67	61	41	15	VIII	61・62	
TY282	G33-16	BY22	円形	49	45	37	14	VIII	62・63	
TY283	G34-16	BY22	円形	37	34	42	18	VIII	62・63	
TY284	G36-17	BY26	円形	55	48	33	20	VI	58・59	
TY285	G36-17	—	円形	65	60	36	15	—	—	TY788を切る
TY286	G32-11	BY16	楕円形	67	55	39	12	II	16・19	
TY287	G32-10	BY16	円形	48	47	36	—	II	16・17	
TY288	G32・33-8	BY16	円形	53	50	36	12	II	16・17	
TY289	G32・33-8	BY16	円形	45	43	31	14	II	16・17	
TY290	G32・33-6・7	BY16	楕円形	79	67	47	17	II	16・17	
TY291	G35-7	BY16	楕円形	36	31	22	—	II	16・17	
TY292	G33・34-7	BY16	円形	56	52	30	12	II	16・17	
TY293	G34・35-8	BY16	円形	51	46	36	16	II	16・19	
TY294	G34・35-9	BY16	円形	38	37	25	—	II	16・19	
TY295	G34・35-10	BY16	円形	52	47	49	14	II	16・19	
TY296	G34・35-11	BY16	円形	54	50	45	14	II	16・17	
TY297	G33-11	BY17	円形	57	54	40	14	III	33	
TY298	G33-10	BY17	円形	53	51	45	14	III	33	
TY299	G33・34-9	BY17	楕円形	56	47	31	15	III	33	TY794に切られる
TY300	G33・34-8	BY17	円形	30	29	31	12	III	33	
TY301	G32-8	BY17	円形	46	41	20	15	III	33	
TY302	G32-9	BY17	楕円形	53	45	31	13	III	33	
TY303	G32-10	BY17	円形	52	50	32	—	III	33	
TY304	G18・19-18	—	円形	40	40	40	13	—	—	
TY305	G17-18	ON1	楕円形	54	43	43	—	II	73・74	TY306を切る
TY306	G17・18-17・18	—	楕円形	55	47	26	12	—	—	TY305に切られる
TY307	G16-12	BY8	円形	55	53	34	—	IV	40・41	
TY308	G16-12	BY8	円形	46	40	45	14	IV	40・41	
TY309	G16-11	BY8	円形	64	60	53	15	IV	40・41	
TY310	G15・16-12・13	BY9	円形	40	37	39	—	III	28・30	TY165に切られる
TY311	G36-21	BY2	楕円形	38	32	22	—	IX	67・68	
TY312	G35-16・17	BY14	円形	50	48	41	—	IX	69・70	
TY313	G35-17・18	BY22	円形	50	48	53	14	VIII	62・63	
TY314	G35-19	BY22	円形	61	53	15	17	VIII	61・62	
TY315	G36-19	BY14	円形	53	47	42	14	IX	69・71	
TY316	G38-21	—	楕円形	52	46	27	—	—	—	
TY317	G38-22	—	円形	30	27	11	—	—	—	
TY318	G36-17	BY14	楕円形	70	55	36	17	IX	69・71	
TY319	G40-21	—	円形	45	43	38	13	—	—	
TY320	G40-22	—	円形	48	40	21	—	—	—	
TY321	G28-17	—	楕円形	62	40	34	—	—	—	TY791に切られる
TY322	G30・31-15	—	円形	52	47	35	—	—	—	TY280に切られる
TY323	G32-18・19	BY15	円形	52	44	27	15	III	32	
TY324	G25-15	—	楕円形	48	38	21	—	—	—	
TY325	G8-9	—	円形	42	35	30	—	—	—	
TY326	G7-9	—	円形	49	45	7	18	—	—	
TY327	G7-10	—	楕円形	40	34	15	—	—	—	
TY328	G9-8	BY8	円形	41	41	11	—	IV	40・41	
TY329	G10・11-8	BY8	円形	65	54	33	23	IV	40・41	
TY330	G11-8	—	円形	30	22	3	—	—	—	TY108に切られる
TY331	G9-8	—	楕円形	58	45	9	—	—	—	
TY332	G8-10・11	—	円形	45	43	28	10	—	—	
TY333	G8-11	—	円形	38	36	3	—	—	—	

T Y 334	G 8 - 12	—	楕円形	47	41	10	—	—	—	
T Y 335	G 10 - 14	B Y 24	円形	55	46	40	17	II	21・22	
T Y 336	G 10 - 15・16	B Y 20	円形	47	46	40	19	I	7・8	
T Y 337	G 10 - 15	B Y 24	円形	50	40	31	13	II	21・22	
T Y 338	G 10 - 15・16	B Y 20	円形	54	50	40	22	I	7・8	
T Y 339	G 10 - 16	B Y 24	円形	57	55	46	13	II	21・22	
T Y 340	G 10 - 16・17	B Y 20	円形	58	57	32	16	I	7・8	
T Y 341	G 10 - 17	B Y 24	円形	55	51	28	13	II	21・22	
T Y 342	G 10・11 - 17	—	楕円形	65	56	35	16	—	—	
T Y 343	G 10・11 - 16・17	—	楕円形	75	61	31	19	—	—	
T Y 344	G 10 - 15・16	—	楕円形	56	46	39	—	—	—	
T Y 345	G 10・11 - 15	—	楕円形	40	35	37	16	—	—	
T Y 346	G 10・11 - 14	—	円形	38	35	30	14	—	—	
T Y 347	G 12・13 - 14・15	—	楕円形	76	45	50	21	—	—	T Y 63に切られる
T Y 348	G 13・14 - 16	—	円形	66	62	58	18	—	—	
T Y 349	G 11・12 - 17	B Y 24	円形	57	57	17	—	II	21・22	
T Y 350	G 10 - 19	ON 5	円形	43	42	38	23	I	74・76	
T Y 351	10 - 12	—	円形	55	55	27	—	—	—	
T Y 352	G 10・11 - 18	ON 5	円形	65	58	32	16	I	74・76	
T Y 353	G 10 - 18	ON 6	円形	47	43	37	13	I	74・76	
T Y 354	G 9・10 - 18	—	楕円形	37	30	14	—	—	—	
T Y 355	G 9 - 19	—	円形	44	43	34	14	—	—	
T Y 356	G 9 - 19	—	円形	52	46	49	15	—	—	
T Y 357	G 10 - 19	—	円形	34	33	41	16	—	—	
T Y 358	G 10 - 19	ON 6	円形	41	40	30	22	I	74・76	
T Y 359	G 10 - 19	—	円形	60	57	30	18	—	—	
T Y 360	G 10 - 18・19	ON 5	楕円形	48	44	42	16	I	74・76	
T Y 361	G 9 - 18	—	楕円形	51	45	23	15	—	—	
T Y 362	G 30・31 - 24	—	楕円形	57	46	25	—	—	—	
T Y 363	G 32・33 - 24・25	—	円形	40	38	19	—	—	—	
T Y 364	G 15 - 14	—	円形	44	42	15	—	—	—	
T Y 365	G 37 - 7	—	円形	47	44	21	13	—	—	
T Y 366	G 37 - 8	B Y 19	円形	52	56	35	12	VI	49・51	
T Y 367	G 37 - 8	B Y 18	楕円形	70	57	23	13	VII	55・56	
T Y 368	G 36・37 - 8	—	円形	45	43	32	—	—	—	
T Y 369	G 15 - 12	—	円形	27	25	16	—	—	—	
T Y 370	G 38 - 8	B Y 32	円形	45	45	12	—	V	48・49	
T Y 371	G 39 - 8	B Y 19	円形	57	52	15	—	VI	49・51	
T Y 372	G 39 - 8・9	B Y 32	円形	55	55	18	16	V	48・49	
T Y 373	G 39・40 - 8	—	円形	47	44	—	—	—	—	
T Y 374	G 39 - 8	—	円形	36	36	7	—	—	—	
T Y 375	G 40 - 7・8	—	円形	51	50	9	—	—	—	
T Y 376	G 39 - 8	B Y 18	円形	38	35	10	—	VII	55・56	
T Y 377	G 39 - 7・8	B Y 19	円形	46	44	24	11	VI	51	
T Y 378	G 38 - 8	B Y 18	円形	43	38	25	—	VII	55・56	
T Y 379	G 37 - 8	—	円形	32	31	9	—	—	—	
T Y 380	G 19 - 21	—	円形	30	30	16	—	—	—	
T Y 381	G 37 - 12	B Y 32	円形	41	35	40	15	V	48・49	T Y 428 T Y 429を切る
T Y 382	G 38 - 12・13	ON 2	楕円形	52	49	41	15	IV	73・75	
T Y 383	G 38・39 - 11・12	—	楕円形	55	40	25	13	—	—	
T Y 384	G 38 - 11・12	ON 2	円形	46	44	23	12	IV	73・75	
T Y 385	G 37・38 - 11	—	楕円形	30	25	35	—	—	—	
T Y 386	G 38 - 11	—	円形	45	44	37	—	—	—	
T Y 387	G 38・39 - 11	B Y 19	楕円形	58	45	25	12	VI	51	
T Y 388	G 39 - 11	—	円形	55	55	25	—	—	—	
T Y 389	G 39 - 10	—	円形	34	30	29	18	—	—	
T Y 390	G 39 - 10	B Y 19	円形	53	52	17	—	VI	49・51	
T Y 391	G 38 - 10・11	—	円形	37	34	22	—	—	—	
T Y 392	G 36 - 8	B Y 19	楕円形	65	53	26	—	VI	49・51	
T Y 393	G 36 - 8	B Y 19	円形	42	40	23	13	VI	51	
T Y 394	G 35・36 - 9	B Y 19	楕円形	50	43	24	15	VI	49・51	
T Y 395	G 35・36 - 10	—	円形	56	32	50	—	—	—	T Y 629に切られる
T Y 396	G 35・36 - 11	B Y 19	円形	45	41	25	12	VI	49・51	
T Y 397	G 36・37 - 11	B Y 19	円形	51	46	31	13	VI	51	
T Y 398	G 37・38 - 11	B Y 19	楕円形	58	47	24	10	VI	51	
T Y 399	G 37 - 8・9	B Y 32	円形	50	49	18	24	V	48・49	
T Y 400	G 37 - 9・10	B Y 32	円形	54	47	19	—	V	48	

TY401	G39-11	—	円形	32	28	10	—	—	—	
TY402	G37-10	—	楕円形	40	30	8	—	—	—	
TY403	G38-10	BY18	楕円形	67	52	49	—	Ⅶ	55・56	
TY404	G37-10	—	楕円形	67	48	9	—	—	—	
TY405	G37-10	—	楕円形	53	41	8	—	—	—	
TY406	G37-11	BY32	円形	50	46	11	—	V	48・49	
TY407	G36・36-11・12	BY29	円形	42	35	35	—	Ⅳ	43・44	TY427を切る
TY408	G38・39-21	—	楕円形	32	29	16	—	—	—	
TY409	G37-10・11	BY32	楕円形	70	48	26	—	V	48	
TY410	G36・37-10・11	BY31	楕円形	80	70	48	—	Ⅲ	35・36	
TY411	G36・37-10	BY18	円形	46	44	40	12	Ⅶ	55・56	
TY412	G37-10	—	楕円形	43	33	12	—	—	—	TY413を切る
TY413	G37-10	—	円形	32	32	12	—	—	—	TY412に切られる
TY414	G38-10	ON2	楕円形	48	36	38	—	Ⅳ	73・75	
TY415	G38-10	—	円形	30	27	17	—	—	—	
TY416	G36・37-9	—	円形	35	30	19	—	—	—	TY417に切られる
TY417	G36-9・10	BY31	円形	45	44	20	—	Ⅲ	35	TY416を切る
TY418	G38-9・10	—	円形	54	51	20	—	—	—	
TY419	G38-9	ON2	楕円形	63	33	27	12	Ⅳ	73・75	TY420に切られる
TY420	G38-9	—	楕円形	60	54	20	—	—	—	TY419を切る
TY421	G38-9	BY31	円形	66	60	22	—	Ⅲ	35・36	
TY422	G37-9	—	円形	41	36	—	—	—	—	
TY423	G36・37-9	BY18	楕円形	61	43	42	15	Ⅶ	55・56	
TY424	G36-9	—	円形	54	46	24	15	—	—	
TY425	G36・36-8	BY31	楕円形	75	61	14	—	Ⅲ	35・36	
TY426	G37-9・10	—	楕円形	47	40	11	—	—	—	
TY427	G36-11	BY31	円形	76	70	42	—	Ⅳ	35・36	TY407に切られる
TY428	G37-12	—	楕円形	36	27	40	15	—	—	TY429を切るTY381に切られる
TY429	G37-12	—	楕円形	32	10	—	—	—	—	TY381TY428に切られる
TY430	G35-12	BY30	円形	52	52	38	—	Ⅱ	23	
TY431	G16-10	—	楕円形	75	55	39	13	—	—	
TY432	G15・16-11・12	—	円形	65	64	53	15	—	—	
TY433	G15-12	—	円形	43	37	22	17	—	—	
TY434	G19-13	—	楕円形	65	53	31	—	—	—	TY30に切られる
TY435	G14・15-15	—	円形	57	53	39	—	—	—	
TY436	G17・18-19	—	円形	30	30	31	12	—	—	
TY437	G21-13	—	円形	49	43	29	—	—	—	
TY438	G22-13	BY5	円形	36	34	21	12	Ⅲ	25	
TY439	G22-13	BY21	円形	48	?	14	—	Ⅷ	18	TY768に切られる
TY440	G22・23-14	—	円形	37	35	13	—	—	—	TY13を切る
TY441	G22-14	BY5	円形	45	39	13	—	Ⅲ	25	
TY442	G23-14	—	楕円形	77	50	34	—	—	—	
TY443	G22-13	—	円形	45	38	18	—	—	—	
TY444	G20・21-11	—	円形	53	49	23	20	—	—	TY170に切られる
TY445	G21-10	—	円形	45	40	28	—	—	—	
TY446	G20-10	—	円形	38	35	21	15	—	—	
TY447	G22-9・10	—	円形	41	40	15	—	—	—	
TY448	G18-14	—	円形	30	28	13	—	—	—	
TY449	G18-14・15	—	楕円形	64	43	10	11	—	—	
TY450	G19-10	—	円形	30	30	12	—	—	—	
TY451	G19-11	—	円形	23	19	20	15	—	—	
TY452	G19-9	—	楕円形	72	57	61	—	—	—	
TY453	G17-11	—	楕円形	70	55	25	—	—	—	
TY454	G38-13	—	円形	49	49	13	—	—	—	
TY455	G38-13	—	円形	62	—	11	—	Ⅲ	35・36	
TY456	G37-13	—	楕円形	57	48	22	12	—	—	
TY457	G36・37-13	BY29	円形	47	45	42	17	Ⅳ	43・44	TY458に切られる
TY458	G36・37-13	BY32	円形	52	45	32	13	V	48・49	TY457を切る
TY459	G39-8	BY31	楕円形	64	33	11	—	Ⅲ	35・36	TY460に切られる
TY460	G36-13	—	円形	45	43	28	—	—	—	TY459を切る
TY461	G35・36-13	BY30	円形	60	50	50	8	Ⅱ	23	
TY462	G35・36-12	BY30	円形	73	63	18	—	Ⅱ	23	
TY463	G35・36-11・12	—	楕円形	52	41	27	11	—	—	
TY464	G37-14	—	楕円形	64	45	36	—	—	—	
TY465	G35・36-14	BY29	楕円形	51	36	45	13	Ⅳ	43・44	
TY466	G36-14	BY29	楕円形	40	25	35	12	Ⅳ	43・44	
TY467	G36・37-14	BY32	円形	50	46	45	24	V	48・49	

TY468	G36-15	BY29	円形	51	47	35	—	IV	43・44	
TY469	G36・37-14	—	円形	45	45	47	14	—	—	
TY470	G35・36-15・16	—	楕円形	40	33	15	—	—	—	
TY471	G37-15・16	—	円形	20	17	12	8	—	—	
TY472	G37-16	—	円形	27	25	18	6	—	—	TY473を切る
TY473	G37-16	—	楕円形	68	40	30	—	—	—	TY472TY474に切られる
TY474	G37-16	BY26	円形	50	44	25	10	VII	58・59	TY473を切る
TY475	G37・38-16	—	円形	40	40	11	—	—	—	
TY476	G38-16	—	円形	40	37	12	—	—	—	
TY477	G38-16	—	円形	32	30	21	8	—	—	
TY478	G38-16・17	BY33	円形	56	52	22	17	VIII	59・61	
TY479	G37-16・17	—	楕円形	35	28	12	—	—	—	
TY480	G36・37-16・17	—	楕円形	60	55	21	—	—	—	
TY481	G37-17	—	円形	33	29	6	—	—	—	
TY482	G36-16	—	楕円形	48	35	23	—	—	—	
TY483	G35-16	BY22	楕円形	52	42	24	14	VIII	62・63	
TY484	G35-15	—	楕円形	45	29	20	—	—	—	
TY485	G35-16	—	円形	34	28	39	—	—	—	
TY486	G35-16	—	円形	23	17	—	—	—	—	
TY487	G35-17・18	—	円形	51	45	33	—	—	—	
TY488	G36-18	BY14	楕円形	65	55	45	—	IX	69・70	TY246を切る
TY489	G36-18	BY26	円形	50	49	22	14	VII	58・59	
TY490	G36-18	—	楕円形	43	40	31	—	—	—	
TY491	G36-18	—	円形	50	47	25	—	—	—	
TY492	G37-17・18	—	円形	41	38	30	14	—	—	
TY493	G39・40-21	—	円形	62	62	38	12	—	—	
TY494	G39・40-21・22	—	円形	62	62	18	—	—	—	
TY495	G38-17・18	BY33	楕円形	56	42	35	10	VIII	59・61	
TY496	G39・40-22	—	円形	48	46	32	—	—	—	
TY497	G37-18	BY26	円形	45	45	25	—	VII	58・59	
TY498	G37-18・19	—	円形	39	30	16	12	—	—	
TY499	G38-18・19	BY33	楕円形	56	50	26	20	VIII	59・61	
TY500	G38-22	—	楕円形	46	30	30	—	—	—	
TY501	G11・12-14	—	円形	68	66	21	—	—	—	
TY502	G13-14・15	BY6	楕円形	60	52	33	—	III	26・27	TY39に切られる
TY503	G15-13・14	—	円形	56	55	50	16	—	—	
TY504	G18-11	—	楕円形	66	50	16	—	—	—	
TY505	G18-13	—	円形	67	58	24	—	—	—	
TY506	G20-15	BY21	円形	25	25	8	—	II	18	東面扉
TY507	G20-15	BY12	円形	46	40	30	—	IV	38・39	
TY508	G20・21-15	—	円形	47	43	38	16	—	—	
TY509	G20・21-15	—	円形	31	30	26	—	—	—	
TY510	G19・20-9	BY21	円形	48	46	26	—	II	18・19	
TY511	G20・21-14	BY12	円形	53	47	14	13	IV	38・39	
TY512	G21-15	BY21	円形	52	47	14	—	II	18	
TY513	G21-15	—	円形	40	35	20	—	—	—	
TY514	G20-16・17	—	楕円形	45	42	14	—	—	—	
TY515	G20-16	—	円形	52	48	15	—	—	—	
TY516	G20-16・17	BY12	円形	32	30	25	13	IV	38・39	
TY517	G22-15	—	円形	35	35	26	—	—	—	
TY518	G22-15・16	—	円形	34	34	15	—	—	—	
TY519	G22-17	—	円形	29	28	22	8	—	—	
TY520	G23-15	—	円形	48	46	14	8	—	—	
TY521	G20-13	BY5	円形	48	24	29	—	III	25	
TY522	G21-12	BY5	楕円形	56	48	28	—	III	25	TY16に切られる
TY523	G23-10	—	円形	48	34	—	—	—	—	
TY524	G26-9	—	円形	48	43	23	16	—	—	
TY525	G27-8・9	—	楕円形	56	50	43	—	—	—	
TY526	G27-10	—	楕円形	42	35	11	—	—	—	
TY527	G26・27-10	—	楕円形	35	30	23	—	—	—	
TY528	G26-13・14	—	円形	36	36	14	—	—	—	
TY529	G28-11	—	楕円形	59	50	28	16	—	—	
TY530	G28-11	—	楕円形	44	30	31	12	—	—	
TY531	G29-11	—	楕円形	40	34	37	—	—	—	
TY532	G29-11	—	円形	36	33	13	—	—	—	
TY533	G30-9	—	円形	50	45	20	—	—	—	
TY534	G29・30-9・10	—	円形	46	44	28	13	—	—	

T Y 535	G30-10・11	—	円形	43	36	21	17	—	—	
T Y 536	G30-11	—	楕円形	47	36	26	—	—	—	
T Y 537	G30・31-11	—	円形	55	49	17	—	—	—	
T Y 538	G30・31-11	ON 3	円形	44	38	28	—	Ⅲ	73・75	
T Y 539	G31-9	ON 3	円形	57	55	30	—	Ⅲ	73・75	
T Y 540	G31-8	ON 3	円形	45	43	34	14	Ⅲ	73・75	
T Y 541	G31-7	ON 3	円形	51	49	21	13	Ⅲ	73・75	
T Y 542	G32-8	—	円形	50	48	28	16	—	—	
T Y 543	G32・33-7	B Y 16	円形	70	55	37	—	Ⅱ	16・17	
T Y 544	G33・34-7	B Y 16	円形	51	50	38	18	Ⅱ	16・17	
T Y 545	G33-8	—	円形	55	55	27	—	—	—	
T Y 546	G34・35-7	B Y 16	円形	54	49	28	—	Ⅱ	16	
T Y 547	G35-8	—	円形	47	45	29	—	—	—	
T Y 548	G33-11	—	円形	48	43	32	11	—	—	
T Y 549	G32-11	B Y 17	円形	46	46	35	13	Ⅲ	33	
T Y 550	G31-11	B Y 29	円形	56	55	18	—	Ⅳ	43	
T Y 551	G29-13・14	—	円形	68	65	27	—	—	—	
T Y 552	G29-13	—	円形	33	32	21	—	—	—	
T Y 553	G29-14	B Y 3	円形	40	37	22	18	Ⅲ	46・47	
T Y 554	G30-13	—	円形	33	33	30	—	—	—	
T Y 555	G31-13	ON 3	楕円形	53	46	30	16	Ⅲ	73・75	T Y 673を切る
T Y 556	G31-13	—	楕円形	47	43	34	20	—	—	
T Y 557	G30・31-12	ON 3	楕円形	60	46	31	12	Ⅲ	73・75	
T Y 558	G30-12	—	円形	36	31	19	—	—	—	
T Y 559	G30-12	—	円形	24	24	11	—	—	—	
T Y 560	G31-12	ON 3	円形	36	30	16	—	Ⅲ	73	
T Y 561	G31-12	B Y 29	楕円形	61	57	34	—	Ⅳ	43・44	
T Y 562	G31-13	—	円形	42	37	23	—	—	—	
T Y 563	G31-14	B Y 29	円形	47	33	22	—	Ⅲ	43・44	
T Y 564	G30・31-14	B Y 3	円形	49	46	17	—	Ⅲ	46・47	
T Y 565	G32-13	—	円形	67	62	52	16	—	—	
T Y 566	G33-13	—	楕円形	56	43	48	22	—	—	
T Y 567	G33-13	—	円形	40	37	74	—	—	—	
T Y 568	G33-13	B Y 30	楕円形	66	52	52	19	Ⅱ	23	
T Y 569	G33-12	—	楕円形	56	43	53	13	—	—	
T Y 570	G32・33-14	—	円形	42	36	32	—	—	—	
T Y 571	G33-14	B Y 29	楕円形	70	55	55	20	Ⅳ	43・44	
T Y 572	G34-14	B Y 29	円形	30	30	28	10	Ⅳ	43・44	
T Y 573	G34-13	B Y 30	円形	43	34	47	13	Ⅱ	23	
T Y 574	G33-11・12	—	円形	50	47	45	—	—	—	
T Y 575	G35-11	B Y 29	円形	65	56	41	20	Ⅳ	43・44	
T Y 576	G33-11・12	B Y 29	円形	52	48	45	15	Ⅳ	43・44	
T Y 577	G33-11	—	円形	45	42	26	—	—	—	
T Y 578	G32-11	B Y 29	円形	51	47	51	18	Ⅳ	43・44	
T Y 579	G32-12	—	円形	62	60	44	—	—	—	
T Y 580	G33-12	—	円形	62	53	39	14	—	—	
T Y 581	G33・34-12	B Y 30	円形	78	78	51	17	Ⅱ	23	
T Y 582	G33-12	—	楕円形	58	48	40	16	—	—	
T Y 583	G32-14	B Y 29	円形	46	40	52	15	Ⅳ	43・44	
T Y 584	G33-14	—	円形	37	36	24	—	—	—	
T Y 585	G30・31-14・15	—	楕円形	49	40	30	—	—	—	
T Y 586	G31-15	—	円形	38	35	19	—	—	—	
T Y 587	G33-15	—	円形	76	75	20	—	—	—	
T Y 588	G36-19	—	円形	35	35	29	14	—	—	
T Y 589	G35-19	—	楕円形	46	41	20	—	—	—	
T Y 590	G35-19	—	円形	23	20	9	—	—	—	
T Y 591	G33・34-19	—	円形	83	74	38	—	—	—	
T Y 592	G32・33-18	—	円形	35	35	14	—	—	—	
T Y 593	G31-18	—	楕円形	53	45	25	—	—	—	
T Y 594	G31-17	B Y 3	円形	72	65	38	—	Ⅲ	46・47	
T Y 595	G31・32-16	B Y 3	円形	38	36	20	15	Ⅲ	46・47	
T Y 596	G33-16	—	円形	57	55	21	—	—	—	
T Y 597	G33-17	—	円形	32	29	10	—	—	—	
T Y 598	G33-17	—	楕円形	67	48	—	—	—	—	
T Y 599	G33・34-17	—	円形	32	23	20	—	—	—	
T Y 600	G33-21・22	—	円形	46	41	16	—	—	—	
T Y 601	G20-14	B Y 21	楕円形	45	38	12	—	Ⅱ	18	東面廂

TY602	G22-12	BY5	円形	35	32	20	—	Ⅲ	25	
TY603	G27・28-18	BY14	円形	53	50	19	—	Ⅸ	69・70	
TY604	G28・29-18	BY14	円形	35	32	14	—	Ⅸ	69・70	
TY605	G29・30-18・19	BY14	円形	40	39	12	—	Ⅸ	69・70	
TY606	G30・31-19	BY14	円形	30	26	10	—	Ⅸ	69・70	
TY607	G31・32-19	BY14	円形	52	50	36	14	Ⅸ	69・71	
TY608	G32・33-19	BY14	円形	42	42	27	13	Ⅸ	69・70	
TY609	G29-15	BY14	円形	45	44	34	15	Ⅸ	69・70	
TY610	G28-11	BY22	円形	47	43	23	14	Ⅷ	62・63	
TY611	G27・28-19	BY22	楕円形	54	38	21	—	Ⅷ	62・63	
TY612	G31-20	BY22	楕円形	47	43	27	—	Ⅷ	62	
TY613	G32-20	BY22	円形	37	36	17	—	Ⅷ	61・62	
TY614	G32・33-20	BY22	円形	47	47	26	—	Ⅷ	61・62	
TY615	G33・34-20	BY22	楕円形	47	32	8	—	Ⅷ	61・62	
TY616	G35-20	BY22	楕円形	47	36	10	—	Ⅷ	61・62	
TY617	G35-19	—	円形	35	30	36	—	—	—	
TY618	G34-21	BY22	円形	28	23	9	—	Ⅷ	62・63	北面廂
TY619	G33-21	BY22	円形	38	37	16	10	Ⅷ	62・63	北面廂
TY620	G32-21	BY22	円形	37	34	26	11	Ⅷ	62・63	北面廂
TY621	G31-20	BY22	円形	60	55	20	12	Ⅷ	62・66	北面廂
TY622	G30-20	BY22	円形	39	35	24	13	Ⅷ	62・66	北面廂
TY623	G28-20	BY22	楕円形	—	37	—	—	Ⅷ	62	北面廂
TY624	G27-20	BY22	円形	23	19	6	—	Ⅷ	62・63	北面廂
TY625	G30-19・20	BY22	円形	30	28	12	14	Ⅷ	61・62	
TY626	G33-19・20	—	楕円形	45	38	10	—	—	—	
TY627	G35-20	BY14	円形	40	35	14	—	Ⅸ	69・71	
TY628	G33-16	—	円形	44	42	55	—	—	—	
TY629	G35・36-10	BY19	円形	51	50	49	11	Ⅵ	51	TY395を切る
TY630	G35・36-20	BY14	円形	47	47	38	11	Ⅸ	69・71	
TY631	G36-22	—	円形	30	30	17	13	—	—	
TY632	G37-22	—	円形	68	54	25	—	—	—	
TY633	G36・37-23	—	楕円形	70	43	26	—	—	—	
TY634	G36・37-23・24	—	円形	40	38	12	—	—	—	
TY635	G36・37-24	—	楕円形	53	50	29	—	—	—	
TY636	G27-13・14	—	円形	54	51	16	—	—	—	
TY637	G26・27-13・14	—	円形	53	50	22	—	—	—	
TY638	G36-15	—	円形	20	20	13	—	—	—	
TY639	G36-14	—	円形	27	26	10	—	—	—	
TY640	G35-16・17	—	楕円形	22	18	22	—	—	—	
TY641	G26-13	—	円形	35	35	24	—	—	—	
TY642	G25・26-14	—	円形	50	46	23	6	—	—	
TY643	G25・26-14	—	楕円形	52	45	14	12	—	—	
TY644	G26・27-14	—	円形	33	30	10	—	—	—	
TY645	G26-14・15	—	円形	93	90	48	18	—	—	
TY646	G25・26-22・23	—	円形	70	62	—	—	—	—	
TY647	G25・26-15	—	楕円形	43	30	14	—	—	—	
TY648	G25-15	—	円形	44	38	21	—	—	—	
TY649	G25-16	—	円形	50	46	18	—	—	—	
TY650	G16-18・19	—	楕円形	33	31	17	—	—	—	
TY651	G25・26-16	—	円形	26	22	15	—	—	—	
TY652	G25・26-15	—	楕円形	37	33	20	10	—	—	
TY653	G25-17	—	円形	41	40	23	—	—	—	
TY654	G28-15	BY3	楕円形	78	66	46	16	Ⅲ	46・47	
TY655	G28-14	—	楕円形	40	34	18	—	—	—	
TY656	G31-14	—	円形	36	36	—	—	—	—	
TY657	G27-14・15	—	円形	55	55	31	15	—	—	
TY658	G27-15	—	円形	53	45	52	16	—	—	
TY659	G24-17・18	—	円形	40	36	14	—	—	—	
TY660	G24・25-17	BY13	円形	45	40	24	—	Ⅴ	31	
TY661	G26-17・18	BY13	円形	37	32	26	—	Ⅴ	31	
TY662	G20・21-12	—	円形	48	45	44	—	—	—	TY171に切られる
TY663	G36・37-21	—	円形	28	26	28	—	—	—	
TY664	G33-17	—	円形	25	22	12	—	—	—	
TY665	G37-21・22	—	楕円形	56	48	27	—	—	—	
TY666	G37-19・20	BY33	円形	50	47	12	—	Ⅷ	59・61	
TY667	G36-19	—	円形	22	22	28	—	—	—	
TY668	G33-17	—	円形	30	27	16	—	—	—	

TY669	G33-19	—	円形	26	24	14	—	—	—	
TY670	G29・30-11	—	円形	45	44	23	—	—	—	
TY671	G29・30-11	—	円形	40	38	21	—	—	—	
TY672	G34-14・15	—	円形	40	38	59	—	—	—	
TY673	G30・31-13	—	楕円形	44	44	21	16	—	—	TY555に切られる
TY674	G28-10	BY3	楕円形	67	60	34	20	Ⅲ	46・47	
TY675	G26・27-18	BY14	円形	53	44	31	16	Ⅸ	69・70	
TY676	G27-20	—	円形	32	30	19	—	—	—	
TY677	G27-20	—	楕円形	36	25	27	—	—	—	
TY678	G27-23	—	楕円形	50	43	20	—	—	—	
TY679	G23・24-20	—	円形	48	40	19	—	—	—	
TY680	G24-18・19	—	円形	35	32	10	—	—	—	
TY681	G34-16	—	楕円形	38	35	21	—	—	—	
TY682	G28-12	—	円形	41	40	10	—	—	—	
TY683	G24・25-16	—	楕円形	47	35	19	—	—	—	
TY684	G23-18	—	円形	30	30	21	16	—	—	
TY685	G23-18	ON1	円形	33	32	31	17	Ⅱ	73・74	
TY686	G22-18	—	円形	47	45	40	—	—	—	
TY687	G21・22-17・18	ON1	円形	46	45	31	—	Ⅱ	73・74	
TY688	G21・22-18・19	—	楕円形	48	35	17	—	—	—	
TY689	G20・21-18	—	円形	53	53	21	—	—	—	
TY690	G21-23	—	楕円形	42	—	5	—	—	—	
TY691	G20-22	—	円形	57	55	24	—	—	—	
TY692	G20・21-22	—	円形	45	42	31	—	—	—	
TY693	G21-23	BY27	楕円形	82	—	8	—	Ⅲ	34	
TY694	G23-17・18	BY27	円形	47	44	23	—	Ⅲ	34	
TY695	G24-22・23	BY27	円形	65	56	19	—	Ⅲ	34	
TY696	G25・26-22・23	BY27	円形	79	71	20	—	Ⅲ	34	
TY697	G25・26-23	—	円形	91	62	18	—	—	—	
TY698	G24-23	—	円形	34	34	11	—	—	—	
TY699	G24-23	—	円形	27	24	11	—	—	—	
TY700	G26-22	—	楕円形	26	19	19	—	—	—	
TY701	G24-23	—	円形	32	26	30	—	—	—	TY702を切る
TY702	G24-23	—	円形	26	18	30	—	—	—	TY701に切られる
TY703	G22-23	—	円形	32	32	23	9	—	—	
TY704	G22-23	—	円形	28	27	8	—	—	—	
TY705	G22-23	—	円形	25	23	31	13	—	—	
TY706	G22-22	—	円形	26	23	14	—	—	—	
TY707	G23-21	—	円形	37	37	20	—	—	—	
TY708	G22-21	—	円形	26	22	21	—	—	—	
TY709	G22-20	—	円形	25	23	7	—	—	—	
TY710	G22-19	—	円形	31	26	22	11	—	—	
TY711	G20・21-17・18	—	楕円形	45	35	31	—	—	—	
TY712	G20・21-19	—	楕円形	55	40	24	—	—	—	
TY713	G20-19・20	—	円形	40	37	40	—	—	—	
TY714	G20-20・21	—	楕円形	48	38	27	15	—	—	
TY715	G20-22	—	円形	33	27	9	20	—	—	TY758を切る
TY716	G19-21・22	—	楕円形	52	45	28	—	—	—	
TY717	G18-21	—	楕円形	47	43	10	—	—	—	
TY718	G38・39-9	BY19	楕円形	70	63	87	15	Ⅵ	51	
TY719	G15-21	—	円形	38	38	10	—	—	—	
TY720	G10-20	ON5	円形	48	42	43	16	Ⅰ	74・75	
TY721	G11-15	—	円形	29	27	18	—	—	—	
TY722	G12-18	ON1	楕円形	55	46	16	—	Ⅱ	73・74	
TY723	G14-18	ON1	円形	36	24	—	13	Ⅱ	73・74	
TY724	G15-18	ON1	円形	38	22	—	12	Ⅱ	73・74	
TY725	G16-18	ON1	円形	43	40	42	18	Ⅱ	73・74	
TY726	G18・19-17・18	ON1	円形	43	42	26	—	Ⅱ	73・74	
TY727	G19・20-18	ON1	円形	30	29	16	11	Ⅱ	73・74	
TY728	G20-18	—	楕円形	37	32	28	—	—	—	
TY729	G20・21-18	ON1	楕円形	41	34	24	—	Ⅱ	73・74	
TY730	G19・20-20	ON4	円形	33	32	29	14	Ⅲ	74・75	
TY731	G10-20	ON6	円形	30	30	19	—	Ⅰ	74・76	
TY732	G11-18	ON1	円形	45	44	12	—	Ⅱ	73・74	
TY733	G11-7	—	円形	39	38	19	—	—	—	
TY734	G9-20	—	円形	40	35	32	16	—	—	
TY735	G9-19	—	円形	45	42	28	18	—	—	

TY736	G 8-19	—	楕円形	44	34	—	11	—	—	
TY737	G 8-19	—	楕円形	40	33	—	12	—	—	
TY738	G 7-18・19	—	円形	48	45	—	13	—	—	
TY739	G 5-18	—	円形	48	43	—	16	—	—	
TY740	G11-19	—	円形	38	35	24	—	—	—	
TY741	G13-18	—	円形	40	38	32	—	—	—	
TY742	G13-17	BY 6	楕円形	32	28	19	11	Ⅲ	26	北面廂
TY743	G14-19	BY 28	円形	53	47	25	17	Ⅸ	71・72	
TY744	G10-13・14	BY 20	円形	52	49	37	10	Ⅰ	7・10	
TY745	G17-19	—	円形	30	27	—	—	—	—	
TY746	G17・18-20	ON 4	円形	41	36	35	17	Ⅲ	74・75	
TY747	G16-20	—	円形	32	28	15	—	—	—	
TY748	G17-21	—	円形	30	27	23	—	—	—	
TY749	G17・18-22	—	円形	26	24	8	—	—	—	
TY750	G17・18-21	—	円形	33	25	25	10	—	—	
TY751	G17・18-21	—	円形	24	22	14	—	—	—	
TY752	G18-21	—	円形	33	32	42	14	—	—	
TY753	G17・18-21	—	楕円形	39	22	20	10	—	—	
TY754	G18-21	—	円形	26	24	25	12	—	—	
TY755	G19-20・21	—	円形	43	41	20	15	—	—	
TY756	G18・19-21	—	円形	40	33	8	—	—	—	
TY757	G19-22	—	円形	28	—	8	—	—	—	
TY758	G20-22	—	円形	58	53	10	—	—	—	TY715に切られる
TY759	G20-21	—	楕円形	48	45	6	—	—	—	
TY760	G20-20	—	円形	27	22	13	10	—	—	
TY761	G19-21	—	円形	27	25	22	14	—	—	
TY762	G18・19-20	ON 4	円形	51	46	17	—	Ⅲ	74・75	
TY763	G12-14	BY 24	円形	68	67	47	—	Ⅱ	21・22	
TY764	G15-21	BY 28	楕円形	52	43	41	13	Ⅸ	72	
TY765	G11-19	—	円形	43	42	15	—	—	—	
TY766	G21-20	—	円形	25	24	7	—	—	—	
TY767	G22・23-13	—	円形	50	48	18	—	—	—	
TY768	G22-13	—	楕円形	42	35	13	—	—	—	TY439を切る
TY769	G38-7・8	BY 19	円形	?	47	10	—	Ⅵ	51	
TY770	G15-20	BY 28	円形	55	48	23	18	Ⅸ	72	
TY771	G15-19	BY 28	円形	50	49	19	16	Ⅸ	71・72	
TY772	G12-20	BY 28	円形	50	48	34	—	Ⅸ	71・72	
TY773	G12・13-11	BY 28	円形	57	53	25	—	Ⅸ	71・72	
TY774	G16-21	—	円形	28	26	6	—	—	—	
TY775	G16-21	—	楕円形	39	37	16	—	—	—	
TY776	G31-6	—	楕円形	47	43	16	—	—	—	
TY777	G27-10・11	—	楕円形	33	24	18	7	—	—	TY 9 に切られる
TY778	G32-15・16	BY 3	円形	88	83	20	25	Ⅲ	46・47	
TY779	G31-18	—	円形	28	28	13	—	—	—	
TY780	G28-16・17	—	楕円形	57	50	26	—	—	—	
TY781	G30・31-18	BY 15	円形	47	46	18	—	Ⅲ	32	
TY782	G32-23	—	楕円形	61	45	11	—	—	—	
TY783	G25-23・24	—	楕円形	54	51	14	—	—	—	
TY784	G11-20	—	円形	44	39	14	—	—	—	
TY785	G 9・10-18	—	円形	38	35	—	—	—	—	
TY786	G 8-18	—	円形	40	35	—	—	—	—	
TY787	G33・34-26	—	楕円形	36	27	—	—	—	—	
TY788	G36-17	BY 26	楕円形	93	65	35	15	Ⅶ	58・59	TY285に切られる
TY789	G17・18-20	—	円形	52	45	35	15	—	—	
TY790	G35-15	—	楕円形	53	53	45	—	—	—	TY261に切られる
TY791	G28-17	—	楕円形	69	48	59	17	—	—	TY198TY321を切る
TY792	G35-12	—	楕円形	54	48	—	—	—	—	
TY793	G28・29-17	—	楕円形	65	56	33	—	—	—	TY794に切られる
TY794	G29-17	BY 25	楕円形	63	53	56	—	Ⅶ	57	TY299TY793を切る
TY795	G14-13・14	BY 20	円形	64	60	31	14	Ⅰ	7・10	
TY796	G14・15-9	BY 9	円形	63	60	47	—	Ⅲ	28	
TY797	G30-17	BY 3	円形	45	43	20	14	Ⅲ	46・47	
TY798	G17-14	—	円形	35	34	18	—	—	—	
TY799	G17-13	—	楕円形	57	50	20	—	—	—	
TY800	G20-12	—	楕円形	40	23	27	—	—	—	TY17に切られる

### 3 集石遺構（S Y記号）

土壙状の上部や内部に小礫を配した遺構を一括したもので、今回の調査区からは5基の集石遺構が検出されている。建物に存在するものとしては、B Y29の西側に付随するS Y4の1基のみであった。

#### ・S Y 1「第77図」

調査区の中央の北側壁にある。長径120cm、深さ30cmを測る円形プランの土壙状に人頭大の河原石4箇を固めるように設置してある。覆土は2枚で、1層面に円礫を配して埋めたものとみられる。遺物は検出されなかった。

#### ・S Y 2「第77図・第13図版」

長径115cm、短径98cm、深さ35cmの楕円形を有するもので、断面が不規則なボール状を示している。覆土は3枚で、1層の中央部に小礫を集石している。遺物は検出していない。

#### ・S Y 3「第76図・第13図版」

長径135cm、短径126cm、深さ35cmの円形を有するもので、断面がゆるやかなボール状を示している。覆土は6枚で、1層と2層内に小礫を不自然に配している。

#### ・S Y 4「第77図・第14図版」

T Y462を避けるように、南東の隅を除いた方形状をしている。長径254cm、短径203cmの集石遺構は、約20cmほど掘り込んだ内部に3の黒土とシルトの混合層を底面に敷き、次に壁の側面に沿って2層とした粘土を置きながら全体を1の粘土層と黒土の混合層を加えて鄭重に版築を行っている。礫は、2層の壁面に沿って大きめの礫を配置した後に、内部を小礫で敷き詰めて構築したものである。

一見、B Y30のT Y462が集石遺構を切っているようにも映っているが、意図的に柱穴を避けて直角に隅を表していることより、B Y30の建物の後に構築されたことは明らかである。遺構の性格であるが、版築の状況から上部構造を有する基礎部分と想定される。建物の端に位置することから竈の基礎部とも想定したが、焼けた痕跡が認められないことで、竈とするには問題が残る。

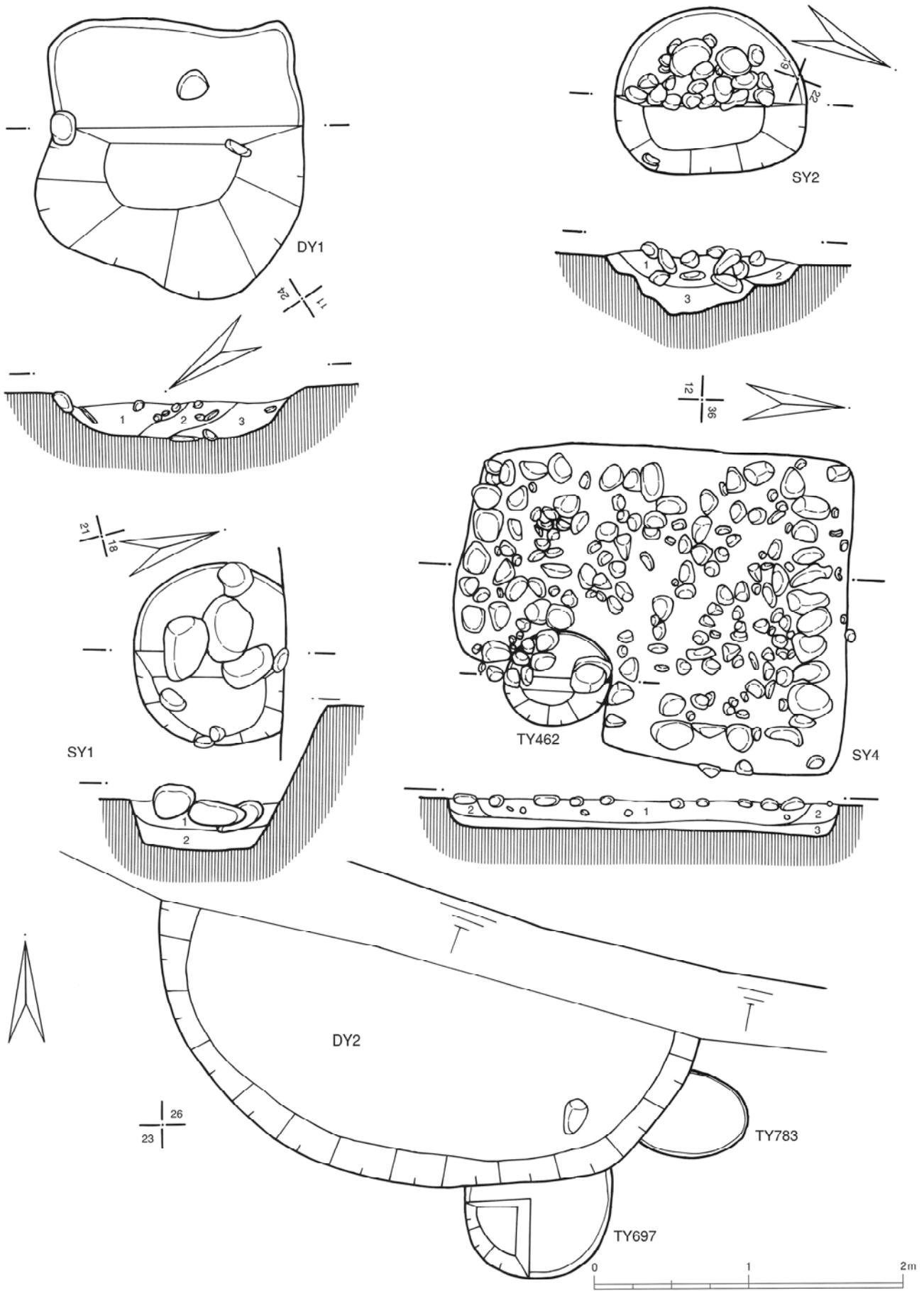
#### ・S Y 5「第76図・第14図版」

長径332cm、短径225cm、深さ12cmほど不製方形に掘り凹めた北東部に、約80cmの方形に25cm掘り下げた穴の壁面に礫を貼り付けた石組状の遺構である。Ⅳ期の建物B Y19となるT Y377の柱穴によって切られていることで、Ⅲ期以前の施設と考えられるが性格は不明である。

### 4 土 壙（D Y表示）

K Y1の東側に隣接するD Y2と調査区のほぼ中央に位置するD Y1の2基がある。いずれも遺物が認められないことで明確にできないが、D Y1は覆土に第1層が含まれていることから近世に掘り込まれたものとみている。

一方、D Y2は長径355cm、深さ25cmの楕円形を測るもので、第3層から掘り込んでいることを考えると中世以前の遺構と推測される。遺物は、両者とも検出されていない。



第77図 館山北館跡DY1・DY2・SY1・SY2・SY4平面図

## 5 井戸跡（DN表示）

井戸跡は7基検出されている。円形もしくは不整形円形を有する掘り方に、河原石を底辺から鄭重に組み合わせて構築している。石積を有する井戸内部の直径は約3尺～4尺（90cm～120cm）深さが5尺（150cm）を基本としているが、5尺未満のDN2・DN5や8尺を有するDN6も含まれている。これらの井戸跡は、いずれも屋敷に伴っていたものと想定される。確認した段階での井戸跡はいずれも廃棄した段階で、埋め戻されてあった。

### ・DN1「第78図」

東側の建物群より検出したもので、約2.7mの円形の掘り方に90cmの井戸口が開いている。確認面からの深さは192cmを測り、底部の幅が72cm、口径が80cmとほぼ直角に立ち上がっている。石積みは、15cm～30cmの偏平な河原石を底辺の側面から積み上げたものであり、隅丸三角形を一段とした設置方法で、角度を微妙に変えて18段を数える。裏込め石は認められない。DN1が構築されたのは、Ⅱ期のBY24の建物に伴う井戸として設置されたものである。Ⅲ期のBY6の母屋までⅡ期に亘って使用された。遺物は出土していない。

### ・DN2「第78図・第12図版・第16図版」

調査区の北東部に位置するもので、長径2.3m、2.1mのほぼ円形の掘り方をもつ。井戸の深さは、確認面からで141cmと今回確認された井戸の中では最も浅い。井戸は、廃絶した段階で約半分の深さまで破壊を受けており、確認した段階での井戸口径は75cmであった。石積は、先のDN1と同様に、隅丸三角形を一段とした設置方法で4段を残してあった。底辺の幅は約70cmを示すことからほぼ直角に立ち上がっていたものとみられる。裏込め石は認められない。

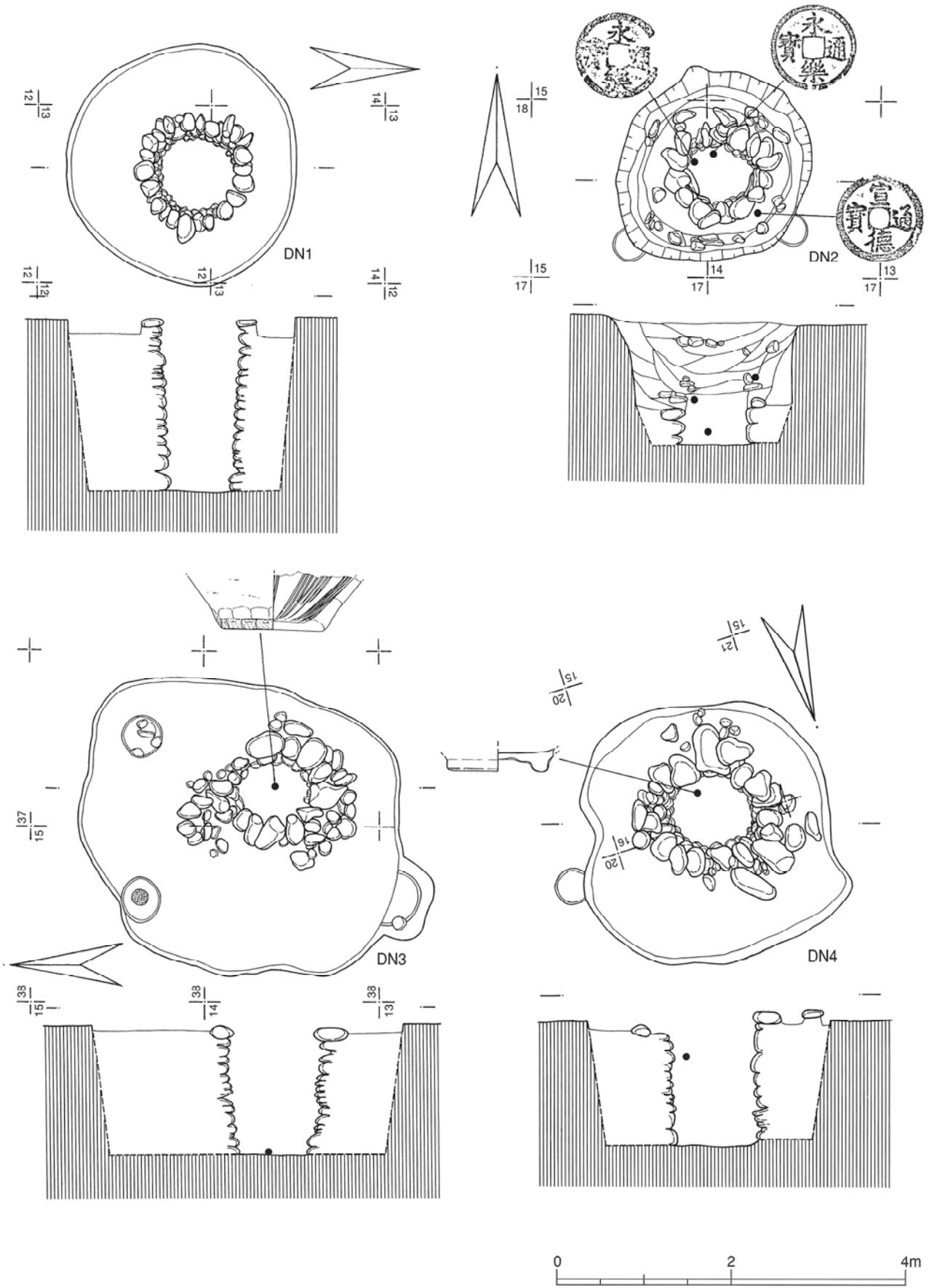
DN2の構築された年代は、ON1の柱列が切つてあることを考慮すれば、Ⅰ期と推測され、BY20の建物に付随していたものと考えている。遺物は、井戸内部から永楽通宝2点と破壊された覆土から宣徳通宝1点の3点の古銭が出土している。井戸の廃棄に伴う祭祀の際に埋納された可能性がある。

### ・DN3「第78図」

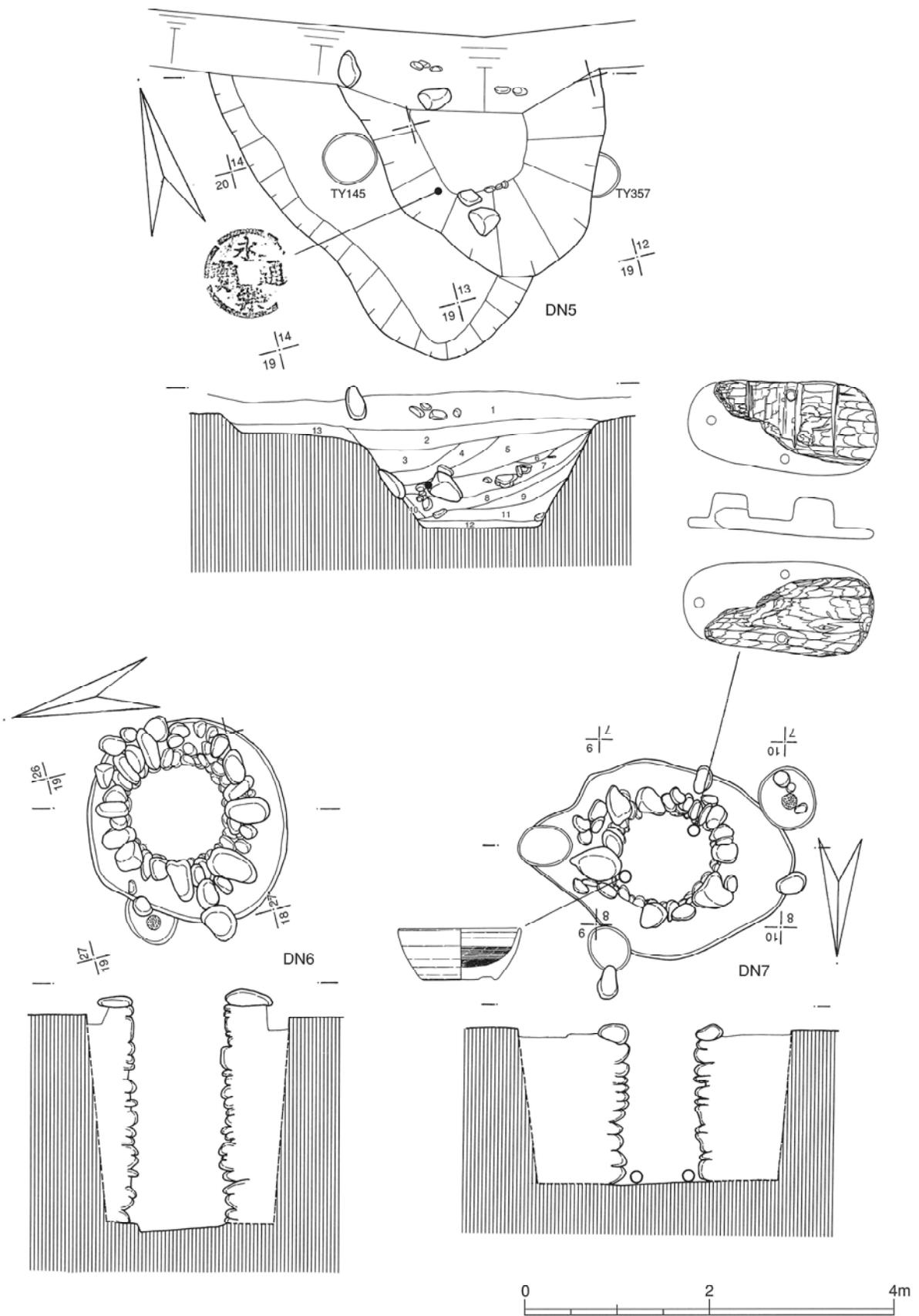
西側建物の井戸として成立したもので、調査区の西端より検出された。不整形の方形状を示す長径3.62m、短径3.32mの掘り方の中央やや北東寄りに井戸口が設置されている。井戸の掘り方の内部には、Ⅵ期の母屋建物であるBY23の柱穴、TY240とTY241の2基が掘り込んであった。確認面からの深さは145cmを測り、底部の幅が78cm、口径が92cmと狭くなっている。石積みは、15cm～45cmの偏平な河原石を底辺から積み上げたもので、隅丸三角形を一段としたもので、角度を微妙に変えて14段で構築している。裏込め石は、拳大を井戸上部に用いられている。井戸が設置された時期は、Ⅱ期のBY16・BY30で構成する西側建物群の段階に出現している。以後、Ⅷ期のBY25ら3棟で構成する西建物群に及ぶまでの長期の間、西側母屋の付随施設に伴う井戸跡として使用されてきた。出土遺物は、井戸底面より、摺り目をもつ土埧の底部1点が認められている。

### ・DN4「第78図・第12図版」

調査区のほぼ中央に位置するもので、不整形円形の長径3.22m、短径2.98mの掘り方を示して



第78図 館山北館跡DN1・DN2・DN3・DN4平面図



第79図 館山北館跡DN5・DN6・DN7平面図

いる。中央からやや北寄りに開口する井戸の口径は約1m、深さ147cmを測り、底辺で90cmとほぼ直角に立ち上がっている。石積は、25cm～65cmの大きめな河原石を混ぜながら底辺の側面から隅丸三角形を基本とした11段で積み上げている。裏込め石は、拳大の礫を中心に底辺から井戸上部にかけて加えてあった。出土遺物は、井戸上部の覆土内から瀬戸茶碗の底部1点が認められている。

・DN5「第79図・第11図版」

北東の壁に面して確認されたもので、約12cmの浅い竪穴状の遺構を切って構築する。掘り方の半分は、未調査区に含まれていることから全体の形状を確認することはできなかったが、DN7と同様な不整楕円形を示すものとみられる。掘り方は、現長幅で250cm、確認面から底辺までの深さは120cmを測り、大量の河原石が意図的に廃棄されていた。東側の端には、Ⅸ期の建物跡であるBY28の柱穴のTY357によって一部を切られている。掘り方上部からは永楽通宝1点が検出されている。井戸を破壊してして埋めたものと推測している。井戸の時期は、Ⅰ期とみられるが、どの建物跡に付随したかは明確でない。

・DN6「第79図・第11図版」

西側を中心とした母屋に付随する井戸跡として利用されてきたもので、ほぼ円形を示す掘り方は長径3.2mをなす。中央やや北西よりに開口する井戸の口径は、102cmをなし、確認面から底辺までの深さが242cmを測り、今回確認された井戸跡では最も深く掘られている。井戸の底辺径の幅は約1mで、ほとんど直角に近い形態で立ち上がる。石積は、20cm～50cmと多様な河原石を駆使し、底辺の側面から円形を基本とした23段で積み上げている。裏込め石は、拳大の礫を中心に底辺から上部にかけ鄭重に加えてあった。井戸が設置された時期は、Ⅳ期のBY6の母屋からで、Ⅴ期のBY3、Ⅵ期のBY23の母屋、Ⅶ期のBY25・BY26の2棟の建物、Ⅷ期のBY22・BY33の2棟、Ⅸ期のBY14を中心とした4棟の建物群と確認された井戸の中では最も長く、Ⅳ期～Ⅸ期の6時期に亘っている。

・DN7「第79図」

東側建物群の母屋に付随する井戸跡として設置されたものである。掘り方は、不整楕円形を示す長径2.9m、短径2.1mを測る。ほぼ中央に開口する井戸の口径は、75cmをなし、確認面から底辺までの深さが171cm、底辺で78cmと直角に立ち上がっている。石積は、16cm～45cmの河原石を底辺の側面から隅丸三角形の強い手法で12段で積み上げている。裏込め石は認められない。井戸が設置された時期は、Ⅰ期のBY8からで、以後、BY9～BY11の4時期に亘って使用されている。遺物は、井戸底辺から漆器の椀1点と下駄1点が検出されている。

## 6 堀跡 (KY表示)

調査区の西よりに検出された堀跡で、中央に虎口を設けて北側に土橋をもつKY1とKY2の薬研堀は、初期の建物群に伴うものと考えている。その後、KY2は埋め戻され、KY1は箱堀に改変するとともに南側には浅い箱堀のKY3が新たに設置されることで、中央に広い虎口が開いた形態をとる。Ⅲ期に入ると堀は全て埋め戻され、以後堀は伴わない。さらに、南西

側に幅の狭い溝跡が存在するが、時期や性格については不明である。ここでは、検出された堀と溝について、その概要を述べておく。

・ K Y 1 「第80図・第10図版」

北西側の壁から南側に延びる堀跡で、当初構築した薬研堀を改変し、箱堀に造り替えてたことが判っている。前者の薬研堀は、現長で11m、幅212cm～258cmを示している。確認面から底部までの深さが110cm～130cmで、約40°の角度で立ち上がっている。堀底の南側には1m位の自然石が露出している。この巨石は、地山層を掘り進む段階に出現したものであり、取り上げを断念したものとみられる。遺物は堀の中央北寄り底部から土塙を中心に156点が検出され、2点の土塙が復元された。

後者の箱堀は、現長が11.3m、幅が南側の3.3m～北壁の4.7m、確認面からの深さが33cm～56cmを測る。覆土は、表土のNo.1～堀最下層のNo.32の32枚に区分され、No.16～No.32の17枚がⅡ期の段階で薬研堀を埋めた際の覆土である。一方、No.4～No.15の12枚の層は、Ⅲ期の段階で整地した際の埋土であり、No.14層とNo.15層が示すように礫層を中心に埋めたものといえる。遺物は覆土のNo.15層ないから2点の土塙が認められた。

・ K Y 2 「第76図・第10図版」

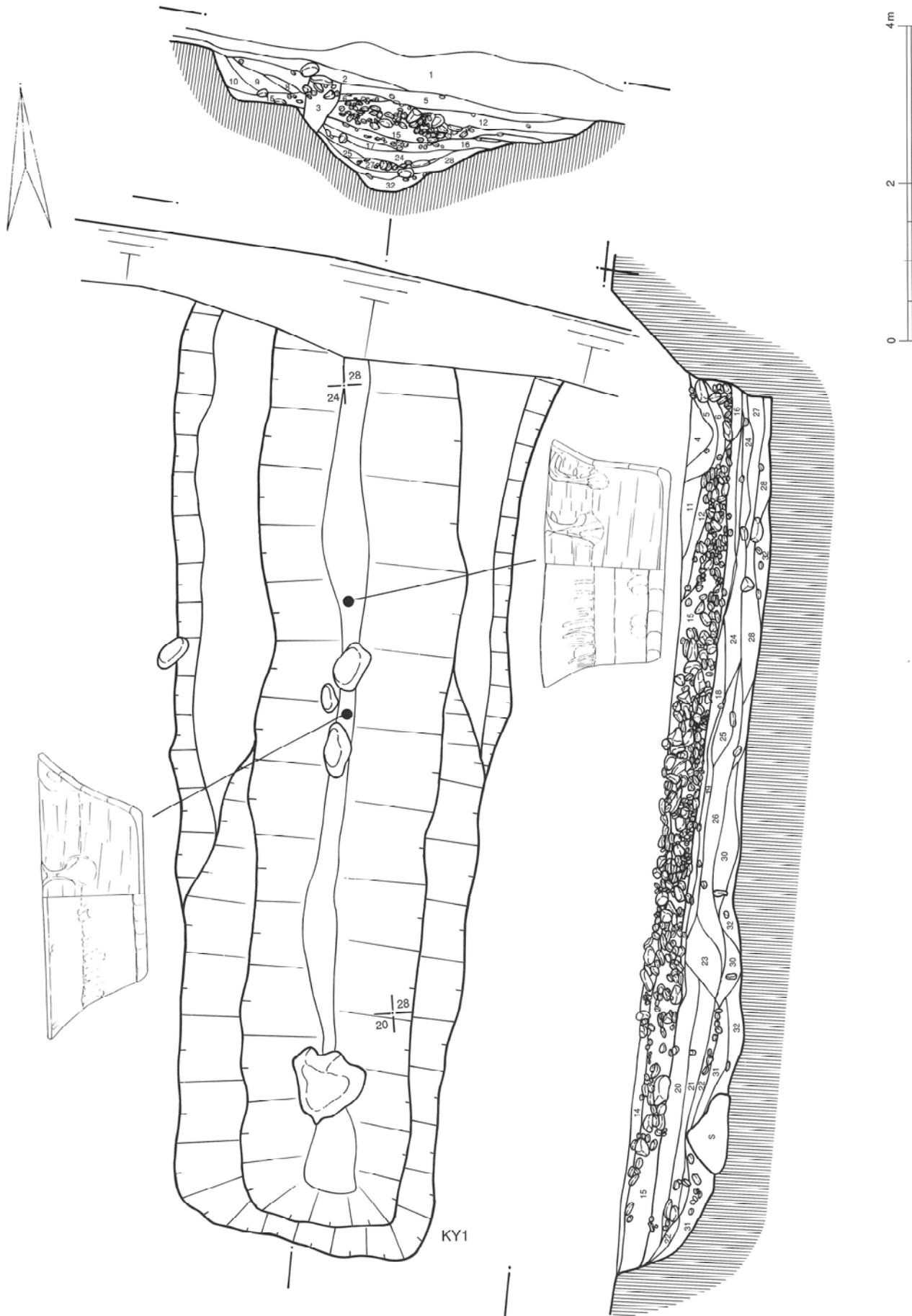
北側の K Y 1 から1.6m（5尺）の間隔を開けて構築したものであり、全長5.5m、幅2.5m～3.3mを測る。深さ58cm～63cmと K Y 1 に比較すれば浅い形状を示す堀内部の覆土はNo.1～No.3の3枚で、No.2とNo.3は拳大～人頭大の礫層が密集して堆積している。この礫層は、先述した K Y 1 のNo.14層とNo.15層の覆土に対比するものであり、K Y 1 と K Y 2 が同時に埋められたことを意味している。つまり、K Y 1 と同じⅠ期の時期に構築されたもので、両者の空間は土橋とみられる。遺物は、堀の底面を中心に64点の土塙片が出土している。復元した土塙1点は堀の北側底面に一括して検出されたものである。

・ K Y 3 「第82図」

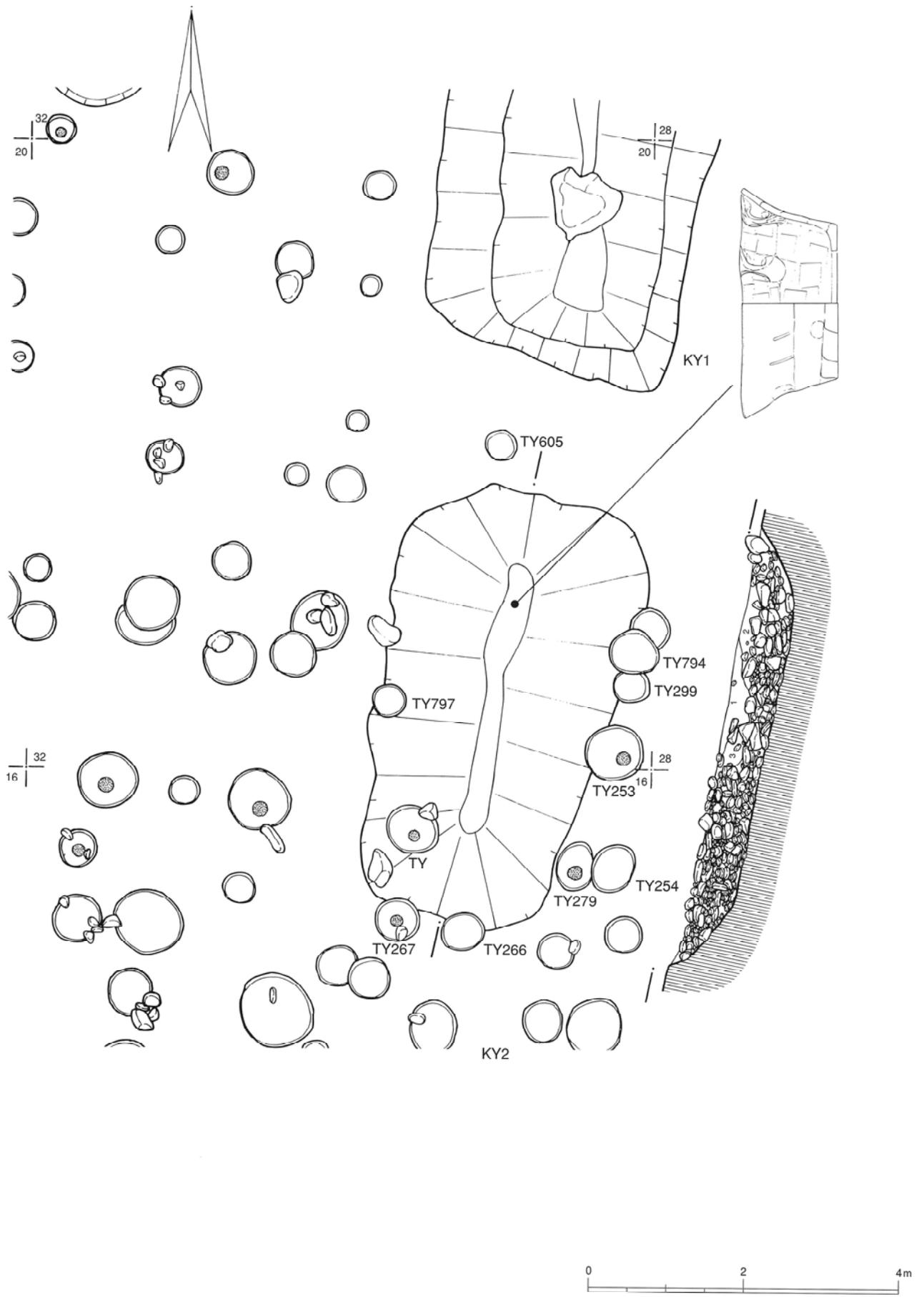
南の西よりから北に延びる南北の箱堀で、G32—8付近で段差を示している。現長での長さは、南側で7.2m、幅が282cm～322cm、深さ32cmをなす。段差をもつ北側の現長が6.5m、幅が225cm～260cm、深さ13cmと極端に浅いのを特徴とし、北端から東側に90cmの不自然な張り出しを伴っている。覆土は南側で3枚を数え、No.2の覆土に多量の礫群を含んでいた。北側の覆土はNo.2のみの礫層の1枚となる。さて、No.2層に含まれる礫層は、先の K Y 1 と K Y 2 と同様にⅢ期の段階で埋め戻した土砂とみている。また、堀の深さが浅いことを考えれば、堀が機能していたⅡ期の段階には、側面に土塁等の施設が伴っていたものと想定される。遺物は土塙片1点と土師質の土器片2点が認められた。

・ K Y 4 「第83図」

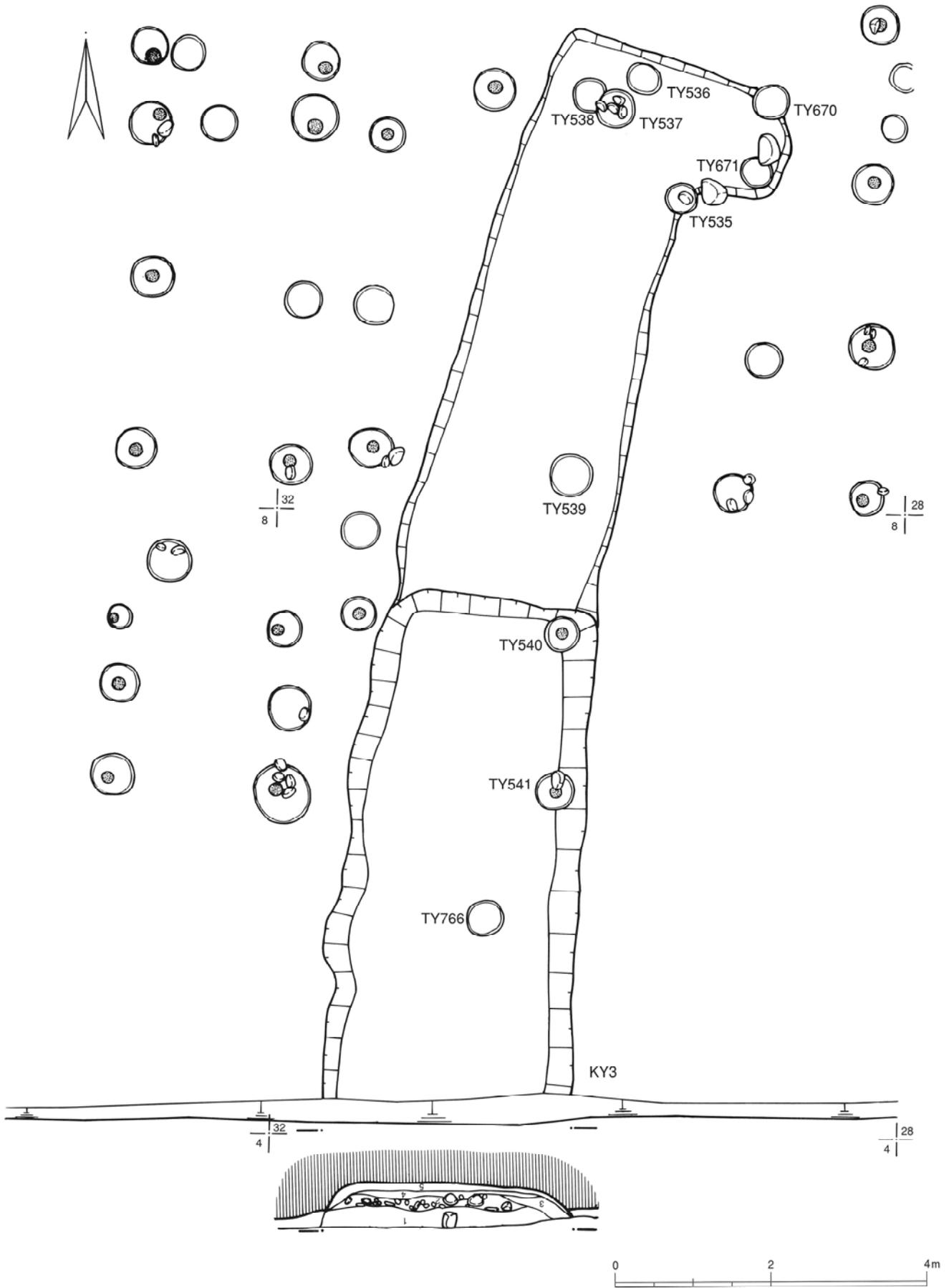
南西部から検出された溝跡で、南側の壁から西側の壁にかけて弓なりに確認されたものである。溝の幅は、主に南東部が45cm～55cm、深さ10cm～30cmを測るが、西側に行くと18cm～32cmと急に狭くなって深さが20cm前後を示していた。遺物は認められない。遺構は、第2層下面から掘込んでいることで、一連の中世に属する遺構と推測されるが、性格は不明である。



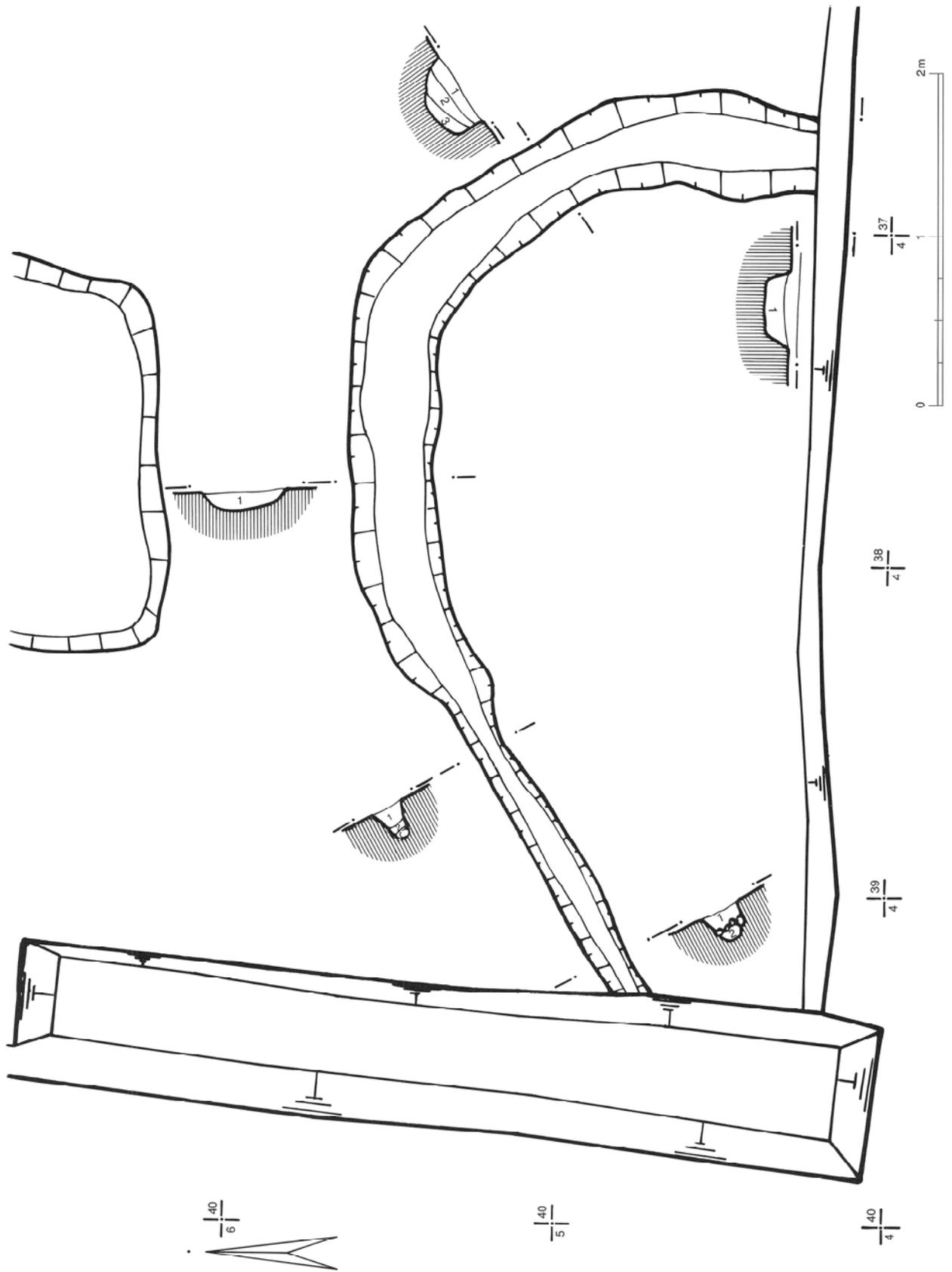
第80図 舘山北舘跡 K Y 1 平面図



第81図 館山北館跡 K Y 2 平面図



第82図 館山北館跡 K Y 3 平面図



第83図 館山北館跡 K Y 4 平面図

## 4. 遺物の概要

今回検出された遺物は、葉研掘や井戸跡等の遺構を中心として整理箱で約3箱分に相当する約360点であった。遺物の大半は中世に属するものであるが、縄文時代に係る石器も55点や表土から出土した90点も含んでいる。主要な遺物の概要は次の通りである。

### 1 縄文時代の遺物「第84図・第19図版」

今回の調査からは、55点の剥片を中心とした石器が検出されている。遺構が認められないことは、館山北館跡が分布する河岸段丘上の平坦部のいずれかの範囲に集落が存在した可能性を示唆している。ここでは、形態の明瞭な石器についてのみ説明を加えたい。

#### (1) 篋状石器「第84図1、3、4」

調査区の東側から検出された石器群で、広義の篋状石器の仲間を含むものとみられる。篋状石器に関しては、多量の出土例のある桑山遺跡群の清水・柿の木、二夕俣A遺跡の分類基準を参考に述べてみる。

図1は、先端が丸みを帯びた両面加工の打製石斧とみる。再加工を加えた刃部には、使用痕跡が明瞭に残っており、両側面には柄の着装を示す痕跡が認められる。V群C類の篋状石器の仲間、概ね縄文早期の中葉に多くみられる。

図3は、主要剥離をa面にもつ洋梨状を有する篋状石器で、刃部に使用痕と上端に柄着装痕を明瞭に残すもので、所謂「分銅型」の打製石斧の仲間といえる。縄文後期の所産とみる。

図4は、先頭状をなす小型の両面加工の石器で、断面が厚みを示すことから、石篋の転用品もしくは打製石斧の先端部と考えられる。桑山遺跡群のVI群e類に分類され、縄文早期に属するものであろう。

#### (2) 石 鋸「第84図5」

石材に黒曜石を使用した大型の石鋸である。ゆるやかな湾曲をなす基部と側面からの直線が先端部付近で内側に折れるように角度をもつのを特徴とする。縄文後期の所産とみたい。

#### (3) 削 器「第84図2」

円形の両面加工の石器で2 a面に主要剥離をもち、b面の打点部を側面から加工を加えたものであり、スクレーパーに分類されるもので、VII群C類に類似している。

#### (4) 石 楔「第84図6」

安山岩の河原石で製作したもので、両面に磨きを加えて刃部を製作している。丸太等の割木に用いるための楔と推測している。

### 2 中世の遺物「第85図～第87図・第20図版～第22図版」

K Y 1等の堀跡や井戸跡の遺構を中心に検出されたもので、素焼の土埴類が221点、かわらけ24点、陶磁器類14点、古銭13点の計272点が認められている。ここでは図化したものを中心に説明を加えてみる。

(1) 土 塙「第86図1、2・第87図1・第22図版1～3」

薬研堀を中心に約5個体分の土塙が出土している。いずれも内側に3単位の内耳把手をもつ。内耳把手を有するもので、底部から斜めに立ち上がる第86図2のa類と直角に立ち上がり、頸部から口縁部が外反する第86図1・第87図1のb類の二種類に分けられる。前者のa類は、米沢城東二の丸跡、後者のb類は上浅川・大浦C遺跡などから検出されている。これまでの出土した土塙の分析から、前者のa類の特徴をなす土塙は15世紀後半には出現し、16世紀前半頃に隆盛を誇ると考えている。一方、b類は、中葉頃になると土塙の器高が急速に低くなって口縁部が広がってくるといった特徴をもつようになる。

今回出土した土塙には、両者の土塙が含まれている点を考慮すると16世紀前半から16世紀といった年代幅を有していることになる。

これまでに土塙が出土した遺跡を列挙すれば、中田町大浦C遺跡、万世町我妻館、米沢城東二の丸跡、川西町大塚城跡、長井市飯塚館跡など伊達氏支配の置賜地方を中心に約20箇所の遺跡から検出されている。

(2) 香 炉「第86図6・第20図版27a・第21図版27b」

酸化焰焼成を有する所謂「赤焼土器」の仲間に入る。底部に粘土粒を貼付た脚部をもつことから香炉とみられる。通常の香炉は陶磁器で製作されるのが多く、赤焼土器による香炉としては類例が少ない。

(3) 播 鉢「第86図4・第87図3」

3号井戸跡(DN3)とTY 587から出土したもので、瓦質及び赤焼系統の播鉢である。内部に櫛状工具で施文した摺り目をもつ。形態は播鉢を示すが、陶質でないことから実際の使用としては塙である。この手の播鉢も伊達氏関連の遺跡から出土する傾向を占めている。上郷地区の上浅川遺跡、米沢城東二の丸跡等12箇所の遺跡からの出土例がある。

(4) 赤焼土器「第86図3、5・第20図版28、29、32・第21図版28、29、32」

切離しが糸切りを呈する坏状のかわらけで、図化した2点の他に22点がある。

(5) 陶磁器「第85図14～16・第20図版15～26、30、31・第図版15～26、30、31」

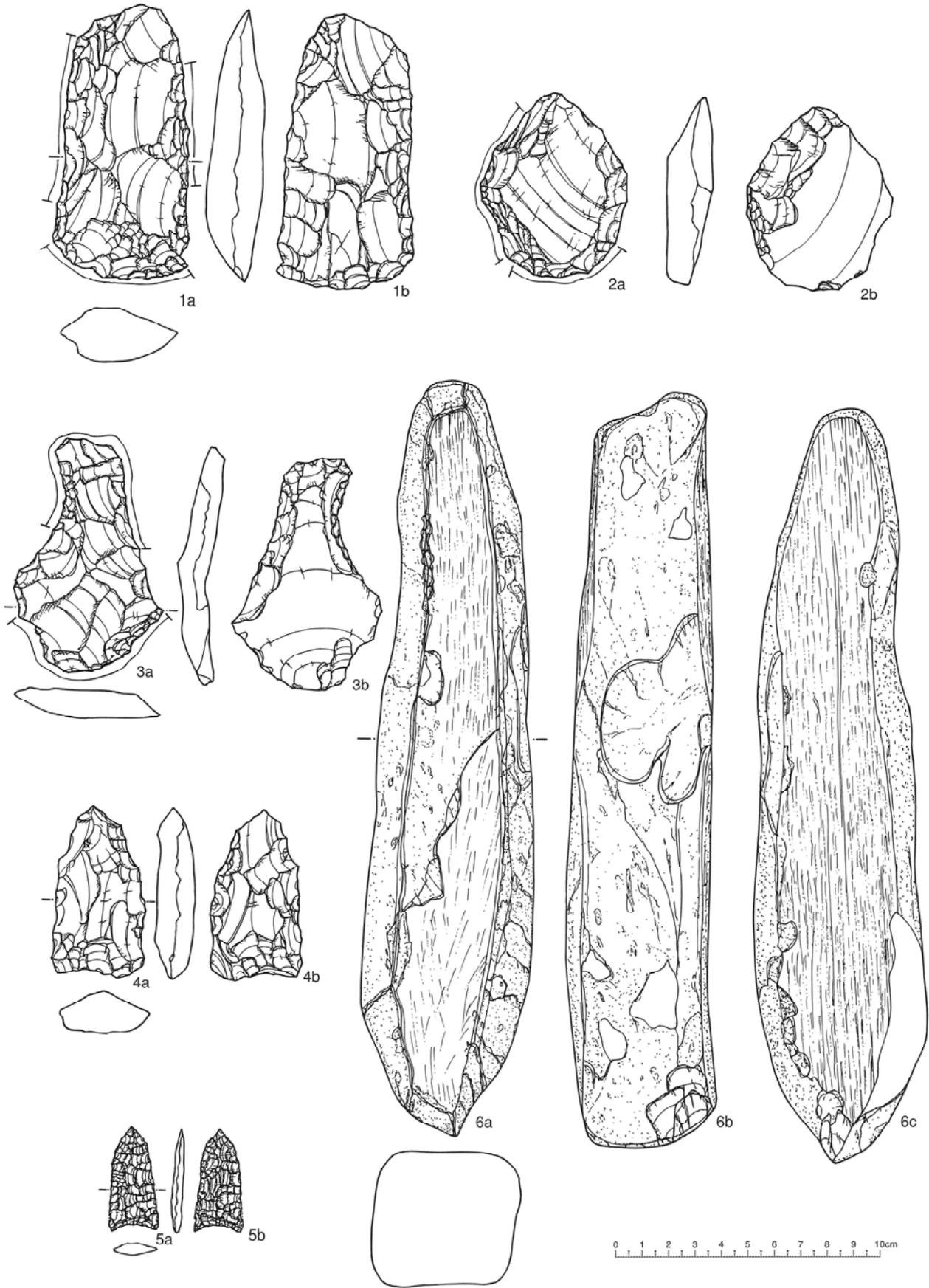
15点が検出されている。いずれも16世紀代の所産と推測されるもので、瀬戸と唐津の抹茶茶碗2点、美濃系の小皿1点、搬入陶器の景德鎮小皿片5点、宗時代の青磁片1点等がある。

(6) 土 鈴「第85図17・第20図版33a・第21図版33b」

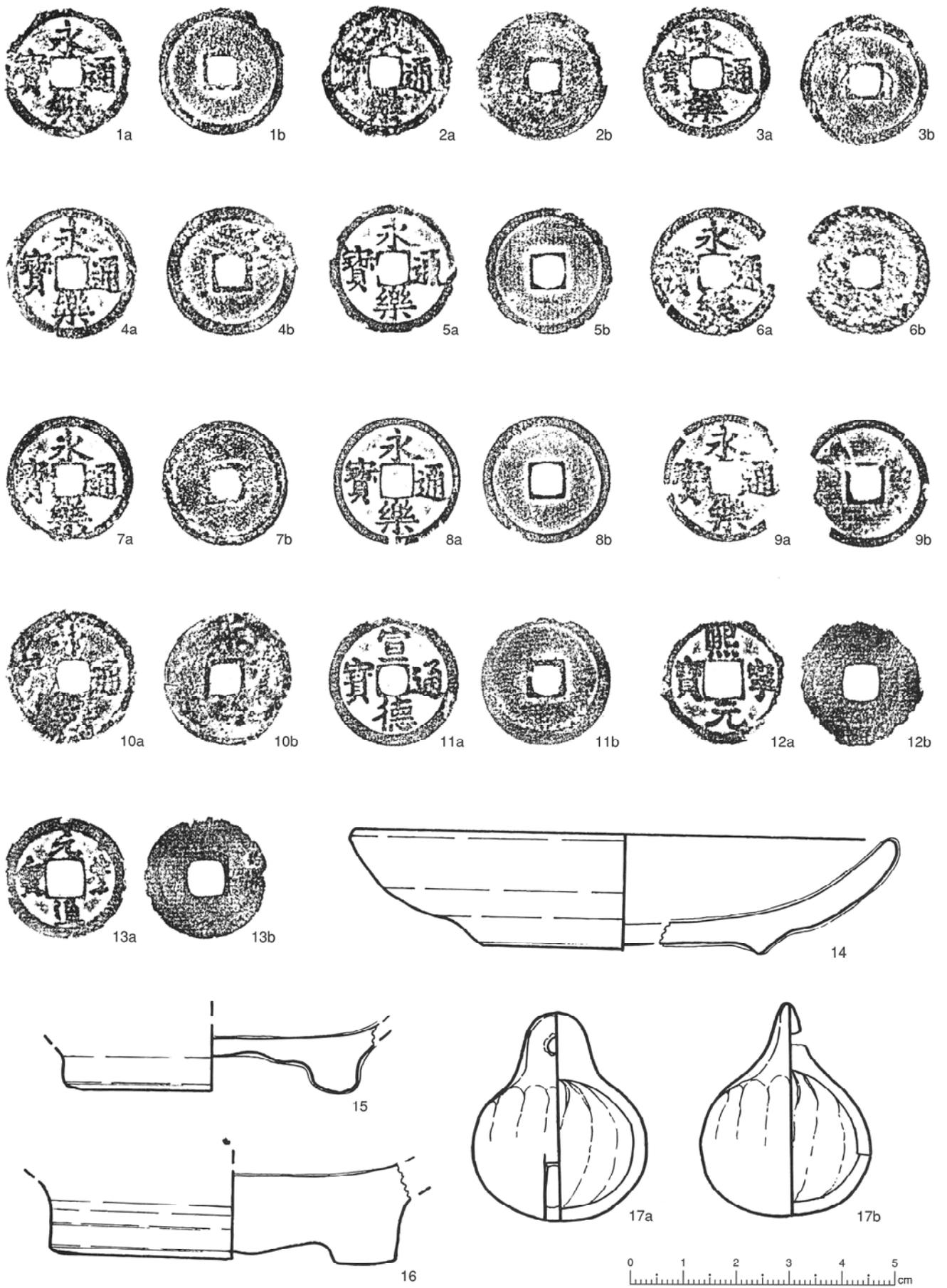
素焼の土鈴で、東側調査区のON5・6付近から出土したもので、約3cmの球形の上部に1cmの撮みを有している。底部には幅3mm、長さ2.8cmの鈴口開いている。中央に紐を通すための3mmの突孔が貫通している。

(7) 木製品「第87図2、4・第23図版」

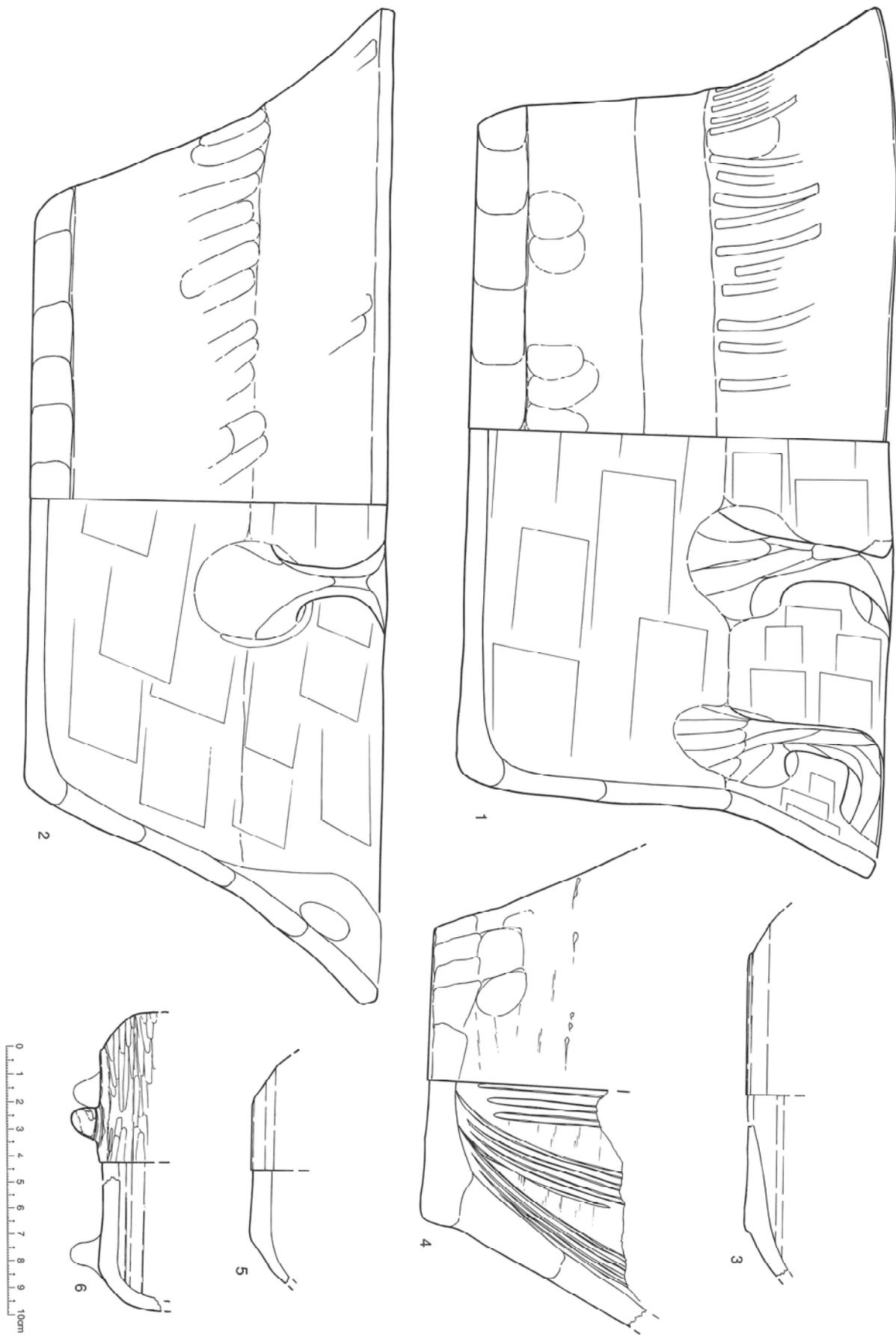
井戸跡から下駄と木椀の各1点が出土している。前者の下駄は7号井戸跡(DN7)底面から出土で斜めに上半分が欠損している。後者の木椀は、口縁部が僅かに内反するかわらけ状の浅い椀形態が特徴で、ロクロ成形による挽き物である。全面に漆を施し底部には低い高台をもつのを特徴とする。



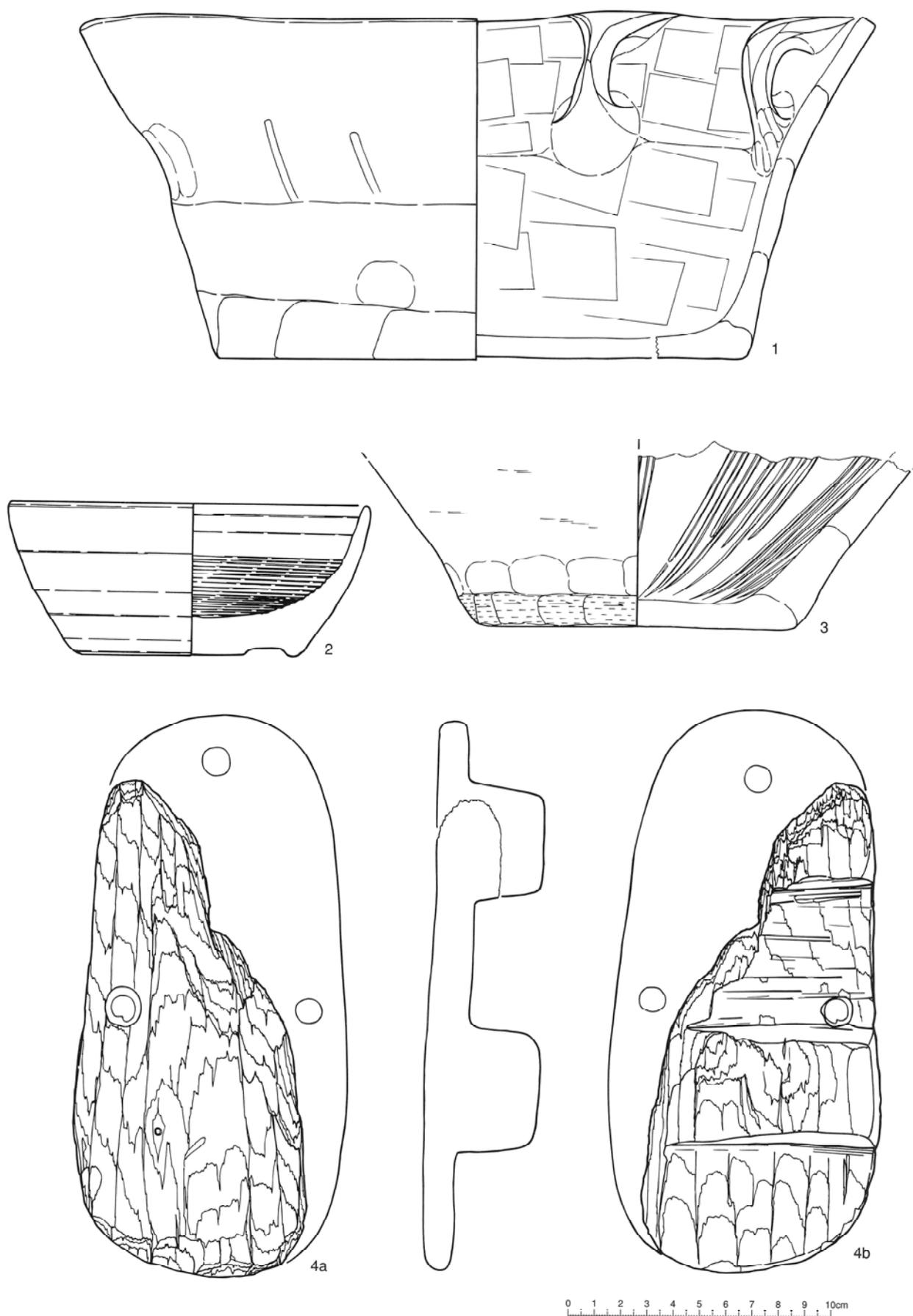
第84図 館山北館跡出土遺物実測図 (1)



第85図 館山北館跡出土遺物実測図 (2)



第86図 館山北館跡出土遺物実測図 (3)



第87図 館山北館跡出土遺物実測図 (4)

(8) 古銭「第85図1～13・第20図版1～14・第21図版1～14」

中国北宗時代の宗銭「熙寧元宝」(A. D. 1068) 1点、「元豊通宝」(A. D. 1078) 1点、明時代の「永楽通宝」(A. D. 1408) 10点、「宣徳通宝」(A. D. 1433) 1点の計13点が井戸跡や柱穴跡の遺構及びその周辺を中心に出土している。井戸跡が機能を失ったもしくは、井戸を破壊して埋め戻した際に埋納したものと推測される。他に表土から出土した「寛永通宝」1点がある。

## 第2節 総括

### 1. 伊達氏関連の主要城館跡

置賜地方に分布する城館跡は、平成14年現在で545箇所を数える。その中で大半を占めるのが平地に築かれた平城の仲間であり、全体の約75%に相当する410箇所が確認されている。平城の多くは、平地に存在することもあって宅地造成や開田等の開発の影響で消滅した館跡も少なくない。また、主体を占める平城の多くは、小規模な地元豪族の居館跡や名主等の屋敷跡と推測されるものであり、城(屋敷)が築かれた時期や居館主の伝承等の情報がほとんど残されていないのが現状である。

さて、館山城を含む山城としては126箇所がある。これらの山城は、伊達氏に係わりを有する城跡と推測しているが、先の平城と同様に築城年代や城主を具体的に把握できる資料は極めて少ない。この背景には、天正19年に豊臣秀吉の奥州仕置によって、置賜地方の伊達氏支配に終止符が打たれ、岩手山に移転せざるを得なくなった急速な廃城の混乱が大きく作用しているものと推測している。ここでは、館山城が成立した段階から城の終焉までの時期に存在していたと考えられる主要な城を紹介しながら館山城の特色を考えてみたい。

#### 1 前の在家城「第88図」

標高430mの山頂を中心に、手前の西曲輪群、尾根を隔てて東側に面した東曲輪群、その曲輪群と接続するように南側に築かれた南曲輪群の三方の尾根に沿って南北310m、東西420mの範囲に分布している。三者の曲輪群は、主要曲輪を区画するように配された帯曲輪で接続するのが特徴で、曲輪群の両端に防備を前提とした堀切が設置されている。

これらの曲輪群は、階段状に連続したテラスをもつ東曲輪群、帯曲輪を多用して階段状に配した西曲輪群、重餅型の主廓が特徴の南曲輪群と曲輪を構成する遺構によって異なっている。このことは、個々の曲輪群の成立に年代幅を示しているものとみられる。

予測される曲輪群の推移としては、東曲輪→西曲輪→南曲輪と拡張増築して最終的な複廓式山城を形成したものと推測している。

城の年代は、初期の東曲輪群の主要遺構に階段状テラスを有していることから早坂山型に後続する15世紀後半から重餅型の主廓が出現する16世紀前半頃とみている。主要曲輪群を帯曲輪

で区画する手法は、曲輪を移動する際の道路として利用された典型的な遺構で、館山城跡も含め多くの伊達を代表する山城に用いられている。

## 2 三沢館「第88図」

米沢から板谷峠をへて福島に至る板谷街道と刈安地区から明神峠を越えて板谷に通じる両街道の要所となる山上三沢地区に存在する山城である。丘陵先端部の尾根を堀切や土塁、縦堀で切断して小規模な曲輪を構成するのが、三沢館を標準とする三沢型山城である。側面に帯曲輪を置き、暖斜面に畝状横堀を多用するのも特徴で、同類型には川西町松ノ木館、米沢市戸塚山館等がある。尾根を切断して主要曲輪を配置する山城の初現は、この三沢型と推測され、概ね16世紀の中頃に位置する。そして、三沢型から大規模に発達したのが館山城となる。

## 3 鷺城「第88図」

鷺城は、第一山城と第二山城、第一居館と第二居館から構成している。第一山城は所謂「早坂山館」であり、居館は北側の山麓にあった。その後、居館を西山麓の谷間に移動し、方形のテラス群を階段状に多様した第一居館を形成する。

一方、山城は北側の尾根に物見台を置くことで、これまでの早坂山館より西側の低い丘陵先端部に第二山城を新たに構築したと考えられる。さらに、第二山城を土塁や空堀を加えて拡張する一方で、南の谷間にも長方形テラスを階段状に構成した第二居館を配置するようになる。

この第二居館を伴った形態が鳥の鷺に似ていることから鷺城、もしくは鷺ヶ城の名称となったものといえる。「米沢地名選」文化元年（一八〇四）によれば鷺城に関する記述として次のように述べている。

- 1、戸板山館（大津土佐守）
- 2、土肥館（土肥備中守）
- 3、土肥単館（土肥多備中守）
- 4、内鷺城（子梁川泥幡）
- 5、鷺ヶ城（不祥）

米沢地名選に関しては、後世にまとめられたもので、信憑性にかけるものの、城の拡張（城主の移動）に伴って城名が変容していることは興味深い。

一方、伊達世臣家譜卷十四の百八十二には、戸板刑部左衛門重俊が伊達政宗から米沢上長井山上西方403石を所領し、天正19年冬に重俊の子安右衛門重勝と岩手山に移るとある。

上長井山上西方とは、鷺城が存在する現在の戸板地区にあたり、戸板氏が鷺城の領主であった可能性が高いものといえる。

このことを前提に遺構を分析してみると、第2山城の初期形態は、最頂部に主郭を置き、第1居館に至る尾根に腰曲輪を多用した高安型と考えられる。第2居館の新設に伴って、南側の尾根に中ノ在家型の特徴となる帯曲輪を加え、最終的に二色根型や柳沢型の特徴となる土塁と空堀で周囲を区画する形態に変容拡張した可能性が強い。

居館の変容としては、初期の第1居館が赤松山型の一部にみられる階段状のテラス群を多様し、左右の山麓斜面には中ノ在家型の側面防御としての階段状テラス及び腰曲輪群で構成している。第2居館は、亀岡館型の特徴となる長方形のテラスをほぼ一定の幅で規則的に谷間に配

置している。よって、第一居館より第二居館が後に築かれたことが判る。

従って、鷺城は15世紀前半に成立し、16世紀後半頃まで拡張や変容を繰り返して継続したものと理解される。以上が鷺城の変容を分析したものであるが、ここでいう鷺城型とは、同じ城館を拡張しながら長期に亘って継続、使用した城を指しており、特に山城を中心にした初期の城下町を形成するものを含めたものである。

この仲間には、南陽市の北館と宮沢城がある。ことに宮沢城は、約2 km四方にも及ぶ広大な規模を誇り、築城期は不明であるが慶長三年（1598）に尾崎重誉が城主になるほかは明確でない。また、宮沢城は大規模なこともあって、全体を把握した図が整っていないので分析できないことをつけ加えておく。

#### 4 二色根城「第88図」

空堀、土塁、堀切を有効に用いて山城を構築する城館址で、10m前後の大規模な堀切と二～三単位を基本とした横位の空堀を暖斜面に加えて外部施設を構成するのが特徴となる。

横状の空堀は、時に4～6条を連続させるものや土塁と併用する場合も珍しくない。こういった複数に及ぶ空堀群は、先の笹野山館型の特徴となる畝状横堀が発達した防御施設と推測されるもので、広義の畝状横堀の範疇に加えられる。

さて、本館型に属する主郭を構成する曲輪群は、外部施設の区画内に方形プランを基本としたテラス状の曲輪を緩やかな階段状に連続して配置するのが特徴で、中心となる平坦部に方形もしくは「コ」の字状に土塁を配置して主郭を置く構造となっている。区画した主要曲輪群は、主郭を構成する所謂「主郭曲輪群」と副郭に相当する「副郭曲輪群」、さらに物見台を構成する「物見曲輪群」といった複数に及ぶものも含まれる。この場合は、当初、単一の曲輪（主郭曲輪群）で存在したものに、後世の段階で新たに副郭を加え、最終的な形態として複郭式に整備していった可能性も考慮しなければならない。館山城の第Ⅲの曲輪は、まさにそれを示唆しているものといえる。

この種の山城は、最上街道沿いに集中しており、二色根館を代表に、梨郷上館、虚空蔵山館、岩部山館と南陽市に集中し、四箇所確認されている。性格としては、街道防備の主眼的な存在として構築された地方色の強い山城と思われる。年代としては、堀切や土塁の発達から16世紀中頃～16世紀後半に成立したものと考えたい。

#### 5 高畑城「第89図」

高島小学校を中心とした周辺の宅地開発によって消滅した城跡である。しかし、元禄頃の「奥州高畑之図」及び明治21年字限図によって大凡の原形を想定することが可能である。これらを元に推測されるのが、東西約300m、南北200mの西側が丸い銅鐸型を示している。土塁の幅や高さは明確でないが、堀の幅は約30mをなしていたものとみられる。城の築城は、奥州藤原一族の「樋爪五郎秀衡」との伝えもあるが、その跡を天授6年（1380）に侵攻して長井氏を滅ぼした伊達宗遠と9代政宗が置賜の拠点として修築し、元禄図程度の規模となったとされている。

以後、伊達氏・上杉氏・幕府直轄・織田氏らの居館、陣屋等となるが、増幅された記述が認められないことからほぼ戦国時代の形態を留めていたと推測される。記録としては、「晴宗公采地下賜録」に「たかはたけのたてめくりのやしき並まちやしき小築川尾張守」とあることから、伊達晴宗の命を受けて小築川尾張守が高畑城を守護していたものとみられる。

## 6 成島館「第89図」

広幡町成島の成島八幡神社境内一帯を含む丘陵と山麓に立地している。主郭の規模は、約80m四方で、東南部が南北にせり出してはいるが、堀を加えればほぼ一町四方を前提とした単郭式の丘城に分類される。根小屋は、西山麓から大胆に掘り下げた縦堀を加えることで主郭との境をなし、山腹に腰曲輪、平地に小規模な土塁と堀、溝などを多用して方形条の曲輪群を構成している。城館跡の性格であるが、歴史的な成島神社の存在を考慮すれば、神社とは密接に係りを有するものと考えられる。成島神社は、古来より長井、伊達、上杉氏などの地頭、領主、藩主によって守護されてきた神社でもあり、成島神社の本殿、拝殿の造立・修理・寄進を示す棟札が43枚、46面が現存している。この中で最も古い棟札は、正安2年（1300）6月6日と17日の2枚で、時の地頭長井掃部守大江朝臣宗秀が本殿と長居の修理を行った旨の記録がある。

その他の主な棟札としては次の様なものがある。

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| ○正安2年（1300）長井宗秀 本殿・長居修理 | ○貞和4年（1348）長井時春 本殿修理  |
| ○永徳3年（1383）伊達宗遠 拝殿造立    | ○明德元年（1390）伊達政宗 門殿造立  |
| ○文明10年（1478）伊達成宗 社檀造立   | ○明応2年（1493）伊達尚宗       |
| ○天文22年（1553）伊達晴宗 宮上葺修理  | ○元亀4年（1573）伊達輝宗 宮上葺修理 |
| ○天正16年（1588）伊達政宗 宮上葺修理  | ○元和7年（1621）上杉景勝 宮上葺修理 |

これ以降、昭和4年の棟札まで残されている。

館跡は方形単郭式で自然丘陵の一端を利用し、「L」字状の土塁と堀をもつもので、この種の城館は、初期武士団の居館形態に類似している。館跡の初現は、概ね鎌倉期～室町前半の年代が予想され、正安2年の棟札とも一致している。ただし、館跡の形態が最後まで存続していたものではなく、時代背景の中で修復、増改築が行われた可能性が指摘される。とりわけ根小屋は15世紀代の特徴を示し、主郭の西側土塁や空堀、東側の腰曲輪も戦国時代に入ってから構築されたものと考えられる。従って、この成島館は神社の建立後に神社を守護するために構築された防御施設であり、やがて根小屋や腰曲輪を追造することによって、臨時的な城郭機能を持つようになったものと推測される。

## 7 鮎貝城「第89図」

舌状に発達した最上川の河岸段丘を利用したもので、先端部の左右が主要曲輪を構成するもので、南側に「L」字状に土塁を配した主廓、別名「桜館」がある。北側は、側面に折れを設けた物見台をもつ副廓を配している。特異なのは西側に延びる変則的な曲輪群である。河岸段丘の側面から入江状に掘られた縦堀が左右から接続して曲輪群を形成している。一部には左右

からの堀が接して土橋状になっていることを考慮すれば、方形を基本とした曲輪群が連続して配置されていた可能性もある。現況での東西約660m、南北約250mを測る。

鮎貝城は、応永3年（1396）に鮎貝成宗の築城と伝えられている。鮎貝氏は成宗の後、宗盛→定宗→盛宗→宗重→宗信と相続するが、戦国大名として成長してきた伊達氏の支配に服属しても、鮎貝郷を中心に一円所領を有する領主として独自性を保っていた。天文の乱（1542～48）で敗れても、晴宗から「一家」として処遇されている。その後も宗重は、伊達輝宗の重臣として仕え、伊達輝宗が隠居して息子の政宗に家督を譲った天正12年（1584）には、館山の隠居所が出来上るまで輝宗は鮎貝宗重宅で起居している。

だが、鮎貝宗信の代になると急変する。天正15年（1587）10月14日、宗信は最上義光と結んで伊達政宗に謀反を企てる。政宗は、町曲輪に押し詰めて火を放し、落城させて鮎貝氏は滅亡となる。翌年の天正16年（1588）4月20日には、御代官衆の手によって「要害普請」が実施され、荒砥城と同一に伊達氏の改修が加えられている。天正19年の伊達氏移封後は、蒲生氏・上杉氏をへて寛文5年（1665）からは、本庄氏が御役屋将として明治まで居住していた。

## 8 荒砥城「第89図」

最上川の右岸に位置する比高差30mの単独丘陵で、別名「八乙女城」とも呼ぶ。丘陵の山頂部を一町四方に整形して中央に段差を設けた主廓に、西側から南北に巡る幅広の帯曲輪を置く。主廓の南側には、幅約50m、長さ約130mの空間を有する副廓が設置され、急勾配の裾を廻るように堀が設置されている。

東側に行くと帯曲輪と腰曲輪を多用した櫓形及び大手口の施設がある。北側は、大手から続く帯曲輪を隔てた裾に堀を配している。西側は大規模な空堀りが塞ぎ、堀底道を利用した搦手が主廓へと接続している。さらに、城の南北から西側には城下町が形成されている。城の形態は、中央の主廓を中心に帯曲輪や腰曲輪が所謂「巴」状に配していることから、広義の櫓塚館型に分類されるものと考えている。築城者については定かではない。ただ、荒川次郎清泰が永長年間に城を築いたものを元中年間に馬場将監が堀を廻らして城を整備したとされている。

伊達氏支配の荒砥郷には、荒砥・桑島・松岡・大立目らの各後続の所領があったが、荒砥城主には、荒砥氏と大立目氏が確認できる。最上郡に接する荒砥城は、鮎貝城とともに伊達領国の重要な要害であった。天正2年（1574）から始まる最上氏との戦いでは、一時、伊達輝宗の本陣も置かれるなど、史料にも度々登場している。

## 9 長手館「第90図」

長手館跡は、標高370mの古館山から北に張り出す丘陵先端部の「山城」とその南側に面した山麓から平地にかけて存在する「居館」とに大別される。前者の山城は、山頂を整形した山頂から腰曲輪とテラス、それに帯曲輪を組み合わせた典型的な重餅型の山城である。居館に接続する東側には堀切が存在し、平城の主郭に付随する搦手の堀底道となっており、山城の大手口にも接続するなど戦略的にも重要な意味をもつ。

主郭は、土塁と堀で二重に区画された南北100m、東西50mの曲輪Ⅰと想定され、南に隣接した「コ」の字状のテラスが大手口と推測される。さらに大手曲輪と主郭の角には土塁で囲まれた水の手曲輪が付随している。

長手館は、山城と平城が隣接して共存する典型的な城館跡であり、類似するものとし高島町の亀ヶ森館がある。城主は伊達氏の家臣、網代伯耆守であり、天正19年（1591）伊達氏とともに岩手山に移り、伯耆を伊予と改め、添川を賜り某所に居住したと伝えられている。

#### 10 亀岡館「第90図」

帯曲輪で区画した範囲に重餅型にテラスを多様して主郭を構成するもので、基本的には米沢羽山型と共通するものといえる。ただし、山麓に方形のテラスを階段状に配置した根小屋を伴うことからむしろ長手館に近いものといえる。平地に存在する一町四方の西館は、亀岡城に先行するもので、階段状テラスを用いた小規模な山城の小館山との関連性を考えている。

年代的には、米沢羽山型と並行するかやや後続するものとみられ、概ね16世紀中葉頃に出現したものと推測される。注目されるのは、かつて伊達輝宗の重臣であった茂庭（鬼庭）周防良直の居館跡「川井館山」の山麓に存在する菩提寺「桃源院」の寺宝として連絡鐘が大切に保管されている。その鐘の用途については、長手館や亀岡館にも同様な鐘が設置され、情報伝達を行っていた旨の記述が伝えられている。実際、当時の米沢城から茂庭街道に通じる路線には、川井館、長手館、亀岡館が存在しており、さらに二宿大塚街道に接続する要でもあった。

#### 11 原田館「第90図」

空堀（水堀？）と土塁で区画する南北60m、東西62m規模の平城は、本丸と二の丸で構成されている。主郭となる本丸は、3m前後の空堀と低い土塁で南北40m、東西35mの方形状を有し、南西に土橋を伴う虎口をもつ。二の丸に当る空堀は、北東部の大手から内側に土塁を配置するもので、本丸の土塁と接続する溝で東西を区画して空間を設けているが、本丸を全周するように廻している。西側に関しては、田開によって堀の一部が消滅しているが、現在の道路部分が堀に相当するものとみられる。大手口は北東部に当り、南に付随する土壇状の高まりは物見台と推測する。地元では、伊達家臣の原田甲斐の居館と伝えられている。

米沢周辺で本丸と二の丸が明確に区画されている城としては、米沢城跡、我妻館、中川原館の3箇所が発見されている。原田館も小規模ではあるが、所謂「戦国末期」の二重構造の平城に分類されるものである。また、本館の南東約300mには、初期二重構造となる我妻館も存在していることから関連性が指摘される。時期的には戦国末期と推測されるが、伝承の原田甲斐氏とのつながりは文献的にも乏しく実証するには至らない。

#### 12 赤芝館「第90図」

館山城を起点に、築沢道をへて会津街道に通じる街道と小野川温泉を經由して会津街道に接続する重要な分岐点に位置している。館山城からは南に1.7kmの地点にあたる。斜平丘陵から流

れるおその川と大樽川に挟まれた丘陵の先端部に立地するもので、東西の全長が約300mをなす。尾根の西側にはテラス状の曲輪群を階段状に配した中心に方形の主廓を設置している。主廓の北側には土塁、さらに斜面を短い帯曲輪と腰曲輪を多用し、東側に変形の柵形と虎口を設けている。そして、主廓曲輪群を囲むように南側から西側に人工斜面を隔てて空堀を廻し、3段の帯曲輪を接続している。東に延びる尾根には、左右に配する階段状テラスを置き、中央部に小規模な堀切がある。全体的にはかなり変則的な形態を示しているが、主廓の構造は三沢型の特徴と空堀や帯曲輪で区画する手法は鷺城の第2山城にみられる。こうした特色を考えれば、三沢型の変形ともいえる。従って城の年代も16世紀中頃に築かれたものと推測される。

### 13 古志田館「第90図」

南北を主軸長とする複郭式の平城跡で、南北180m、東西80mをなす。曲輪は、山麓を削平してテラス状の平坦面を構築するのを特徴とし、主郭となるほぼ方形の曲輪Ⅰは長径70m、短径60mと館山城の主廓に匹敵する。北側には、2m前後の段差をなして50m×18mの長方形の低い曲輪Ⅱ。さらに1.5mの段差を有した70m×50mの曲輪Ⅲの3曲輪で構成している。

曲輪Ⅰの南側には南からの敵の侵入を防御する幅18m、高さ4mの土塁と幅28m、深さ5m前後の堀切が付随し、北側の尾根を整形して土塁と同じ効果を加えている。虎口は、曲輪Ⅰの南に延びる腰曲輪から柵形に入り、虎口より曲輪Ⅰに通じている。

米沢古志田館は、斜平丘陵の山麓を利用して構築した所謂「山寄式」の丘城で、同形態をなす中田町の大浦館跡も掘立川と旧河川の自然堤防を縦堀で区画した平城である。全体的な構造は、館山城型に類似しているが、記録及び伝承等は残っていない。

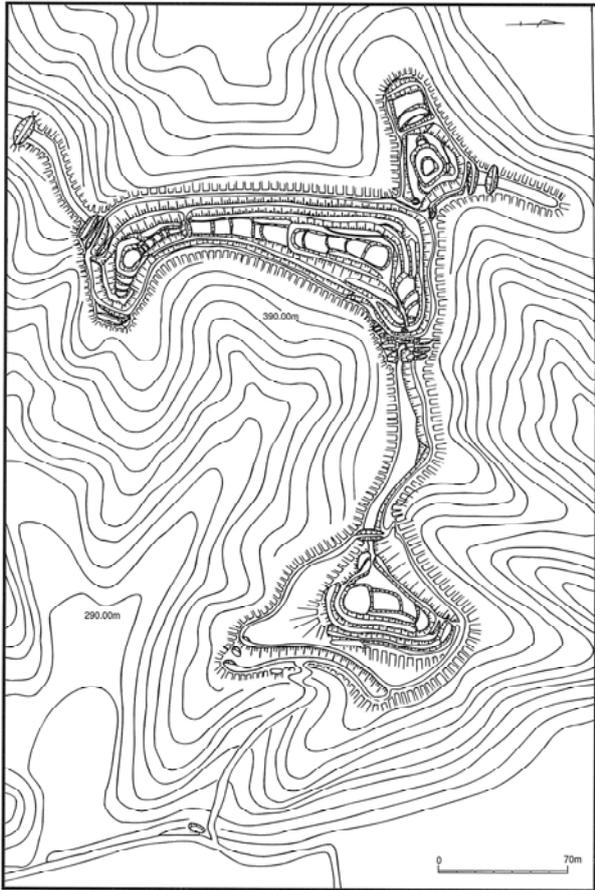
一方、古志田館跡から東に約2kmに位置する繰返館は、昭和40年代の土砂採集によって、消滅した山城であるが、昭和37年の柏倉亮吉氏による調査報告や現存する写真などから、ほぼ館山城と同形態であることが確認されている。

このように、館山城型を有する城形態は、山城・平城を問わずに存在しており、確立した形態の一種だった可能性もある。

年代は、大浦C遺跡より多量に出土した内耳取手の土塼の年代を参考にするならば、少なくとも15世紀後半～16世紀前半まで遡る可能性もあるが、大規模な土塁と堀切を特徴とした最終的な館山城型に発展するのは16世紀後半とみたい。

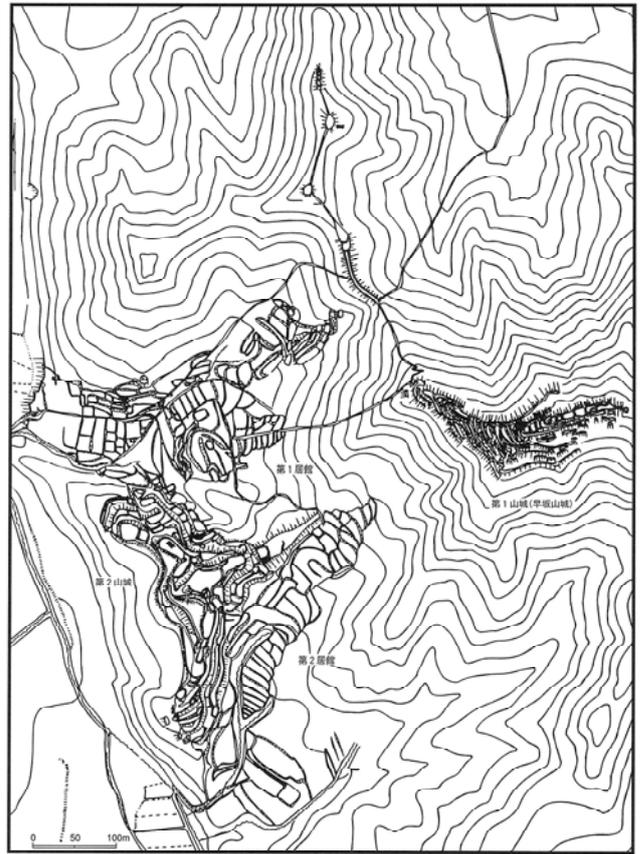
### 14 上ノ町館「第90図」

館山城から小樽川を約3km遡った左岸に一町四方の単廓式の平城がある。田沢村の在地豪族の新田遠江守・同美濃守の居館跡と伝えられる城跡で、現在は開田によって失われ、南側の一部に痕跡を留めるのみである。城は、南側を河岸段丘の自然面を利用し、東西と北側の3方を土塁と空堀で区画している。上ノ町館の存在する位置は、大峠喜多方街道をへて福島抜ける街道沿に面し、大舟道から越後街道に通じる分岐点にも当たる重要な場所でもある。前述の赤芝館と同様に館山城の左右を貫く街道を防御する目的で築かれた可能性を示唆する。



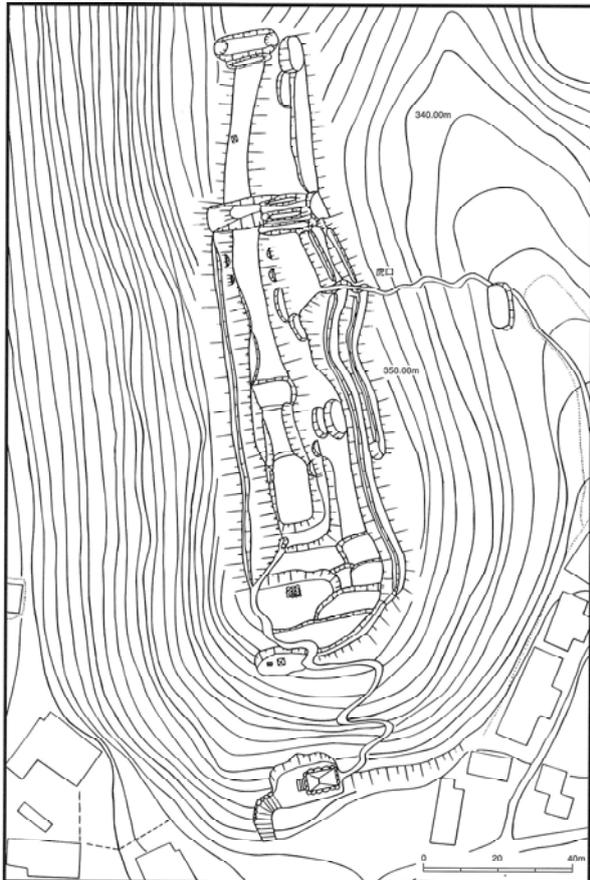
1 前の在家城略測図

1999.9



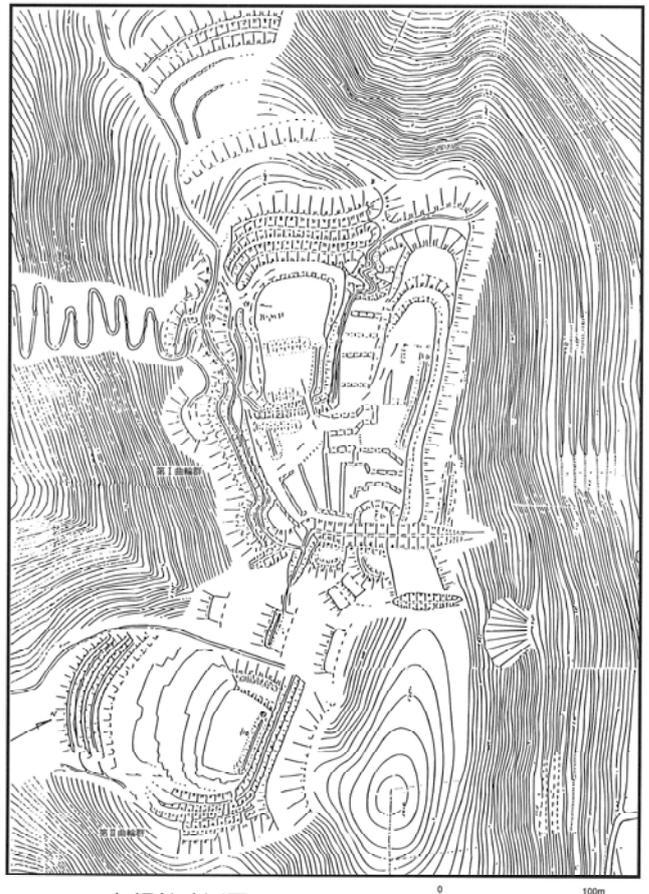
3 驚城略測図

1990.11



2 三沢館略測図

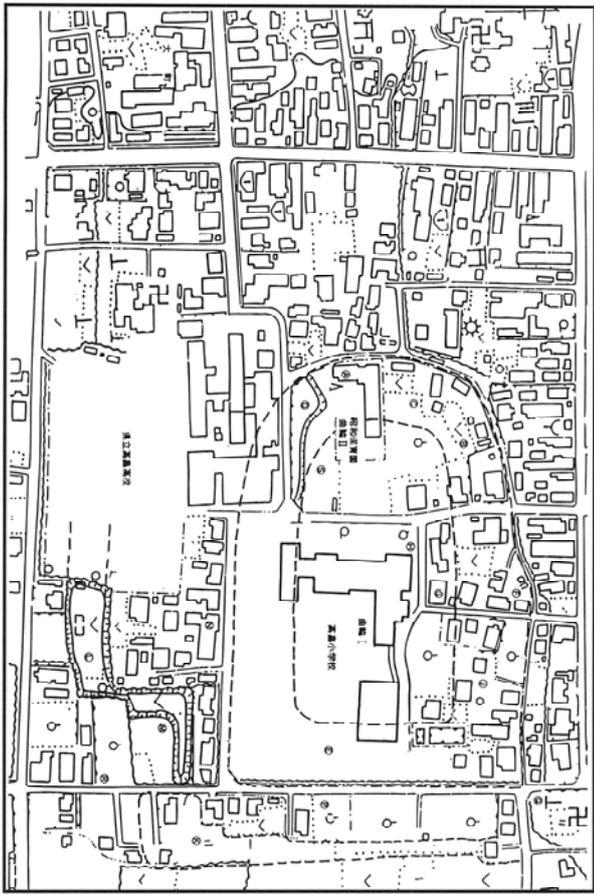
1988.8



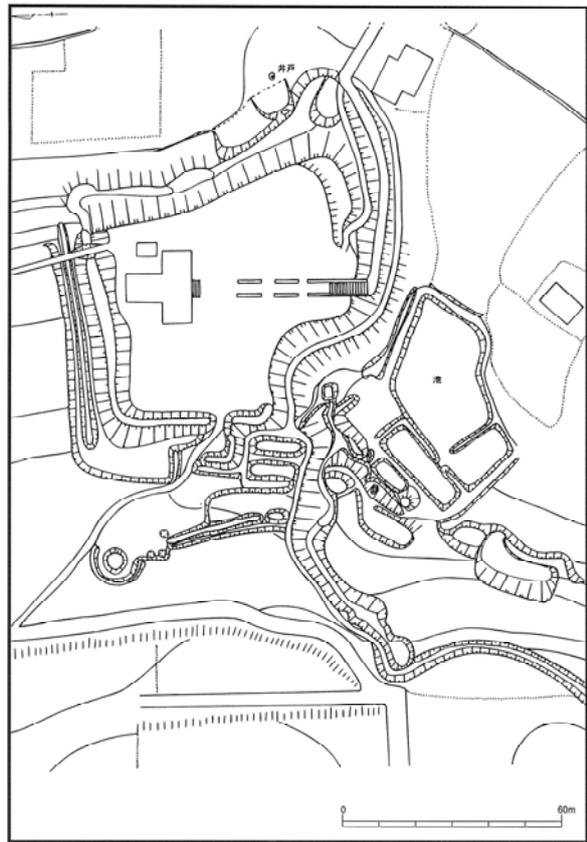
4 二色根館略測図

1989.12

第88図 館山城関連城館跡縄張図(1)



5 高畑城略測図



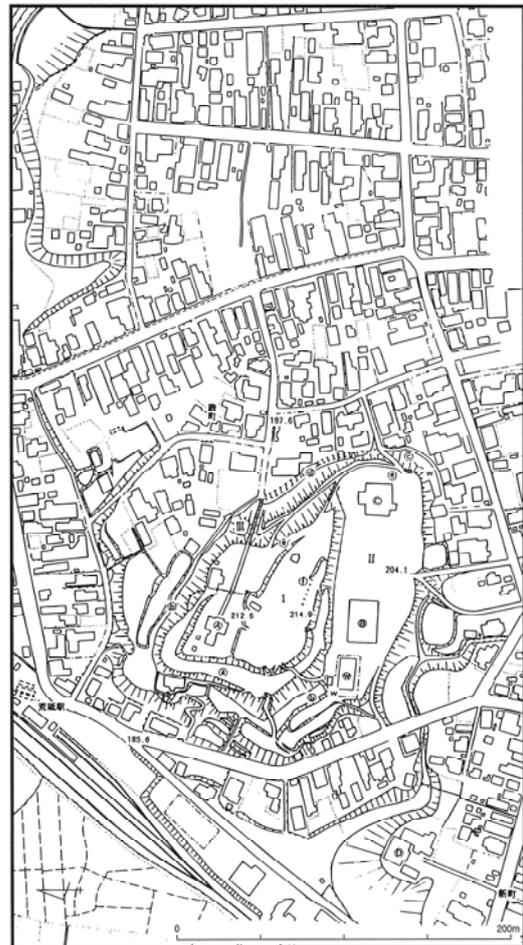
6 成島館略測図

1990.9



7 鮎貝城略測図

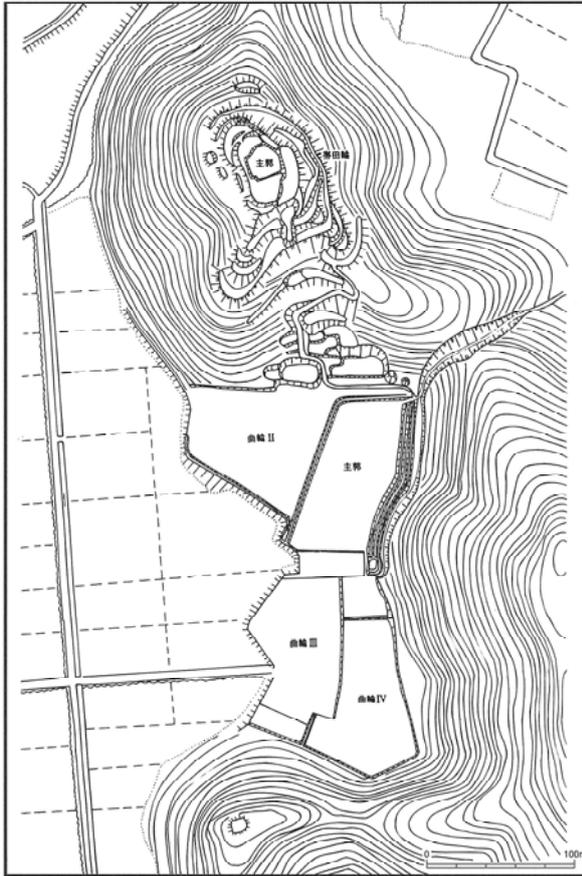
1994.12



8 荒砥城略測図

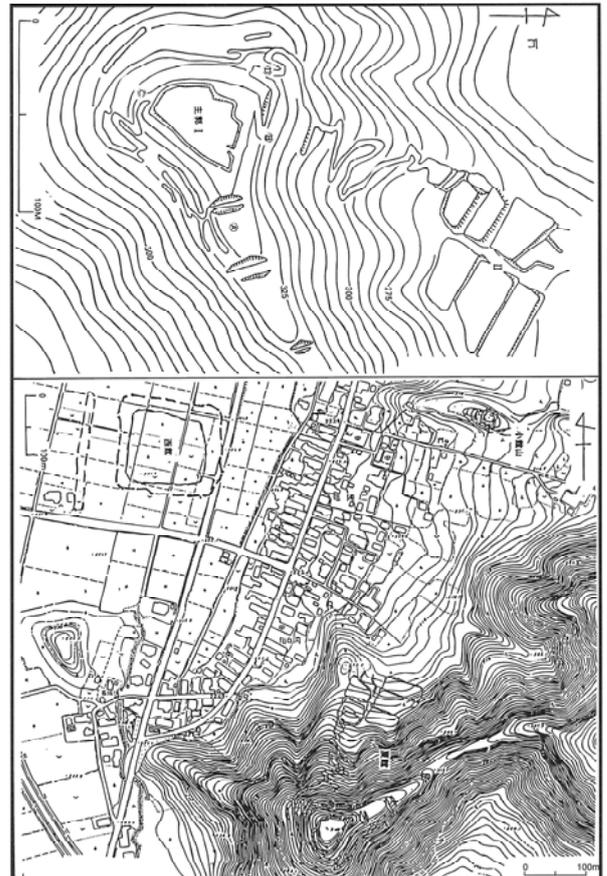
1994.12

第89図 館山城関連城館跡縄張図(2)



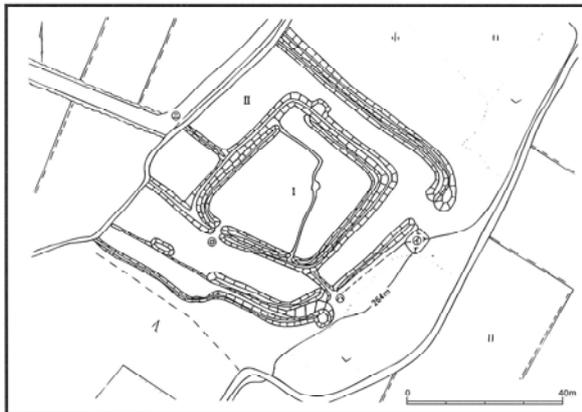
9 長手館

1988.10



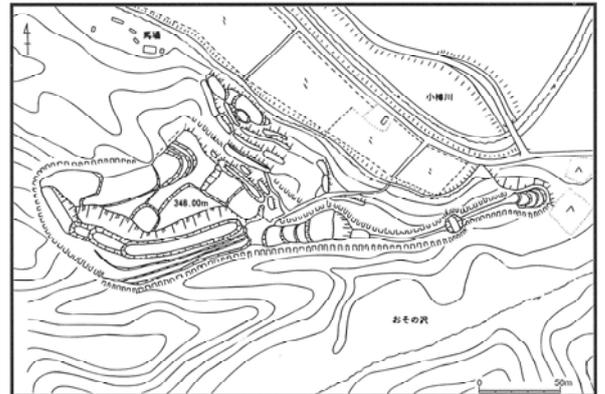
10 亀岡館略測図

1990.2



11 原田館略測図

1988



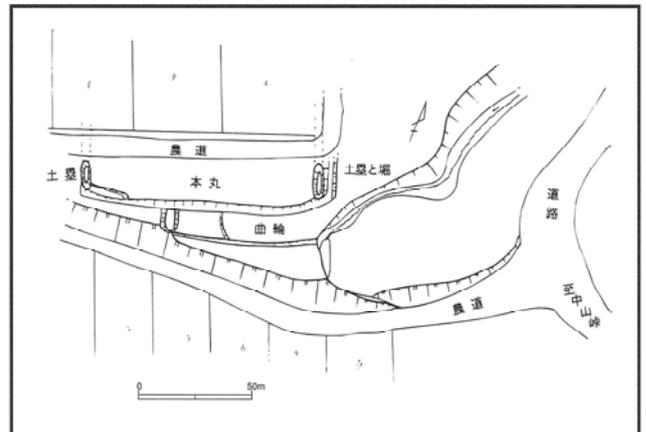
12 赤芝館略測図

1992.9



13 古志田館略図

1994.12



14 上ノ町館跡略図

第90図 館山城関連城館跡縄張図 (3)

以上、伊達氏に係わる代表的な城について述べてみたが、山城の機能を前提に分類すると次の4のグループに分けられる。

第1のグループは、恒久もしくは臨時的に街道沿や幹線道路に配備された小規模な山城で、敵の侵入の監視や防備を目的に築かれたものであり、有事の際には臨時の支城となる場合もある。伊達領から最上領に通じる小滝街道や最上街道を中心として、置賜地方の山城では最も多く存在している。

第2のグループは、山全域を城の拠点とする城館跡の仲間であり、山城を中心として周囲に大規模な城下町を形成するものと山城だけで機能させた二者に区分される。前者は、白鷹町の荒砥城・鮎貝城となる。後者は、南陽市の二色根城、米沢の鷲城・成島館などがある。県外では、上杉氏の春日山城や織田氏の安土城、伊達氏の青葉山城等がその代表となる。

第3のグループは、山城と居館（平城）を並立させた城館跡である。通常は居館となる平城を拠点とするが、敵の侵入や有事の際に拠点を山城に移して籠城や合戦する目的がある。ただし、この種の山城の関しては、常時一定の兵を山城に駐屯させた「配備型」と有事に応じて軍を臨時的に配備する「臨時型」とに分けられる。前者は、主城や戦略拠点のような大規模な城に多く、南陽市の宮沢城や米沢市の館山城がその代表となる。後者の臨時型は、街道警備を目的に配備された小規模な城館跡に多く、米沢市の長手館跡・三沢館、高島町亀岡館跡など置賜地区に30箇所近く存在している。

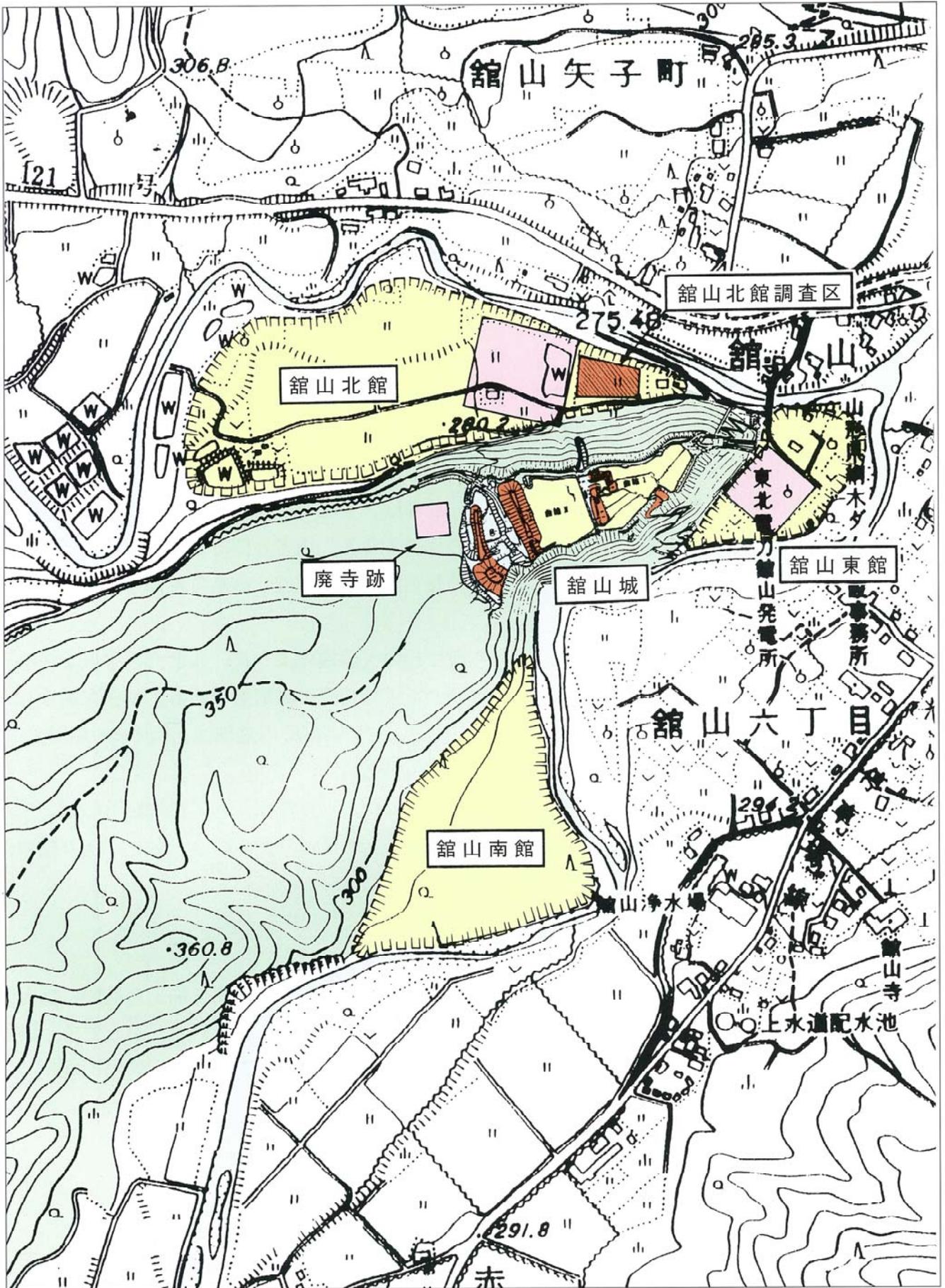
最後の第4のグループは、徳川氏の江戸城や豊臣氏の大坂城のように、複廓式の平城を中心に配置し、周囲に大規模な城下町を形成する典型的な近世様式の城形態である。戦国末期から出現し、江戸時代以降の大半の城はこの形態が中心となる。高島町の高畑城、米沢市の原田館・米沢城（上杉氏）、山形市の山形城（最上氏）などが代表といえる。

館山城は、第二の城の形態に分類される。この場合、山の城を館山もしくは城山と呼び、居館と区別する名称で呼ばれるのが通常である。例えば、上郷地区の長手館の「城山」、川井館の「館山」など地名として比較的多く残っている。

## 2. 館山城跡及び館山北館跡の性格

館山城の範囲は、前述したように館山北館、同東館、南館を含む平坦面を加えた範囲に拡大するものと考えられる。大樽川と小樽川の自然要害を効率よく利用したもので、かつて古い橋脚が存在したと伝えられる東館から館山平城に接続していたものと考えられる。館山平城の範囲としては、第1図に示した館山一丁目から館山六丁目の範囲を示しており、南北1.2km、東西1.5kmの広大な範囲である。

特に、一ノ坂付近から南北に配されていた堤防状の土塁施設である「並松土手」は、これまでの分布調査によって、幅約5m、南北の長さが約1.3kmで西側に約4m前後の水堀が付随していたことが判っている。この並松土手は、上杉氏が最上氏との合戦を想定して築いたとする説もあるが、上杉氏の居城である松岬城「米沢城」の防備とするには、距離や選定場所において不自然である。むしろ、館山平城の東側防御として設置されたものと想定される。



第91図 館山城跡範囲推定図

さて、館山城の性格であるが、おおまかにいえば次の三者に分けられる。

- (一) 伊達の主城とする説。
- (二) 伊達輝宗の隠居跡とする説。
- (三) 伊達氏の家臣の城とする説。

特に(一)の主城とした場合、伊達の主城となる米沢城の存在が問題となってくる。米沢城は、伊達晴宗が高島城から移ったとされる城で、上杉氏の米沢城（松ヶ岬城）を米沢城とする考え方と、館山城を米沢城とする考え方に別れる。

(二)の輝宗の隠居跡に関しては、伊達治家記録によると天正13年（1585）館山に隠居所を造りと、具体的に「館山」とある。館山は、既に述べているように館山城及びその周辺の三箇所の曲輪を指している公算が強い。その館山東館と今回の調査を実施した館山北館の西側には、一町四方に区画された館跡が存在する。しかも、確認された建物群が、V期以降に東側の建物群が構築されないといった傾向は何を意味しているのだろうか。一つの可能性として、館山東館跡に輝宗の隠居跡が存在したとしても特に違和感はない。

(三)の伊達家臣の城、つまり、田沢村の在地豪族の新田氏の居館とする考え方は、既に述べているように上ノ町館の可能性のが高いものと確信している。

さらに、天正15年（1587）正月11日には伊達政宗が自ら館山に赴いて地取、2月7日再び同地に赴いて縄張り（測量）を為し築城計画を開始した旨の記述からは、政宗が館山城をさらに拡張して大規模な城廓に改変しようとした意図が読み取れる。事実、館山城の物見台の西側には広大な平坦面には、人工的に手を加えたと考えられる不自然な痕跡も残っている。おそらくは、標高350m付近までを前提に拡張を考えていたのかも知れない。

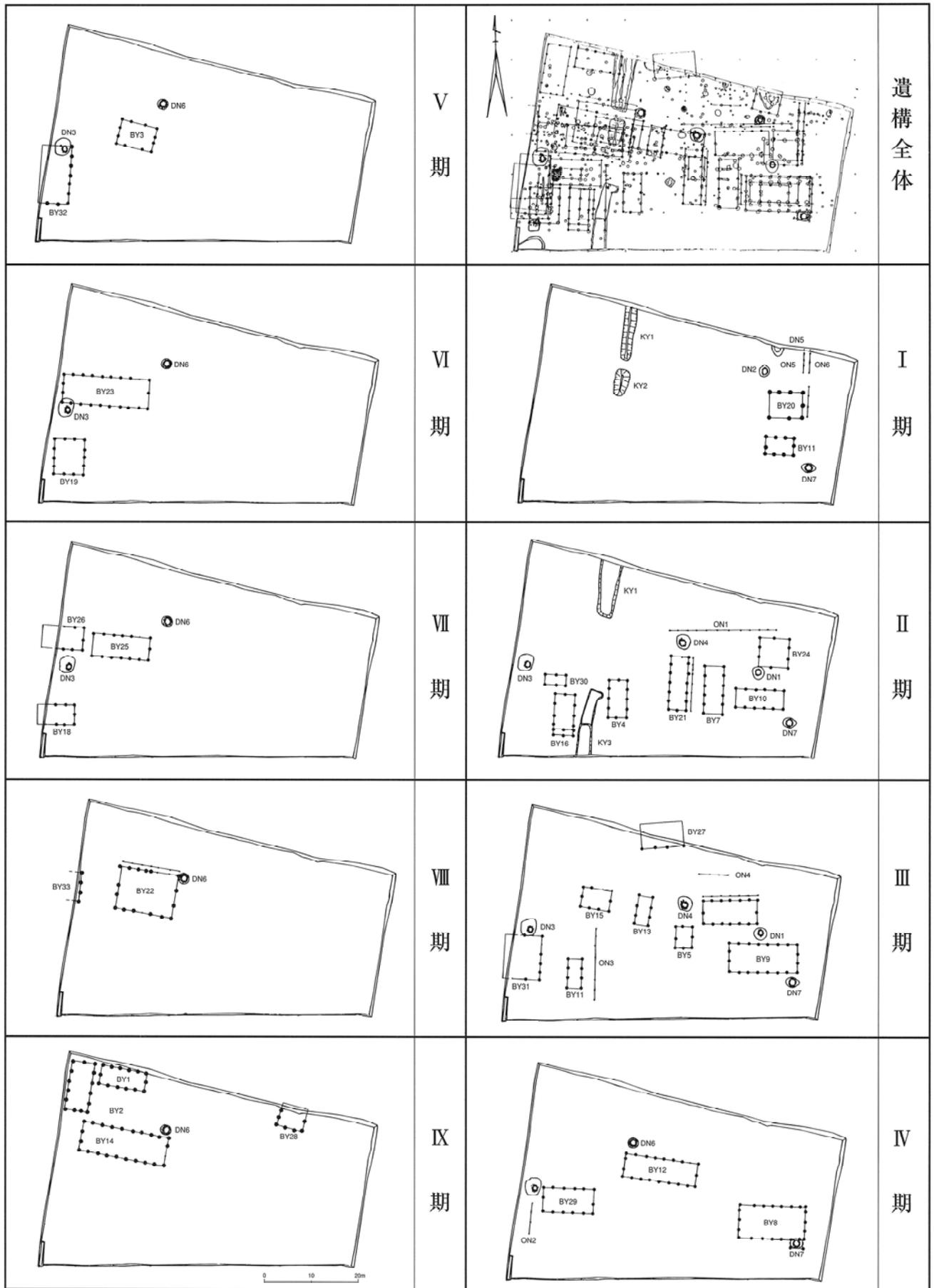
以上のことから館山城は、恒久的な山城として伊達氏が主城として築城したと推測される。館山城を中心とする山麓には、館山北館を含む3箇所の広大な曲輪を配置し、屋敷群が整然と配置され、多数の兵力を駐屯させていたものといえる。

伊達政宗は、天正19年に当地米沢を去り、岩出山に移って拠点とした。その後、青葉山に大規模な山城を築くが、その両者の城とも左右を河川に囲まれた舌状丘陵と館山城の地理的環境に類似している。館山城を意識したと考えざるを得ないのである。

### 3. 館山城跡及び館山北館跡の年代

館山北館の調査で明らかとなったように、平坦面「曲輪」には屋敷が整然と配置されていたと想定される。しかも、建物は時代に応じて母屋と付属施設を加えた複数の建物群で構成されており、9期の変遷を有していたことも判っている。しかしながら、これらの建物の時期を明確に決定する資料は得られていない。

そこで、置賜地方全体の城館跡の形態と遺構の特徴から想定すれば、発達した土塁と堀切に柵形を伴っている。曲輪Ⅲに残る階段状の発達したテラスは、三沢館や鷺城の第2山城、二色根館の第1曲輪群の特徴をもっており、概ね土16世紀の中葉～後半にみられる手法である。土塁の一部の食違いと曲輪Ⅰの方形の虎口は、長手館や亀岡館に存在し、16世紀中葉となる。さ



第92図 館山北館跡遺構変遷想定図

らに曲輪Ⅰと曲輪Ⅱを囲むように側面を走る帯曲輪は、移動を前提とした道路である。こうした帯曲輪が具体的に出現するのが、15世紀後半の中の在家館からで、16世紀中葉頃まで継続盛んに用いられた特徴である。

こうした遺構の特徴から判断される年代は、概ね15世紀後半～16世紀後半となる。また、出土した土塼は、大浦C遺跡の堀内出土の内耳取手をもつ土塼の類似性から16世紀前半～16後半頃と推測している。よって、館山城が成立し廃絶した時期も概ねこの範疇に加わっているものと推測される。

#### 4. 要 約

館山北館は、初期の館山城の築城に伴って成立したと考えられる。当初は、薬研堀と箱掘で区画した小規模な館跡に近いものと考えられる。建物には、井戸跡が付随する屋敷が真北方向に配置され、個人単位で機能していたものと推測される。

その後、館山城の整備の関係で掘跡が埋め戻され、新たな屋敷群が配置されたものと推測される。建物の重複関係から想定される建替えは少なくとも9時期で、出土した遺物から想定される年代は、16世紀前半～16世紀末とみるのが妥当である。前述したように館山城に関する考え方は、館山城を→主城（米沢城）とする説と構築途上で断念した説が有力であったが、少なくとも館山城の築城と同時期に屋敷群が配置されていたことは明らかとなった。内耳把手を有する土塼からは、伊達氏に係わる遺跡であることは明白である。

今回の調査は、館山城の山麓に広がる北側の平坦面の館山北館の一部を精査したに過ぎないが、東側の館山東館や新たに確認された南側の館山南館についても同様な建物群を配置していた可能性がある。これら三箇所曲輪群は、館山城の築城に伴って配置されたことは言うまでもないが、館山平城の関係を重視するなら、館山城→館山東館→館山北館→館山南館の順で館山城の拡張に応じて整備されていったものと考えている。今後は、曲輪群の役割と性格についても追求していかなければならない。

それとともに、東館と北館に存在する一町四方の遺構も重要となる。特に、館山北館に関しては、一辺約120mの土塁と空堀で区画されたもので、ある特定の重要な人物の居館跡であった可能性が高い。とりわけ、伊達輝宗の隠居所の所在については、館山北館を含む館山城の一角に存在していたと考えるべきで、新たに検討する必要があると出てきたといつてよい。

さらに、館山城の西側の尾根に残存する不自然な遺構は、伊達政宗が天正15年（1587）に拡張整備を検討していた可能性を具体的に示唆するものである。一方、3箇所の平坦面（曲輪）は、館山城（山城）を両翼で防御するように配置するのが特徴で、総曲輪を前提とした最終的な意図を示しているものであろう。

館山の機能や性格については、今後の調査や検討を待たないと明確にできない部分もあるが、館山城の規模や形態、建物群の配置等から考えた場合、伊達氏の居館（山城）と推測するのが妥当といえる。築城から廃絶までの時期は、概ね16世紀前半～16後半頃と想定され、伊達氏15代伊達晴宗～17代伊達政宗までに相当する。

## 米沢城・舘山城関係資料（治家記録）

・永禄八年（一五六八）五月 御父左京大夫從四位下晴宗入道道祐君隱居シ給ヒ、公御家（輝宗）督ヲ統（繼）キ給フ。公ハ出国羽

置賜群長井莊米沢城ニ御座ス。

・永禄一〇年（一五六七）八月 庚辰刻羽州置賜郡長井莊米沢御居城ニ於テ嗣君誕生、実ニ是伊達氏十七世ニ当リ給フ。

・永禄一三年（一五七〇）四月 中野常陸宗時・牧野彈正忠久仲叛逆ヲ謀ル、四郎（新田四郎景綱）モ与スルノ旨言上ス。御感斜ラナス。遠州速ニ四郎カ居城舘山ニ取移シ下知スヘシト仰付ラル。……中略……

新田四郎義直カ父遠州ハ此比笹平ニ隱居セラル。行テ父ト議スヘキ由ヲ答フ。宗時大ニ怒テ頼シクヒ思此一大事ヲ告ルニ、一味同心セスンハ全ク其座ヲ立セシト責ム。四郎是非ナク是ニ与ス。笹平ニテ具行ニ父ニ申ス。遠州驚キ汝チ縁類ノ好ヲ似テ累代ノ主君ニ対シ暴逆無道ノ拳動ヲ作サンヤ、必スヒ止レ思ト警ム。四郎、武士ノ一度約シテ違変スル事ヤ有ント云フ。遠州、一タヒハ怒リ、一タヒハテ言ヲ尽軟シテ制シ止ム。四郎終ニ從ハス。遠州大ニ怒テ、君ニ畔ク而巳カ父ヲ棄ル大賊、手撃ニセト刀ヲ抜クン四郎即チ逃去ル。遠州有リ合フ所ニ從者纔ニ二十人許リヲ率テ、急ニ四郎カ居城舘山ニ到ル。……中略……其夜中野常陸・牧野彈正忠、謀叛露顯シ新田四郎生捕ラルト聞テ、其黎明ニ一党ク牧野カ居悉。

城小松ニ入テ楯籠ル。此城ハ行程近ケレハナリ。此放火ニ御城下一宇モ不残焼亡ス。御ハ山上ナレ城ハハ恙ナシ。

・天正一二年（一五八四）一〇月 京大夫從四位下輝宗入道受心君隱居シ給ヒ、公御（政宗）家督ヲ嗣キ玉フ……中略……

公ハ出羽国置賜郡長井莊米沢城ニ御座ス。受心（輝宗）君ハ米沢舘山城ニ隱居シ給フ。

米沢城辺舘山ニ御城ヲ築キ、隱居所トシ給フ。其間、鮎貝安房宗重宅ニ御座ス。天正十三年ニ至テ普普成就ス。即チ舘山ヘ移住シ給フ。

・天正十五年（一五八七）二月 去月十一日舘山地取ノ絵図、老臣等ニ御談合有テ、今日御出、地割アリ。日暮御帰。

此城ハ元性山（輝宗）公ノ御隱居所ナリ。今度又普請シ玉フ。其故不知。

・天正十六年（一五八八）一月 正月甲寅大元日乙酉。米沢城ニ於御祝儀アリ。

## 参 考 文 献

- 石倉惣吉 (1952) 『置賜文化』創刊号伊達政宗はどこで生まれたか 置賜史談会
- 川崎浩良 (1954) 『山形県の板碑文化』出羽文化同好会
- 中村忠雄 (1958) 『置賜文化』創刊号17・18号「伊達政宗誕生に関する考察(上・下)付・館山城・矢子山城」置賜史談会
- 川崎利夫 (1983) 『山形県』「板碑研究の総合研究—地域編所収」
- 川崎利夫 (1984) 『まんざり』2号「置賜の経塚」まんざり会
- 手塚孝他 (1984) 『まんざり』2号「山形県における塚研究の諸問題—置賜盆地を中心として」まんざり会
- 渋谷敏巳 (1985) 『地域の地方史—社会と文化』「山形県における板碑をめぐる若干の問題—記名板碑を中心として」地方史研究協議会編
- 手塚 (1987) 『木和田館跡』「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第20集 米沢市教育委員会
- 川崎利夫 (1988) 『羽陽文化』第125号「山形県における板碑の形態と分布」山形県文化財保護協会
- 手塚他 (1992) 『大浦C遺跡』「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第33集 米沢市教育委員会
- 手塚 (1993) 『懐風』第17号「米沢盆地における中世考古学の諸問題」御掘端史蹟保存会
- 手塚他 (1994) 『米沢城跡』「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第44集 米沢市教育委員会
- 月山他 (1995) 『我妻館跡』「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第50集 米沢市教育委員会
- 手塚 (1996) 『中世における伊達形山城の成立と発展』「—東南置賜を中心として—」まんざり会
- 手塚他 (1985) 『上浅川』「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第14集 米沢市教育委員会
- 菊地 (2000) 『米沢城東二の丸跡』「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第68集 米沢市教育委員会
- 手塚 (1999) 『館山城跡』「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第66集 米沢市教育委員会
- 菊地 (1999) 『遺跡詳細分布調査報告書』第10集 <上ノ町b遺跡>「米沢市埋蔵文化財調査報告書」第54集
- 須賀井新人他 (1997) 『荒川2遺跡』「山形県埋蔵文化財センター調査報告書」第68集 山形県埋蔵文化財センター
- 山形県教育委員会 (1995) 『山形県中世城館遺跡調査報告書』第1集 (置賜地域)
- 米沢市史編さん委員会 (1997) 『米沢市史』原始古代中世 米沢市
- 山形県史編纂委員会 (1977) 『山形県史』古代中世史料I・II 山形県
- 東置賜群教育委員会編 (1939) 『東置賜郡史』下巻 東置賜郡
- 南陽市史編さん委員会 (1990) 『南陽市史』上巻 南陽市
- 川西町史編纂委員会 (1979) 『川西町史』上巻 川西町
- 高島町史編纂委員会 (1972) 『高島町史』上巻 高島町
- 鮭川村史編纂委員会 (1986) 『鮭川村史』通史編 鮭川村

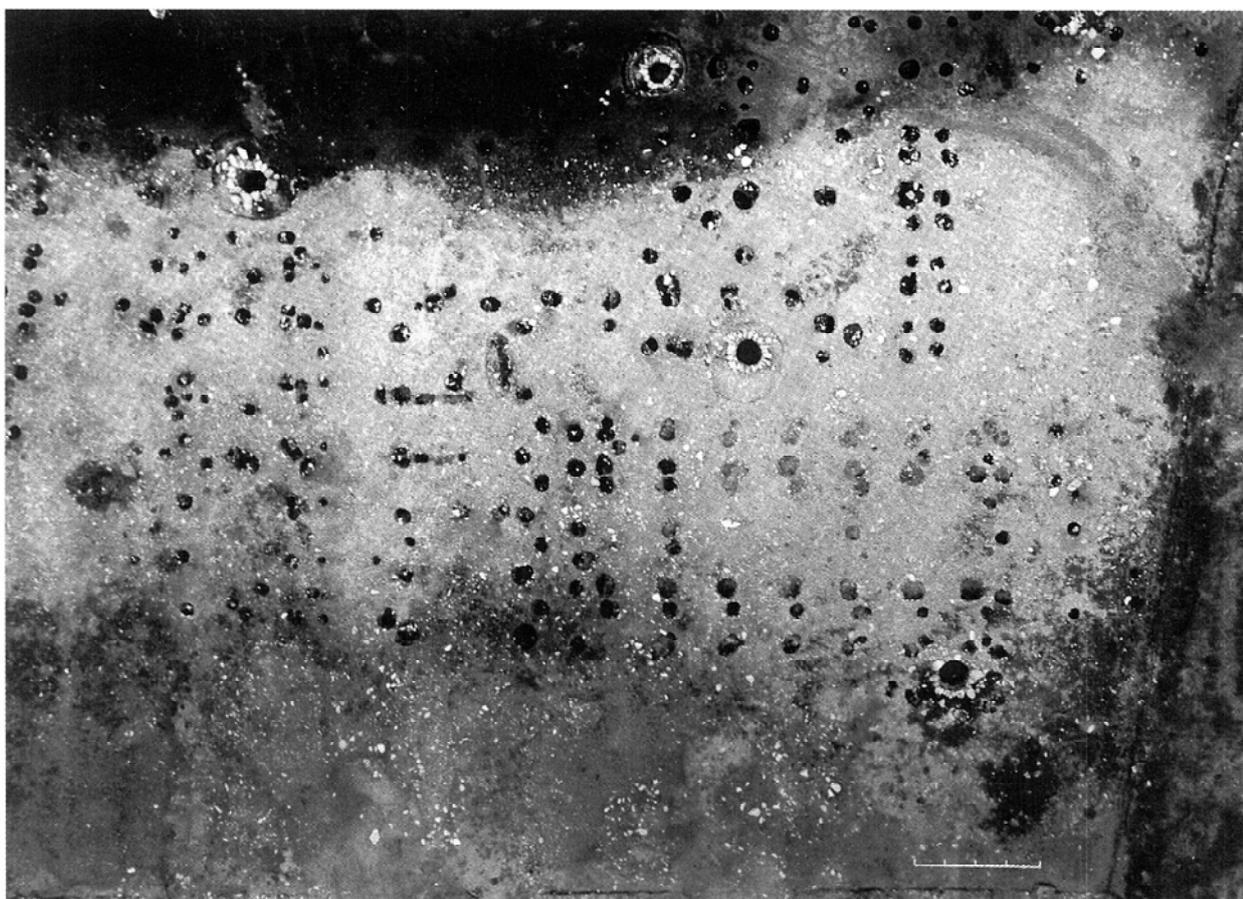
# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たてやまきたたてあと							
書名	館山北館跡							
副書名	館山北館跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第79集							
編著者名	手塚 孝							
編集機関	米沢市教育委員会							
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1-55号 TEL (0238) 22-5111							
発行年月日	平成14年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 機 関	調 査 面 積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
たてやまきたたてあと 館山北館跡	やまがたけんよねざわし 山形県米沢市  たてやまささだいらした 館山笹平下 1733-1	6202	米沢市 遺跡番号 G-649	37度 54分 33秒	140度 4分 0秒	20010510 ) 20010921	2,500	養魚池 造成工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
館山北館跡	城 館 跡	中 世	掘立建物跡・堀跡・ 井戸跡	石器・土埴・陶磁器 類・土鈴		伊達氏の居城		

# 写 真 图 版



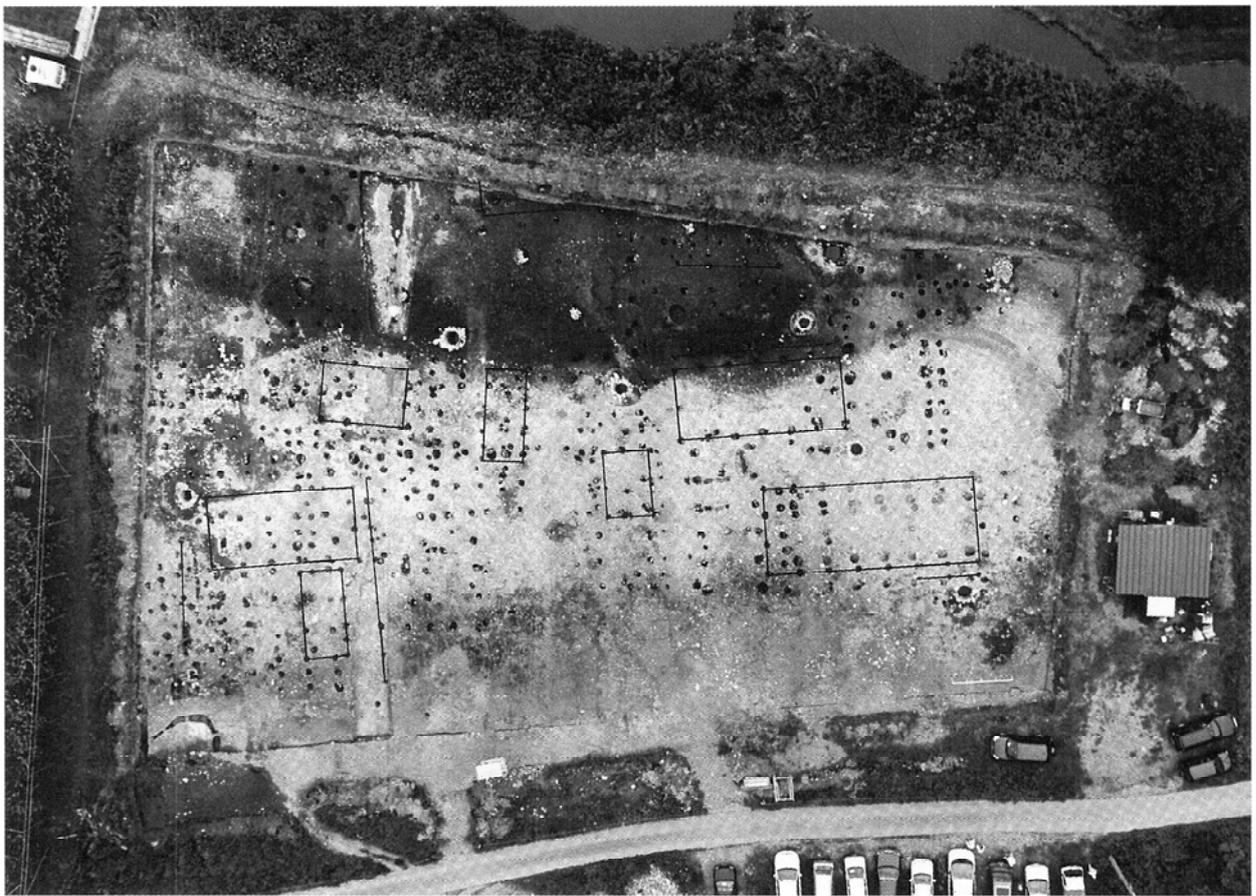
▲調査区全景 (空中写真)



▲主要建物全景 (空中写真)



▲館山北館跡Ⅱ期建物群（空中写真）



▲館山北館跡Ⅲ期建物群（空中写真）



▲東側調査区全景（西より望む）



▲東側調査区全景（南より望む）



▲BY 8～BY 11全景（東より望む）



▲BY 14・BY 22・BY 23・BY 25全景（東より望む）



▲BY20全景「I期」(東より望む)



▲BY4全景「II期」(南より望む)



▲BY7全景「Ⅱ期」(南より望む)



▲BY21全景「Ⅱ期」(南より望む)



▲BY27全景「Ⅲ期」(南より望む)



▲BY6全景「Ⅲ期」(東より望む)



▲BY 8全景「IV期」(東より望む)



▲BY 32全景「V期」(南より望む)



▲BY22全景「Ⅷ期」(東より望む)



▲BY1全景「Ⅸ期」(東より望む)



▲KY1・KY2全景(南より望む)



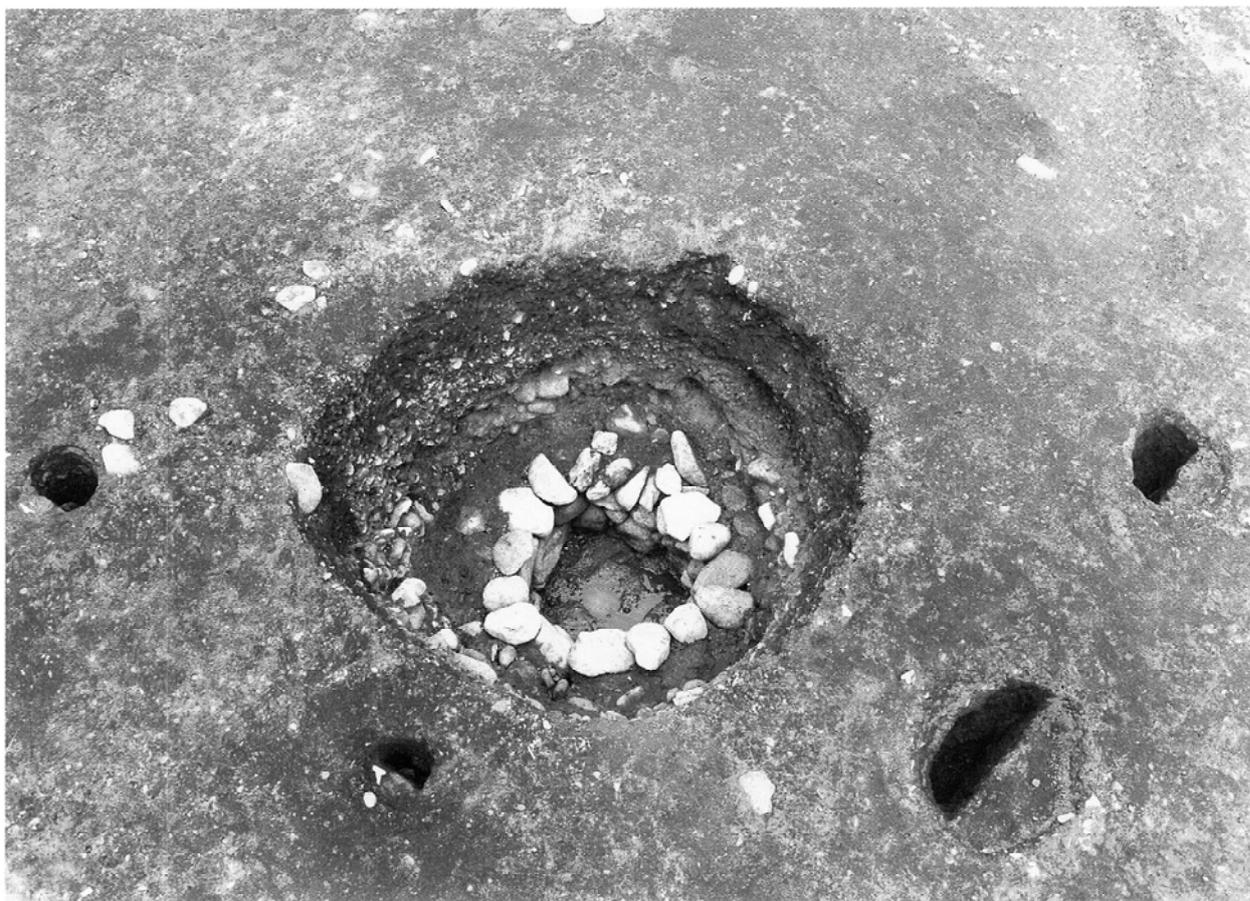
▲KY1断面状況(東より望む)



▲DN 5 全景 (南より望む)



▲DN 6 全景 (北より望む)



▲DN 2 全景 (北より望む)



▲DN 4 全景 (北より望む)



▲SY2全景(東より望む)



▲SY3全景(東より望む)



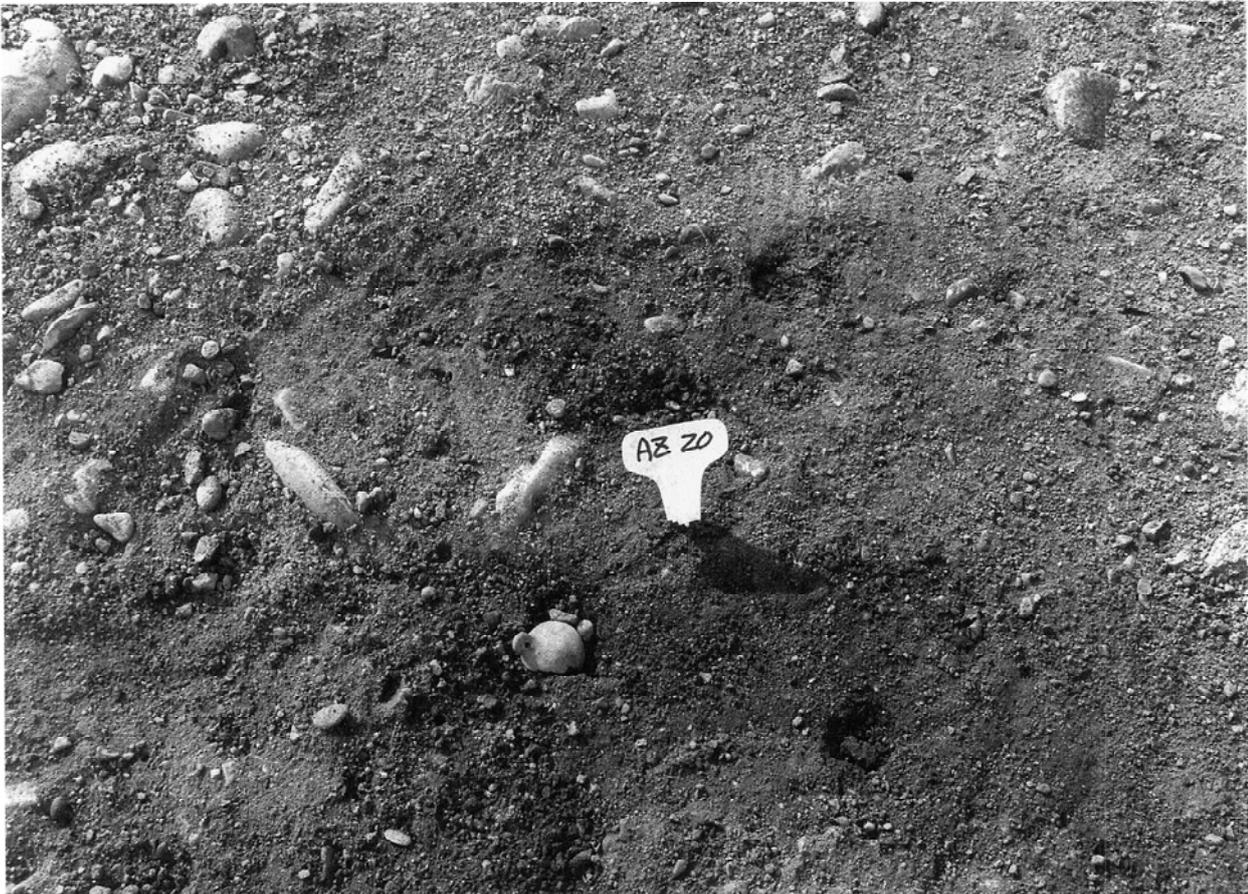
▲SY4全景(東より望む)



▲SY5全景(南より望む)



▲ T Y 587内摺鉢出土状況（東より望む）



▲ 土鈴出土状況（南より望む）



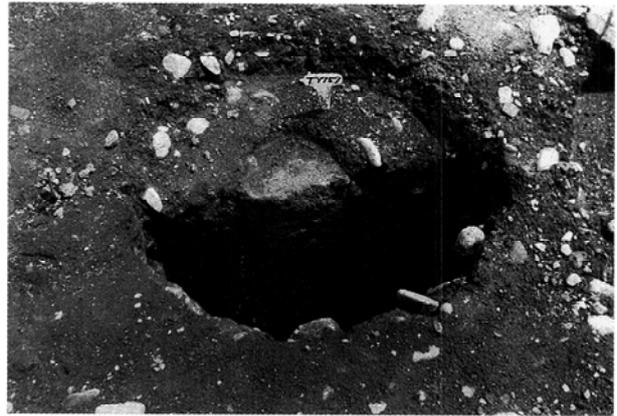
▲DN 2内古銭出土状況(南より望む)



▲TY 353内陶器出土状況



▲TY149全景全景 (BY1)



▲TY157全景 (BY1)



▲TY155全景 (BY1)



▲TY151全景 (BY1)



▲TY156全景 (BY1)



▲TY38全景 (BY6)



▲TY159全景 (BY1)



▲TY33全景 (BY6)



▲T Y 26全景 (B Y 7)



▲T Y 275全景 (B Y 15)



▲T Y 267全景 (B Y 14)



▲T Y 276全景 (B Y 15)



▲T Y 201全景 (B Y 14)



▲T Y 168 (B Y 21)



▲T Y 277全景 (B Y 15)



▲T Y 178全景 (B Y 21)



1a



1b



2a



2b



3a



3b



4a



4b



5a



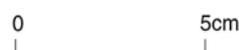
5b

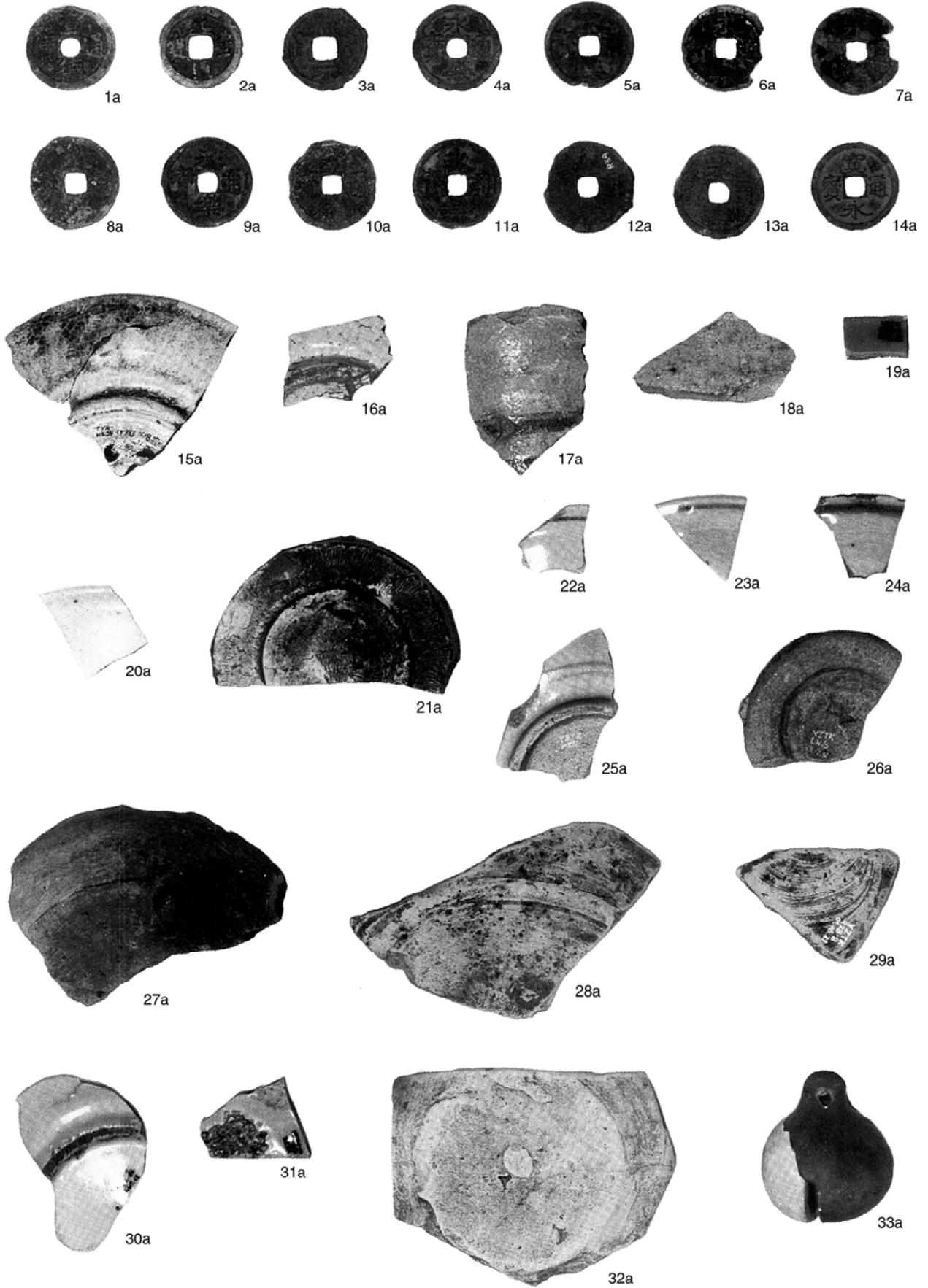


6a



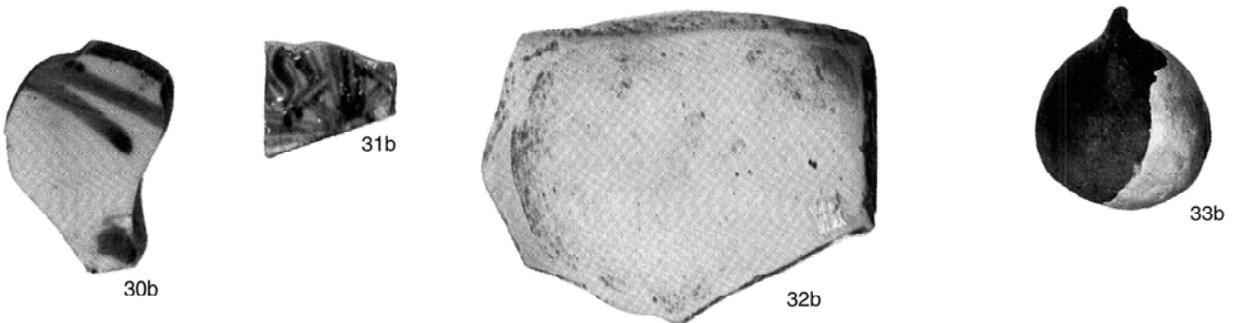
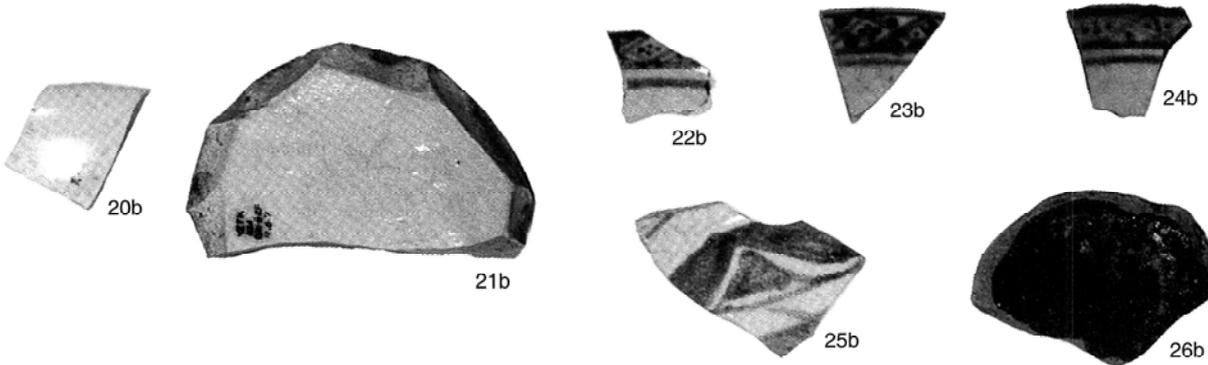
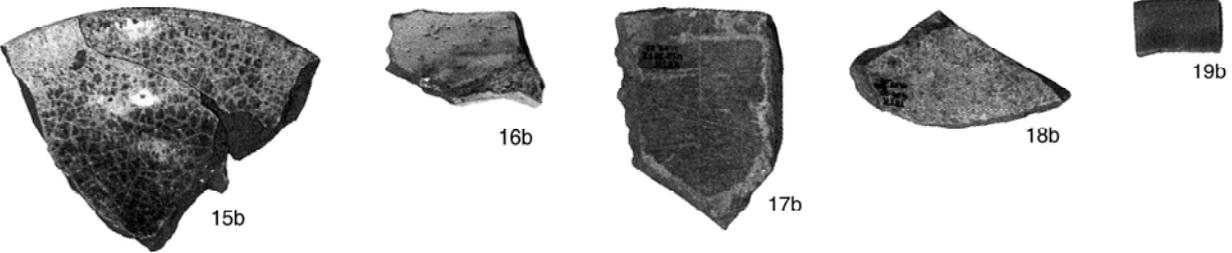
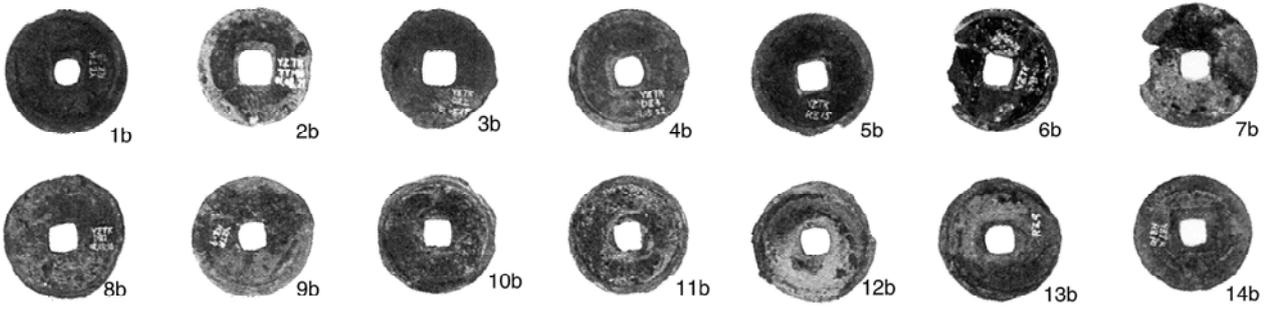
6b



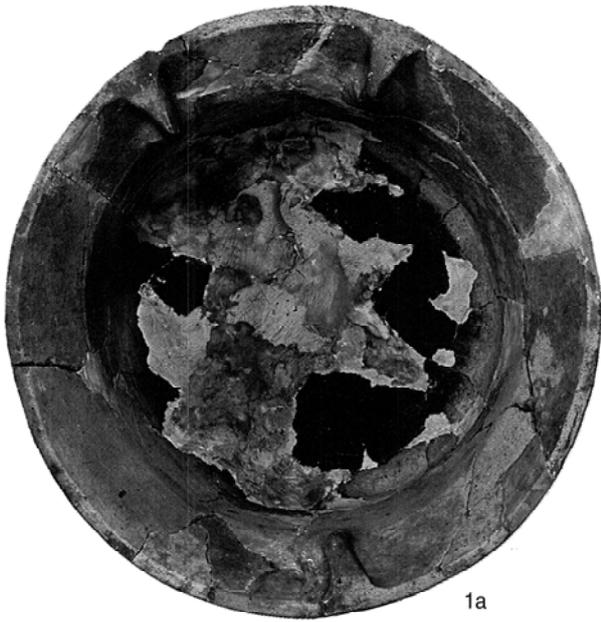


▲古銭・陶磁器・土師質土器(一)





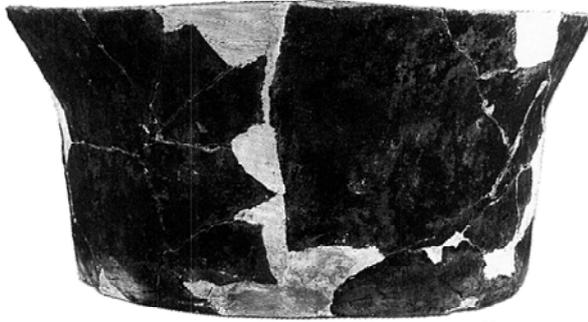
▲古銭・陶磁器・土師質土器(二)



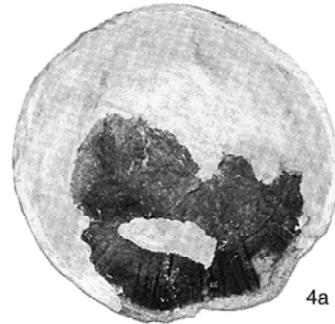
1a



3



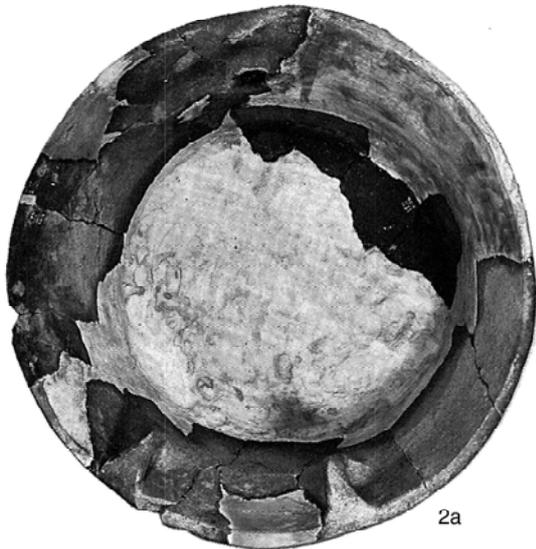
1b



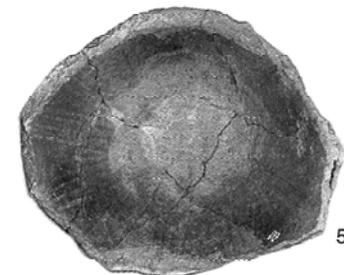
4a



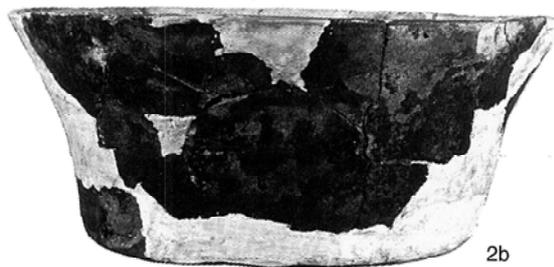
4b



2a



5a



2b

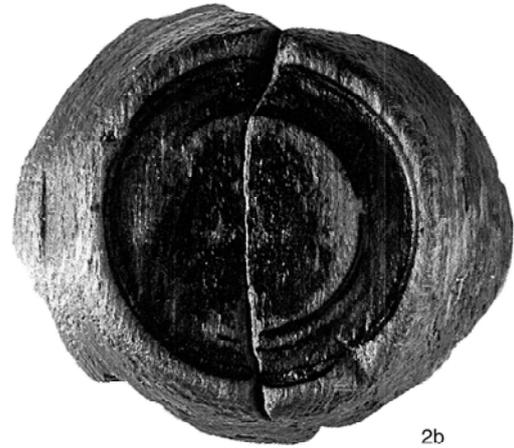


5b

▲土鍋・播鉢



0 5cm



0 5cm

▲下駄・木碗

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第79集  
舘山北館跡発掘調査報告書

平成14年3月15日 印刷

平成14年3月28日 発行

発 行 米沢市教育委員会  
米沢市金池三丁目1-55  
T E L (0238) 22-5111  
(内線 7502)

印 刷 株式会社ケムシー  
米沢市通町八丁目2-43  
T E L (0238) 26-2212  
F A X (0238) 23-1408